

はやてに勁草を知る

焼きポテト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日の夕方、八神はやては買い物帰りに近くの公園で倒れている一人の男を見つけた。

危うく雑草にかじり付く直前の彼は、自分が魔法使いだと言い張る。

そこから始まった二人の奇妙な関係のお話。

◆追記

おそらく、何名かの方はお気づきだと思いますが。本作はとある作品の影響を受けた上で執筆を開始したものとなっております。

いくつか似通った部分があることを否定はしませんが、これはあくまでもオマージュ。パクリでもオリーシユでもございません。

ストーリーも、出だし以外はあちらとは大きく異なります。

ご注意ください。

という予防線は張っておきますが、正直あまりにも文句が出そうなら処置を考えます。

ご意見の場合は、どこからでもご一報をお願いします。

2014/01/25 記入

すいません。リアルの方で少しドタバタしております。

4月ごろまでには復活を予定しています。

2015/03/10

目次

無印

1 道草から始める	1
2 ドナドナごっこ	9
3 働かざる者遊び倒す	15
4 前門のポチ、後門のはやて	22
5 美味しいものには棘がある	29
6 殴り合うも多少の縁	35
7 計り難きは乙女心	41
8 アルフも歩けばプレシアに当たる	48
9 現実が通れば夢引っ込む	55
10 閉めっ放しの根性あし	61
11 下手の考え頭を抱える	66
A's	
1 2 ヤクモに反哺の孝ありき	74
1 3 家主に交われば赤くなる	82
1 4 口は八丁手はアチョー	88
1 5 錆も出れば棒に当たる	95
1 6 小事に拘わりて大事を忘れるTRPG	102
1 7 嘘つきは悪人のはじまり・前	109
1 8 嘘つきは悪人のはじまり・後	116
1 9 食わせて置いて始める外道	123
2 0 胡蝶のヤクモ	132
2 1 今日月夜に仕事の飯	139
2 2 失敗は味の素	145

23	過ぎたるは満腹がごとし	151
24	課題を見て犬を見ず	157
25	猿も穴からボツシユート	163
26	痛い腹を探り合う	170
27	敵地に入らずんば情報を得ず	176
28	言うはヤクモ行うはウーノ	184
29	痛しあべし!	190
30	踏んだり蹴られたり	196
31	売りはやてに買いヤクモ・前	202
32	売りはやてに買いヤクモ・後	208
33	事は強引グマイウェイを以って成る	215
34	隠してなかったけど見るるはなし・上	223
35	隠してなかったけど見るるはなし・下	230
36	雨降って泥沼と化す	237
37	一はや二なの三フェイト	243
38	皮を切つて肉を切られ、肉を切られて骨を砕く・前	250
39	皮を切つて肉を切られ、肉を切られて骨を砕く・中	256
40	皮を切つて肉を切られ、肉を切られて骨を砕く・後	262
空白期 追い回され編		
41	右腕無しの振りヤクモ	268
42	戦う傭兵幼女を恐れる	274
43	悲しみの中の神頼み・前	279
44	悲しみの中の神頼み・中	284
45	悲しみの中の神頼み・後	290
46	一寸先はゴリ・前	297

47 一寸先はゴリ・後

48 痩せ吸血鬼、魔法使いを恐れず

49 現実には夢を求む

50 開いた口を塞がない・前

51 開いた口を塞がない・後

52 舌の根を乾かすうちに

53 根を立てて人を枯らす

54 行きあたりハツタリ・前

55 行きあたりハツタリ・後

56 近くて見えぬは恋心・前

57 近くて見えぬは恋心・後

最終話かもしれない ヤクモに竹を接ぐ

58 ヤクモの嘴の食い違い

59 猫の手も借りた

60 月にヤクモ、花にはやて・前

61 月にヤクモ、花にはやて・後

空白期 ミッド暗躍編

62 病は発狂から

63 備えあれば嬉しいな

64 転んだ先の杖

65 死んだヤクモが咲きほこる

66 網にかかるは狂人ばかり・前

67 網にかかるは狂人ばかり・中

68 網にかかるは狂人ばかり・後

無印

1 道草から始める

突然だが、生物は食わなきや死ぬ。

ミミズだってオケラだってアメンボだって、みんなみんな食わなきや仲良く死ぬのだ。

胃袋を持って生まれた以上、自然界の摂理から逃れることなんて適わない。

そうやって食物連鎖が作られ、世界は回っているのだから。

「お、この草食えそう！　これがホントの道草食うってね!!」

「いや、生のままはどうやろか」

冷静な突っ込みありがとうございます。

危うくいろんなものを投げ捨てる所だった。

夕食の買い物帰りらしい車椅子の少女には、感謝の言葉もない。

とある海浜公園にて、リアル行き倒れの俺とそれを見下ろす少女。

凄くシュールな光景だなあ、と思える辺りまだ余裕はある。お腹は減ったけど。

彼女は、足が不自由なのか車椅子に乗っていた。見た目からして、最低でも十歳は年下だろう。

「こんばんは。何か恵んでくれると助かります」

「躊躇いとかあったもんやあらへんな」

「いや、この状況は躊躇ってたら死ぬんだよね。これが……」

何のかんの言いながら、買い物袋からお菓子をわけてくれる。

この子は女神かもしれない。

「というか、なんでこんなところで行き倒れてるん？」

「それが、いろいろと凡ミスでさあ。まさかこんな管理外世界まで逃げることになるとは……」

「管理……なんやて？」

「いや、こつちの話。さて、このハッピー〇ーン分の恩返しをしないと。肉体労働でも肉体労働でも肉体労働でもなんでもするから要望

をどうぞ！」

凄くかわいそうなものを見るような少女の目が痛い。

いやだってお金ないから行き倒れてたんだもの。支払えるものはこの身一つで出来ることに限られる。

「とうか、お兄さん何者や。こんなところでなにしてるん？」

「うん……俺は魔法使い。ついさっきまでは行き倒れてたけど、今は親切な女の子と会話してるかな」

車椅子が少し離れたような気がする。

ついでに、視線の質が胡散臭そうなものを見るものに変化した。

わかっちゃいたけど、これはちよつと泣きそうだ。

「魔法使い？ お腹空かして行き倒れるお兄さんがか？ それやったら、魔法でぱぱつとご飯とか出せばよかったやん」

「んー、いやちよつとそういう方面性の魔法は無理臭いかな」

「そうなん？ それやったたら何ができるん？」

怪訝そうな表情で聞かれて、ちよつと考えてしまう。

何が出来るかなあと。

魔法使いと言ってはみたが、正確に魔導師だとか。魔法って言葉に認識の差があるよなあとか。まあその辺りは置いておこう。

問題は、俺がこの子に何をしてあげられるかということだ。

「ここで、その足とか治してあげられたらカツコいいんだろうけどなあ。ちよつと治療系は専門外だから何とも言えないし。あとは空飛ぶくらいしか思いつかなあ……荷物持ちの方がいくらか役に立ちそうだ」

「荷物持ちなあ。って言うても、お菓子一個でそこまでやってもらはんも……ちよお待ち。今何て言うた？ 空？ 飛べんの!？」

あれ、変な所に食いついてきた。

何だろう。特別、この世界の空を飛ぶ技術が遅れているわけではなはずだ。

むしろ、ここ数日でいくつかの飛行物体は観測している。魔法なしでここまでやってのけるとは、なかなかの技術力だとすら思う。

そんな世界の住民が、今さら空を飛ぶことに食いつくだらうか。

「より正確には、足場を作ってジャンプするんだけどな。本格的な飛行魔法は、けっこう上級スキルなんだよ」

「そんなんええんねん！ 空!! 私、それがええ!!」

「ん？ いや普通に空の散歩くらいしかできないぞ？ 飛ぶんならいろいろ乗り物があるようだし、もつと別のことにした方がお得だと思うんだが」

主に肉体労働とか。

「空の散歩なんて聞いたたら、なおさら興味わいてきたわ！ 私がええ言うてんねやからええねん！ ほら、はよ連れてって!!」

遠ざかっていた車椅子がごりごり近付いてくる。

よくわからないが少女の興奮はピークに達しているようだ。

車輪が迫って来ているので非常に怖い。

「わかった、わかったけどちよつと待て。さつき正確にはジャンプするって言ったろ？ 車椅子とか買い物袋を持ったままだと、重量というかバランスというかその辺がちよつと不安になる。一時的にでも、荷物を置いとける場所とかあるか？」

「それやったら、いつそ家に帰った方が早いやらなあ。ほらお兄さん車椅子押して！ ダツシュやダツシュ!!」

思わず「おっけー」なんて軽く答えてハンドルを握ってしまったが、この展開大丈夫か？

うーん……ぎりぎり？ たぶん大丈夫。

もーまんたい、もーまんたい。

ちよつと駆け足くらい早さで車椅子を押しながら、少女の指示に従って住宅街を進んでいく。

軽快な走りがお気に召したのか、ひゃーつと楽しそうに悲鳴を上げる姿は微笑ましい。

「で、ここが君の家か。えーつと、八神さん？」

「そうやで、私の名前は八神はやて。よろしくや、お兄さん」

「おう、俺はヤクモ・ナナミ……：そういえば自己紹介まだだったんだな」

まるで数十年来の友人感覚で喋れてしまうのが驚きだ。

特に人付き合いが苦手なんてことはないが、初見でここまで打ち解けられる相手も珍しい。

きつと、この子自身がとっつきやすい人格なのだろう。真つ暗な玄関へと車椅子を進めていく。

二階建ての、けつこう広い家だ。明かりがないということは、家族は留守だったりするのだろうか。

だが、なんとなく静か過ぎる気もする。

生活臭がしないとは言わないまでも、人の息遣いが濃く感じられないような？

玄関を上がってずんずん進んでいくはやてが、遠慮せんとあがつてやーと言いながらドアの向こうに消える。

靴を脱いで後を追えば、その部屋はダイニングキッチンだった。大家族が生活できるくらい広い。だが、今はキッチンから漏れる光に照らされて哀愁すら窺えそう。

「うん、食材も冷蔵庫に入れたしおつけーや。はよ行こう！ お空の散歩!!」

「あー……うん、まあそうだな。じゃあ、庭から出るとしようか。靴取ってくるわ」

そのままいったん玄関に戻る。

吹き抜け構造の天井を見上げて、二階の様子を探ってみるが誰かがいる様子もない。

足の悪い幼女放り出して、家族全員でお出かけなんてことはないだろう。

やだなあこれ、絶対どっかに地雷埋まつてるじゃん……

「はいよ、お待たせ。それじゃあお姫様、お手をどうぞ」

「うむ、よきにはからえ」

それじゃあ王様だよ。

にこにこなはやてを抱え上げ、庭にひよいと躍り出た。

夜の空が頭上に広がっている。

月と星と街の明かりがあるだけ、まだ八神家の窓より明るい闇だ。ぐつと足に力を溜める。

わくわくした顔の少女をちらりと見て。

「お、おおお!!」

次の瞬間、視線が一気に高くなった。

地上に広がる街明かりと、頭上に広がる星の狭間。

見回せばいつも生活している場所があつて山があつて海がある。

「凄いなあ。ほんまに飛べるんやなあ……」

「とべるつても跳躍の方だけだな。そろそろ位置エネルギーがマックスになって、運動エネルギー入れ替わる。重力加速度つても、まあまだ早いな」

だからこうする。

ポケットの中を探り、取り出した鉛色の石を手のひらの上で転がす。

場所は頂点。位置エネルギーが最大になり、運動エネルギーがゼロになる高さで、俺とはやての体は一瞬停止した。

「M1903、起動しろ」

刹那。慣れ親しんだ閃光が視界を駆け抜け、同時にデバイスが格納空間から装備を開放する。

左手にタクティカルグローブ、右手に軽装甲の籠手。腰の後ろに銃器を模した杖をマウントし、靴を補強するように足を鋼が覆っている。

同時に足元が淡く光ったので、そこに着地した。

「わ、わっ！ なんやこれ!!」

「まあ魔法使いの変身みたいなもんかなあ。ちなみに、これが魔法の杖ね」

引き抜いて見せた銃を見て、はやての視線がみるみるうちに懐疑的なものへ変わっていく。

そりやそうだ。

「え、魔法の杖つてもつとこう。なんていうか、夢あふれるものやと思ってたんやけど」

「魔法使いもリアリズムに目覚める時代なんだよ、言わせんな恥ずかし」

再び足に力を込める。

淡く光る足場を蹴って、再び体を夜空へ放り出した。

目的地なんて決めていないので、山の近くまで行つて海の方へと引き返すルートを選ぶ。

春先とは言え風が少し冷たいか。

「寒くないか？」

「うん、大丈夫や。それにしても凄いなあ。正直、ちよつと冗談や思つてたわ」

「通りで飲み込みがいいと思つたら、そういうことか。信用ないなあ」
堪忍やと笑つてみせるはやてに、苦笑で返す。

しばし無言で散歩を楽しんでいたら、いつの間にか海上まで足が伸びていた。

風の温度が劇的に下がってきたので、一応のために風防代わりの防御魔法を展開する。

「海鳴市がちっちゃなつたなあ」

「ちよつと調子に乗りすぎた。ここらで引き返すとするか」

「……せやな、ありがとうヤクモさん。めっちゃ楽しかったわ」

目を伏せて、はやては言う。

ああ、ここで地雷がきたか。踏んでもないのに起爆とはどういう了見だ。

だがまあ、面倒だなとは思わない。

他人の不幸なんて聞いて楽しいわけもないが、そんな気分だ。

どの道、ここで無視を決め込むにしては仲良くなりすぎたというものもある。

八神家を目指して跳躍しながら、静かに問う。

「はやては、あの家に一人暮らしなのか？」

小さな頷きで答えが返ってきた。

いつの間にか、小さな手が服の裾を力強く握っている。

「車椅子で一人暮らしつてのも、けっこう大変だよな」

「ちよつとだけや。台所とか、車椅子でも調理しやすいように作つてもらつてるし」

今度は掠れた声で答えがあった。
でもやはり顔は上がらない。目は伏せられたままだ。

目的地に向かって階段状に足場を作る。

終着点はやはり暗い。周りの民家に明かりがあるのを見れば、なおさらその暗さが際立つ。

庭に降り立ち、お互いにしばし無言になった。

俺はなんと声をかけていいか迷って、はやてもたぶん言葉が見つからないのだろう。

口元を引き結び、もぞもぞと腕の中でもがいている。

「これは提案なんだが」

縁側からダイニングキッチンへと入り、車椅子にはやてを座らせた。

正面にしゃがみ込めば、自ずと視線がぶつかる。

「……提案？」

「ああそうだ。いくら車椅子でも生活しやすい家でも、二階にあがったり不便なことはあるだろう？ だから、介護をしてくれる人を雇えばいいと思うんだ」

「ええつと……まあ、そうかもしれないけど」

「かもじゃない。絶対に必要なの、おつけー？」

お、おう……とはやてが頷く。

なんか引かれている気がしないでもないが、この際仕方ない。

「さて、そこで有料物件のご紹介です。住み込みで働いて肉体労働が得意、更にはいつでも夜空の散歩を提供できる素敵な魔法使いがいるんですがいかがでしょう？」

「……それ、ヤクモさんが住む場所あらへんだけとちやうの？」

バレテラ。

「そそそそそんなことは一ミリもありませんのことよ？ なんと今なら、給料は寝床と三食昼寝付きという激安特価!!」

「なんやのそれ……んー、まあでもええかな。昼寝は却下やけど、毎週の定期通院とか楽できそうやし」

ええそれはもう粉骨砕身働きますとも。

「お米買ったときとか……あとは、家電買ったときも送料とか浮かせそうやし」

「すいません、冷蔵庫見ながらそれ言うのは勘弁してもらえませんかね」

「なら洗濯機でもかまへんで？」

やめてくださいいしんてしまいます。

とりあえず、今後の宿を確保できたのは大きい。

いかんせん無一文だ。雨風をしのげる上に三食であるというのは魅力的な提案である。

「なんや、氣遣わせてもうたかな？」

「ん？ いや、持ちつ持たれつだろ。むしろ、はやての方がデメリット多めだけどな」

せやったらやっぱ冷蔵庫でも。いやそれはホントに勘弁してください。

そんな感じで賑やかに言いながら、俺はダイニングの照明を点燈する。

この家も、他の民家と変わらず暖かな光が室内を照らした。

2 ドナドナ(つこ)

俺の朝は早い。

というか、はやての朝が早いから必然的にこつちも早くなる。

初日の朝は完全に出遅れた。それでも短い針が8を刺していたのだが、朝食を作るからということらしい。

なるほどと納得して、次の日は少し早く起きるようにする。だが、これでようやく同着か僅差で遅いくらいだった。

介護要員という名目を謳っている以上、流石にこれでは駄目だろう。

ちよつと意地になっている自分もあつて、その次は更に早起きをした。

「なんだっけ、こういうときなんて言うんだっけ。イエスロリータノータツチ?」

「ちやくちやくとヤクモさんが毒されてきとるな。ええ兆候や」

廊下でがつくりとうな垂れていたら、寝室から出てきたはやてが満足そうに頷いている。

何か間違えたか?

「というか、何しとんの?」

「いや、はやてより早く起きることに成功したのはいいんだけど。そのあとのこと考えてなくて……」

何の予定もないのに寝ているはやてを叩き起こす意味はないし、それ以前に男が着替えを手伝うわけにもいかない。

いくら十歳ほど年下でも、女の子への配慮は必要だろう。

結果的に、試合に勝って勝負に負けたような気分になってしまった。

次から起床時間は六時にしようしようという、と話し合っただけだ。めたのは二週間前のことだ。

はじめからこうすればよかったなんて後の祭りだが。

今日も二階から一階へ降りるのを手伝い、朝食が出来るまでテレビや新聞と睨めっこして過ごす。

台所は完全にはやてのテリトリーなので、欠片も入れてくれる気配がない。慣れた手つきで作業をしているから、もしもに備えて近くにいれば十分だろう。

そう思いつつ、最終的に朝のアニメ枠へチャンネルをかえる日々。はやて曰く再放送らしいのだが、この指先から収束砲をぶつ放す少年は何者だろうか。

婆さんが美少女に変身する原理もわからない。レアスキルか？

デバイスなしでの規模の魔力刃が生成できるやつが、なんで雑魚なんだ。

黒い炎の竜が大暴れしていたが、あれは噂に聞くアルザスの竜召喚師の……

あと、なんか狐を素体にした使い魔みたいなのが混じってるのも意味がわからん。

管理外世界の文化は面白いなあ。

「ヤクモさん、ごはんやよー」

「おう、今行く」

食卓に二人分の食事を並べ、向かい合って座り、いただきますと手を合わせる。

パンにかじりつきながら、はやてはどこか楽しそうだ。

「なーなー、今日は何して遊ぶ？」

「そうだなあ。シューティングのスコアアタックは、昨日飽きるくらいやったしなあ」

「格ゲー系とかええんちゃう？ 先週やったきりやし」

「やめろ、腕が伸びるやつと後出しジャンケンのやつがまだトラウマになってるから……」

あれはよくない。というか、ゲーム初心者にあの仕打ちはホントに酷いと思う。

まさか、身をもって容赦という言葉の意味を理解するはめになるとは思わなかった。

「ところで。遊ぶのもいいが、今日って定期通院の日じゃなかったか？」

「あれ、そうやっけ？」

一瞬ぶつかった視線を、二人して壁にかかっているカレンダーへ向ける。

縦に一本引かれた線が、いくつかの数字を数珠繋ぎにぶち抜いている。赤ペンで書かれた「通院」という丁寧な文字が近くに添えてある。

「あかん、完全に忘れとった。準備しとかなあかんなあ」

「最悪、遅刻しそうなら俺がショートカットするさ。ついでに、今回は身分証も作ってみた。前みたいに不審な目は向けられない、はず？」

ちよつと自信ないな。

俺が初めて石田先生と顔を合わせたのは先週のこと。

当然と言えば当然の反応かもしれないが、そのときは思いっきり怪しまれてしまった。

いたいけな少女が一人暮らししている家に転がり込んだ、この馬の骨ともしれない野郎。

この構図だけ見れば、どう考えても怪しき満載だろう。

はやてが親戚のお兄さんでー、とか適当に誤魔化してくれたからよかったものの。あのまま口ごもっていたら、廊下の奥で腕を組んでいたマツチヨが走り込んで来たかもしれない。

なんであいつら『はやてちゃんを見守り隊』とかプリントされた鉢巻き着けてたんだ。

「身分証？ そう言えば、ヤクモさん名前に違和感なかったから忘れとったけど別の世界の人なんやっけ」

「おう。とは言え、俺も管理外世界の出身だからこことあんまり変わらないかな。名前は移民かなんかだと思う。稀によくいるんだよ。たまたま魔法の素養持つてて、たまたま魔法のこと知って、ついでにたまたま管理世界に引越すやつ」

「そこにリーフの石をシウウウツ！」

「いやいや超エキサイトしないし、ナシにもならないから」

架空の戸籍を作るのは、さほど難しいことでもなかった。

この世界のネットワークは、魔法に対する防壁なんてないから当然か。

一度データを書き込んでしまえば、よっぽど念入りに調べなくてはわからないだろうし。全国民の戸籍データをしらみつぶしに調べるモノ好きもいないだろう。

そんな感じで偽造戸籍作つといたから、これでいくらか動きやすくなったよ。やったねはやてちゃん!!

なんて説明したら、ちよつと微妙な顔をされてしまった。

おかしい。これは喜び分かち合うときに使う言葉だ、つてとある掲示板サイトで教えてもらったんだが。

今度、なんか反応がおかしかったんだけど聞いてかないとな。

「とりあえず、これで先延ばしにした身分証明書を石田先生に見せられる。家に忘れちゃいましたテへ作戦も限界が来てたからなあ」

「一回やるごとに、スゴい疑いの目が深まつとった気がするけどな」

最後の言葉は聞かなかつたことにして、ちやつちやと朝食を済ませてしまう。

午前中は手分けして家事をやり、昼前には病院へ。通院日の昼食は、可能なら石田先生も加えてということになっている。

お弁当か外食かは日によるが、今日は後者だ。はやてが忘れていたのだから仕方ない。

それでもつて、そのときついでに身分証も見せてみた。

今回はちゃんと持ってきましたよと、と笑顔で言つたはずだが。なんでこんな胡乱な目をしてるんだろうと不思議になるくらい、濁りきつた視線を向けられてしまった。

おかしい。この国では免許証という身分証明書が最強だと聞いたのに……

「用意した身分証明つて免許証やつたんやな。で、実際に運転とかできんの?」

「大丈夫。指名手配レベルマックスで警察の手から逃げ切つた俺を舐めてはいけない」

「あ、これあかんやつや。石田先生に電話せな!」

「ごめんなさいちゃんと乗れます! 一応、その辺りは調べたんで運転の仕方はわかるんだ。こつちの世界で似たような乗り物もあるし」

危うく携帯に手を伸ばしかけたはやてを、必死で押しとどめる。

こう言つては何だが、どうも俺はあの先生が苦手だ。嫌いとかそういうことじゃなくて、純粹にこっちの心が汚れてるんだらうなと思う。

「へえ、七海八雲つてこう書くんや」

「名前がこつち向きでよかったよ。漢字は当て字だから適当だけど」

「年齢20歳つてのもびっくりやな。成人しとったんか」

「その成人つてシステムに驚愕したのは懐かしい記憶だ。こちとらはやてくらの歳には、もう働いてたからなあ」

「どんな仕事なん？」と聞かれたんで、ニヤリと笑いながら秘密のある男つてかっこいいだろ？ とだけ返しておく。

「なんか、これが噂のニコポかあとか言い出したが何のことだろう。」

「なんにせよ、これで身分証明もできたんで考えてることがあるんだが」

「ん、なんや？」

「そろそろ働こうかなつて」

「なん…やと…!!? とはやてが驚愕する向こうで、八神さーん！ あれ、八神さーん？ と看護師さんがキョロキョロしているので車椅子を後ろから押し進めていく。」

「あ、八神さん。もう呼んだらすぐに返事してくださいと困ります」

「いやあ、申し訳ない。では検査よろしくお願いします」

「ちよつ、ちよお待ち！ 看護師さんストップ！ ストップや!! あああああ、今ヤクモさんがさらつととんでもないこと言うててん!!」

あとが押してるからあとで話し合つてね、とにっこり笑顔の看護師さんにはやてが連れて行かれる。

「こういうときにピッタリの歌があったと思うんだが何だったか。」

「ああ、そうだ。あーるはれたー」

「私は子牛とちやうから！ ドナドナ言うのきん——」

そこで診察室の扉が閉じてしまったので、それ以上のセリフは聞こ

えてこない。

辛うじてわかったのは、ドナドナ禁止令が発布されたくらいか。せめて最後まで言わせてあげればいいのに、あの看護師さんも容赦ないなあ。

まあ、それもこれもはやてのためか。

「さて、俺はどうしようかな。適当な言い訳を考えとくのは当然として」

昼食後ということ少々眠い。

はやての診察も、すぐに終わるような類のものじゃないし。屋上で休憩かな、とか考えつつ視界の端でちらちらしている『はやてちゃんを見守り隊』の連中を警戒する。

公共の場でちよつと騒ぎすぎた。これは逃げるしかない。

そんな感じで、地味な鬼ごっこをするはめになる。

食後の腹ごなしになって万々歳だよクソツタレ！

3 働かざる者遊び倒す

作業の手を止めて体を伸ばし、座りっぱなしで固まっていた体を解していく。あっちこっちから骨の鳴る音が聞こえてくるが、努力の結果と受け入れよう。

傍らに置いていたコーヒーを取り、口を付けながら画面を流し見る。

試験運転でプログラムを走らせてみるが、特に問題もないので完成か。そのままデータを圧縮して、依頼主のところへ投げつけておく。

そんな一連の動作を終え、短く息を吐きながら天井を見て。

「うわあ、すげえ働いてる感あるわあ」

「在宅勤務でなに偉そうに言うてんの」

居間で作業していたのがよくなかった。

せつかくの達成感に水を流し込まれるとは。

「で、なにやってたん？ というか、その半透明のって」

「空間投影式のキーボードとモニターだけど。ああ、そうか。こつちじゃこういうのは無いのか」

魔力のある側とない側の発想だから、それぞれ違う発展をして当然だろう。

どちらも軽量・小型化を目指すところや、無暗にマシンパワーを追求する辺りの考えは似たようなものだ。

地球が特別劣っているわけではなく、純粹に時代が遅れているだけ。こつちも数百年後には似たようなのが出来てると思うから気にするな。

ってはやてに言おうと振り返ったら姿がなかった。あれ？

「うわあ、これ凄いなあ。どうなつとんのやろ。わっ、端っこに指置いたらドラッグもできるんやなあ!!」

テンション高めのはやてさんは、気付いたら回り込んでモニターをグリグリいじっていた。

思っていたより早く動けることが発覚して、驚愕を禁じ得ない。

介護、ホントに必要なだったんだろうか……

「よし、ちょっと待てはやて。ってお前、油断も隙もないな！ 仕事のメール見るな!! どうせ読めないんだから諦めろってほら!!」

目ざとく送信途中の画面を引き寄せようとしたはやてに、ガツとアイアンクローをくらわせる。

締め付けるのではなく目を覆うのが目的だが、なにやらはやては「ぬるぽー・ぬるぽー」と連呼しはじめた。

ガツの種類が違うと思うんだがいんだらうか。

とりあえず乗り出し気味の体を車椅子に押し戻しつつ、送信が終わるまでそのままにしておく。

「はい終了つと。結局、何がしたかったの?」

「いやな、ヤクモさんがどんな仕事してんのか気になってん。あとは興味に負けて」

てへつと舌を出して反省してるんだかしてなんだかわからないポーズのはやて。

何この可愛らしい生き物とか思っけてない。思っけてなんかいないだからね!!

「んで、何の仕事やの?」

「自称テロリスト集団が管理局の施設に入りたいらしくて。ロツク解除のウイルスデータをちよつとな。テロリスト集団の後ろにかっこ笑が付きそうなチンピラどもだけど」

「通報しました」

「大丈夫だいじょうぶ。あんなのにやられるほど管理局もやわじやないって。むしろ、検挙率あがるんだから金一封とか欲しいところだなあ」

でも、そういうお仕事はどうかと思うんよ。と説教されたので、今度からはこつそりやろうと心に決める。

はやてもいるから、流石にガチでやばいところからの仕事は受けないけどね。

カモフラージュの仕事も探しとかないとなあ。

「まあ、それは置いといてや。その画面使っけてゲームとかでけへんやろか!!」

「んー……どうかな、やったことないからなあ。あ、先に言っとくけど。カードセットしてモンスター召還的なのは、もつと大規模な装置が必要になるから諦めとけよ?」

はやての目から光が消えた。

これが噂の……いや、倫理的にやめとこう。最近、テレビで偉そうなおっさんが非現実うんたらとか言ってたし。変なのが突入してきたら困る。

「とりあえず、出来そうなところからやってみよう。はやて、そこ動くなよ?」

車椅子のブレーキまで入れて準備万端のところ、フライトステイックコントローラーを持たせる。

空間投影ディスプレイを前後左右と頭上の五面に展開して、あとはこつちで設定してやるだけだ。

ゲームソフトをデバイスにスキャンさせてROMを引っこ抜き、五面のディスプレイに対応した映像を呼び出す。

もともと、ゲーム内でもパイロットが肉眼で後方確認を出来るようなシステムになっていたのは幸運だった。映像の処理方法をいじってやるだけで、なんとか対応できそうな気がする。

「たぶん、これでいける?　なんか、こつちの方が犯罪に手を染めてる気がしてならない件」

「個人的に楽しむ分にはおっけーやろ。それよか、何がはじまるんか知らんけどはよ!」

「目に光が戻ってなによりだよ。そんじゃあ、はじめまーす」

スタート画面をすっ飛ばしてニューゲームで始める。

最初のムービーはカット。内容も操作方法も熟知しているので、もろもろの部分ですつとばして戦闘画面を立ち上げた。

中からみれば、さながら戦闘機の中にいるような風景となるはず。と思ったが、画面の透過率が高すぎる。

その辺りの数値もいじり、これで完璧……かもしれない。

「はやて、どんな感じだ?」

「おー、これは凄い。あとは音やな。なんか、のっぺりしとる気がする

る」

「そういえば音響系は触ってなかったな。スピーカーを置いてもいいが、流石に台数買うのは出費が酷いし」

何か代用になりそうなのは、といくつか考えてみる。

モニターからも音は出せるが、ステレオで出力すると音響が混乱しそう。どうせやるならリアルにサラウンド方式でやってみよう。

だが、そうなるよりはスピーカーを大量に置くしかないわけだが。

「いや、まあでも音が出るなら念話でも……いやいや、今のはやてが使えないと意味ないな。ここはサーチャーの録音機能を逆利用してバイノーラル設定が妥当かもしれん」

「日本語でおk」

遠まわしによくわからないと言われたので、とりあえず実践する。

本来は索敵なんかを使うサーチャーだが、録音の機能を逆出力に設定してスピーカーに変える。

パソコンにイヤホンを差してマイクの代わりにするのと似たような発想だ。機能的には集音も発音も出来るはずなので問題ないだろう。

このサーチャーをはやての両耳付近に固定して、首を動かした際に連動して移動するよう設定しておけば完了だ。

「これならヘッドフォンでもよかったかなとは思う」

「でも、これやったら外の音も聞こえてええと思うよ。配線とかも気にならへんし、ヘッドフォンは長時間つけてたら耳が痛くなるしな」

るんるん気分の声に合わせて、敵機が次々と撃墜されていく。楽しんでくれているようだなによりだ。このままさっきのことを忘れてくれるとありがたい。

「まあ、流石に毎回こんな準備してゲームするのも面倒だけだな。室内限定なら範囲も知れてるし、小型の空間シミュレータとか作った方が手っ取り早い気がしてきた」

そのためには先立つものが必要だが、その辺りも仕事をいくつかこなせば何とかかなりそうだ。

むしろ、問題は管理世界からどうやって部品を密輸するかになりそうで恐ろしい。

昔の伝手とか、まだ生きてただろうか。あとで確認しよう。

「なんやわからんけど、あんま悪いことしたらあかんぞ?」

「ときどき、はやては人の心が読めるんじゃないかと思う件について……」

「はやてが読心術を覚えてしまったら大変だ。

なんでも某掲示板の住民曰く。半眼になって瞳から光が消えた末、眼鏡の二頭身が変なポーズでモリモリ言いながら変態紳士とか聞いた気がする。

あれ、コシコシ言いながらヘッドバットだったかな? よく覚えてないや。

でもまあ。うん、これは流石に嘘だな。

あそこで教えてもらったことを頭から全部信じるのはよくない。それくらいは俺も学習した。

「あの掲示板、とりあえず罵倒から入るところもあるしなあ」

「ヤクモさんのソースは、偏りが多いと思うんやけど」

そんな馬鹿な、と驚愕しているうちにステージのボス機体が撃墜されてしまう。

流石にやり込んでいるだけあって、序盤の敵など相手にもならないようだ。

この調子で攻略されると、ステージ設定が間に合いそうもない気がする。

「ということ、急遽ラスボスのご登場です」

「ご都合主義もええところやな」

この際、手抜きと言われても致し方ない。

いくらROMがあるとと言っても、映像を処理して各画面に割り振るシステムを組み込む必要がある。

各ステージで数値も違うので、最初のステージを作ったらあとはコピーというわけにもいかないから面倒だ。

「なーなー、ボスキャラが全然出てこえへんけど。どこに……ん?」

なんやあれ」

何かに気付いたらしいはやてが、左側の空間モニターへ目を凝らしている。

まだはつきりと視認しているわけではないようだが、こっちからは丸見えだ。

「ちよ、まつ！ ストライクイーグル!! あかん、こっち旧式ミグやのに勝てるわけあらへん!!」

「H A H A H A！ 見ろ、人がゴミのようだ」

大慌てで急旋回した冷戦期の戦闘機を、最新鋭の戦闘機が追いかける。

当然、操作しているのは俺だ。ちよつと大人げなかっただろうか。いや、そんなはずはない。

この前の格ゲーで味わったトラウマを刻み返してくれるわ。

「ふはは、逃げる逃げる」

「満身やな！ 喰らえ捻り込み!!」

「なん、だと……」

絶望的なスペック差でぐんぐん放されていくが、一瞬でも背後を取られるとは。フロツガーなんて骨董品でとんでもないことをしてくれる。

はやて、恐ろしい子……

きつと魔法を覚えて空戦が出来るようになればとんでもない才能を開花させるんだろうなあ。

最終的に「うわようし、よつよい」とか言う日が来そうで笑えない。

「まあでも、その前にリンカーコアの状態も気になるし。冗談抜きで一回こっちの医者にも見せた方がいいかなあ」

小声での吹きは、撃墜されて落胆の声を上げるはやてまで届かないだろう。

彼女のリンカーコアは、共同生活を始めて2日目くらいに気付いた。

医療関係は専門じゃないが、簡単な身体スキャンくらいはできる。こっちの技術ではわからないことも、これならわかるかもしれないと

いう考えの元に行ったのだが。

あろうことか、とんでもない容量のリンカーコアを発見してしまつてコーヒ―を吹く結果となつた。

あとはあからさまに怪しい本と、遠巻き且つ偽装を施された監視用カメラが芋づるで出てきて真顔になつたのは言うまでもない。

前者に関しては封印がきつすぎて正体不明だが、きつとロストログアだろう。面倒事の匂いしかない。

後者も見ただことがある隠蔽魔法と機材だけだけに、管理局絡みと見て間違いないだろう。こつちも面倒事の匂いしかない。

どれもこれもはやてには伏せたままだが、場合によつては二人して逃亡生活も考えた方がいいだろうか。

まあ、独断専行で騒いだつて仕方ない。

ロストログアは起動する気配すら見せないし、管理局だつて突然こちらを殺しに来たりはしないと思う。

しばらくは大人しく様子見をしつつ、ちよつとした妨害工作を挟んでいくことにする。

手始めに投げつけたウィルスを、監視してるやつが気に入ってくれればいいな。そう思っていたら、はやてが声高らかにお昼ご飯宣言を発令した。

今日はオムライスらしいが、何故か俺だけグミになるらしい。

え、ミグの呪い？ なにそれ怖い……

土下座で許してもらい、なんとかオムレツを確保するのだった。

4 前門のポチ、後門のはやて

さて、俺がはやてに拾われて一カ月くらいたったような気がする。四月も後半にさしかかり、よくわからない共同生活にも慣れてきた。

目を閉じてこれまでを思い返してみれば、はやてと過ごしたひと月ちよつとの情景が瞼の裏に浮かんで……

「……あれ、遊んでた記憶しかないんだけど。これ大丈夫なの？」
「むしろ今さら言われても困るんやけど」

地球って教育機関ないのかと聞いたところ、足のこともあるから休学中やとやはては言う。

なるほど、バリアフリーってのも大変なんだなあ。

「不便なんだったら、ガ○タンクみたいな車椅子つくってあげようか？」

「なんやそれ、カツコよすぎやろ！ それで登校したら一日で人気者になれそうやなあ」

興味はあり気だったが、根本的に石田先生が登校を止めてるらしい。

まあ、確かに原因不明の身体障害らしいし。主治医の言うことは聞いとくべきだろう。

それが例え、魔法関係のせいっぽかったとしてもだ。

上手く説明できる自信がない上に、実質的な原因はわかっていないのだからどうしろというのか。

きつと、魔法関係の何かが原因なんです！ なんて言ったら、石田先生は迷いなく腕のいい精神科医を紹介してくるだろう自信がある。

まったく、俺がいったい何をしたっていうんだ。

「ほら、アホなこと言うたらんと食器並べてくれへん？ 今日ほカレーやから」

「わあい！ 俺、はやてカレー大好きー」

すごく嫌そうな顔をされてしまった。アルエ？

とりあえず、今ははやての足に触れない方がいいだろう。

素人知識でいじくりまわしてなんとかできるはずもない。最悪、悪化なんてしたら笑い話で済まなくなる。

触らぬ神にんたとやらだ。

「さて、はやてはご飯どれくら……ん？」

「どうしたん？」

「いや、なんかこれ……あー、まずいかもしれん」

空気がぴりぴりする。

いや、ついにはやてが怒ったとかではなく。魔力関係の現象として何か起こったという意味でだ。

どうも、俺がこの世界へ逃げ込んだ直後くらいからよくわからない反応がちらほらしていたのだが。今回のこれはずいぶんとガチのやつだ。

どれくらいガチかというと、これ管理局に嗅ぎつけられるんじゃないかなというレベルである。

まずい。非常にまずい……

「ちよ、ちよつとはやてさん、いいですかね？ どごその馬鹿が魔力ドーン！ で大喧嘩はじめたみたいだから、ご近所迷惑にならないよう注意してくるわ」

「途中のドーン！ が凄いい気になるけど、えらい慌ててんなあ」

「ああ……まあ実は、これまで何回か結界魔法が近場で発動しててだな。ぶっちゃけ今はあんまり関わりたくなかったのと、一応は隠蔽するつもりはあるんだなって思って放置してたんだけど……」

けど？ と先を促されて、思わずどう答えようか迷ってしまう。

距離的にはそこそこ遠い。だが、この遠さで観測できる異変というのが洒落にならない。

つまり、どう考えても今回は隠蔽前にとんでもないことをやったということだ。

そしてこの場合、いったいなにをやっているのが問題となる。

飛び火しないとは言いい切れないしなあ……

「とりあえず、ぱぱと偵察してくる。1時間くらいで戻るから、先に食っててくれ」

「んー……まあ、ええけど。それ行かなあかんもんなん？」

「すまん。無視するつてのも考えたけど、ここ本来は魔法がない世界だろ？　いくら管理外世界だからって、ここまで派手にやったら管理局が放つとくとも思えん。最終的に芋づるで見つかりたくないし、目的だけでも確認してくる」

まあ、それやったらしゃーないかもなと呟くはやてに、もう一度すまんと謝って玄関へ走る。

靴に足を無理やりねじ込んで、同時に最近使ってなかったデバイスを起動。並行してハイド系の魔法も発動していく。

ドアを押しあけて外に出る瞬間、後ろから「気いつけてな」という声が追いかけてくる。

どうする、ア○フル？

そんな幻聴に後ろ髪を引かれながら、俺は未練たつぷりで真つ暗な空へと文字通り跳び出した。

†

突然だが、空間の一部を切り取って特殊な性質を付与する魔法を結界魔法という。これらにはいくつもの種類があり、多種多様な効果を発揮する便利な魔法だ。

空戦のできない俺が足場に使っているのも、厳密にはフローターフィールドという結界魔法の一種である。

「うわあ、暴走したロストログア素手で握りやがった。金髪△。というか、さっきのやつぱり次元震だよなあ……」

流石にこれは管理局も無視しないだろうな、とため息が漏れてしまった。思わず遠い目をしてしまったが、これくらいは許して欲しい。

ということ、はりきって話の続きをしよう。

結界魔法のバリエーションにはエリアタイプというものがある。

現在、街のど真ん中に展開されているものがそれである。

はつきり言って、エリアタイプは上位の魔法だ。

その中でも通常空間から特定の空間を切り取り、時間信号をズラすことで認識できなくする結界魔法。封時結界というやつだろう。

術者が許可した者か、視認もしくは進入する魔法を持つていなければ認識することもできないような代物である。

ここまでであえて一言添えるなら、舐めてました土下座するんで許してくださいと言ったところか。

俺は結界魔法なんて使えないし、進入はできるが一発で術者にばれる自信がある！

なんとなく、胸張つて言うことちやうなと呆れ混じりの幻聴が聞こえた気がした。泣きたい。

「もうやだこの世界。なんで管理外世界に、こんな高ランク魔導師がいのの？ ドンパチやるなら余所でやってくれよ……あ、金髪が犬耳に抱えられて逃げた」

そこで愛杖であるM1903のスコープから目を放し、深い深いため息を再び吐き出す。

やったことは簡単だ。

封印結界は、特定の通常空間をズレた時間信号の幕で覆っているにすぎない。だから、その信号を解析し、スコープにフィルターを掛けて覗き見していただけである。

だから、ここは結界からかなり離れた高層マンションの屋上だ。わざわざ近付いて、見付かる可能性を増やす必要もないだろう。

そう思つての位置取りだったのだが……

「これもう間違いなく管理局にバレてるよね。しばらくは大人しくしてるしかないかなあ」

ふうむと首を捻っていると、上空から犬耳しっぽのお姉さんが降りてくる。

着地と同時に目が合ってしまった、お互いに固まってしまう。

「なっ!? おおおおお前誰だ!!」

「フアッ!? なんで居場所がバレたんですかね」

つつい震え声になってしまったが、俺の尻は無事だ。安心して欲しい。

「待ち伏せしといてしらばつくれる気かい!!」

「え、何それおいしいの？ 濡れ衣！ それすつごい濡れ衣だから!!」
ぐるぐる唸っている犬をどうしようかで迷う。

「ご主人様は抱えられたまま伸びているようだし、残念ながらほねっこの持ち合わせもない。」

「いよいよ詰んだか。というか、待ち伏せ？ もしかしてこのビルが拠点だったりして。」

「そんな馬鹿な、ハツハツハツ……」

「わ、笑えない!!」

「よしポチ、ちよつと落ち着け。俺は敵じゃないから。ほら怖くない、怖くない。ね？ 怖くない」

「誰がポチだ！ ぶつ飛ばされたいかこの野郎!!」

「何故だか火に油を注いでしまった気がする。」

「おかしい、動物はこうやれば落ち着くと聞いたのに。」

「ああ、指を噛ませなかったのが悪かったのだろうか。でもちよつと食いちぎられそうで怖いなあ。」

「他に知ってる宥め方と言えば、撫でまわしながら舐めまわすというちよつと絵面的に犯罪臭ががが。」

「ダメだ、倫理的にこれはダメだ」

「おいこら、そこの変な奴！ 結局お前は何なんなのよ!!」

「そうです、私に変なおじさ……お兄さんです!」

「もうこうなったら三十六計逃げるにしかずだ。」

「今ならポチも困惑している。恐れ入ったか俺の話術!!」

「全力で振返って力の限り走り、屋上の淵までたどり着ければこちらの勝ち。」

「人を抱えている以上、深追いまではしてこないだろう。」

「やったか!？」

「まてこら、誰が逃がすか!!」

「わあー！ ノータイムでバインドとかお前とんでもないね!!」

「いかん、やったか!? はやってないフラグだった。」

「対象を拘束、捕縛する魔法。その最たる鎖が、ポチの展開した魔法」

陣から躍り出る。

なにこれ、新しい性癖に目覚めちやいそう。

「フウーハッハッ！ やらせはせん、やらせはせんぞ!! 逃げることに關しては一家言ある俺を舐めるなよ!!」

鎖が届くよりも早く、こちらも魔法を展開する。

ハイド系の魔法は既に発動中なので、ここは物理方面で視覚を誤魔化すものが必要だろう。

が、その前にバインドの方が早いので時間稼ぎが必要だ。

振り向きざまにM1903を引きぬき、追いかけてくる鎖へ向ける。

このまま牽制に撃つてもいいが、如何せん今のライフル状態ではポルトアクションがめんどくさい。

ならどうするか。伊達や酔狂で機械的な数字の羅列を名前にしたわけではないところを見せるときだろう。

「俺のデバイスは、まだ一回分の変身を残しているのだよ!!」
「なっ!?!」

驚くポチの目に写ったのは、俺のデバイスが部品をパージした姿だろう。

いや、変身も何も。ただ追加装甲を格納空間に戻しただけなのだが、思いのほかい反応で嬉しくなる。

銃身に対してへの字だったグリップが、直角にスライドしアジャストした。それでパージ工程が終了する。

32オートモード。コンパクトな拳銃型へ姿を変えたM1903の名前だ。

「バックショット・ファイア!!」

M1903の先端に集まった魔力が、放射状に猛威をふるう。

狙いはてきとうだが、これだけ弾をばら撒けば鎖にもあたる。破壊まではいかなくとも、軌道がわずかに逸れば十分だ。

「アルターデコイ・ランダムバースト」

少しの隙間と、一瞬の時間。逃げるだけなら、これでなんとかなる。体がぶれるような感覚に襲われ、続いて十数の俺が四方八方へ飛び

出していく。

ポチの表情は焦りに染まっているが、反応が遅れるのはありがたい話だ。

構わず全方位に突っ走って、ビルの淵から全部の俺が飛び降りた。わあと叫びつつ両手を上げたスタイルで。

「な、なんだっていうんだい!？」

慌てて一番近い場所から下をポチが下を見下ろす。だが、もう遅い。

そこにデコイたちの痕跡は欠片も残っていないだろう。

小さく舌打ちして、追うか迷った末に建物の中へ戻ることにしたらしい。

手の中でぐったりしている主を気遣ったの行動か。いい使い魔じゃないかポチ。

「いやあ、あつぶねえ。これ、毎回どつきどきするわ」

名付けて逃げたと思っただらわりと近くにいきました作戦。

わりと成功率は高いけど、スリリング過ぎて心臓に悪いんだよなあ。と給水塔の裏でひとりごちった。

幻術系の魔法を好き好んで覚える物好きは少ない。希少価値は、そのままステータスに直結する。

この調子で管理局もやり過ぎせればいいが。どうなるかは、神のみぞ知るといったところだろう。

「さて、もうそろそろいいかな。慎重に急いで撤収するでしょう」

変な接触もあったので、帰りがやや遅れている。

はやて、飯はどうしたかなあ。

このあと、帰ってみればはやてはご飯を食べずに待っていた。

聞いていた時間よりも遅いとしこたま怒られたが、これくらいは教えてくれてもよかったんじゃないかな神よ……

5 美味しいものには棘がある

はやての定期通院に付き合うのもずいぶん慣れてきた。

主治医の疑わしげな視線を受け流すのも上達したし、どれくらいで診察が終わるのかも把握している。

だから、わざわざ筋肉集団と追いかけっこしなくても外で時間を潰すことだってできるのだ。

流石は俺。やれば出来る子だ。

「ということで。ええつと、クワトロベンティーエクストラコーヒー
バニラキャラメルハーゼルナッツアーモンドエキストラホイップア
ドチップウイズチョコレートソースウイズキャラメルソースアッ
ル克蘭ブルフラペチーノを一つ」

「それ、最近はいくつか無くなったトッピングがあるらしいから出来
ないみたいよ?」

カウンターのお姉さんが困ったように微笑んでいる。

ナンテコツタイ。お札が必要な飲み物と噂で聞いてわくわくして
いたのに。

ついでに診察を終えたはやてのお土産をと思ったのだが、出来ない
のか。残念。

しかし、せつかく長い呪文を覚えていざ挑んでみたら何も出てこな
いとは。

これは直訴も辞さない。

「あと、申し訳ないけどこちらは普通の喫茶店なの。だからそう言うの
はちよつと」

「どうかしたのかい?」

「イイエ、ナニモアリマセン。タイヘンゴメイワクラオカケシマシタ、
ドゲザデュルシテクダサイ」

必死に額を床にこすりつけたら、あとから出てきた男の店員さんと
もどもドン引きだった。

いやだって、後から出てきた方が完璧にやばい空気出てたんだも
ん。

これは仕方ないね。

「すいませんでした、だから殺さないでください」

「いや、殺さないよ?」

生きてるって素晴らしい。

今回に関しては、本気で命運が尽きたかと思つたレベルだ。逃げに定評のある俺だが、何故か捕まる自信がある。

かと思つたら、いつの間にか女性店員さんの方はテーブルの客に呼ばれていなくなつていた。

これはやばい。

何と言うか、たぶんこの人はこちらに危害を加える気がないのはわかる。だが、それと全く関係ないところで俺の中に警鐘がガンガン鳴り響いている。

「えつとその、まさかお店が違うとは思わなくて。本当に申し訳ない。今度、黄金色のお菓子とか持つてくればいいですか?」

「何か必要以上に怯えられているように思うんだが、気のせいかな……」

「いやまあ、ぶつちやけ怯えるというか生命の危機を感じてますが」

何かショックを受けているらしい男性店員が、がっくりと肩を落としました。

見た目は優男風なのだが、ひしひしと溢れ出すプレッシャーが隠し切れていない。

まかり間違つて戦場で出会ってしまった日には、一も二もなく尻尾巻いて逃げているところだ。

そういえばはやてが言つていたか。この地球どこかには、生き返るごとに強くなる恐ろしい戦闘民族がいるという。

そもそも、完全に殺しきれないとかどうすればいいのか困惑するレベルだ。

「それにしても、君はわかるんだね。何かやっていたりするのかい?」「むしろ、何をやってればそんなとんでもないことになるのか聞きたいんですが。こっちはただの生存本能ですけど」

俺の言葉に困つたような笑みで答える辺り、きつとこの人はいい人

だろう。

ただちよつとこつちが及び腰になるのは容赦願いたい。

「とりあえず、ケーキくれませんか？ ショートケーキ二つで」

「ああ、お買い上げありがとうございます。うちはシュークリームも美味しいんだが、どうだい？」

じゃあそれも、とお願ひして二つずつ箱に詰めてもらった。

本当に、心から申し訳ないのだが、一刻も早くこの密閉空間から出る必要がある。

この距離では瞬きする間にやられてしまう。

「えつと」

「ひゃい!? なんでしょうか……」

もはや、店員さんの表情は苦笑を通り越して引きつり気味だ。

こちら心苦しいが、体の芯の部分が逃げると言っているのだからどうしようもない。

大目に見てくれると嬉しいなあ。

手早くお金も払い、後ずさるように店を出る。

最後の最後まで苦笑いの店員さんと睨めっこ状態だ。扉を閉じたところで、思わず息を吐いてしまった。

「もう、いったいどうなってんだよこの街。実は歩く死神とか住んでも驚かないレベルだぞ」

不意に見上げた先にあるお店の看板を、俺は絶対に忘れないだろう。悪い意味で。

世界は広いな。あれでリンカーコアがあつたら俺は泣くかもしれ
ない。

とりあえず、ここもまだ間合いの中だ。安心するためにも、さっさとここを離れた方がいい。

そろそろはやての診察も終わっているころだ。

†

「このシュークリーム美味しいなあ。どこで買ってきたん？」

「翠屋つて喫茶店。散歩がてらに見つけたんだけど、確かに美味しい。これはケーキの方も期待できそうだな」

とか駄弁りながら、シュークリームをかじりつつ帰路を歩く。

小規模の次元震から数日、今のところ何も無い。

昨晩いろいろと観測データを集めてみた結果、近くを次元航行船が通り過ぎた痕跡だけは見つけたが。

なんだ、つまり管理局は素通りしてたのか？ わけわからん。

「なんや難しい顔してんな。どうしたん？」

「いや、このシュークリーム。カスタードの舌触りが半端ないんだけど、どうやってんのかなと思って」

料理には自信のあるはやても、流石にこういうタイプのはあまり作らないらしい。

「というか、1人のころはお菓子そのものをあまり作っていなかったよ。ようだ。」

自分用よりも、石田先生のお土産にという方が多かったんだとか。

それにしてもメイドインはやてのおやつは、いつも決まって3時に出てきている気がするが。

「そりゃ、ヤクモさん来て食べてくれる人ができたしな。1人で作って1人で食べるんとか、けっこう悲しくなるときあるんやで」

「なるほど。なら明日のおやつは一番いいやつを頼みます」

「神は言っている、まだそのときではないと」

綺麗に切り返され、明日はクッキーですと宣言されてしまった。

なんだろう。そのときになったらどんなのが出てくるんだろう。

俺、わくわくすんぞ！

「そういえば、結局この前の魔力ドーン！はどうなったん？ 居場所とかばれたら困るんやろ？」

「ううん……なんていうか、ぶつちやけどどうもなっていないというか」

いぶかしげな顔ではやてが振り向く。

いやそんな目で見られても。

「まあ、とんでもないことやらかしたのは俺じゃないから。たぶん、主犯格の2人を追っかけてったんじゃないかなと思う」

はつきりせえへんなあと言われてしまったが、そこは仕方ないだろう。

無暗に深追いしても、尻尾を掴んだと思っただら掴まれたなんてことになりかねない。

いなくなってくれたのなら、そのまま放っておくのが一番だ。

どこにいるのかわからない不安も、あるにはあるが……

「ちよつとロストログアの正体くらい調べてみるかね。見たことないタイプだったし、小規模とはいえ次元震まで起こしたしなあ」

「次元震？ なんやのそれ」

「って聞かれても、言葉通り次元間で起こる地震としか」

他にどう説明しろというのだろう。

はやてに拾われた日から、ゆつくりと身の上話をしていた。もちろん、話すべきでない部分はカットしているが、この地球以外にも色々な形の世界があるんだよと説明したことがある。

つまり、その散見する世界と世界の間には空間があつて、そこが伝導体となり次元震は伝播していくのだ。

次元震の発理由はさまざまだが、今回は膨大な魔力による空間干渉が原因だろう。

空間の許容量を超えた魔力が行き場を失い、空間を引き裂いたことで次元震に発展したのだと思う。

今回は小規模で済んだ。だが大規模な災害にもなると、断層が発生して世界を崩壊させるほどの被害を出すこともある。非常に危険な現象だ。

そんな感じの説明をしていたのだが、やけにはやてが静かだな。あれ？

「おい、寝んなー！」

「あ、終わったん？ なんていうかな。ヤクモさんの説明って、専門用語が多すぎて聞いているのしんどいんやけど」

「まあ、俺も教師じゃないからなあ。向いてないってのもあるんだらうけど、今後の課題にするわ」

自覚はあるのでなんとかなると信じたい。

なんならはやての勉強をみるのもいいだろう。たまに答えがわからなくて四苦八苦しているし。

なにより、まだ初等教育ということだ。こちらもハードルは低いところから跳んでいきたい。

「それにしても、別の世界なあ。ちよつと行つてみたい気もするわ」

「はやての足が治ったら、いくらでも連れてつてやるさ。見たことはないが、探せばジョグレス進化できる个体がいるかもしれん」

途端に、はやては目を輝かせはじめた。

最近リメイク版が出たとかで、流行の波が返ってきたとか騒いでいたからだろう。

久しぶりに引つ張り出した四角い機械の画面では、ドット絵の墓が立っていたが。あの不吉極まりないおもちゃが面白いのだそうだ。

よくわからない。

「そういえば、ヤクモさんにあげたやつどうなったん？ そろそろ進化やったと思うけど」

「え、そうなのか。悪い。家に忘れてきたから今はわからん」

「なん、やと……」

よくわからないまま、驚愕するはやてに急かされて帰宅。ケーキの箱を冷蔵庫に入れていたら、居間の方で落胆の声が上がった。

「どうした」

「んー、死んでへんかったからよかったんやけど……まあ、これも教訓やな」

はいと渡されたゲームの画面で、なんだかナメクジみたいなのが這いまわっている。

なんだこれは……

「anim.o」

励ますように肩を叩いたはやてが、やたらいい発音でなにやら呟いた。

え、ホントになんなのこれ。

6 殴り合うも多少の縁

それは夜の帳がすっかり落ちて、はやても寝静まった頃。昼間の宣言通り、自室でちよつとばかりロストログアの正体について探りを入れていたときのことだった。

軽く管理局のサーバーをひっくり返し、それっぽいデータを探していると割り込みが入ってきたのだ。

おや？　と思つたのも束の間。乱入者は欠片の迷いもなくこちらを目指してくる。

管理局に感づかれたかとも疑つてみるが、そうでもないらしい。こちらだつて管理局のサーバーへ無策で突っ込んでいるわけではないのだ。

ダミーはいくつか撒いているし、回線の経由だつて何重にもしている。

「おいおい、どこでこつちのシステム捕捉したんだよこいつ」
つまり、完全にやり口が読まれているのだろう。

管理局を無能だと言うつもりはないが。しかし、俺みたいの有象無象の動向にまで目を光らせられるほど化け物じみた有能さがあるはずもなく。

つまりなんだ。

これ、完全に個人的な知り合いだよな……

「誰だよ！　ここ最近は怨みを買うようなことした覚えなんてないぞ！！」

悪態を吐いてみたところで、追撃の手が弱まる気配はない。

じわりじわりと追い詰められているのは、おそらくマシンパワーに差があるからだろう。こちらは所詮デバイス一つ分の処理能力なので、そこは仕方ない。

べ、別に俺の腕が悪いわけじゃないんだからね！　勘違いしないでよね！！

「これは逃げきれそうもないなあ」

思わず吐息を漏らしつつ、こちらの接続経路を複雑化する作業に入

る。

こうなったら逃げ切るのは諦めよう。この鬼ごっこは時間稼ぎに使って、こちらの居場所を特定されないようにする方が建設的だ。

相手を知り合いだったとして、ガラスの良いやつである保証はない。

今の居場所がバレるのは、イコールではやてを危険に晒してしま
う。

本当は、早めに出て行った方がいいんだとは思うのだが。

「まったく。俺はいつまでここにいられるのかね、っと」

無理に回線を追いかけてくると、そのまま管理局のメインサーバに突っ込んでいくウイルスコードを設置したところで短い電子音が鳴る。

アラートだ。

これで追いつかれてしまった。

「こっちのIPアドレスの暗号化が間に合わねえ。くやしいのう、くやしいのう」

『それは本当に悔しがっているの?』

空間モニターに見覚えのある顔が浮かび上がる。

ああ、こいつだったか。出来れば、しばらく見たくなかった顔だ。

プレシア・テスタロッサ。

俺が管理外世界まで逃げ込む原因を作り、はやてと知り合うチャンスをくれた人物。殴るべきか五体投地で感謝すべきかで迷う相手だ。

「おい、依頼はちゃんどこなしたろ? 今さら何の用だよ」

『共犯者なのに、ずいぶんつれないわね』

「だいたいお前のせいだけだな」

思わず吐息が漏れてしまうのも仕方ない。

確かに仕事を受けたのは俺だ。自業自得と言われればそこまででもある。

しかし、共犯者というものの言いはどうだろうか。少なからず、彼女の仲間になった記憶はない。

「俺はお望み通りの機材を、全て探し当てて運び込んだよな? それも違法合法の区別なく。おかげ様で管理局に睨まれたんだからいい

迷惑だ。その上、まだ何かあるのか？ それとも、今さら機材に不備があつて文句でも言いに来たのか？」

『まあ落ち着きなさい。別にクレームを言いに来たわけじゃないの。むしろ、あなたのおかげで計画を前倒しできたのだから。これでも感謝しているのよ。』

「あーあー、そうですか。じゃあ今すぐ回線のロック外して解放してくれませんかね。こっちはお前に関わりたくないんだ」

出来れば、ほとぼりが冷めたあとでも永遠に関わりたくない。

運び込んだ機材には次元境界計測装置やちよつと言えないレベルの薬品や、培養機なんてものまで含まれていた。

俺が直接会つて取引をしたのは、主にリニスとかいう使い魔だったが。通信モニター越しに喋るプレシアは、ときたま饒舌になるとアルハザードがどうのと言つていたと思う。

もちろん、装置を何に使うのかなどと野暮なことを聞いたことはない。興味がないというものの理由の一つだ。

だが、どう考えても面倒なことだろう。巻き込んで欲しくはない。「ん？ そういえば、お前が自分で連絡してくるなんて珍しいな。リニスはどうした。あつちの方がちゃんど会話のキャッチボールになつて楽なんだが」

『……彼女はもういないわ』

ああ、また話しがきな臭い方に傾いた。

「ふうん……まあいいなら仕方ない。じゃあ、ご用件をどうぞ。仕事のご依頼以外なら今すぐお引き取りください」

『本当に、あなたはいつも私の話を最後まで聞かないわね』

最後まで聞くと、知りたくないことまで知りそうだからに決まつてるんじゃないか常考。

『用件は簡単よ。また少し手伝つて欲しいの』

「あー、これは申し訳ありませんお客様。ただいま、在宅以外のお仕事は休業してますんで派遣の類はお取り次ぎできません」

『あら、そんなことを言つてもいいのかしら？』

「いいに決まつてんだろ。もともとこっちは中堅で仕事してんだ。

断って無くすような知名度は持ってねえ」

そういうことではないのだけどね、とモニターの中でプレシアが忍び笑う。

もうちよつと普通にキャッチボールしようぜ、マジで。普段から変化球投げ合うのも疲れるだけじゃないかな。

「言いたいことがあるならさっさと行ってくれるかな？ 俺だって調べ物の途中なんだ」

『そうね。じゃあ、あなたの手間をはぶいてあげるわ』

不意に、こちらの空間モニターが一つ増えた。プレシアが何かしたか。

相変わらずモニターの中で不敵に笑う姿を一瞥し、新たに出現した情報を手元に引き寄せる。

内容はとあるロストログアに関する資料だ。

ジュエルシードと銘打たれた青の宝石には見覚えがある。つい先日、金髪と白いのが取り合っていたロストログアで間違いない。

「情報提供には感謝するが、だからと言って仕事を受ける気はないぞ？」

『頭のいいあなたなら気付いているでしょう？ なぜ、私がこのタイミングで連絡をとったのか』

何も言っていない俺の欲しがっている資料がばれている。

どこにいるのかもわからないはずの俺に、わざわざ連絡を取って依頼をしてくる。

極めつけは、いかにもな口調でわかっているでしょう？ と問いかけてくる。

もうやだ。引きこもりたい……

「あの金髪とポチか。リニス以外にも身内がいたなんて知らなかったな」

『ポチ……？ ああ、アルフのことね。あと、その金髪はフェイトというのよ』

「名前なんて知りたくもない……ああ、クソッ！ わかった、一回だけだ。代わりに俺の居場所をリークするのはやめろ。間接的とはいえ、

お前と関わってたこともだ」

『いいわ。ここ最近、管理局が邪魔してくるせいで私も余裕がないの。追って詳細を送るから、連絡先を覚えてくれないかしら』

「捨てアカウントのメールでよければ喜んで」

いつでも削除可能なフリーメールのアドレスを受け取ると、プレシアは早々に帰って行った。

声は努めて落ち着かせていたようだが、本当に余裕がないのだろう。

でなければ、こんな方法で接触を図ってくるはずもない。

一応、俺への連絡方法は他にもいくつかある。どれも時間がかかるし、確実性に乏しいという難点はあるが。

なんにせよ、そっちではなく直接のコンタクトだ。

それも、管理局のサーバーを漁りに来ると予想して網を張っていたということになる。

「これは面倒事の予感がするなあ」

あーあとやる気のない声を漏らしながら、ベッドへと倒れ込んだ。

一応、今回の騒動に派遣されている部隊名だけ管理局のサーバーから洗い出して、あとはさっさと撤退しよう。

横目に別のモニターで流れるジュエルシードの資料を流し見しつつ、目的のブロックからファイルを引っ張ってくる。

出てきたのは艦の名前と、乗員の名簿だ。

「L級艦船第八番艦・アースラ。艦長はリンディ・ハラオウン。出向で執務官まで乗ってるのか、泣きそう。あれ、こっちもハラオウン？」

まあ、その辺はどうでもいい。

問題なのは艦船が出てきているところだ。

部隊だけの派遣ならまだしも、拠点として戦艦を持ちだしてきている。彼らのフットワークは非常に軽いと思っておいた方がいいだろう。

カタログスペックを見るだけでも、アースラが厄介なのは明白だ。

フェイトというらしい金髪少女を手伝う場合、ポチも含め味方は最大3名。アースラに乗員している武装隊が駆けつけると、一瞬で踏み

つぶされるんじゃないかな……

ここに執務官もやってくるとなれば、もう勝てる気がしない。
「うわあ、めんどくせえ……」

もう許してください、なんでもしますから。

そんな切なる願いは、数週間後に儂く吹っ飛ぶことになる。

汚い花火だ。勘弁してほしい。

7 計り難きは乙女心

スコープを挟んで遙か先。金髪の少女ことフェイトが、使い魔のポチ……違った、アルフを連れて移動している。

目指しているポイントまで、数分もあれば到着するだろう。

『すまんが、ポイントに到着したら少し待機してくれるか？ お前らの飛行速度を舐めてた。思ったより早いな』

視界を大きく右に振って、こちらの準備を整えるために射撃する。

空気の抜けるような軽い音を伴って、ライフル形態のM1903の先端からスフィアが発射された。それは5メートルも進まない内に、空気へ溶け込んで見えなくなってしまう。

『固定座標に到着するまで6分つてとところか。カップラーメンでも作ってればちよいどいい時間になるぞ』

『は、はあ……』

どうも冗談の類は通じないらしい。なんと答えればいいのか困惑するような声が返ってきた。

別にからかうつもりもないのでどうでもいいのだが。

『あの、あと少しで海上のポイントに到着します』

『ちゃんと見えてるよ。隣の使い魔が不機嫌そうなのまでばっちりな』

『そう思うんなら話しかけてくるんじゃないよ！』

今日はささみジャーキーを持参してみたのだが、この距離では投げ渡すわけにもいかない。

いつそ口を狙って撃ちこんでみるか。ジャーキーをアルフの口にシユウウウウウツ!!

めちやくちや怒られそうだな。やめとこう。

『到着しました』

『了解。こっちはもう少した。手順の確認でもしとこうか？』

そうですね、と決意に満ちたような声が聞こえてくる。

プレシアから連絡を受けて今回のサポートをすることになったが、彼女はそれをどう思っているのだろうか。ちよつとわからない。

フエイトの話しぶりから、2人の関係が親子なのは予想できた。母さんのために頑張ると意気込む彼女は、今ちよつと無謀なことをしようとしている。

だが、これだけの愛を注ぐ娘に対して、親の反応は異常に冷たい。何かの研究のためジュエルシードを集めているらしいが、結局その詳しい理由もわからないままだ。

『今回のジュエルシードは海中にあるんだったな』

『はい。だから、私が電気の魔力流を打ち込んで強制発動させようと思えます』

『それをお前が封印して、俺が撤退のサポートをする。やはり、何度聞いても無謀な気はするが』

答えは返つてこない。むしろ、この沈黙こそが答えなのだろうか。彼女が何を考えているのか俺にはさっぱりわからない、ぐらいならわかるのだが。

わからないことがわかるなんて、所詮は負け惜しみな気がしてくる。

『まあ、やると言うなら止めはしない。俺も報酬分は働くさ』

『ありがとうございます』

本当は全部一人でやって、母親に褒めてもらいたいとか？

第一印象は聞きわけのいい優等生だが、それぐらいなら考えているかもしれない。

それくらい、彼女が見せた家族への執着心は強いものだと思う。

結局、この考えはよくわからないという結論に帰結する。

あまり不用意に踏み込むと面倒なことになりそうだが、どうもこの中途半端な感じも気持ち悪い。

歯がゆいところだ。

そういえば、リニスの姿を見ていないような気がするのだが。別件で出かけているのかもしれない。

なんだかんだ律儀なやつだから、居るなら挨拶くらいしてくるはずだ。

彼女がいれば、いろいろと上手くやってくれただろうに。

『待たせたな。こちらの準備も完了した。好きなタイミングで始めてくれ』

はいと力強く頷いた言葉には、やはり意思を感じる。

切羽詰まったような、焦っているような。昔、仕事を受けた直後のプレシアに似ているようだ。

親子だから、当然なのか？

いまいち晴れない疑念の答えを待つてくれるはずもなく。雷が海面に突き刺さった。

‡

苦しい、でも諦めない。なんとしてもやり遂げてみせる。

そんな使命感が、体を突き動かしていく。

全ては母さんのため。そう思えば目の前で撒きあがる渦も、放電の光だって怖くはない。

研究で必要だからと、母さんが私にジュエルシードの回収をお願いしてくれた。

最近、なんだか距離を感じていたけど。きっと全部、研究が思うように進まなかったせい。

ジュエルシードさえあれば、研究は前進するはず。

そうすれば、また昔みたいに仲良く笑って暮らせる。

あの陽だまりみたいに温かくて優しい母さんが笑ってくれるはず、きっと……

「ぐうっ……あああああああ!!」

もう魔力が限界に近い。飛んでいるのがやつとだ。

体も重く、あつちこつちが痛い。動きが鈍くなっている自覚もある。

ここまでなのかな。

そんな不安が押し寄せ、感情と視界を黒い影が侵食していく。

今日初めて会った、協力者のお兄さんが言ってたっけな。今からやることは無謀じゃないかって。

やつぱり、無理だったのかもしれない。

でも、やらないと。母さんのために。

『お——、——以上は！ 頼——ら、一旦——てくれ!!』
ぶつ切りの声が念話でとんでくる。

何を言っているのかわからないけど、この声は協力者のお兄さんだ。

結界の外にいらしいから、ジュエルシードの影響で繋がりにくくなっていいのか。はたまた私の魔力切れが原因か。

とりあえず声が焦っているような気がする。

『聞——ない—か？ ちく——、上だ!!』

「え？」

念話の聞きとれた部分にだけしたがって空を仰ぐ。

そこにいたのは白い子。ジュエルシードを巡って戦った、あの子だった。

こちらを目指して降りてくる彼女から敵意は感じられない。

むしろ、なぜか悲しげな表情すらしている。なぜ？

「フェイトちゃん!! 手伝って、ジュエルシードを止めよう」

そう言つて、その子は私に魔力を分け与えてくれる。

どうして？ なんで？

「2人できつちり半分んこ」

私の困惑を置き去りにして、その子が笑う。

バルディツシユまでもが、貫つた魔力で勝手にフォームを変えてしまった。

わからない。わからないけど、きつと今は迷っているときじゃない。

胸の奥にもやもやした何かを感じる。それすらも無視して、魔法の術式を組み上げた。

「せーのっ!!」

遠いはずなのに、あの子の声がやけに近く感じた。

†

上空から白い魔導師が乱入してきた。

あれは前に次元震を起こしたときのやつか。管理局員には見えなかったが、どうやら関係者らしい。

てつきりフェイトが墮ちる直前に出てくると思っていたから、完全に動くタイミングを逸してしまった。

「なにこれ。つまりどういうことだったってばよ」

スコープに映る二者は、不思議なことに協力体制をとっている。

あれ、敵じゃなかったの？ もう予想の遥か斜め上に行く展開に、俺の頭はまったくついていけない。

とりあえず、乗艦リストにあつた執務官は男だった。武装隊も見えないので、管理局側は余剰戦力を残しているだろう。

それが出てくれば、今度こそ俺の出番となる。

戦闘準備？ いやいや、逃走準備なら万全だけどね。

「案外、あの白いのが出てきたのもイレギュラーだったりしてな」

ははっ、そんな馬鹿な。

ないない。流星にそんな都合のいい話……ない、よね？

俺は今、何に対して不安を感じたんだろう。怖すぎるんですけど。

そんなことを言っている間に、結界の中では2人の魔導師が高威力魔法をぶっ放してジュエルシードをねじ伏せてしまった。

うん、あいつらまだ小学生くらいだよな？ やばい、はやてと同じくらいの歳の子に勝てる気がしない。

「やばいなあ。今すぐ逃げたいのに、凄いい雰囲気になってんなあ。どうし、え？」

不意に空間モニターが開いてアラートが鳴る。

高速で流れるデータへ視線を向け、次の瞬間には体が動いていた。

「ショートジャンプ！」

最小限で展開された転移魔法が、俺の体を一瞬で結界の内部へと放り出す。

あ、やばいここ海上だった。足場が!?

慌てて小さなフローターフィールドを作って蹴り、半ばタツクル気味にフェイトへ突っ込む。

なんか耳もとで「かあさ、ふっ」とか聞こえたけど気にしない。より厳密には気にしている余裕がない。

近くにいた白いのを、蹴り飛ばしてやる代わりに足場として使わせ

てもらおう。

やはり、こつちからも「フェイトちや、ぐうっ!？」とか聞こえたが、むしろ感謝してくれ。

「あの女なに考えてんだ!？」

俺が突っ込んだ場所に、少しだけ遅れて稲妻が降り注いだ。

着弾と同時に大量の海水を巻き上げ、その威力を雄弁に語って見せる。

空間干渉型の魔力攻撃。次元の壁を無視して飛んでくるような代物を、自分の娘に向けるってどういうことだよ。

「おいアルフ、フェイトを頼む!」

近くで茫然としていた使い魔に主人を投げ渡し、俺はそのまま切り返す。

とりあえず、仕事を終わらせる。さっきのことを問い詰めるのはそれからだ。

空中で静止する6つのジュエルシールドに手を伸ばし、回収と同時にもう一度シヨートジャンプを。

「やらせない!」

黒い影が割り込んでくる。

若干、肩のあたりが世紀末な少年だ。ヒヤッハー! とは言わないだろうな、執務官だし。

それにしても、ここ年齢層が低すぎやしないだろうか。確かにミッドでは子供が働いているし、俺も人のこと言えた義理じゃないけど。

「悪いが不意打ちで行かせてもらう! ああつ、なんだあれ!!」

少年の後ろを思いつきり指差して叫んでみるが、完全に無視された。ジュエルシールドへの道を遮るように立ったまま、どくつもりはないらしい。

あーあ、これ俺のせいじゃないからね?

「ぐがっ!」

不意に少年の後頭部へスファイアが激突した。

なんてことはない。最初に撃った設置式のスファイアを手繰り寄せただけである。

だから警告してあげたのに。

いや、振り返ったら振返つたでM1903のストックがフルスイングされてたんだけどね？

「あ、ちよつと背中貸してくれ」

全力で踏みつけて、6つのジュエルシードを掴み取る。慈悲はない。

ショートジャンプでフェイトたちの横に飛び、アルフの肩を掴んで更に飛ぶ。

ちよつと次元間転移なんて面白すぎることはできないので、とりあえずの逃走手段だ。

あとはプレシアに回収してもらおうか、フェイトに頼むこととなるだろう。

「ああ……やつちやつたよ。あれ、完全に目と目があう瞬間状態だった。これ顔覚えられたよマジ勘弁だわあ……」

「えつと、なんて言えればいいか。とりあえず元気だしなよ？ きつと大丈夫だつて」

まさかアルフに慰められる日が来ようとは。

こ、これは涙じゃないんだからね！ 目から汗が出ただけなんだからね!!

おい、そこで引くなよ。最後まで慰めてくれポチ……

8 アルフも歩けばプレシアに当たる

時の庭園に足を踏み入れたのは何年振りだろうか。少なくとも、4年くらいは立ち入っていない気がする。

それにしても風景がかわったな。

もっと緑が多く、外観も綺麗だったと思うんだが。数年で陰気くさくなったというか、お化け屋敷でも開けそうなレベルだ。

もろもろの管理をしていたのはリニスだったはず。彼女は、こんなになるまで放置するような性格だったろうか。

おかしいな。

「まあいい。そんなことより、とにかく今すぐ帰りたい。はやてに怒られる」

とりあえず、しばらく帰れないかもとメールはしておいた。

それに対する返信は、パンの耳かドックフードかどっちがええ？という辛辣な内容である。

胃がキリキリいつているのは気のせいだと思いたい。

しかし、現状で次元転移なんてやったら間違ひなく捕捉されるだろう。管理局だって、この状況で網を張らないほど馬鹿じゃないだろうし。

というか、根本的に俺では次元間の移動は不可能だ。

第97管理外世界に戻ろうと思ったら、プレシアかフェイトかアルフに頼む必要がある。

「で、あいつらどこだよ」

案内役のリニスがいないと不便だな。

ただでさえ詳しい内装なんて知らないというのに。見た目が変わりにすぎているせいで、見覚えがあるものすらわからない始末だ。

さて、どうしたもんか。

「フェイト！ どこだいフェイト!!」

「どうしたアルフ、フェイトがなんだって?」

向こうから走ってきた顔見知り手を振る。

どうやら遭難は回避できたらしい。

知り合いに会えて一安心とか思っていない。ちよつとひとりぼっちが心細くて泣きそうだったという事実もない。ないっただけだ。

「あんだ、フェイトを見なかったかい!？」

「いや見てないけど。失神してそのまま寝てたはずだろ?」

いなくなつたんだよ、と顔を青くしてアルフは言う。

どうやら少し席を外した隙に姿を消したようだ。流石に外へ出ると思えないので、庭園内にはいるんだろうが。

しかし、あの疲労で歩き回るのは相当つらいはず。本当なら丸一日は安静にしていって欲しい。

え、トドメ? 俺ですけど何か?」

「頼むよ。一緒にあの子を探してくれないかい?」

「まだ報酬もらってないしな。仕事の範疇ってことにしよう」

青い顔のまま、ちよつとだけアルフの表情が緩む。軽口に反応する余裕くらいは出たらしい。

まあ、何事も一人より複数の方が気楽だよな。

「じゃあ、あんたはあつちの方を頼むよ。あたしは、プレシアに報告してみるから」

あんなのでも一応母親だからね、と言外の声が聞こえそうだ。

果たして彼女がフェイトを心配して動くだろうか。実は表に出さないだけで娘を溺愛なんてパターンは……ちよつと考えにくいな。

同じようなことを考えていたらしいアルフも、苦い顔で唇を噛んでいる。

「庭園内にはいるだろうから、探せば見つかるだろ。つてことで、地図をくれ。このままだと現在地がわからなくなる」

「なんでこんなところにいるのかと思ってたけど、あんたまさか迷子に……」

まままま迷子ちゃうわい!

「さて、何のことかな。俺は昔を懐かしんでちよつぱり散歩していただけですよ?」

とても胡散臭そうな目で見られながら、庭園の地図情報を手に入れた。

迷子じゃないけど、これで迷うこともないだろう。

「じゃあ頼んだよ？」

「おう、一通り探し回ったら俺もそっちに合流する」

サボるんじゃないよ！ と念を押して走り去るアルフにひらひらと手を振っておく。

ありがとう、と聞こえた気もするが空耳かな。

広域サーチャーを6つほど走らせ、さつき貰った地図をホログラム化して状況の観測をする。

それにしても、こんなにもやる気だすのは柄じゃないんだが。

こういうのって死亡フラグになるらしいんだけど、その辺が大丈夫かすごい心配だ。

✦

部屋の真ん中にフェイトが寝ている。しかしアルフの姿はない。ついでに、今しがた奥の部屋から爆音が響いてきた。

うん、つまりどうということだっばよ？

「おいフェイト？ フェイトさーん？」

とりあえず、幼女をそのまましておくのもよろしくない。

しかも、大理石みたいな床の上で直寝だ。申し訳程度にマントはかけてあっても、これじゃあ寒すぎるだろ。

そう思って肩をゆすつてみるが、目が覚める気配はない。

ずり落ちたマントの影から見たくない物も見えてしまったので、もう今すぐ帰りたくなってきた。どう考えても報酬が割にあっていないだろこれ。

「あのフェイトさん、ガチでやばそうなら医療機関に連行するんですけど？」

「それはダメよ」

視線を上げれば、割り込んできた声の主がいる。

直接こうして対面するのは初めてだ。

歳を考えろよと思わず言いたくなる服装だが、何かしら意味があるのだろうか。

「おいプレシア。いくつか聞きたいことがある」

「答えるつもりはないわ。それよりさっきの広域探索、許して欲しければもう一仕事してちょうだい」

動力炉なんて機密の近くまで、サーチャーがすんなり入っていくからおかしいと思ったら。どうもわざと見逃されていたようだ。

断れば俺の居場所をばらすつもりなんだろう。

もちろん、はやての家まで把握されているはずはない。せいぜい第97管理外世界での目撃情報を流されるだけだ。

とはいえ、それでも相当めんどくさいことになる。

ちよつと念入りに調べられでもしたら、はやての家にあるロストロギアだってばれないとは限らない。

俺自身の行動もかなり制限されてしまうだろう。

「あなたにだって保つべき知名度がなくても、守るべきプライドくらいはあるでしょう?」

「……全くもってその通りだから腹立つな」

自分の力量にあった仕事を選んで断るのはいいが、途中で投げ出して放棄するのはダメだ。主に今後の信用問題として、よっぽどの理由がなければできない行為である。

そこへ行くと、無理やりにも筋を通しているだけプレシアの提案は断りにくい。

半ば脅迫だとしても、機密を知った対価が一回の労働で済むのは、むしろ破格の条件だ。

「さあ、フェイト。起きなさい。まだ足りないの。ジュエルシードを最低でもあと2つ、欲を言うならそれ以上を。手に入れてきて、母さんのために」

「は、い……」

さっきまで意識のなかったフェイトが、条件反射のような感覚で目を開く。

返事をしたのはいいが、状況を把握していないらしい。一番近い俺の顔に焦点を合わせ、続いてマントへ視線を落とした。

少し首を傾げながら、アルフ? と呟いている。

そういえば、あのわんこどこ行つた?

「ああ、あの子なら逃げ出したわ。怖いからもういやだって」

はい？ 逃げ出したって言ったか今。

猛犬注意とか表示が必要そうなアルフが？ 怖くて逃げた？

またまたご冗談を。

「必要なら、もつといい使い魔を用意するわ。忘れないで、あなたの本当の味方は母さんだけ。いいわね、フェイト」

「……………はい、母さん……………」

何がいいんだかさっぱりわからん。誰か俺に説明はよ！

「あなたも、引き続きフェイトを手伝ってちょうだい。きつと、新しい使い魔なんて必要ないくらい働いてくれるわよね？」

「毎度ご利用ありがとうございます。料金は前払になりますんで、今すぐ入金しやがってくださいお客様」

後払いとかい出したら断るつもりで言ってみたものの、その辺りプレシアに抜かりはないらしい。

口の端を釣り上げるように笑い、目も向けなくてモニターを操作する。

あらかじめ設定でもしてあったんだろうか。指定の口座にしつかり報酬が入金されてしまった、泣きそう。

「いい報告を期待しているわ」

悪の総帥が言いそうな台詞を残して、プレシアは奥の部屋へと引っ込んでいく。

そういえば、あそこだけはサーチャーが侵入できなかった領域だ。はて、いったい何があるんだろう。

ジュエルシードを使って研究をしているとか言ってたから、その設備があるのかもしれない。

外に漏らせないほど重要な内容なのか、あるいは後ろめたさからか。どちらにしても、人目に触れさせたくない物があるのだろう。

研究は守備範囲じゃないからさっぱりだな。

「……………行かないと」

「黙れ小僧」

間違えた、小娘だった。

ぽかんとした顔のフェイトを見降ろし、はやてに全力で土下座することを心に誓う。

もうこれ今日は帰れそうにないもんね。

「1日ぐらい安静にしてろ。どの道、白い魔導師を見つけないと話にならない。正面きつての戦闘は苦手なんだ。搜索はやつとくから、体調を万全にしといてくれ」

「……………」

「第97管理外世界では、こういうとき急がば回れと言うらしい。あとは、急いては事を仕損じるとかな。俺もいろいろと準備がしたいし、1日でいいから時間をくれ」

わかりました、と呟いてフェイトがふらつきながら立ちあがる。

流石に魔力の過剰消費あとだ。1人で飛び出していくとは思えな
いが、一応近くにいた方がいいだろうか。

今からやるべきことを順に考え、リニスがいればなあと思い、いやと首を振って思考を散らす。

いないやつをあてにしたって仕方ない。むしろ、今回のアルフ失踪から察するにもう……

「なあフェイト。リニスはどうした」

「……………」

だんまりか。

ああ、もう。ホントなに考えてんだあの大魔導師様は。

「とりあえず、傷の治療から始めるか。治療道具ぐらいあるよな？」

「はい、私の部屋に」

「ああ、そりゃあいいな。そのまま今日は寝ちまえ」

ふらふらの足取りで歩き出したフェイトを担ぎ上げる。驚きから彼女が暴れたのは一瞬だった。

大人しくしてくれているのは、肩の上が平和なので非常にありがたい。
い。

「…………まるで荷物みたいなんですが」

「まるでじゃなくて、そのものずばりだろ。それとも、可愛らしくお姫様だっこでもしてやろうか？」

ボロボロの体では反論の余地がないのか、再び沈黙が返ってくる。どうも、こいつは困ると黙る癖があるようだ。言いたいことがあるなら、言った方がすっきりすると思うんだけどなあ。

大人しくなった荷物を抱え直し、庭園の見取り図を呼びだす。さて、フェイトの部屋はどれだろう……

9 現実が通れば夢引つ込む

ハロー、全国約72億人のみんな。俺、今君たちのために頑張ってるよ！

「うがあああああああ！ もう無理、もう無理です!! これ以上は耐えられないってマジで勘弁してくれないかな!? あああああ、特性シールドがまた一層!! なにこのじわじわくる恐怖? もう拷問の域だよねこれ!!」

視界を覆い尽くす桜色の光。

これ全部、魔力砲なんだぜ。嘘みたいだろ？

完全に、見た目は避けたら地球が吹き飛ぶあれだ。俺はいつから戦闘民族の世界に迷い込んだんだろう。

「あつ、なんか勢いが弱まって……ハハッ、完全に気のせいでした!! むしろ弱まってきてんの俺の方!! もう駄目だってこれ、さつきから魔力ゴリゴリ持ってきてかかれてんですけど!! 馬鹿じゃないの! 馬鹿じゃないの!?! 何なの死ぬの!! まあ、今死にそうなのは俺なんだけどねえ!!」

いくら収束砲だったって、こちとら温存してたから魔力はほぼ全快なんだよ! それがどうすればこうなるんだ!!

なにこれ、どう考えても満身創痍の幼女が撃つ砲撃魔法じゃねえよ。

どっちかっていうと、戦場の流れを一気に変える戦術クラスの隠し玉だよこれ。

「もうゴールしてもいいよね!! これ以上は脳みその血管的ななにかが吹っ飛ぶって! あああああああ、また1枚! また1枚いいいいいい!! なんだよチクショウ、お岩さんにも転職しろってか!?! 俺にはまだ帰れる場所があるんだよ!! よし、生存フラグも立てたしあとは根性おとおおとおお!!」

背中にフェイトもかばってるし、これはもう必死になるほかない。

最後の1枚になったシールドを睨みつつ思うのは、どうしてこうなったんだろうなあということだ。

フェイトと白い魔導師が戦って、勝とうが負けようがジュエルシードの奪取を考えていたのに。

おかしいなあ。あと、思考面は意外と冷静でびっくりするなあ。

†

時間は少し遡る。

朝焼けの海上、海鳴市の海浜公園。その両側に立つのは、フェイトと白い魔導師の少女。

白と黒の間を朝霧が通過していく。まだ消えていない街灯と、僅かに顔を出した太陽の光に照らされ、2人のコントラストは実に栄えている。

うん、絵になるね。これから始まることを思えば頭は痛いけど。

「フェイト。たぶん管理局に監視されると思うが、お前は目の前に集中してろ。全周警戒は俺の仕事だ。やばくなったらまたタックルするから覚悟しとけ」

『出来れば、もう少し穏便な方法を考えてください！』

ああ、冗談通じるようになってきたね。いい兆候だ。

よくわからんけど、機嫌もいらしい。丸1日死んだように眠ってたが、なにかいい夢でも見たのだろうか。

アリシアじゃないとか言ってた気はするが。誰だそれ。

「さて、アースラはどこかな？　ちよつくらお邪魔しますよつと」

フェイトが戦端を開いたので、合わせてこちらも空間モニターとキーボードを展開する。

こちらの動きを追随するように空を結界が覆っていく。管理局ではないが、アルフでもないな。白い魔導師のお連れだろうか。

まあ、なんでもいい。今回は俺も結界の中だ。ハイド魔法を重ねたおかげで、最初から範囲内にいたとは思われていないだろう。

2人がドンパチやってくれるおかげで、結界内の魔力量が飽和状態に達している。おかげ様で身を隠しやすくなるからありがたい。

今や内部は、天然のチャフで満たされている状態だ。

まあ、どう考えても子供の魔力量じゃないけどね。最近の幼女は怖いなあ。

「わあい、戦艦のシステムなのにザルだなあ。あ、でもしつかりネットワークとシステム部分は切り離してあるのか。これはめんどくさい」
これじゃあ、船を乗っ取って時の庭園に特攻とかは出来なさそうだ。残念。

当初の予定通り、ゆつくりとデータの転送をおこなっていく。

サーバーは昨日のうちに用意したフリー領域だ。追いかけてきても俺はいない。

「名付けてバケツリレー。作動率はまずまずってところかな。一気に情報やると、こっちの決着が、あ？」

ちよつと目を放した隙にフェイトが大技を使っている。

バインドで拘束された白い魔導師に、無数の魔力弾を打ち込んでいくところだ。

最後に残った燃えカスみたいな魔力を集め、それも全部投げつけるつもりなのだろう。

かなり強力な魔法だ。けど、今の万全じゃないフェイトじゃ威力に難ありといったところか。

案の定、白いの耐えきつた上で最後の1撃に砲撃魔法をかぶせてきた。

残りカスの魔力弾はあえなく相殺。それどころか、とんでもない威力の砲撃がフェイトを襲う。

「うわ、きつつ。これは決まったかな、っておい待てや！」

しばらく白い魔導師の攻撃に晒され続けながらも、なんとか耐えきつたフェイトはボロボロだ。

なんてことはない。もう完全に限界が来ているのだろう。

1日寝た程度で全快するなら、世の社畜はもつと元気に働いている。でも、そうじゃないから過労という言葉があるのだ。

タオルを投げ込んでギブアップ。セコンドとしてはそれが正しいのだが、どうも投げ込む余裕はないらしい。

空を埋め尽くす桜色の魔力塊。それが、絶望の象徴にすら見えてくる。

なんか、これが私の全力全開とか言っているが。たとえば非殺傷設定

でもこれはあかんやつや！

慌ててショートジャンプを展開し、フェイトの目の前に飛ぶ。

「うわあ！　なにこれ近くで見ると死にたくなるんですけど!？」

「えっ、なんで!？」

やかましい、説明してる余裕なんてあるか！

「M1903起動！　マーキング、フェイト。トライシールド展開、うわああああ間に合ええええええええ!!」

外側を優先して3面式の鋭角シールドを作り出す。

形状としては三角錐といえわかりやすいか。展開にラグがあるものの、防御力は絶大だ。

主に大型魔法生物のブレス攻撃なんかには耐えるためのものだが。うん、この幼女そこらの大型魔法生物よりおつかない。

駆除とか捕獲とか面倒な依頼だと思ってきたが、こつちの方が万倍厄介だ。

これは死ぬかもしれないと涙目になったところで、ギリギリ展開したシールドの先端に収束砲が突き刺さる。

威力を受け流すよう計算された角度なんて関係ないとばかりに、全五層の1枚目にひびが入った。

「無理ぽ!？」

そんな俺の叫びと共に、話は冒頭へ戻るわけだ。

†

海上に浮かぶ男を見つけて、僕は杖を向ける。

この事件の重要参考人。加害者側だが、情報提供者でもある人物だ。

「抵抗せず大人しく投降して……そもそも動けないみたいだな」

「そう思うなら助けろよ執務官様。ああ痛え、ちよつとゲロった」

うつぷと口元を押さえた男は、げんなりした顔で海面を漂う。

仰向けのままほとんど動かないのは、たぶんなのは砲撃をまともに浴びたからだ。あれをまともに受けたら、流石に僕もどうなるかわからない。

「おい、結局どうなった。フェイトは無事か?」

「無事だ。まさか、こちらの転送ポートに直接ねじ込んでくるとは思っていなかったが」

「かなりシビアな荒業だったが、それなりに収穫はあったろ？ ジュエルシードの方は」

「彼女のデバイスが、負けを認めてジュエルシードを排出していたんだが。その隙に物質転送でプレシアが持って行ってしまった」

ナンテコツタイと頭を抱えて見せる男は、やはりプレシアの仲間というわけではないようだ。

なのはとフェイトの戦闘が始まった直後から転送されてきたデータ。遅々とした勢いで送られてくるそれらは、早い話が内部告発の内容に似ていた。

物質転送があつて無駄にはなつたが、時の庭園の位置情報からはじまり建物内の見取り図や動力炉の映像など。中身はこちらにとつて有り難いものばかりである。

もちろん疑つた。これは罠で、なにかしらの目論見があるはずだと。

ウィルスか、あるいはデマ情報か。あらゆる可能性を考え、少なくともデータの最後に添えられた一文を見るまでは疑い続けていた。

『交換条件だ。俺は守つたぞ、お前らも女の子一人くらい守つてみせる管理局』

意味もなくなのはとフェイトの戦闘を映すモニターに目が向く。

そこにはとんでもない馬鹿魔力を振り上げるなのはと、呆然とした顔でそれを見上げるフェイトがいて。その間に、なぜか僕を踏み台にした男が飛び込んできていた。

「とりあえず拘束させてもらう。アースラまで一緒に来てもらおう」

「お好きにどうぞ。どうせ動けないから安心してくれ」

力なく両手を挙げる男が、まさしくその人だ。

特殊なシールドでなのはの砲撃をぎりぎり耐え切つて、そのまま墜落。

どういう仕掛けか、負けを認めてジュエルシードを排出したデバイスに驚くフェイトを、その直後にアースラの転送ポートへ放り込んで

きた。

転送オペレーションが自動的に起動したと報告を受けているから、おそらく本当にウイルスが組み込まれていたのだろう。質が悪い。

そのせいで、無防備にさらされたジュエルシードを持つていかれたというのもあるのだが。まあ、ここで言っけていても始まらない話だ。

「こちらクロノ。容疑者の一人を確保、ただちにアースラへ帰還します」

「お前、計ちゃんだったのか。ネギやるからお手柔らかによろしく」

「はっ」

意味のわからない発言を問いただす前に、送還転送が開始される。

今頃、武装局員がプレシアのアジトに踏み込んでいるはずだ。僕もそれは見ておきたい。

とりあえず不穏当な言葉はあとで問いただすことにしよう。フェイトに関する話で、なのはたちに伝えていない件も気になることだし。

これで決着することを願いながら、アースラの艦橋へ直接転送してもらおう。

そこで見た光景に、後ろからため息が漏れた気がした。

10 閉めっ放しの根性あし

どうも艦橋に直接放り出されたらしい。

部外者に機密を見せるのとかいいのだろうか。ああ、でも一部は民間に公開してるんだっけ。

純粋な軍隊じゃないよというアピールも大変だな、管理局。

「アリ、シア？」

大型モニターに映った自分そっくりの少女を見て、フェイトは声を震わせながら視線を落とした。

少女は試験管の中に収められているようだが、あれ死んでるんじゃないかな。

というか、あれがアリシアか。見た目的には妹っぽいけど、たぶん違うんだろう。

もう、地雷が見えてるんですけど……

プレシアも、突入したらしい武装隊が送還されてるのをガン無視か。余裕だな。

『もう駄目ね。時間がないわ……今あるロストログア12個。これだけあれば、あるいはアルハザードに届くかもしれない』

何かに酔っているような口調で、モニターのプレシアが語り始める。

死んでしまったアリシアのこと。クローンとして作ったのに、まったく似なかったフェイトのこと。これから目指すアルハザードのこと。

途中で挟まったアースラ側の説明もあり、ようやく話が繋がってしまった。知りたかったかと聞かれれば首を全力で横に振りた。

アルハザードというのは俺も知っている。確か、自爆して滅んだ御伽噺レベルの古代文明だったはず。

そこへ行くためには、次元を裂いて道を作る必要があるようだ。

つまり、あのジュエルシードが通行証になると。移動することによって次元なんて起こされてたら、正直たまったもんじゃないな。

『これでも感謝しているのよ。最後の6つ。あなたが確保してくれな

かっいたらどうなっていたか』

「えー、マジでー。追加料金とつとけばよかったー」

なんとなく俺に喋っているようだったので適当に答えてみたが、一瞬周りから怖い視線が集まった。ちびりそう。

結局、プレシアはフェイトを人形だとか使えないだとか失敗作だとか一通り罵り続けた。ゆっくりと心を抉るような言葉を選んでいる辺り、いろいろ溜まっていたんだろう。

ホント、他所の家庭事情に首突っ込むと碌な目にあわない。昼ドラ先生の言うとおりだ。

更にヒートアップを見せるプレシアは、時の庭園内に大量のゴーレムを出現させながら口角を吊り上げる。

溢れかえった高魔力反応に艦橋がざわめく中、不意にフェイトが画面を見た気がした。

こちらからでは後頭部しか見えないが、きつとすぐる様な目をしてるに違いない。

『いいことを教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してからずっとね。私はあなたのことが——』

「楽しそうなどこ申し訳ないんだけど、俺そろそろ本格的に吐きそうなんだよね。その話ってまだ長い？ もうちよいかかるなら、誰でもいいからちよつと医務室に連れてって欲しいなあ」

え、駄目？ そこをなんとか。あ、睨まれた……

「お前の不幸はよくわかった。娘を亡くして辛かったな。うんうん、その気持ちよくわかるよって言ってやりたいところだが。ぶつちやけさつさと子離れしろよ、この親バカ。もしくは、娘と一緒に墓場へ行きたいなら端っこの方でひっそりやってくれない？」

あ、モニターからも睨まれた。

全部ひつくるめて敵に回すとか、俺もなかなかやるじゃん。

「世の中、不幸なんてキャリアオーバーしてるんだ。お前だけじゃない。もっと悲惨なやつだっている。それを御伽噺にしがみついて家族旅行？ やってることが子供だぞプレシア」

『なんとでも言いなさい。私はアリシアを取り戻すためならなんでも

するわ!! 私たちは旅立つの! 忘れられた都、アルハザードへ!!」
狂信的に叫んで、彼女はジュエルシードを発動させた。

次元震で艦が揺れ、立っているのがやつとだったフェイトが崩れ落ちる。

親からいらないと言われた子供。こんなところにだって、不幸は意味もなく転がっているのに。

なまじなんとか出来そうな能力があると、今のプレシアみたいになるのかもしれない。

「まあ、俺はお前がなにをしようと思らん。けど、仕事はしないとな。なんせ、フェイトを手伝うのが依頼内容だし」

『……なにをしたの?』

「えー、なんのことかわかんないですー。庭園内の至るところに刻まられてた、ゴレム召還っぽい術式引つ掻き回したくらいかなあ」

周りの管制官たちが、今の話を聞いてマップから手薄な場所を探し始めたらしい。こいつら優秀だな。

対してプレシアは舌打ち1つ。忌々しげにこちらを睨んで通信を切ってしまった。

タヌキは損気と言ってだ……あれ、なんか違うな。あと、なんでこのタイミングではやてを思い出したんだろう。

通信が切れたことにより、艦橋が慌ただしくなり始める。

次元震の影響が少ない位置へ艦を動かしたり、茫然自失のフェイトを医務室へ運んで行ったりするようだ。

すみません、俺は?」

「いろいろと言いたいことはありますけど。一応、感謝しておいた方がいいのかしらね」

「感謝、ね。怒る方が先じゃないか?」

不意に、正面で指揮を取っていた女性が振り返る。確か乗船リストには艦長と記載されていたか。

いい加減、手厚い看護をください。こういう世間話も体力使うんだぞチクショウ。

「あら、怒られるようなことをした自覚はあるのね」

「ノーコメントだ。あんたみたいなタイプは、下手なこと言うところちが不利になる」

「それは残念ね。まあ全部終わったら、たっぷりお話は聞かせてもらうのだけれど」

怖いなあ。でもこれ、お手柔らかについて言ったところで意味はなさそうだ。

何かしら考えておかないと。

「あ、そうそう。これを忘れていたわ」

やることの多さにため息を吐いた直後、手元でガチャリと嫌な音が鳴る。

手錠だ。どこからどう見ても手錠にしか見えない。

そのまま視線を上げた先には、笑顔でこちらを見下ろす艦長様。途端に腹黒さが浮いて見え、背中を冷たい汗が落ちていく。

「治療室へは自力で行ってちょうだいね。艦内図くらいは手に入れてるのでしよう？」

「あれれ〜おかしいぞ〜。どこら辺で俺が艦内図持つてる話になったんですかね」

「ずいぶん派手に管理局のサーバーを引つ掻き回していたのだし。あれでバレてないと思うほうが難しいわね」

それもこれもプレシアのせいじゃないか。俺は悪くねえ！

「俺もあんまり余裕ないんですけど。マジで自力？」

「ええもちろん。ここにいてくれてもいいけれど、あなたはやることがあるでしょう？ ずいぶん肩入れしていたものね」

「うわい、あんたいい性格してるわ。せめてこの手錠外してくれない？」

「それ無しで艦内を歩かせるわけにはいかないのよ」

頑張つてね、という有り難い言葉を残して艦長さんはどこかへ歩いていった。

そういえば現場に出るとか言ってた様な気がする。何か奥の手でも持っているのだろう。

なんにしても助力はなしと。ほく前進は……逆に疲れそうだな。

壁伝いに根性出して歩くしかないらしい。

体痛い、頭ぐるんぐるんする。

毎回思うけど、俺こういうキャラじゃないんだって。ホントに勘弁してください！

「もうやだ帰りたい……いや、帰ったら帰ったで五体倒地が待ってるんだって……」

進退窮まった感じがいなめない。なるほど、これが四面楚歌。

楚国の項羽さんがどんな気持ちだったかちよつとわかるな。

あと、産まれたての子牛の気持ちもわりとわかりそうで嫌だ。

「くそう、思ったより遠い。頑張れ俺、ファイトだ俺、負けるな俺。これ、やってみると思つたより虚しすぎて死にたくなるなあ！」

涙が出ちやう、だって怪我人なんだもん！

冗談言いながらモチベーションを上げつつ、えつちらおつちら歩いて医務室まで行きましたとき。

1-1 下手の考え頭を抱える

ちよつと根性出して自力で立ち上がる。姿勢も正し、なんでもない風を装えばパーフェクト!

壁に手をついたへっぴり腰のやつが慰めに來たら、流石の俺も笑う自信がある。

空気というのは大切だ。ここはまじめに行こうじゃないか。

そんな感じで医務室までやってきたら、フェイトはベッドから体を起こしていた。

あれ、これ俺必要なかったんじゃないやね? という不安が一瞬よぎっていく。

いやそりゃ、必要ないなら一人で安心なだけでしょ。

そしてまたアルフがいないな。あいつ肝心なときいつつもいなくなるのか?

「よう、フェイト。俺よりは元気そうだな」

どうやらベッドの側に備え付けられているモニターをみていたらしい。

映し出されているのは戦闘の模様だ。執務官殿と白いのと、あとはお連れとアルフがゴーレムと戦っている。

なんでアルフあそこに……まあいい。今は置いとこう。

声に反応して振り返ったフェイトは、涙を流していた。どうやら来て正解だったらしい。

「どうすればよかったのかな。私はただ……」

家族で仲良く過ごしたただけなのに。たぶん、そんな感じの言葉が続くんだろう。

そりゃ、目標が急になくなったら戸惑うよね。

特にフェイトの場合はそれだけだったはずだ。今まで知らなかったとはいえ、クローンだったわけだし。

母親が優しくしてくれる日が来るのを、ずっと待っていたんだろう。

「うん、甘ったれんな」

つい口から出た言葉に、フェイトがびっくりして動きを止める。とりあえず涙も止まったから、この場合はよしとしておこう。それにしてもいかな。頭の頭痛が痛くなってきたら、考えが欠片もまとまらない。

「フェイト。俺はプレシアに子離れしろと言ったが、お前もお前でさっさと親離れしろ。何も認めてくれるのは身内ばかりじゃない。あれだって、そうだろう？」

モニターを指差すと、その先を追いかけるようにフェイトが振り向く。

移っているのは白い魔道師だ。

この前はいい雰囲気になってたし、今回の決闘じみたジュエルシード争奪戦だって向こうが呼び出してきている。

探す手間を省けて有り難い上に、早い話が白い魔道師にも思うところがあるということだろう。

お話どうのと言っていたから、間違いないと思いたい。

「結局、俺が邪魔しちやっただけだから。あとでちゃんと会話しとけ」

実は俺の声届いてないんじゃないかなってくらい、フェイトはモニターを見つめている。

それにしても、あの白いの怖いな。決闘であれだけ暴れまわったのに、もうあんなに元気ってどういうことだよ。

どう考えても凶器の波動に目覚めてんだろ、あれ。

「で、まあアレだ。お前は他より一足早く子供を卒業しなきゃならん。ちよつとだけ大人になって親離れしろ。子供ってのは親がいなくても育つらしいからな」

モニターに釘付けだった視線がこちらを向く。

瞳の揺らめきは、そのまま不安の表れだ。良心が痛むなおい……

大人が子供に、現実を見ろと強要してるんだから当然か。情けなくて泣きたくなる。

はやてに知られたら、なんて言われるかわかったもんじゃない。

「さっきも言ったが、不幸なんてその辺に転がってる。ありふれた日常そのものだ。いちいち落ち込んでたらきりがなし」

「でも……」

「でももかかしもねえよ。俺だってお前くらいのころには働いてたし、自立もしてた。だからお前もつてのは流石に乱暴だが、でもそれが現実だろう？ うだうだ言ってたって、お前の身内はじきにいなくなる。例え、プレシアがアルハザードに行こうが管理局に捕縛されようがな」

そう、どっちに転んでも結果は同じだ。

あの様子では、改心してフェイトと一緒に暮らすなんてことは出来ないだろう。

そもそも旅立ちか死かの二択しか頭にはないような気がする。プレシアの執念はそのレベルに達していると考えたほうがいい。

アリシアを諦めて、という前提の考えは持っていないはずだ。

「最後に言いたいことがあるなら、通信をねじ込んでやる。それが出来ないなら母親は最初からいなかったと思う方が楽だろうな。どうしたい」

「私は……でも。母さんに笑って欲しくて……」

「甘えんなって言っただろ。残念だが、俺はお前にかけてやれる言葉を持ってない。ここにだって慰めに来たつもりは欠片もない。お前がどうしたいかの意思確認だけして、手伝えそうなら大人として手を貸してやろうってだけだ」

もう一度、フェイトがモニターへ目をやる。

相変わらず白いのは善戦しているが、ちよっとゴーレムの量が多いな。

戦線をさげるリスクを負って、兵を集結させたのだろう。プレシアのやつ軍師の才もあるのかよ、多才で羨ましいね。

別のモニターにクロノが映っている。こちらは陽動のため、1人別ルートで最深部を目指しているようだ。

単騎でゴーレムをガンガン削っていく姿は、執務官の面目躍如とあったところか。流石、星人相手にびびらない主人公は伊達じゃない。

「私は……まだ、どうしていいのかわからないですけど。でも、あの子

は私の名前を呼んでくれた。何度も、何度も」

かみ締めるような声で言って、フェイトがベッドから立ち上がる。あれ、思ったよりもやる気になっちゃってお兄さんびっくりなんですけど。

「捨てればいいってわけじゃない、逃げればいいってわけでもない。だから私は」

「えっと、通信繋ぐ？」

「いえ、あの子の隣に。それから母さんのところへ行きます」

やばい、発破かけすぎた！

っていうか、こいつもアレだけ暴れまわってもう動ける系統の人種かよ。なにここ怖い。

「バルディッシュ。上手くできるかわからないけど、一緒に頑張ろう」「はいストップ！ え、なににする気なの」

ここに取り出しましたるはボロボロのデバイス。こちらを見事、自分の魔力で完璧に復元してご覧に入れますってか。

馬鹿じゃないの？ 馬鹿じゃないの!?

っていうか俺の転送、実はぜんぜん間に合ってなかったんじや。

「ちなみにフェイトさん。なんでデバイスはボロボロなのかな？」

「えっと……母さんの次元魔法をバルディッシュがかばってくれて」

「完全に俺のせいでした本当にありがとうございます!!」

いかん。アースラの制御中枢の一部まで食い込んでおいて、なんの成果も得られませんでしたとか洒落にならない。

このままではアレだ。ちよつとくらい株を回復させておかないと、いつか大暴落する。

「よしフェイト、バルディッシュの修復は俺に任せなさい。どっちかっていうと、そっちが専門の人だから。ね？ ちよつとでいいから俺にも汚名挽回、名誉返上のチャンスを！」

「え？ ？」

駄目だ、はやてだったら突っ込んでくれたのに！

いや違うそうじゃない。

「よし、俺のデバイスパーツを使いまわす。ちよつと魔力切れしてる

から、完全修復とはいかないけど。これでかなり楽になるはず」

手を出して、躊躇いがちに渡されるバルディッシュを受け取った。黒いフレームはもちろん、コアである金色の宝石部分までひび割れている。こいつは重症だが、たぶんなんとかなるだろう。

魔法を詰め込んでおく記憶媒体のストレージデバイスと違い、インテリジェントデバイスは人工知能を備えた杖だ。状況判断をする意志を持ったため、場合によって魔法を自動で起動させたりする脳を持っている。

つまり、突貫工事になってしまおうが、修復において俺は補助をするくらいでいい。

パーツさえ提供してやれば、おおよそは勝手に自分の穴を埋めていくはずだ。

「さてバルディッシュ。情けないことにデバイスの起動ができない。勝手に拡張空間へ接続して、使えそうなパーツは持っていつてくれ」
『Thank you.』

バルディッシュが展開した空間モニターを操作する。

やるのはもっぱら、パーツの適合率を上げてやる作業だ。まあ、それすら殆どやる必要もないのがインテリジェントデバイスの凄いいところだが。

「流石にフレームは無理だが、内部はほぼ代用できそうだな。ちよつと使い心地に違和感があってもご愛嬌ってことで」

一通り作業の終わったデバイスを受け取って、フェイトが魔力を通していく。

彼女の魔力光に包まれたバルディッシュは、ほぼ新品のようになって復帰した。

フレームの修復ぐらいなら、俺でも出来る。もちろん、万全なときに一回ぐらいが限界だけど。

「ありがとうございます。あの、お兄さんのデバイスは」

「大丈夫だいじょうぶ。俺のはストレージだから、あとでパーツ買い足して直すさ」

ところで、そろそろ立ってるのがしんどい。膝笑ってきてるし。

思わずよろけて2歩ほど下がると、足元に転移魔方陣が展開した。え、こつから転移できるの？ ああそうか、今非常時だからか。たぶん、庭園に乗り込んだ面子がやばくなつたときに撤退するためだ。転移魔法を遮断する類の装置を起動したままにしておく、いぎと言うときの逃げ道が消えてしまう。

そういうことにならないための措置かな。たぶん。

「あのお兄さん」

「おう、なんだ」

「その……私、まだちゃんと名前を聞いてなかったんですけど。でも、あの子はたくさん私の名前を呼んでくれて。だから、その」
なんのこつちや。

よくわかってないことを、そのまま口に出されても困るんだが。

「よくわからん、3行で！」

「え、えつと！」

「まあ、あんまりゆっくりしていると出遅れそうだぞ。さっさと行ってこい」

よくわからないが、あわあわしていたフェイトの顔が引き締まった。

ちよつとは覚悟が決まったんだろうか。

「お前くらいの歳だったら反抗期だろ。母親の顔面ひっぱたいてこい」

「……行つてきます！ あとで、名前を。必ず」

最後にまとまっていけない言葉の切れ端を残して、転送魔法が発動した。

あ、もうやせ我慢しなくていい？ そろそろ本格的に膝と腰がいっぱいいいっぱいなんですけど。

この歳で腰痛持ちとか勘弁してくれ。

「はあ、もう無理。これ、たぶん吐くだろうなあ。けど、今が絶好のチャンスだよね」

懐を探ると、そこに硬い感触がある。

手のひらサイズの立方体。ホントは、はやてのリクエストに答えて

用意した装置だが。まあ、仕方ないな。

捕まったときに、ばたばたしていたせいだろう。身体チェックが甘かったのは幸運だった。

「外は次元震。胃の中身がシェイク……で、済まないか」

信じてるよ、俺の幸運値。

装置をルービックキューブの要領で捻る。ぴこんぴこんと間の抜けた音をたてて点滅を始めたので、あとは待つだけだ。

もちろん、これが小型の転移装置だなんていわない。そんなことができるなら、プレシアはもつと穏便にアルハザードへ向かっていただろう。

これはビーコンだ。俺はここにいるから回収してねというやつである。

そういうレアスキル持ちの知り合いがいるのだが。ああ、料金プラン的に足りるかな……

「俺、お金稼ぎに来たはずなのになあ。借金不可避なのはなぜだろう」
悲しみの言葉ごと、俺は装置を起点にして三次元的に展開する魔法の中へと飲まれていく。

バッチコーイ。

‡

名前を聞こうと思っていたお兄さんが、帰ってきたらいなくなっていた。

いろいろと言葉をくれて、行こうとする私のために準備をしてくれて、さり気なく場所も空けてくれて。

でも、戻ってきたときには色んなどたばたに紛れて脱走されたらしい。艦長さんがため息混じりに言っていた。

なんとなく寂しいのは、きつとあんな風に声をかけてくれる人が今までいなかったからだ。

全然似てないのに、リニスのことを思い出してしまう。

『アルフは優しいけど、私を叱ったりはしない。母さんも……だから、あんな風に叱ってくれた人はリニス以来でした』

『え、なにこれ。ちよつと今、かなり体調悪いんであとにし、オロロロ

ロロロロ……』

『ありがとうございます。また会えるような気がするのですが、そのときには名前を教えてください』

『おいこらガン無視か？ そっちから通信繋いできといてシカト？』

実は……うっぷ……一方通行の通信になってんじやないだろうな。叱ってどうのとか、いつからマゾに目覚めたんだよおま、オエー……!!!』

きつと、この念話回線もこれで切れてしまうだろう。

もしかしたら、これも私を気遣って今日まで残っていてくれたのかもしれない。

今は管理局に捕縛されているから、念話を繋いでいるリスクもあるはずなのに。

優しい人だ。こんな兄がいたらと思えるくらい、暖かな人だ。

『うええ……おい、もう用がないなら切るぞ？ お前との念話回線のこと忘れてた。バレて逆探知なんて洒落にならな——』

あれ、回線が悪くなったのかな？ 突然切れちゃったけど。

迷惑になっても大変だから、この回線は早急に処分しよう。

A, S

12 ヤクモに反哺の孝ありき

五体投地とは、己の身を大地に投げ出して行う行為。

土下座？ 生ぬるい。

膝を折って頭を地面に擦り付けるよりも、これは上位互換に位置する。

体の前面はすべて地面と一体化し、背中是一片の影もなく天井を仰ぐ。

決して寝ているわけじゃない。これは最上位の礼だ。

「で、ヤクモさん結局なにしてたん」

「えっと、出稼ぎ？」

「出稼ぎで借金作ってくるんやったら世話あらへんな」

「こもつとも過ぎて言い訳の余地もない。」

「まあそれはええわ。そんで？ もう6月やねんけど。話を聞いた限り、1週間くらい誤差あるわな。なにしとつたん？」

「管理局と追いかけて……」

「ホンマにい？」

「ほほほ本当ですよ？ 半分は……」

実際、不慮の事故で管理局に逆探知されたときは本気で焦ったが。

まあ、隣にいたやつを思えば言うほどの脅威ではない。

むしろ問題なのは、あの守銭奴が慈善で助けてくれないところである。

人の足元見やがって……ぐぬぬ。

(でも仕方ないよなあ)

あの時点で体調は絶不調、頼みのデバイスもパーツが足りないので起動できず。魔力にしても、ようやく少し回復してきたところだった。

完全に無理ゲーじゃないですかねこれ。

根本的に、あの次元震の中を転移する方が頭のおかしい話である。

今回はレアスキルの転移だったから無事だったものの。あれが通常の次元転移だったとしたら、俺も今頃はプレシアの仲間入りを果たしていたことだろう。

手錠も外してもらい、看病までしてもらったのだから文句の言いようもない。

そんなこんなで、気付けば積み上がった借金はちよつと口にしたくない額に達していた。思わず白目になるくらいの金額だ。

普段やらないことをやるから、こういう目にあうのだろう。救いはないんですか!?

古い付き合いということもあり、前金は働いて先払いするという条件でツケにしてもらい。気付いたら、あれこれやらされてる間に1週間が過ぎ。

そして、今日までしつかり勤労に従事して帰ってきたら土下寝という流れである。

情けない大人をスキップして通過した先にあったのは、ただの駄目人間だった。泣きたい。

「もう許してください、なんでもしますから!」

「ん? 今なんでもって」

「いかん、早まった。」

「ほほう、なら許したるか。そやなあ……さしあたって、明後日の誕生日プレゼントでも楽しみにさせてもらうわ」

「え、今なんて?」

誕生日とか言いましたか。しかも明後日?

「私の誕生日、6月4日やねん」

「凄い初耳なんですけど」

そりや言うとらへんし、なんてはやてはしれつと言う。

どうしろというのか。生まれてこの方、プレゼントなんてやったことも貰ったこともないぞ!

「ひ、ヒント! ヒントください!! 誕生日とかやったことない俺にお慈悲を!!」

「卑屈なんか自虐なんかどっちゃの」

ホント、どっちだろうね。

「もう、しゃあないなあ。それやったら、また空に連れてってえな。もちろん、これ以外にもなんか考えるんやで？」

「そうだな。それ、本来は俺の宿代に含まれてるやつだもんな……」

ホンマやわ、とため息混じりの声の後頭部に突き刺さる。

誰かさんがおらんかったせいで、結局行けへんままやったしなあ。なんて心の声が聞こえてくるようだ。

マジすいません!!

「あの、新しい炊飯器とかご入用じゃ？」

「母の日はもう過ぎたで。というか、プレゼントは当日まで本人に内緒で用意するもんや。しつかり考えとくんやで？」

あ、そういう感じなんだ。

でもそれ、貰ったのが興味ないものとかだったらどうするんだよ。ああ、だから考えるのか。

つまり、相手のことを考えてプレゼントを選ぶってことでいいのか？

なかなか難しい注文をしてくれる。

これまで送った品なんて、爆弾かコンピュータウイルスの二択だぞ。

「いやまあ、流石にそれは極端か。他には……あつれ、おかしいぞ？」

今日まで20年生きてきたはずなのに、浮いた話の記憶がないのはなんでかな？ 贈り物、贈り物……やべえ、毒薬のこと追加で思い出しちゃった」

「え、なにそれ怖い。ヤクモさんの青春時代が荒んどる件について」

「ちよつとこれは俺もドン引きですわ……」

灰色どころかどす黒いんですがそれは。

「まあ、ええ機会やろ。女の子に贈り物する練習せえへんと、ずっと独り身になってしまいうで」

「小学生にそんな心配されるとは思いもしなかった。これは驚愕を禁じえない」

うそ、だろ!?

そんなことを言っていたら、突然背中にはやてが降ってきた。グワーツ！

いくら軽いとはいえ、肺の空気が!! とうか、普通に危ないから。「人が心配したってんのに」

「え、心配したらフライングプレスになる理由を詳しく」

「何事も暴力で解決するのが一番や」

お前、いつからニンジャになったんだよ。

ここネオサイタマじゃねえから！

「ところで話しは変わんねやけど。パンの耳とドックフード、どつちがええか決めたんか？」

アイエエエエエエ!?

そのフラグ生きてたのかよ!!

†

あー、まだお腹がごろごろいっている。

晩ご飯は普通のを出してもらえそうだが、さっき食った昼飯は凄いいんパクトだった。

今回のことから俺が学ぶべき教訓は、カリカリドックフードとシリアルは別物であるということだ。

しばらく牛乳も控えよう。嫌なことを思い出す。

「すいません。誕生日だったらケーキらしいんで、なんかそれっぽいありませんか？」

「えっと、いつまでに必要なかしら？」

明後日ですと伝えたら、翠屋の店員さんはうーんとなにごとか考え始めた。ちなみに女性のほうだ。

あのとんでもない男性の方は、カウンターでコーヒー豆をごりごり殺っている。

なんでミルが拷問器具に見えちゃうんだろう、不思議だなあ。

「そうね。他の予約もあるから小さいのになってしまいうけど、用意できると思うわ」

「助かります。3人なんで、むしろ小さい方がありがたい。このお礼はそのうちしますんで」

いいのよ料金は取るから、という素敵なお顔で店員さんが言う。
当然なんだけど、容赦の欠片も感じられないのはなぜだ。

「あと、女の子が喜びそうなプレゼントとか知りませんか？ 正直、まったく思いつかなくて」

「それは彼女さんのために、あなたが悩んで選んであげるべきだと思うわ」

違う、そうじゃない。

「いやあの、相手は家主的なあれで彼女とかそういうんでは」

「あらいいのよ恥ずかしがらなくても。だってそういう歳だもの」
どす黒い青春送っててサーセン……

「でもそうね……その子が、普段から身に着けてるアクセサリーなんかをヒントにするといんじやないかしら」

「アクセサリー……髪留め？ やばい、本格的にわからないジャンルはどうしよう」

そもそもプレゼントってジャンルから未知との遭遇レベルなのに、その上でアクセサリーだと？

茨の道すぎんよ。都合よくライフカードとか出ないかな。

けどまあ、ヒントは貰えたし。これ以上ここに居座って、営業妨害するのも気が引ける。

予約伝票を受け取り、軽く礼を言っつて翠屋をあとにした。
さて、どうしてみようかなあ。

まだ昼過ぎだし、アクセサリーショップでも探してみるかな。

見付けても1人で入る根性あるかは微妙だけど。

「せめて小学生の流行りとかわかればなあ。いつそ、その辺の子に頼んでみるか？」

もちろん、付き合ってくればお小遣いくらい出そうじゃないか。

おい、その警官。なんでこっち見たんだよ。

冤罪！ 冤罪だからこっち見たまま無線に話しかけるのやめて！！

たぶん、今ごろ管理局からも指名手配されているはずなんだが。このままこっちでも追われる身になった場合、もう引きこもりの道しか残らない。

ここは迅速にBダツシユ。

予想以上にしつこい警官から逃げて隠れてしてるうちに、気付いたら夕方だ。

あいつら仕事しすぎだよ。

「善良な市民になんという仕打ち」

「なんなのこの不信心物。すずか、通報よ通報！」

「ちよ、ちよつとアリサちゃん落ち着いて！ 流石にそれはかわいいそうだよ。確かに怪しいけど悪い人ではなさそうだし」

軽く打ちひしがれていると、なにやらちびつ子と遭遇してしまった。つり目と気の弱そうな2人組みである。

あと、気弱な方は弁護になってない。心を抉りにきてるだろそれ……

「やあ、そこなお嬢さんたち。ちよつと教えて欲しいんだけどさ」

「小学生をナンパするなんて……つまり、変態のおじさんだったわけね」

「アリサちゃん……」

おいちよつとマジやめてくれませんか。危うく前科付いちやうだろうが、ぶつちやけもう付いちやつてるけど。

あとお兄さん！ まだそんな歳じゃないから!!

「君らくらいの子つて、誕生日プレゼントになに貰うと嬉しいのか教えて欲しいだけなんだけどなあ」

「はあ？ なんで私の誕生日なんて教えなきゃいけないのよ！」

「誰がお前のつて言った」

なんですつて！ と怒ったつり目を気弱の方がなだめている。あれ、こいつ思ったよりも気弱じゃないかもしれない。

「ちよつと君らと同一年くらいの子にプレゼントを要求されてな。正直、誕生日プレゼントなんて選んだことないからわかんないんだよ。あと、これは親切心から言うけど君らつけられてるよ？」

は？ とか言いながらつり目が勢いよく背後を振り向いた。

ちよ、おま。そんな行動とつたら相手が警戒するに決まってる。ろ。

なるほど、だから漫画とかアニメでは振り向くなよとか前置きする
のか。ひとつ勉強になったわ。

「なによ、あれうちのボディガードじゃない。たぶん、あんたのこと
取り押さえるかで迷ってるのよ」

ファツ!?

「アルエ? ピンチなの俺だったのか……」

「あの、大丈夫ですから。大丈夫ですって言うておきますから」

その優しさが心に染みるわ。

泣いてないし!!

「それにしてもボディガードとか、お前らとんでもないな」

「あんたみたいなのもいるから、最近は物騒なのよ。習い事のたびに
付いて来られるのも、鬱陶しくはあるんだけどね」

そんなもんかね。とりあえず、こいつが金持ちなのはよくわかった
けど。

まあ、勘違いだったならそれでいいや。これ以上関わってたら、今
度はボディガードと追いかけてこすることになりそうだし、ここは
さっさと撤収しよう。

「この辺で、髪留めとか売ってる店しらない? それだけ聞いたら消
えるから」

「人の話は聞きなさいよ! まったくもう……確か、駅前になんか新しくて
きたお店に可愛いのがいくつあつたと思うわ」

「あれ、わりと親切に教えてくれるんだな。ちよつとびっくりしたわ」

「なんだかんだ言つて、アリサちゃんはやさしいもんね」

くすくすと気弱そうな子が笑うのに、つり目ちゃんがいろいろと否
定の言葉を並べている。

仲いいなこいつら。もう結婚しろよ。

「なるほど、これが噂のツンデレ。実在するとは」

ぽろっと出してしまった心の声を、俺はすぐさま後悔することにな
る。

そりやもう、今すぐに。

顔を真っ赤にして弁明を繰り返していたつり目が、ゆっくりとこち

らを振り向く。同時に振り上げられた右手を警戒してみたが、何のことはなかった。ただ振り下ろしたただけだ。

だが、彼女にとってはその動作だけで十分である。

そう。隠れていたボディガードがこちらへ突進してくるのには、あまりに十分すぎたのだ。

「うわあ、カッコ絶望カッコトジル」

これは逃げるだろ常考。

ちやうど真横に停車した車へ乗り込んだつり目は、俺の発言はガン無視でいくつもりらしい。

慌てる気弱な子を車内へ引っ張り込み、そのまま車はスムーズに発進していく。

そして目の前に迫るのは、ハンター……

本日2回目の鬼ごっこ開幕である。

13 家主に交われれば赤くなる

人様に迷惑かけるんやない、とはやてに怒られた。しよぼーん。

「なんや、イラツとするわそれ。ちよつとそこ寝てみ。轢いたるから」
「発想が恐ろしすぎる。あのつり目ちゃんといい、最近の小学生は容赦ないなあ」

え、俺のせいだつて？ 知ってた。

「まあ、そんな感じでケーキは予約したから。誕生日にはやてが作るのも変な話だし」

「確か翠屋つて、この前の美味しいシュークリームのとこやんな？」

「ショートケーキも美味しかったし、楽しみやなあ」

確かにあそこのは美味かったよなあ。

しかし、ケーキでこれだけ喜んでくれるなんて予想外だった。

これ、プレゼントのハードル上がっただけじゃないかな。白目。

「誕生日って定期検査と被ってるんだっけ？」

「そや。検査のあと、石田先生からお食事に誘われとるよ。もちろん、ヤクモさんも込みでな」

ちゃんと呼んではくれるらしい。ぶっちゃけ、少し心配だったのは内緒だ。

まあ、あの人も仕事あるだろうしなあ。夜が空いてないなら仕方ないか。

ケーキはどうしよう。はやての検査中に俺が取りに行くとして、レストランで出すと怒られる気がする。

うーん……まあ最悪の場合、奥義を使ってなんとかするか。

猛虎落地勢に敵はない。

「それで、まだ1日の猶予があるわけやけど。ヤクモさんはなにをくれるんやろうなあ」

「H A H A H A！ それはそれはいいものを考えてございますのことがよ？」

「目が泳ぎまくつとるがな」

見えないだろうけど、背中の汗も凄いんだぜ。

「女の子の趣味なんて俺にわかるかよ。ハードル上がると洒落になんないんで、あんまり期待しないでください」

「ふうん、それでもちゃんと用意してくれるんやな」

そりやお前……っておい、顔がにやけてんぞ。

まったく。誕生日のプレゼントは俺だよ！　とかやろうかと思つてたけど、これは真面目に考えないといかんね。

「ああそうだ。誕生日で思い出したけど、散歩の件どうする？　昼間は検査とご飯で潰れそうだから、そのあととか？」

「んー。でも、誕生日は家で過ごしたいしなあ」

いつ行こ？　と首を傾げられても困るんですけど。

でも実際、ささやかなパーティーをやつてやりたいから家で過ごすのには賛成だ。

ご飯の後にちよつと外へ出るのもありだが。しかし、食後にすぐ運動というのもしんどい。

昼に余るだろうケーキも控えているから、できたら人心地つけておきたくもある。

「もういつそ、明日の日付変わるくらいに行つてみるか？　誕生日の瞬間、地球にいませんでしたとかどうよ」

「なんやその新年イベント」

えー、流行つてるって聞いたのにー。

「でもそれええなあ。この前は夕方やったし、今度は夜景とか今から楽しみやー！」

「じゃあ、明日は11時くらいから上がるか。街の明かりが少なくなつたら、きつと星が綺麗に見える」

「なん、やと……ヤクモさんがロマンチックなこと言うてる。熱でもあるんちやうの？」

「お前は俺をなんだと思つてんだ」

星ぐらい俺だつて見るわ。

遭難したときとかの必須スキルだぞ。

「前から思つてたんやけど、ヤクモさんホンマなんの仕事してるん？　何でも屋みたいなんかと思つてたけど、そういう感じでもないねん

な」

「あれ、なんでこんな雲行きが怪しい話題になったのかな？」

わけがわからないよ。

と茶化してみたものの、ちよつとはやてさんの目が怖い。

あ、これ今度こそ言い逃れできそうにないかも。

「なんていうか、ちよいちよい変なところはあつたんよ。言葉の端々にある違和感というか、それ今聞いてもええ？」

「けっこう今さらじゃない？ この話」

「誰かさんがおらんかったから、聞きそびれとつたつてのもあるんやで？」

まだ根に持っていらっしやるとは。

その節はご心配おかけしました。

「まあ、実際のところ言っていないことがあるのは認める。けど、特に隠すつもりもないから聞かれたら答えてあげますよ？」

「……せやな。例えば、もしかしてヤクモさん家族おらんかったりする？」

くあwせdrftgyふじこip:!?

「……ノーコメントで」

「やっぱ、おらんへのやね」

おいおい嘘だろ。そんな話いつしたよ。

口を滑らせた記憶なんて、欠片もないはずですけどそれは。

「参考までに、なんで俺に家族がいらないと思ったのか教えてくれる？」
「いくつかあるで。最初におかしい思うたんは、私くらいの歳で働いてたつて言うてたときやな。確信を持ったんは昨日、誕生日やったことない言うてたからやけど」

「なるほど、普通は家族がいればやってるはずと。家庭環境が酷かつたつていう可能性は？」

「そうやったとしても、早いうちから働いて自立しとつたんやろ？
離れて過ごしとつたら、おらんのと一緒や思うで」

なるほど、仮に親子の縁を切つてたとしても同じ質問で通りそう
だ。

確かに、魔法圏で仕事をしている人間の平均年齢は低い。場合によつては1桁の年齢で働いているものもある。

だが、それらはそうしなくては生活できない子供たちだ。

一般家庭で、家族の庇護下を抜けてまで働いているような子供はほとんどいないだろう。

ホント、よく頭が回るじゃないか。

いや、感心してる場合じゃないんだけどさ。

「あとは免許証のこととか、ウイルスデータ作ってたとか、管理局つてところから逃げまわつてるとか。もろもろ考えたら、世間的には犯罪者つてことでええん？」

「そうだな。そっちは別に隠すつもりもなかったし、あえて言うつもりもなかったけど」

とはいえ、目の前でいろいろやつてたからそれは気付いて当然だろう。

逆にあれでばれなかったら、はやてがかなり察しが悪い子ということになる。

「そうか。それやつたら、いろいろ話してもらおか。中途半端なごまかしは聞きたないで？ 完璧に嘘つくか、ホントのこと言うかどっちかにしてや」

「きつついこと言いやがつて、マジで最近の小学生怖いわ。おっけー、俺の負けです。インディアン、嘘つかない」

え、なんでそこで胡散臭そうな視線がくるんですかね？

「まあ、つてもそんなに難しい話じゃない。ただ俺が孤児なだけ、それで全部だ。気付いたら親はいなかったし、自力で生き抜くしかなかったから今の仕事を……おい、お前なんて顔してんだよ」

「……どんな顔してる？」

ちよつと女の子がするべきじゃない顔してるかな。

声も震えてるし、動揺してるのがまるわかりだ。

小学生相手に、思つてることを表情に出すなつてのが無理な注文なものもわかるけどさ。

「別にお前が気に病む必要はないからな？」

「それくらいわかっるとるよ」

わかっただけなら言ってるんですが。

「反応に困るくらいなら聞かない方がいいのに。まあ、もう言っちゃったから最後まで続けるけどさ。ええっと、どこまで話したっけ……ああ、そうだ。生きるために今の仕事始めて、悪そなヤツはだいたい友達までだったかな」

「気いつかうつもりあるんやったら、もうちよい丁寧にやって欲しいわ」

その調子その調子。

「実際のところ、半分はホントなだけだな。最初のころは盗みとかもしてたし。そのあと、人に拾われて半分何でも屋の傭兵業を始めたんだ。だから、あまりガラのよくないやつらも知ってる」

俺のこと拾ってくれた人も、あんまり良心的な分類にはできないからなあ。

なんせ、その娘は親の影響受けすぎて守銭奴の転送屋やってるぐらいだし……カツコ遠い目。

「中には優しいやつだっているかもしれないけど、それだけでやっていける環境でもなかったからな。拾ってくれたオッサンも、言わないけど俺に利用価値をみつけたから引つ張り込んだんだと思うし。そこそこ感謝はしてるんだけど、口に出して言ったら負けみたいないな？」

その辺、ちよつと気分的に複雑である。

こうして普通……かどうかは微妙だけど、それなりに生活ができるのは今の仕事があるからだ。店先から商品盗んだり財布スツたり、そういうやり方で飯の確保をしなくていいようになったのは大きい。

しかし、同時にこの生活をいいと思ってるのも事実である。

今回、プレシアの一件が運悪く明るみに出てしまったわけだが。もちろん、俺個人に対する罪状というならこれは冰山の一角だ。

密輸に脱走、公務執行妨害もやった気がする。あ、不正アクセスもか。

プレシアの事件だけで少なくとも4件。過去の違反行為も掘り起こせば、軽く5倍くらい膨らむんじゃないだろうか。

もう、芋づるで管理局に嗅ぎつけられないことを祈るばかりだ。

「まあ、だいたいそんな感じかな。他に聞きたいことは？　もしくは、出てけとかある？」

「それじゃあ、最後に質問や。ヤクモさんは私が同じように親無しやから、かわいそうでここにおるんか？」

「ノーだけど、なにこのアホらしい質問。俺は身を隠すのにちようどよかったから、お前の家に転がり込んだの。言っとくけど親無しの子供見つけることに助けるほど、俺は心優しい人種じゃないからな？」

ま、そうやんなと息を吐きながらはやてが呟く。

ここでそれはずるいだろ。

「それに、俺は哀れみじゃなくて気遣いでここにいるんだよ。他人のことなんて知らんが、身内なら話しは別だろうが言わせんな恥ずかしい」

というか、言つといてなんだが何様だ!!

これは痛い。痛すぎて黒歴史化待ったなし状態すぎる。

噂の中二病とかいう病院で治療できない病気だろうか。ここ最近、柄にもないことをやり続けた結果かもしれない。

「あはは、なんやのそれ。顔真っ赤にして、新手のツンデレか？　ツン

デレなんか？」

「やかましい！　誰のせいだ誰の!!」

これしばらくネタにされるんだろうなあ。

そんなことを思いつつ、ニヤニヤ顔で騒ぐはやてをキッチンに放り込む。

さつさと晩飯作ってくれませんかね！　という感じで強引に話を打ち切り、うやむやにするのがやっつとだ。

ただまあ、そのあと出てきた晩ご飯がちよつと豪華だったのは、気のせいじゃないと思う。

14口は八丁手はアチョー

見上げれば満天の星空。そして、見下ろせば眠りかけの疎らな街明かり。

夜の闇に溶けるような地上と空の狭間で、俺とはやては寝転がつている。

あれがデネブ、アルタイル、ベガとかやればいいだろうか。もしくは、北斗七星の真横にある星とか見つけるのはどうだろう。

「あかんでヤクモさん。今めっちゃええ感じやねんから、余計なこと言わんといてや?」

あつぶねえ!

「俺の行動パターンばれつつあるよね」

「そら、わかりやすいからとちやう?」

なん、だと。

こんなにあれこれ策謀を張り巡らせてる俺がわかりやすい?

そんなバカな。きつと孔明先生も草葉の陰で顔を青くしてるはずなのに。

「そんで、いつんなったら回復するんや?」

今でしょ!

あれ、孔明先生って塾の講師だっけ?

「すまんね。デバイスないと魔力の変換効率が悪いんだわ。もともと、ぎりぎりAランクぐらいの魔力しか持ってないもんで」

「ランク?」

「ああー、そうだった。本来は魔力総量とか運用技術なんかをランク付けする制度なんだけどな。魔力の出力量から推定のランクを出して、おおよその目安にしたりするんだわ」

運用まで入れれば、たぶんAA+くらいはあるはず。

けど、管理局の定めた基準だしなあ。こっちもわかりやすいから使ってるだけで、正確に測定したことはないし。

あ、でも資格方式なんだっけ?

どうでもいいけど、管理局の体制とかはよくわからんね。

みたいになってもいいなら防御魔法を解除しますけど?」

高度9000mの猛威に耐えられるならやつてもいいよ?

俺は凍る自信あるけど。

「それは流石に無理やな。ちよつと残念やけど、これはこれで楽しいわ。目の前で雲が割れるなんて、初体験やしな」

「はつた……いやごめんなさいなんでもないです。ただの全方位防衛魔法だから、飛行機とか突っ込んでくると一巻の終わりだけだな」

ラウンドシールドならギリ耐えられる。たぶん。

まあ、そもそも質量差で吹っ飛ばされるのがオチだとは思うけどさ。

「魔法にもいろいろあるんやね」

「わあ、都合の悪いところは聞かなかったことにするつもりだこの人」
無言のはやてに額をペしペし叩かれる。

その残念なものを見る目やめてくれませんか? なんていうか、悲しくなってくるんですけど!?

「さあて、そんなこんなでお時間が迫ってまいりました。12時だよ!」

「全員しゅーごー!」

はやてさんノリよすぎワロタ。けど、全員って誰だよ。

「なーなー、ヤクモさん」

「なにかなはやてさん」

「あれはサプライズってことでええん?」

「ちよつと空飛ぶ本に心当たりはないかなあ」

全員集合とか言うからじゃないかな。

いや、言わせたの俺だけだよ。

『Ich entfere eine Versiegelung. (封印を解除します)』

「キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

え、これははやての部屋にあったロストログアだよ? なんでこんなところに……

って、いかん冷静に観察してる場合じゃなかった。

これはまずい。どう見ても起動状態です本当にありがたいがとうござい
ました！

ロストログアなんて厄介なものが、この距離で起動とか勘弁してく
ださい。

逃げよう、今すぐ逃げよう。

『Anfang. (起動)』

「マタシャベッタアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「いや、さつきから騒ぎすぎやろ」

ほら、片方が大慌てするともう1人は冷静になる法則だよ。
俺なりの気遣いだって。う、嘘じゃないんだからね。

「で、凄い光ってるんやけど。これ大丈夫なん？」

「全然大丈夫じゃないです。今すぐ逃げるから落ちるなよ？」

とりあえず、ショートジャンプで距離を……ってアルエ？

いきなりはやてのリンカーコアが露出したんですけど、これどうい
う状況ですかね。

「なんやこれ!? と騒がれても、ちよつと俺だってわからないんです
が。」

誰でもいいから説明はよ!!

「待て、よしちよつとタイム！ 俺に考える時間をください!!」

「わあつ、ヤクモさん人！ 人がおるよ!!」

「だからタイムだって言ってるじゃないですか!!」

泣くぞチクショウ。

「闇の書の起動、確認し——」

「うるせえ！ もうちよつと時間くださいお願いしますから!!」

よし、落ち着け。クールにいこう。

こういうときは、まず状況の整理からと相場が決まっている。

はやての部屋にあったロストログアが起動しました。

更にいきなりリンカーコアが露出して、目の前には4人の見慣れぬ
影。

えーつと、コアの露出はおそらくロストログアとの接続？ いや待
て、じゃあこいつら誰だ。

闇の書の起動を知ってたってことは、それ系で用のある人物たちでことでもいいんだろうか。

女3に男1、全員が跪いたまま俺に視線を注いでいる。いやん。

こいつらを闇の書の関係者と仮定しよう。けっこう有名なロストロギアだから、それ系で動いてるやつなんてすぐ話題に上がりそうな気もする。

だが、そんな噂は聞いたことすらない。こいつらがテロリストかつコ笑いである可能性は低いだろう。

かと言つて、こいつらが管理局の関係者とも考えにくいんだよなあ。そうだったら今ごろ杖を向けられて、大人しく投降しろ！とか言われてるはずだ。

つまり、ほら。アレだ。

「わからんということがわか……あ、闇の書？」

ファツ!?

「どうしたんや？」

「これはまずい。非常にまずい。え、闇の書って言った？ マジで？」

嘘でしょ？ 嘘だと言つてよバーニイ」

「私はクリスちやうで？」

知ってるわ！

「お前ら、もしかして噂の守護騎士か。うわあ、めんどくさいことになってきたなあ」

「さつきから聞いていれば貴様。いったい何者だ。我らの主をどうするつもりだ」

ポニーテールさん目付き悪すぎて怖い。というか、なんで俺が悪者みたいになってんだよ。

もうちよつと時間が欲しいな。だからその赤チビ、しばらく座つてろください。

「おうテメエ。あたしたちベルカの騎士を舐めんじゃねえぞ」

「騎士っていうか、ただのチンピラだよこいつ!？」

「なあなあ。状況が飲みこまれへんねやけど、今どんな感じなん？」

だんだん収集つかなくなってきた上に、俺が崖つぶちって状況です

けどなにか？

「簡単に言うのだな。あの本と4人組がはやての財産になったって状態かな」

「……んん？　つまり、家族が増えるよってことでええん？」

「やったねはやてちゃん。っておいやめろ！」

その発想はなかったよ。流星にポジティブ過ぎやしませんかはやてさん。

「すいませーん。ちよつとそつちの守護騎士さん側で、話のできる人を出してもらえませんか？　あ、目付きの悪いポニーテールと赤チビは除外で」

「おい、そこで武器を構えるのはやめてもらおうか。」

仕方ない。ここはお仕事モードで、真面目にやらないと生命の危機が危ない。

「ご覧の通り、俺は空戦ができない。だから逃走の心配はしないし、人を担いでお前らとやりあえる実力もない。一度警戒を解いて、ちよつと俺と答え合わせしてくれないかな？」

「そうすることで、我らになんのメリットがある」

「お前たちが優先すべきは、主の安全だろうか？　俺だって傷つけるつもりはないが、ぽつと出のやつらにハイどうぞって言えるほど浅い関係でもないんでね」

語り合おうじゃないか。

武器を持って殴りあわなくても、人には考える頭と伝える口があるんだから。穏便に済ませられるなら、それが一番だ。

「誰やあんた」

「はやてさん今そういう発言ややこしくなるから控えて!?!」

お前、そりゃ逃走どうのはブラフだけど敵対したいわけじゃないからね？

条件にもよるけど、ガチンコで勝てないのも事実だし。こんなところで撃墜されたら、間違いなく死んじゃうから。

「わかりました。それなら、私がお話しを伺います」

「おいシヤマル!」

いいから、と赤チビを抑えて女性が進み出てくる。

ポニーテールとアイコンタクトまでして、あれは念話でなに話されてるかわかったもんじやないな。

不意打ちの算段とかされてたらどうしよう。

「ぶ、文化的にいこうじゃないか。ね？　文化的に。暴力はなにも生み出さない」

「一気に腰ひけとるやん。もうちよい頑張りや」

「お前、これ4対1だってわかってる？　リアル弱い者いじめだし、弱者（俺）がハンデ持ちっておかしいだろ!？」

このあと、なんやかんやで穏便にことは済みました。でも、代わりにはやてと守護騎士たちの俺を見る目が『情けない男』って感じの雰囲気で泣きそうになりました、まる。

15 錆も出れば棒に当たる

はやてを病院に放り込み、って言うと言こえが悪いな。なんでだろう。

「なんででしょうね」

「君はあれだね。僕を怖がるわりには話しかけてくるね」

そりや怖いけど、視界に入ってたなかったらもつと怖いし。

もちろん、良心的な人であることはわかってる。だから奇襲の警戒もしてないわけで、この辺りがギリギリ限界だから許してください。

あとは慣れつてことでひとつ。

「とりあえず、予約してたケーキを受け取りに来ました」

「ああ、桃子から聞いてるよ。ちよつと待っていてくれ」

奥に引つ込んでいく店員さんを見送りつつ、そうかあの人は桃子さうって名前なのかあ、なんて思ってたら即行で戻ってきて変な声が出そうになった。

はっやーい！

例え保管庫が近かったとしても、今の速度はおかしいだろ。

どうなってるの、ホントに人間でいいんだよね？

「うちの桃子が作ったケーキは美味しいからね。きつといい誕生日になるよ」

「よし、とりあえず情報ダダ漏れとかは置いとこうか。え、うちの？

もしかして夫婦だったりとか」

「そうだよ。僕が高町士郎で、妻の高町桃子。ここは家族経営なんだ」
ヴェーイ！

そりや人妻だとは思ってたけどさ。もう少し夢を見させてくれ
たつていいじゃないか。

こちらら花も恥らう20代だぞ。綺麗な店員さんがいたら、お近づ
きになりたいとか考えちゃう世代なんだよ察しろ!!

「美人な嫁さん持つててオシアワセソウデスネ」

「え？ あ、うん。そうだね？」

くそう、これが勝者の余裕か……いや、流石になんか違う気がする

な。

というかなんの話しだっけ。

確かに桃子さんは美人だけど、別に愛をささやくつもりなんてないし。こういうときは、とりあえずリア充爆発しろって言うんだっか？

ん？ 爆破するためにここへ来たわけじゃなかったような。

「えっと、ケーキはいいのかい？」

「ああつー！」

それだ！

ということ、さっさとお金を払ってしまおう。

それにしても懐が厳しい。ただでさえ薄い財布が、そろそろ透けてきそう。

昨日のプレゼントも含め、どうしてこうなった。

別に必要経費だから、散財だとは思わないけどさ。こうして借金に借金を重ねながら買い物していると、自分に甲斐性がなさすぎて笑えてくるよね。

「目から汗だつて出るんだぜ……」

「君は、なんだかいつも忙しそうだね」

いやあ、それほどでも。

「とりあえず、ありがとうございました。桃子さん？ にもお礼を伝えておいてください」

「わかった。いい誕生日になるといいね」

軽く頭をさげ、いつも通り後ずさるスタイルで店を出る。

まだ、ちよつと背中がガラ空きは怖いんだ。許してください。

「ふう、今日もなんとか生き残れた。今はデバイスもないし、本気でこられると負けるかもなあ」

今のままでも魔法は使えるけど、戦闘になったら流石にね。

ホント頼むから、もうちよつとしつかり人間やってくれないかな。

†

ガチャリと玄関を開けると、ちよつと荒んだ目の黒尽くめ4人が待ち構えている。

す。順にヴィータ、シヤマル、ザファイラ。我ら守護騎士は、闇の書の収集を行い、主を守る存在です」

「うーん、つまりどういうことなん？」

「はやての命令があれば、犯罪にも手を染める危ないしゅうだ——ごめんなさい許してください命ばかりはお助けを！」

じよ、冗談の1つくらい許してよ!?

なんだか、最近シリアスなこと多すぎて耐えられないんだよこっちは!!

今からまた真面目な話ししないとだめなんだしさ。

「闇の書ってのは、管理局でロストログア扱いになってる魔道書のことだな。古代ベルカって文明があったらしいんだけど、その頃に作られたものらしい。因みにベルカ文明そのものはとつくの昔に滅んでるから、俺もあんまり知らないんだよ。そっち関係の知り合いが1人いるから、今度聞いとこうとは思うけど」

うーんと思案顔のはやてに、シグナムが闇の書に関する取り扱いを喋り始める。

そこに適時、俺の知っている範囲のことを差し込むわけだが。これちよつと情報量が多いかもしれない。

「つまり、闇の書のページを埋めると願いが叶うけど、人様に迷惑かけるってことでええん？」

「はやてさんマジばねえ！」

今ので理解できたのか。これは脱帽もんですわ。

「そのリンカーコアっていうんは、魔道師の生命線なんやろ？ それ引っこ抜くんやから、大変なことになるんとちゃうん？」

「まあ、大変ってか最悪死にますね」

お腹から臓器引き抜くのと同じことだから。

足を治して欲しいとか、叶えたいことはあるだろうに。結局、はやてが出した結論は「収集活動禁止！」の一言だった。

かっこいいね。

「ああ、ついでに。必要ないかなと思って言わなかったんだけど、こうなったからには仕方ない。昨日、ランクの話はしたよな？ はやてに

もリンカーコアがあるんだけど、軽くオーバーSランクなんでよろしく」

「なん、やと」

はやてさんTUEEE！　が見れる日も遠くないな。

いやあ、楽しみ楽しみ。

しばらく中二病という言葉に打ちひしがれるはやてだったが、咳払い一つで立ち直ってシグナムたちを順に見回していく。

最後に視線を俺へ向けて、にっこり笑って見せた。

あ、この顔知ってる。俺のときと同じやつだ。

「まあ、私のリンカーコア辺りの話は今度聞いわ。それより、みんなの衣食住なんとかするんが先やしな！」

まあ、このまま黒尽くめだと不審者として通報されそうだしね。

実ははやてが着せ替え人形を手に入れただけ、なんて思っていない。きつと気のせい。

「ほらヤクモさんメジャーー！」

「いやちよつと野球ボールは今ないかな」

顔をジャイロ回転さすよ？　と笑顔で脅され、思わずダツシユで裁縫箱を取りに行く。

首が凶ルなんてもんじゃねえよそれ!?

「最近、はやての発想がとんでもない方向にぶつとんでないかな」

「くだらんことばっか言うからちやう？」

あれ、おかしいなあ。否定の言葉がみあたらないよ？

「いつまでおるんや。はよ出ていき。みんなのサイズ測るんやから」

「え、俺は別に気にしな——あつ待てはやて。冗談！　冗談だから車輪はやめアーツ!!」

ザフィーラに引きずられ、敢え無く廊下へと退場させられました。

乱暴に放り投げられたので、フロアリングにヘッドバッドしてしま
い散々です。

「少しは自重したらどうだ」

「お前らがもうちよい気安かったら、端っこで大人しく三角座りして
ただけどね」

ひんやり気持ちいい廊下に寝転んだまま、軽く肩をすくめて見せる。

僅かに守護獣様の表情がかげつたのは、きつと気のせいじゃないだろう。

俺が知っているだけでも、闇の書はこれまで戦って戦って戦いぬいたロストログアだ。ここにきて、環境ががらりと変わったんだから戸惑うのも仕方ない。

まあ、その辺はおいおい慣れていけばいいんじゃないかな。

むしろ、今はそんなことよりもその太すぎる眉が気になる。

え、なにそれどういう感じで生えてるの？ 私気になります。

「まあ、暮らしてらうちに心情くらい変化するだろ。とりあえず、ちよつとその眉毛触らせてくれない？」

一瞬でザフィーラの視線が冷たくなった気がする。アルエ？

「いやほら、ちよつと構造的に気になるじゃん？ 触ってみればなにかわかる気が、げふっ」

「わけのわからんやつだ」

後頭部の方からため息らしきものが聞こえる。

「というか、足どけてもらえませんか？ 廊下と熱い口付けを交わして、愛を語る趣味は持ってないんですが。」

ほら、いい子だから。お手は後頭部じゃないくて、掌にするものだからね？

アフルにやり忘れたジャーキーもあげるし、ちよつとその開放してくださいお願いします。

「あと、ここは定番的にこっさり覗くところだと思っただ。ほら、男同士の友情とか深めようぜ痛い痛い痛い!!」

割れる！ いや違うこれ潰れる方が先だ!!

「おい、ちよお前。マジか！ マジでかつ!？」

「一瞬でも感心した自分が嫌になる」

ちくしょう、リビングからは楽しげな声が漏れてくるというのに。なにが悲しくて、頭を力いっぱい犬に踏まれなくちゃいけないんだ。

男たるもの「え？ シグナムの魔乳が重すぎて計りづらいつて？

じゃあ俺が支えててやんよ」くらいの紳士的な行動を痛い！ これ痛すぎて冗談も考えてられないんですけど!?

これあかんやつ!!

あばばと暴れてみたところで、ザフィーラはびくともしない。

危うくなにか目覚めそうなので早く解放して欲しいんだけど、よく考えたらはやてに誕生日プレゼント渡すのも忘れてる。

どうしてこうなった!

いや、自業自得なんですけどね。知ってた知ってた。

16 小事に拘わりて大事を忘れるTRPG

賽は投げられた!

神々とか、俺たちを侮辱した敵のいるところへ行くわけじゃないが。2つのダイスはテーブルの上をころころ転がっていく。

「おつ、どうだ99だぜ。なかなかでかい数字が出たじゃねえか」

「こいつ、よりにもよってファンブルしやがった!」

「あちやー……どないしよ。とりあえず、この戦闘中は精神鑑定せな発狂したままってことにしよか」

そんな無慈悲な。

たかがSAN値チェック失敗して、1D6で最大値出した上にアイディアロールをクリティカルしただけじゃないですか!!

よく考えてみたら逆にすげえなこれ!?

「ちよい待ってな。えっと、一時的狂気の種類は……あつ」

「……そういう不穏な発言はやめてくれませんか?」

サイコロを転がしたはやてが、気まずそうな顔でカードを差し出してくる。

「ご丁寧なことに、ホラー文字で書かれていたのは『殺害癖』という単語だった。

え、なにこれ俺らに死ねと?

「やべえ、どうしよう……しゃ、シヤマルは精神鑑定できたよな? せめて一時的狂気だけでも解除しよう」

「え、あつはい。でも今はちよつと、シグナムの治療で手が離せそうになくて」

そうだった。ついさつき、神話生物に特攻かけた馬鹿がいたの忘れてたよ。

おつと、これひっそり詰んでるような。

「やばい。ゴールが見えてるのに、辿りつける気がしない!」

これにははやても、ちよつぴり困り顔だ。

まあ、全員初心者だからハウスルールは優しめですってことになってたし。まさかこんなことになるとは、思ってもみなかったんだろう。

普通にしていればクリアできるシナリオなのに、なんだこれ。

「ちよつとタイム。キーパー考える時間をください」

「ええよ。とりあえず、ここで時間止めとくからよう考えてクリアしてや?」

今、確実にハードル上がったよね。

クリアできそうもないシナリオをクリアしろって言ったよね!?

ちよつとライフカードとかください。選択方式でいいから解決策を俺に!!

「これもしかしてやばくねえか?」

ここにきてとか、遅いよヴィータさん。

今更だけど、これ小さな数字出す遊びだからね?

「う……うっせーな!」

「あれ、なんで逆ギレされたの俺?」

くそう。ミルゴ4体に囲まれて、仲間が瀕死と殺害癖の発狂。医師は動けないし戦力にもならないから……

駄目だどうしようもない。

俺のキャラだつて普通に探索メインの探偵だから、攻撃面に振った技能って組みつきと武道（柔道）だけなんですけど。

シグナムとヴィータにアタッカー任せたのが運の付だったとは、そこまで予想してキャラ作れるわけないだろ。

「あ、主! 私のキャラはまだ動けないでしようか!」

「うーん、シグナムのキャラはかなり深手を負ったからなあ。体力の8割は回復せんと、気絶状態からの復帰はでけへんな」

因みに、今のシグナムが復帰するにはシャマルが2回連続で最大値を出す必要がある。

どこまでダイスの女神に愛されていたとしても、今から数えて3ターン目から参戦じゃ遅い。

そのころには、みんな仲良く脳缶になつてることだろう。仕方ないな。

「よし、最終手段だ。個人的には、最後まで全員生き残つてる方が好きなんだけどしかたない」

ん？ と全員の視線がこっちへ向く。恥ずかしいじゃないか。

「じゃあキーパー、組みつきを宣言する」

「組みつき？ ミッゴに特攻でもするつもりなん？」

まっさかー。

「いや、組みつきの相手はヴィータで」

えっ、という声を聞いた気はしたがた無視してダイスを振る。

そう。既に賽は投げられたのだ。

こうなったらなにをしてもゴールする。

「よしきた、クリティカル!!」

「ちよ、おまつ」

大人しく組みつけるかは賭けだったが、これは流れが来ているに違いない。

自動成功をもぎ取ったので、そのまま武道（柔道）の使用も宣言。

無難に成功したので、もうあとはロールプレイで全部誤魔化す。

「すまない、君の尊い犠牲は忘れない！ といいながら俺は、ヴィータを背負い投げでミッゴに向けて投げつける」

「なっ!? テメエエエ!!」

「いやあ、先にシグナムが突っ込んだことによつてミッゴが密集していたから助かった。これで発狂した彼女は、殺害癖の行動に沿つて限界バトルをはじめだろう。つと、キーパーここまでいいか？」

「ぶっ、ははははっ！ 確かに、シグナムは4体全部から攻撃もらつてるから密集してるやろうな。ええよええよ、通したげるわ。くふふ」

笑いを堪えてもらつてるとこ申し訳ないですが。こっちも綱渡りなんで余裕ないんですね！

えっと、次は。

「確か、今回のセッションつてミッゴの採掘場ぶつ壊せば勝ちだったよな。よしシャマル、シグナムの治療中断！ 持ってきた爆薬出して、大急ぎで設置するぞー！」

「え、でもそれじゃあ」

「いいから幸運ロール。ヴィータも頑張れ、お前の働き次第でシグナ

ム担いで逃げられるかもしれん」

「デメエ、これ完全にあたしは詰んでんじゃねえか!!」

いや、そもそもお前がファンブルしたのが原因なんで。

そんな感じで、あれよあれよと言う間に爆薬をバラ撒いていく俺とシヤマル。

予想以上に善戦してしまったヴィータのおかげもあり、無事にシグナムを回収して脱出することができてしまった。

「いやあ、集合墓地にはなったけどデカイ墓でよかつたな」

「なんもよくねえよ！ 宇宙生命体と一緒に埋め立てやがってこの！

この!!」

ちよ、脛はやめろ。地味に痛い。

はやても笑ってないで、助けてくれたっていいと思うんだ。

「いや、まさかあこでプレイヤーを神話生物に投げつけるとは思わなかったわ。これは貴重な体験やね」

「次は、ヴィータにプレイ動画見せて雰囲気つかませてからやろう。このまま次のセッションもやったら、行動が読めなさ過ぎて酷いことになる」

あと、そこで視線を逸らしてる劣化の将もな。

なにが仲間を守るためだ。かばうばつか使いやがって、自分が攻撃する前に沈んでどうするんだよ。

まともに動いてたの俺とシヤマルだけじゃないか。なにこれびつくり。

「む、終わったか」

「ああ……開幕5分で留置所送りになった、永遠1回休みのお前がいたの忘れてた」

ザフィーラ、お前はロールプレイからやり直しだ。

⇕

氣志團……違う、これ別のやつらだった。

騎士組が笑顔の動画でTRPGのお勉強を始めたため、こちらは新しいシナリオのネタを探しに図書館へ。

車椅子を押しながらどんどこと進んでいく。

「ルルブのシナリオを使えばいいのに」

「それでもええけど、ストーリーを作る楽しさってのもあるんやで」

まあ、そういうもんなのか。

そういう方面の想像力が乏しい俺には、ちよつとわからないジャンルだな。

「それに、図書館には別の用事もあるしな」

「ん？　そうか、あいつらの騎士甲冑だっけ」

「そや。本はよう読む方やけど、甲冑のイメージなんてわからへんからな」

なんだろう。

いっそ、射手座の化身っぽいのかでいいんじやなかろうか。あつ、素手で戦うやつ一人しかいないから駄目かもしれない。

じゃあ兜に愛の文字とか刻んでやろう。それが駄目なら長槍二本持ちとかで。

「熱血α波はどないしようかな……」

「俺が言うのもなんだけど、やめたげてよお」

「んー、それやったらビキニアーマーとか」

「ザフィーラが見るに絶えない格好をすることに……キリン装備くらいで許しといてやれ」

あれなら男と女で住み分けもできるだろ。個人的にはベリオでもいいけど。

ナルガ装備が出えへんとか、ヤクモさんもまだまだやな。というはやての言葉に驚愕しつつ、市営図書館へ辿りつく。

見に行くのは、もっぱら西洋文化の棚だ。適当に一冊引き抜いてみる。

「ロンドン塔の拷問史。この図書館、いろんな意味で大丈夫か……」

「ヤクモさんは、もうちよい図書館学に数値振つとくべきやな」

まったくだ。どうせ引き抜くならアーサー王伝説とか、そういう系のお願しいたいね。

そう思いつつ本を戻そうとしたとき、ふと向こう側に知った少女の顔が見えた。

狭い隙間からだだが、相手もこちらに気付いたらしい。というか、ばつちり目と目が合う。

「よう、久しぶりだな幼女」

「あ、あははは。まさかまた逢うなんて」

それはいったいどういう意味でだ。場合によっては泣くぞ。

「ヤクモさんがロリコンの変態やったなんて。おまわりさんこいつです」

「公共の場所でそういう冗談いくない！」

本棚をぐるりと回りこんで現れた彼女は、つい最近知り合った子だ。

確か名前は……

「ええつと、サーキットさんだっけ？」

「いっけえマグナム！」

はやてさんは今日も絶好調ですね。

目の前でサーキットさんがすごい困った顔してるってのに。

「あの、すずかです。月村すずか」

「俺の記憶力も衰えたな。歳か」

「ぴっちぴちの20代とか言うてたん誰やの」

俺ですね。

「名前を間違えるとは無礼千万。俺の名前は七海八雲なんで、好きなように間違えてくれてもいいんだよ？」

「日本語おかししいし、女の子困らしてどうすんのやナツパさん」

「へへへ、かわいいヒヨコ達に挨拶してやろうかな。って上手いこと言っただつもりか!?!」

これじゃ俺が本格的に変質者なんですがそれは!?

そして、相変わらず置いてけぼり状態なすずかさんの目が据わってきてる希ガス。

「え、えつと……とりあえず、こっちは八神はやて。俺の家主とか、ちよつと複雑な事情があれこれしてるんだけども。その辺は置いといて、今日はなんの本を探しにきてるんだ？」

「あ、いえ。今日は本を探しにきたんじゃなくて、友達と勉強をしにき

たんです」

なるほど、そういう利用方法もあるのか。

確かに資料が近いだけあって、勉強向きの環境だ。

「そいつは偉いな。はやて、お前ちよつと混ぜてきたらどうだ」

「唐突やなあ。その心は？」

「よく考えたら、はやてが同年代の子と関わってるのみたことないな
と思つて。正直ボツチじゃないかって心配だったけど、これがチャン
スだ！」

うわ、視線が超冷たい。

あと足痛いんで、車輪で地味に踏むのやめてくださいませんか？

「ハア……なんやごめんな月村さん」

「ううん、気にしないで。この前からなんとなくわかつてたし。私の
ことはすずかでいいよ。よかつたら、一緒にお勉強しない？ 向こう
の2人にも紹介したいな」

「勉強道具も持ってへんねやけど、お邪魔にならへんかな？」

大丈夫だよ、と笑顔満面のすずかに照れ笑いではやてが答える。

結論はでたようだ。

「じゃ、野暮なのは消えるでしょう。勉強会が終わったら連絡してく
れ、迎えに来るから」

「ほんま、ヤクモさんは変な気いばっかりつかうな」

そりやまあ、身内ですからね。

同年代の友達つてのは、思ったよりも大事なものなんですよ？

車椅子のハンドルをすずかに預け、奥の学習室へ向かっていく2人
を見送る。

はやてならきつと大丈夫。新しい家族もできたし、これで友達も増
えるだろう。

いよいよ、俺もお役ごめんかなあ。

「あれ、そういえばなにしに来たんだっけ……まいつか」

17 嘘つきは悪人のはじまり・前

はやてをすずかに任せ、迎えに行くまで俺は昼寝。というわけにも
いかないのよ、やることをやっつけてしまおう。

そう思い立って、都心から少し外れたところにある中古車販売所ま
でやってきた。

暇そうに見えるかもしれないが、これで案外忙しい身である。

いや、借金の返済以外でね？

「合言葉を言え」

「急いでるのに！」

「……風」

「バーニィー!!」

あのホント暇じゃないんですけど。なんでこんな遊びに付き合わ
されてるんですかね？

なんなの？ 馬鹿なの死ぬの？

「はいおつけーっす。なにがご入用で？」

「え、あ、おう。ちよつといろいろ揃えたいんだけど、今のなんだよ。
悪ふざけにしか聞こえないんだけど」

「この世界、魔法関係の人口が少ないっしょ？ それでも、あんたみた
いなのがいるからこっちは仕事できるんすけど。普段はこの世界
の人相手に商売してるし、どっちも相手するなら見分けるために違和
感がないような合言葉が必要なんすよ」

お前の趣味マシマシな悪ふざけだろ絶対。そんなことを思いなが
ら発注表を渡す。

せつかく、はやてと守護騎士の気が逸れている今がチャンスだとい
うのに。他の業者探そうかな。

「えーっと、細かいのがひい、ふう、みい……ん、これ医療道具？ な
んに使うんすか？」

「詮索屋は嫌われるぞ。用意できないなら他所をあたらせてもらう」
「怒らないでくださいよ。ちよつとした世間話じゃないっすか」

めんごめんご、なんて謝り方をされてもイラツとするだけ。商売

するつもりあんのかこいつ。

まあここは管理外世界だし、こういう人種がいるだけで奇跡かもしれないが。

それにしたって、借金に紹介料まで上乘せしてこれとは。あの守銭奴め覚えとけよ。

「ま、大丈夫だと思っス。いつまでに？」

「できるだけ早く。全部揃ってから連絡してくれ」

「お任せを。サラマンダーより、ずっと早くご用意するっス」

お前は、今なんでサラマンダーと対比した。悪意しか感じられないんですけど。

「あつ、そうだ。ついでに車とかいかがっスか？ お安くしときますよ」

「いらない。そもそもこつちで永住するわけでもないし、買ったところで持て余すだけだろ」

もちろん、輸送する手段ぐらいある。だが、そうするメリットはどこにも見当たらない。

こつちで通常車を買ったとして、魔法圏に行けば結局新車を用意することになるだろう。

なぜなら、向こうのほうが圧倒的に便利な機能を積んでいるからだ。あくまで魔力が扱える前提の便利さではあるが。

輸送費や維持費など、もろもろを考えてもデメリットばかりだ。「まあまあ、そう言わず。ちよつと見るだけでもいいっスから」

しつこいなあ、と思いつつも出されたカタログへ目を向ける。真つ赤なスポーツカー。そういう印象の写真が載っていた。

車種はアウディR8というらしい。

「ツーシートかよ。ん、魔力炉？ おいこれ」

「あはは、いや実はそのせいで困ってんスよね」
つまりなにか？

どこぞの馬鹿が、この世界の車を弄って魔法技術がぶっこんだど？
管理局さんこつちです。

「正直、こつちの人間に売るわけにもいかず。かと言って管理外世界

に定住するやつなんて、基本的に魔法から離れたいやつらばつかりな
んスわ」

「まあ、そうじゃなくても気軽に魔法技術なんて使えないだろ。そ
りや買手もつかんわ……」

元が高級車ということも原因の1つだと思うが。

それにしても、前の持ち主はなにがしたかったんだらう。

こんな魔改造施してまで行きたい場所でもあるのだろうか？

「前の持ち主は？」

「いやそれがわかんないんす。流れに流れてうちまで辿りついたんす
けど、魔力炉の周辺がふっ飛んでるみたいで」

「ああ、つまり動かないと。お前は喧嘩売ってんのか？」

事故車どころか故障車じゃないですかやだー。

「その辺は、紹介者さんからこういうのの修理が得意って聞いてんす
けど」

HHHHA！ あの守銭奴マジで覚えとけよ!!

人の情報ダダ漏れにしゃがって、次会ったら男女平等パンチでもく
れてやる。

「悪いけど予算がない。ちよつと惹かれなくもないが、今の俺は借金
まみれだからな」

「そうっすか。たぶん売れないと思うんで、余裕ができたら買って
やってくださいよ」

確約はできないけどな、と言いつつ残して店を出る。

このまま居続けたら話がループを始めそうだな。

無限ループってこわくね？ だって同じことが繰り返されるんだ
ぜ？ とか言いたいわけじゃないから、早々に脱出してしまおうのがい
いだらう。

あとは支払い金を用意するくらいか。はやてからの連絡もまだな
いし、今のうちに依頼の受注もやっておいた方がよさそうだな。

「なんだろうなあ。この久しぶりに働くと動くのめんどくさい感じ」

あ、今なら鬱診断で一攫千金狙えるかもしれない。

ここは落ち着いて生活保護申請！ これで勝つる！

い魔砲こわい魔砲こわい。

「ん、君は……うちの娘を蹴っただって？　そういう風には見えなかったけど、ちよつと話を聞かせてもらおうか」

そう言っただけから乗り出し気味の土郎さん。

ファツ!?　娘……だと……?

あ、でもこれで馬鹿魔力とかの納得ができちゃったよどうしよう。「なのはちゃんを蹴ったやつて?　ヤクモさん、ちよつとどういこうとか説明してみ?」

そして、ガンガン闇のオーラを放ちながら振り向くはやてさん。

綺麗にシヤフ度が決まっていますね。マジ恐いんで勘弁してください。

「妹を蹴った?　いい度胸じゃないか」

更に女性と2人席に座っていた青年がやおら立ち上がる。

くっそ、お前もかよ!

って、え?　いや、誰だお前。欠片も見覚えはないんですが。

でも妹つてことは兄つてことで、土郎さんの血縁つてことはこいつも化け物つてことだなカツコ白目。

「どうもはじめまして、七海八雲といいます。お名前を伺ってもよろしいでしょうか?」

「あ、これはご丁寧に。高町恭也といいます——いやそうじゃなくて!」

「ん?　なにが違うんだ。初対面の人には挨拶、これ基本だろ?」

確かにそうかもしれないが、とか言っただけで青年が怯む。

あ、こいつ真面目くん。よし、ここを押しとうやむやにできるかもしれない!

「誤魔化そうだったって、そうはいかへんでヤクモさん」

「ですよー」

逃げられないよう、はやてにがっしりと腕を掴まれてしまった。冷や汗がパナイ。

あと、やつぱり移動速度がおかしなことになってませんか。それホントにただの車椅子?　実はいろは坂でドリフト決める系のターボとか積んでない?

「まず誤解であることを認めてくれませんか？」

「ギルティ」

わあ、容赦ねえな!!

あとその親指で首元を搔つ切る感じのジエスチャーやめてください、ちびりそうだから。

「いや、今回ばかりはホントだから！ 蹴ったのも助けるためであつてだな。ああしないと空間干渉のまほ——」

「あ、あああああつ!! ストップ、待ってそれ以上はダメなの!!」
はい？ それは俺に冤罪で裁かれろつて意味ですかね？

いやいや流石にそれはない。というか、こつちだつて砲撃されてるんだから蹴ったのはチャラつてことにして欲しかった。

世の中ままならんね。

「まあ落ち着け、これは意見の相違だ。お前は蹴られたと思つたかもしれないが、あのままだと魔力こ——」

「ち、違うんですそういうことじゃなくて!! ともかくダメつたらダメなのー!!」

なんか痲癩を起こしたツインテールがこちらへ走りこんでくる。

キレやすい現代っ子恐い。というかちよつと待て、減速という概念はどこにげふう!?

「ぐおお……鳩尾にヘッドバッド……ダメ、絶対……」

これは果たして、打点がもうちよい下じやなかったことを喜ぶべきなんだろうか。それとも、絶賛痙攣を始めた横隔膜を嘆くべきだろうか。

どつちにしろ、この子の頭硬すぎんよ。

「まあ、ええ薬やな。自業自得や思つて諦め」

「そんな、バナナ……」

あつ、やめて。今わき腹はらめえ!!

なんか出ちやうから、ゲロつと産まれちやうから!!

『あの……私、家族や友達には魔法のこととか黙つて。だから言わないでもらえると助かるんですけど』

『念話ができるんだから、そういうのは先に言つといて欲しかったな。』

俺の腹はサッカーボールじゃないんだぞ」

華麗にダイビングヘッドでシュート決めやがって。

俺に吐き癖とかついたらどうしてくれる。

「とりあえず、どいつもこいつも一回落ち着こう？　ここ店内だからね？　お客さんドン引きですよ？」

「それもそうよね。じゃあ話の続きは店の奥でどうぞ」

「それはいい。恭也、なのはについてやってくれ。僕が行くと、もしものときに殴ってしまうかもしれない」

おい、この夫婦リアルに怖いぞ。

嫁が逃げ場を潰して、夫がトドメってか？

ははっ、そういう息の合った共同作業は結婚式でお願いします。

「わかった。なのは、奥で詳しく話を聞かせてもらおうぞ」

「カツコ意味深」

最後の虚しい反撃にはやてからの鉄拳制裁を貰いつつ、がっちり肩を恭也くんとやらに掴まれて連行される。

退路もなく。説得に失敗すると、自動で人生のゴールテープを切る
ことになりそうだ。

えっと、最後の言葉くらい残しとくか。

昨晚のハンバーグ、大変おいしゅうございました……

18嘘つきは悪人のはじまり・後

「違うんですこれ本気で冤罪だから！ 俺は悪くねえ!!」

「それ、街ひとつ滅ぼした人のセリフじゃ……」

よく知ってるじゃないかツインテールちゃん。

「ともかく、話を聞かせてもらおう。父さんから任されている以上、場合によっては三枚におろさせてもらう」

「なにそれ怖い」

隣が厨房なせいとか、ちよつと冗談に聞こえないんですけど。

そんな斬新すぎるダイエツトはしたくないので、手短かに経緯を話してしまう。

といつても内容は、車道に出てしまったお嬢さんをとつきに蹴って歩道へ戻したというハイパー嘘なんですけどね。

さつきから念話で、魔法のことは絶対に喋るなど釘を刺されまくってるから仕方ない。

むしろ、実は振りなんじゃないかってくらいの念の押しようだ。

押すなよ？ 絶対に押すんじゃないぞ！

「なるほど。つまり、あなたはなのはを助けてくれたと。なんだ、それなら恩人じゃないか」

「そんないきなり『あなた』呼ばわりなんて。照れるじゃないかハニー」

凄く嫌そうな顔で返された。

まあ、勢いで言つといてなんだけど俺も嫌すぎる。

ヨツンヴァインな謎の生物が出てくる前にやめておこう。

「で、ご理解いただけただけなら包丁は片付けてくれませんか？ これ普通に脅迫だからね!」

「にやはは……お兄ちゃん、私もちよつとやりすぎだと思おうよ」

「まあ、流石に俺もこれはやりすぎたと後悔している」

でも反省はしていないって顔してるのが恐すぎる。

シスコンつてこじらせるのと凶器になるんだな。覚えとかないと。

包丁を厨房に戻して戻ってきた恭也くんは、いろいろとなのはちや

んに説教をはじめた。

心配かけたくないのはわかったが、なぜ黙ってたんだとかそういう感じの。

店先で散々俺のこと止めたから、この誤解は当然だな。

だから、そこでどうしようって顔するんじゃないやありません。あとこつち見んな!

「あー、俺が黙ってるように言ったんだ。特に怪我もなかったから大丈夫だと思っただし」

何より他所の子蹴ったなんて聞こえ悪いでしょ? と肩を竦めて見たところ、鋭い眼光がこちらを向く。

恭也のにらみつけるこうげき。効果はばつぐんだ。

彼自身が恐いつていうより、化け物家系の補正付きでの話だけど。

ちよつと達人とかじゃないんで、見た目から「ムムツ、こやつできる!」とかはわかんないです。

生存本能的にやべえ! くらいならわかるんだけどなあ。

「とても大人の意見とは思えないな。見たところ同世代だと思うが、責任感はないのか」

「体は大人、心は子供! そういう人に、私はなりたい」

危うく掴みかかられそうになったので一歩下がる。

包丁片付けた後でよかつたよ、マジで。

「まあまあ、ちよつと頭冷やそうぜ。なんでこう、みんな沸点低めなんだろうな。冗談くらい言わせてくれよ」

「時と場合を考えろ! なのはが怪我をしてたかもしれないんだぞ!!」

「結果論だけど、今こうして元気にしてるんだからいーじゃん! いーじゃん! スゲーじゃん!」

今度は本格的に殴られそうだったので、握られた右拳とは反対の左手側へダックインして向こうへ抜ける。

よし、動きはまだ普通だ。将来的にどうなるかは知らないけど!!

「お、お兄ちゃん! 暴力はダメだよ!」

「そうだよお兄ちゃん。暴力はんた——危ねえ!」

完全に背後へ回り安心してたら、前のめりの姿勢で後ろ蹴りが飛んできた。

咄嗟に膝から力を抜いて下に回避する。

「なんつう体勢で蹴ってくんだよ。化け物の片鱗でてるじゃないですかやだー」

で、そつちのなのはちゃんはアワアワしてる間にお兄さんを止めてくれませんかね。

さっきのヘッドバッドでもくれてやれば大人しくなるから。ほら急いで、ハリーハリー！

「どうやら、俺はお前のことが嫌いみたいだ」

「まあ、見知らぬ野郎に嫌われてもコメントしづらいな。悲しくて死んじやいそうよ、とか言えばいい？」

蹴り上げ、かかと落とし、ハイキックからの回し蹴り。

流れるような動作で繰り出された4連打をなんとか捌く。

こんな狭いところで、よくもこんな派手な動きができるね。驚愕とか通り越してドン引きですよ。

しかも4連撃中、1回も蹴り足が地面に付かないってどういうことだ。

ホントもう、マジでやめてよねそういうの!!

『あのあの！ 喧嘩しちゃだめですよ!!』

「いやお前、それは口に出して言おうぜ！」

「なんの話だー！」

ですよねー。

『適当に落としどころつくるから、あとは自分で誤魔化せよ？ いいな』

『へ？ それってどういう』

知らん。自分で考えろ。

「やーい、1発も当たってないでやんのー。見た目の派手さに拘るからだよーくすくすぶっ!」

無言で高速のアップパーカットが飛んできました。泣きたいです。

身を縮めてコンパクトに構え、殆ど予備動作無しでの一撃。

お見事。流石は化け物の血を引くだけある。

「あー、これダメなヤツ……」

目の前がゆらゆらしてんよ。

自分がなにやってんのかわかんなくなってきたよ最近。マジ楽しいですわーカツコ棒読み。

「お、おい！　なんで避けなかった」

「お、お父さん！　お父さあん!!」

なんか大騒ぎされてる中、そつと俺は目を閉じた。

合掌。

†

西日に照らされながら、車椅子を押して帰路を歩く。

結構がつつり気を失っていたようで、起きたときは既に夕方だった。

開眼一番、はやてに目潰しされたので目覚めもぼっちりである。

容赦？　そんなもんなかった。

あー、それにしても痛い。

まだ顎ががつくんがつくん言ってる気がする。

「ヤクモさんはやることが極端やない？」

「んなこと言われてもなあ。いったい俺にどんな紳士の解決策を求めたんだよ。それが出来るんだったら、今からでも詐欺師に転職したいね」

そうすれば、少なくとも殴り合いなんてしなくて済むだろう。

まあ、出来ないから殴られたんだけどき。

あーやんなつちやった。あー驚いた。

ウクレレが欲しいところだな。

「そっちはどうよ。友達は大丈夫か？」

「アリサちゃんが凄い呆れとつたで。すずかちゃんは心配そうやったけど」

「なんていうか、悪魔と天使だな」

気を失ってたから見てないけど、2人の反応は目に浮かぶようだ。今度あつたらなに言われるかまで予想できる。

きつと、あんたバカア？　って言われるに違いない。

「そんなに沢山の拍手が欲しいと？」

「なんなの、はやては俺を強制エンディングに放り込みたいの？」

ちよつとありがとうを言う父もいないし、とつくの昔に母とはさよならしてるんで勘弁してください。

「そんで？　結局なんでああなったん。恭也さんは優しいお兄さんやって聞いているけど？」

「ちよつと煽り厨の真似をしてみたくなくて。むしゃくしゃしてやった、今でも反省はしていない」

「え？　むしゃむしゃしてやった？」

俺を食いしん坊キャラにしてどうするつもりだ。

そりや、乱闘途中にむしゃむしゃしてたら凄いや腹立つとは思うけどさ。

「とりあえず、あんまりこの話題は突かないでくれる？　まあ、察しはついてると思うんだけどさ」

「そやなあ。じゃあ、私の氣い逸らせるもんあれば聞いたげる」

また難しい注文を。

どうしようかな。笑ってはいけない八神家の開催宣言とかどうだろうか。

あ、ダメだ。普通に全員から吊るされる未来しか見えない。

「んー……あつ、そういうえば」

ふと上着のポケットを探れば、渡すタイミングを見失って数日放置されていたプレゼントの感触がある。

完全に記憶から抹消しかけてた。危ない危ない。

「ハッピーバースデーはやて」

「……忘れとつたやろ」

バレテラー！

「いやまあ。ごたごたしてたし、これも円環の理に導かれた結果じゃないかな」

「その流れで行くと、ヤクモさんは首なくなりそうやな。見せてもらったデバイスの意味で」

「今は長銃状態にできないし、なにより起動すらしないからセーフだつて。たぶん」

あと、拳銃状態にも出来るから場合によっては無限ループ開始の可能性も微レ存。

心が擦り切れて悪魔化は遠慮したい。

そんなことを思いながら、プレゼントを渡す。

開けてもええ？ と聞かれたので、お好きにどうぞとっておく。

「ん、ヘアゴム？ 思ったよりも普通やな」

「ネタに走って欲しかったなら先に言つといてくれ。自分をラッピングする用の長いリボンがいるじゃないか」

「ありのまま、今起こったことを話すで。ヤクモさんが予想以上に変態やった。なにを言っているかわからねーと思うが、私もなにを言っているのかわからへんし警察さんこいつです！」

「おのれポルナレフ！」

近くに警官がいなくてよかった。あいつら執拗に追いかけてくるんだよね。

「で、ご感想は？」

「うん、ええ感じや。羽のワンポイントも可愛くて気に入った。けど、なんでヘアゴム？ 私、そこまで髪長くないんやけど」

「伸びたら使えばいいんじゃない？ 俺、実はポニーテール萌えなんだ」
「お、おう。とりあえず、ヤクモさんの偽名がジョン・スミスやなくてよかったわ」

アル晴レタ日ノ事。

魔法使いのヤクモが。

限りなく腹すかす、冗談じゃないわ。

「てつきり、こういうのは誕生日プレゼントに本名教えてくれるフラグやと思つてたんやけどなあ」

「あえて目を逸らしたのにこの子は！ どこだよ！ 今度はどこでやらかしたよ俺!!」

記憶にないぞ。

というか、この調子で俺の秘密を丸裸にされそうな勢いなんですけ

ど。

「え、だって気付いたら親はおらんかったんやろ？ その時点で、前に言っとったたまたま理論は崩れとると思うけど」

「そんな前の話よく覚えてましたね……」

ねえねえ、今どんな気持ち!?

そう聞かれたら、こんな気持ちと言って涎を垂らした顔文字を書き込めるレベルだ。

なんだろうね。はやては俺を少女恐怖症とかにしたいのかな。

「で、本名は？」

「知らぬ！ 存ぜぬ！ 省みぬ！」

「こまけえこたあええから言ってみ？」

いやガチでダメなんで教えませんけどね。

「まあ、それもそのうちぼろが出るんまってようかな」

「どんな口の滑らせ方したら、本名を全部いう事になるのか疑問でない」

「でもヤクモさんならやりそうやん？」

「前科があるだけに否定の言葉が見つからないよね……」

おかしいなあ。

管理局は煙に巻けても、はやてから逃げきれぬ気がしないのはなんでなんだろうなあ。

ちよつと無理に髪を集めてポニーテールを作ったはやてが、振り向きながらこつちを向く。

よくお似合いじゃないですか。

「みんなにも見せびらかしたろかな」

「恥ずかしくなるから目の前でやるなよ？」

どーしよかなあ、とちよつと上機嫌のはやてに溜息で答えながら帰路を進む。

うん。ヴィータ辺りがなんか言ってきたら、黙れファンブルと返してやろう。

19 食わせて置いて始める外道

八神家が俄かに慌しくなる。

とは言っても、はやては不思議そうな顔をしているだけなのだが。主に騒然としているのは守護騎士の面々だ。ついでに、俺も内心ひやひやしてるけど。

なんせ、無差別に「七海八雲さーん、どこですかー！」なんて念話を飛ばす馬鹿がいるのだ。

俺の心中が穏やかなわけなくなってしまうじゃない。

「おいヤクモ。テメエ、いったいなにしやがったー！」

「俺に聞かれてもなあ」

ずずいとお茶をすする横で、ヴィータが顔を真っ赤にしている。

これがデレなら可愛かったのだが、残念なことに激おこぷんぷん丸の方なのでどうしようか。

インフェルノする前には動くけど、今はまだそのときじゃないかもしれない。

あとシヤマルさんは手元をよく見てください。

それチョコレート！ カレールーじゃないか——ああ……

「悲しい現実を見てしまった……」

「主はポテマヨにするそうだ。お前は どうする」

「あー、じゃあブツチャーキングで。あのカレーになれなかった残念スープはどうするよ」

元はといえばお前のせいだから、責任持ってなんとかしろという目でシグナムが俺を見てくる。

そのままファイラへ視線をパスしたら、自然な流れで更にヴィータへ受け流しやがった。

やるじゃない。

おいマジかよ……という絶望的な声は聞かなかったことにして天井を見上げてみる。

妙案とかどっかに書いてないかな。

「さて、どうするか」

『この念話、誰からか検討はついているのか?』

『こいつ直接脳内!?』

いいから答えろと拳骨食らったので、大人しく高町なのについて知ってることを喋っておく。

管理局の関係者だが、おそらく局員ではない。囑託がいいところじゃないかな、などなど。

聞けば聞くほど守護騎士達の顔色が悪くなっていくのだが、なにこれちよつと楽しい。

『そしたら、なのはが俺に向かって極大の砲撃を撃ってきてな。確か「ヤクモさんが避けると地球がコナゴナなのー!」とか言ってたような』

『管理局にそんな恐ろしい最終兵器があったとは。今後、警戒が必要かもしれないな』

『いや、今のはどう考えても嘘だろ』

ヴィータに言われて気付いたシグナムが、2度目の拳骨で俺を家から追い出した。

もろもろ解決するまで帰ってくるなどのお達し付きである。

「そんなこんなで呼び出しにに応じてやったぜ!」

「えつと……:はい、ありがとうございます?」

なんで疑問系なんだろうね。

いや、別にいいんだけどさ。

「で、あんな広範囲に念話とばしてまで呼び出した理由を聞こうじゃないか」

「実はフェイトちゃんのことでお話があつて」

あ、これももう既にめんどくさい臭いしてるんですがそれは。

確かフェイトの身柄は、あのままアースラが持っていったはず。

となると、今ごろはミッドの法廷で大岡裁きを始める前準備をしているくらいか。

出来レースとまで言わないけど、きつと減刑されるに違いない。

情状酌量の余地は十分あるし、なにより被害者でもあるフェイトだ。彼らが鬼じゃなければ、きつと管理局へ引き込みにかかるだろ

う。

鬼は知らないけど、腹黒ならいたからね。優秀な魔道師を宙ぶらりんにするとも思えない。

「相談、ね。聞こうじゃないか、場合によっては手も貸してやろう」

「本当ですか!」

もちろんだとも。

誰もタダとは言っていないけどな。

「ありがとうございます。ちよつと待ってくださいね」

そう言つて、なのはは空間モニターを展開する。

通信の周波数を頑張つて弄つているようだが。おかしいな、ちよつと時間かかつてない?

『な……さん、き……るかしら。なのはさん?』

「リンディさん、まだちよつと音声か」

ちよつと待つてね、という雑音混じりの声がモニターから漏れ出す。

映像なしのサウンドオンリーにも関わらず、ここまで通信状況が酷くなるのも変な話だ。

ミッドチルダから第97管理外世界までつて、そんなに距離あつたかな。

『ごめんなさいね。まだちよつと安定しないけど、これくらいは許してちょうだい』

「お前らどこにいるんだよ。雑音入ってるけど、ミッドじゃないのか?」

『ミッドへ向かっているのは間違いないわ。まだ途中なだけで』
ん? それなら、やはりおかしい。

ミッドチルダに着いてないのもそうだが、近いのに通信が乱れる? そんなわけあるか。

これはなにか起こってるんじゃないか……

「まあいいや。で、俺になにをやらせたいつて?」

『なんと言うか、あなたってかなり大雑把な性格をしているわね』

ははっ、褒めたつてなにも出ねえよ。

「リンディさん！ 八雲さんがフェイトちゃんのこと手伝ってくれそうなんです！」

『あらそうなの？ てつきり、なにか要求されると思っていただけれど』

「よくわかってるじゃないか。どうせ裁判の証人とかだとは思うが、先に最低条件を言っとこうか。管理局に出頭して証人保護を受けろ、なんて言ったら俺は帰るからな」

わざわざ敵の巣窟へ飛び込む趣味なんて俺にはない。

大人しく逃がしてくれるとも思えないし。

『ええ、それくらいは理解しているつもりよ。それに、たぶんミッドまで来るのは大変だと思うわ』

「は？ そりゃ確かに金はかかるが。ずいぶん含みがあじやないか」

『小規模とは言え、現状で次元断層が発生しているわ。私たちも迂回しているせいで、帰路が長くなっているのだし。それとも、あなたのお友達なら次元断層を突っ切るような転移もできるのかしら？』

答えるわけないだろ。

にしても、次元断層ときたか。

原因は、間違いなくプレシアが起こした次元震だろうな。

あれ、これ俺も共犯者扱いされてるんじゃない。

『ああ、その件なら大丈夫よ。公式の記録上、あなたは存在しないことになってるから』

「そういうことか。じゃあ、どっちにしろ証人にはなれそうもないな」

どうせ別件で引つ張れるもの、とか考えてんだろうなあ。

ちくしよーめ!!

「まあ、次元断層はわかった。その辺は置いとこう。で、なおさらなにをさせたい」

『別に難しい話ではないのよ。あなたが持っているフェイトさんのデータが欲しいの』

データ？

いったいなんの……ああ、そういうことか。

『フェイトさんが言っていたわ。母親から虐待を受けたあと、あなた

が治療したそうね』

「そうだな。治療痕の記録と、当時のバイタルデータなら保存してある」

もちろん、今のままじゃデバイスが起動しないから取り出せないけど。

「状況証拠ならいくらでも揃ってると思ったが。こんなデータまで必要なのか?」

『小規模とはいえ、次元断層が発生してしまっているから。フェイトさんに責任能力があるかないかで、判決は大きく変わってしまうの。バルディツシュの記録もあるのだけど、それだけじゃ納得させられるかわからないわね』

なるほど、デバイスとはいえ身内のデータだからか。

対比できる第三者の情報があれば、真偽の判断もできないと。

それにしても、ずいぶん下地を固めにきてるな。

よっほどフェイトにとって不利な条件があるのかもしれない。例えば、次元世界の1つでも断層に飲まれたとか?

「まあ、俺としてはバイタル関係のデータを渡すのもやぶさかじゃない。他にも戦闘中に降り注いだ空間干渉魔法とか、たまたま近くにいる民間人としてデータの供与は可能だが」

『タダではない、ということね』

もちろんという意味を込めて肩を竦めて見せたが、よく考えたらサウンドオンリーだった。

代わりに隣の幼女が険しい表情をしている。

当然のように、無償で協力してくれると思っていたらしい。

「60」

『45よ』

「57は?」

『49』

向こうの方が1つ譲歩してきたか、うーん……

「53、と言いたいところだが51まで譲ろう。代わりに輸送費を持ってくれ、そうすれば腕のいい転送屋も紹介してやる」

『あら、助かるわ。ではそれで。受け渡しは?』

「それも転送屋に仲介を頼んでおく。手数料くらいはサービスさせるさ」

そうしてちようだい、と吐息混じりの声がモニターから漏れてくる。

おそらく、この交渉も公式の記録には残らないだろう。予算から用途不明金を捻り出すのは大変だろうが、それくらいあの腹黒い提督さんならなんとかするはずだ。

フェイトの才能と今後の働きをかんがみれば、ずいぶん安めに吹っ掛けたほうだろう。

うわあ、俺って優しい。

「じゃあ、受け渡しの場所だが――」

アースラの航路から、受け渡しに最適な場所なんかを話していく。

同時にメールで守銭奴に連絡を付けながら、細かいところを詰めていけば概ね完了だ。

当日は、雇われた現地民か専門のパシリを仲介に置くこととなるだろう。

俺の仕事はデータを渡して報酬を待つだけだから、その辺りの段取りは知ったこっちゃやないけど。

「不満タラタラって顔だな」

「……………」

アースラと転送屋にパイプが出来てしまえば、俺はお役ごめんとなる。

モニターを閉じて隣を見れば、そこには口元を引き結んだなのはいた。

そんなに熱烈な視線で見つめられたら、頭がフットーしちゃいそいだよ。

「どうして……フェイトちゃんを助けるのに協力してくれないんですか!」

「ちゃんと協力しただろ。有償だったただけで」

「フェイトちゃん、いい人だって言ってたのに。いつかお礼を言って、

名前を聞くって。背中を押してくれた恩人だからって言ったのに！」

俺の知らないところで株が鰻上りしてて恐すぎる。
なんだこれ、どう考えてもインフレしてんだろ。

さつさとオイルショックが来いよ。

「じゃあ、フェイトには汚い大人だったって伝えといてくれ」

「はやてちゃんも、八雲さんは優しい人だって」

「あいつは、俺が汚い大人だって知ってると思うけどなあ」

ここで「最終的に証拠は渡すし、その過程で俺の懐が潤うだけだろ？」と言うのは簡単だ。

だがまあ、そういうことを言ってるんじゃないってのもわかるはわかる。

どうも高町家の人間とトラブルことが多いと思ったら、早い話がこいつら正義の味方体質なんじゃないか。

士郎さんや桃子さんぐらいになれば、酸いも甘いも理解してるだろうから喧嘩にはならないが。しかし、恭也やなのはは違う。

善意で手を差し伸べ、無償で人を手助けする。そういう生活をしてきた人間に、俺みたいなのはさぞ邪悪に見えるんだろうなあ。

悲しすぎて涙が出るわ。

「打算と駆け引きで会話なんて、まあしないよな」

「どういう意味ですか」

「いや別に……はやてには好きなように言ってくれ。それで出てけつてなったらそうするさ。どうせそんな——」

そこから先の言葉は飲み込む。

これをなのはに言ったって仕方ない。

なにより、やり残したことを片付けてからのことだ。

「そんな、なんですか？」

「そんなことよりおうどんたべたい」

え？ と声を漏らしてなのはが固まる。

こいつも兄と同じで唐突なのに弱いな。

「じゃ、宅配ピザも来てるだろうから帰るわ。もう念話で呼び出しと

かやめてくれよ？ あと、俺と会いたくなかったらはやての家にも来るな」

背後で慌てたような声が聞こえるけど、待ってやる義理なんてどこにもない。

ちやつちやと八神家の玄関に転移して、俺のブッチャーキングを。

「お、帰ってきたか。お前のスペシャルシーフード残してあるぞ」

「いつから牛肉は魚介の仲間に入ったんだよ」

口の端にバーベキューソース付けて目を逸らしたヴィータと、コーンバターを一粒ずつ食べる意気消沈のシヤマル。数種類を重ね置きされてどうしようか迷う犬ザフィーラに、シグナムはペプシが気に入ったのかぐびぐび飲んでる。

なんだこのカオス。

ちよつと家を空けただけで、どうやってたらこうなるんだ。

「お帰りや、ヤクモさん」

「おうただいま」

はやての隣に座りながら、さり気なくヴィータのピザにタバスコをぶっ掛けておく。

牛肉の恨みは恐ろしいぞ。

「で、なにしに出とったん？」

「ちよつと野暮用。実は軽く落ち込んでただけど、この惨状見たらどうでもよくなっちゃった」

ギャーツ！ と叫び声上がる。

ざまあみろ。

「ヤクモさんでも落ち込むんやな。今はシヤマルも落ち込んだるし、これ以上増えても困るんやけど」

「ああ、カレーになれなかったなにかね。今度、しゃべるお料理ナビでも買って来るわ」

ガタツと立ち上がったシヤマルが、決意の視線を送ってきた。

やめろ、それたぶん失敗フラグだから。

あとザフィーラは人間フォームになって食べばいいと思うんだけど。

ちよ、シグナム。今のヴェータに炭酸はダメだろよくやった！

「この家、すげえ賑やかだわあ。ちよつと安心する」

「全ての元凶の元凶はヤクモさんな気がする件について」

ははは、ご冗談を。

20 胡蝶のヤクモ

ずずいとお茶をすすする。

うん、今日のは飲めるな。

「昨日のしょっぱいコーヒーはなんだったのか」

「そ、その節はご迷惑を」

全力で視線を逸らしにかかったシャマルさんに肩を竦めて見せ、もう一口麦茶をすすすった。

もうホントに普通のお茶だわ。文句のつけようがないね。

「インスタント物で、どうやったら味を変えられるのか疑問だがな。砲撃、B3」

「砂糖の代わりに、塩が混入したんじゃないかなと推理してるんだけど。波高し。戦艦、東に2マス移動」

ザフィーラの言葉にシャマルさんが若干凹む。

この前のカレー事件といい、料理っていうか台所に立たせると危険な気がしてきた。

本人はなんとしても頑張りたいようなので、特に止めるつもりはないが。

犠牲者が出たとき用に、胃薬くらい準備しておいたほうがいいのかもしれない。

「駆逐艦、南へ1マス。まあ、努力しだいでなんとかかなればいいが。実験台はヤクモがやってくれるそうだし」

「攻撃、B4。お前も道連れにしてやるから覚えとけ」

「く、着弾。戦艦沈没」

おお、当たったか。

「ところで、2人はさつきからなにをしてるんですか？」

「ん？ 海戦ゲームって遊びだよ。最近、リーダー作戦ゲームってのを見つけてな。俺ら魔道師なら、脳内処理でなんとかなりそうだったし実験をな。いきなり縦横10マスもあれだし、5マスで済む方をザフィーラに付き合ってもらってる」

まあ、実験とは名ばかりで意味のない暇つぶしなんですけどね。

「はやてたちも、買い物でしばらくは帰って来ないだろうしなあ。シグナムに押し付けた感はあるけど、騒がしいヴィータもないから平和でなによりだ」

「あはは。ヴィータちゃんが聞いたら、それこそ騒がしくなりそうね」
「お前が煽るせいだと思うが。戦艦、北へ1マス」

そんな、なんでもかんでも俺のせいにされてたまるか。
あれはどう考えても性格の問題だろうに。

ちよつとアイス食べちゃっただけでアイゼンを振り回されていたら、いつか骨を砕かれるんじゃないかと不安になる。

誰か、俺の心労を気遣って欲しいな。

「シヤマルさんが仲間になりたそうな目でこちらをみている。駆逐、北へ2」

「ルールがややこしくならないか？ C1へ攻撃」

「あ、俺の駆逐艦が……」

見事に轟沈してしまった。

なんとというめくら撃ち。ゆるるるるんん！！

「で、シヤマルさんも暇なら仲間に入ってみる？ C2、攻撃」

「ぐつ、なぜそこにいるとわかった……全滅だ」

いや、意趣返しのもりだったんだけど当たったのか。

その辺にいるのはわかってたけど、まさか大当たりとは。

「じゃあ、ひと段落したし別のことでもやるか。3人でやる遊び……」

ハルマとか？ 普通にゲーム機出してきたでもいいけど」

「ハルマ？ ってなんですか？」

「そもそもボードがあるのか」

よく考えたらないな。

アナログゲームを調べるのに気をとられて、現物のこと忘れてた。

まあ、今度までに作つとこう。時間あつたらだけど。

「しかたないからテレビゲームだな。確か、モノポリー系のソフトが1本だけあつたはず」

俺がソフトを漁っている横で、手早くザフィーラは本体の準備を終えている。

なんだかんだで、こいつさり気ない気配り上手いな。

流石は守護騎士のサポート担当。行動がイケメンのそれじゃないか爆発しろ。

ところで、シヤマルさんどこ行った。

「2人とも、ゲームするならお茶とお菓子もどう？　って、そんな目で見ないで！　大丈夫よ、これははやてちゃんが作っておいてくれたものだから!!」

「ああ、それは安定と安心の提供だな」

「すまないシヤマル。これには同意せざるを得ない」

怒ったシヤマルさんがお菓子の独占を宣言した。

この瞬間、俺とザフィーラの結託が確定。初っ端から株で荒稼ぎし、慌てて買いに走ったシヤマルさんを見て全売りしてやる。

ああっ!?!　と悲痛な叫びは、大人しくお菓子をシェアすることで落ち着きを取り戻した。

†

夢を見た。

目を覚ますと俺がいて、こちらをじっと見ている夢だ。

場所は八神家の居間。先ほどまで、ザフィーラやシヤマルとゲームで遊んでいた場所である。

ゆっくりとこちらを指差した俺が、もったいぶって口を開く。

—お前は刺されて死ぬ。じわりじわりと死んでいく—

不意に見下ろすと、腹から刃物が生えていた。

赤く滲んだ色に沈む、鉄の塊がずしりと重い。

視線を戻せば、俺がくつくつ笑っていた。

ほら見ろと。お似合いじゃないかと。目の前で俺があざ笑っている。

おもむろに伸ばした手が届くはずもなく。そのまま目の前は真っ暗になり。

「なんという悪夢。おいはやて、頼むからどいてくれ」

目を開けると、見慣れた天井が視界へ飛び込んでくる。

いつもの八神家。差し込む夕日に照らし出される居間だ。

なぜか腹の上にはやてが乗ってるけど。

「んー……あと5時間……」

「5秒で支度しな!!」

眠いんやあー……と目も開けられないはやてが、俺のお腹を圧迫する。

頭が乗ってるなんてレベルじゃない。もう完全に上半身が乗っている。

俺はクッションじゃないんですけどね!!

「ところで、左の太ももにも重みがあるんですがそれは」

「シヤマルが枕にしているからな。こういうとき、リア充爆発しろと言うんだったか?」

「リア充って枕代わりの称号だったんだな、はじめて知ったわ」

足が痺れて感覚ないんですけど、助けてはくれないんですかシグナムさん。

「今、ザファイラが夕食の準備をしている。主ほどではないが、あれもそれなりに料理ができるからな」

「ザファイラの万能感が凄いな。心の隅で、これはケモナー大歓喜!

とか考えてたんだけど謝った方がいいかもしれない」

「お前がなにを言っているのかよくわからんが。とりあえず、主はやてはお疲れだ。ついでにシヤマルの足止めも頼む」

お前それ、疲れてるのって確実にヴィータのせいだろ。

アイツに抱き枕役やらせろよ。っていかどこ行った。

「ヴィータならそこだ」

「寝てんじゃねえか。守護騎士って買い物ではしやぎ疲れて昼寝するもんなの?」

「……………」

おいこらそこで視線逸らすな。

「おっと、そうだと忘れるところだった。闇の書が主と一緒に昼寝をしたいらしくてな。ここまで連れてきた」

「え、連れてきたってお前その分厚い本どうするつもりで——ちよ、待てやめろ! そんなもん顔面に落ちてきたら流石に前歯が折れるわ

!! 角度計算とかいいから!」

ちよつと残念そうに、シグナムが闇の書を胸の上に置いてくる。
いやあの、それもそれで面倒くさいんですけど。はやての横にでも置いていてやればいいだろ?

「主の顔を見れる場所がいいそうだな」

「この本の目ってどこになるのか、素朴な疑問が俺の中を駆け巡っていくな」

「あくまでデバイスだからな。目で見るというより、スキャンで認識していると言う方が正しくないか?」

その場合、別に顔の付近に置いてやる必要ないよね。

オ・ノーレ!!

「もういいよ諦めました。で、今日の買い物はどうだった?」

「我々の衣装を追加で買っていただいたな。あとは下着類の充実と、ヴィータが人形をねだったくらいか」

「へえ、シグナムのサイズがあったのか。流石、専門店は伊達じゃないな」

「まったく、頭をかち割って欲しかったなら早く言え。レヴァンティンの錆にしてやろう」

「ハハツ冗談きついなあ……冗談だよな?」

ウィットに富んだ会話のキャッチボールじゃないか、もうちよつと冷静になろうぜ。

だからほら、武器を下ろそうか? これじゃ、ただの斬首スタイルだし。

「まあいいだろう。それにしても、ずいぶんよく寝ていたようだが」

「あー、まあ留守番組みはゲームでヒートアップしてたからなあ。騒ぎ疲れたから、途中で昼寝タイムに入って……あれ、俺はいつシヤマルさんの枕にされたんだ?」

まあでもそうか。おやつの片付けとかしてたはずだから、最後に寝たのはシヤマルさんのはず。

俺とザファイラもフローリングに直接寝てたからなあ。後から来たら、空いてるスペースで横になるのが普通か。

え、普通か？

「俺の部屋だった場所、お前らに譲ったんだしそっち行ってもよかつたんじゃない？」

「まあ、仲良きことは美しきかなとも言うそうじゃないか。悪いことではあるまい」

そりやそうかもしれないけど、俺の左ももを生贄に捧げる友情ってどうよ？

「お前は不思議なやつだな。気安いというか、壁はあるんだが見えないというか」

「きつとガラス製なんじゃね、その壁」

もちろん、防弾仕様の。

隠し事なんていくらでもあるから、そりや壁の1つや2つくらいはあるだろうさ。

「そんで？ これどういう会話の流れなの」

「……お前、どういった内容の夢を見た？ 我らが帰ってきた時点で、もうかなりうなされていたようだが」

「マジっスか……」

ってことはなんだ。この2人は俺の心配をして、近くに来てくれたからこうなっていると。

なんとという事実を教えてくれやがりましたんですかね、こいつは。

これでもう、2人を無理やり起こしたり振り落としたりできなくなったジャマイカ……

「ホント、お前ら優しすぎて涙でそうだわ。お礼にシャルさんをあげるから、お願い早くどけて俺の左足がおかしなことになる前に！」

「たまにはお前も酷い目にあうべきだと私は思う」

鬼か。

「それで、どういう夢を見たんだ？」

「ずいぶん食いついてくるな。ちよつと腹から刃物生やして死ぬ夢だよ」

しかも犯人が自分っていう。

言つてて滅入りそうだなこれ。

「ふうん、けつこう怖い夢見たんやな。頭撫でたげよか？」

「……………やられた」

こいつ起きてやがる。

というか、寝てると思ってたヴィータがぶるぶる震えている。

これは全体的にはめられた感が酷いな。

「くそう、さつきまでの感情を返せと言いたい」

「まあまあ、そう怒らんと。ほら、頭撫でたげるで？」

「いらぬから、とりあえずどいてくれる？ 俺が起きれないんだけど」

まあええやんか、と闇の書を撫でながらはやてが笑う。

俺の左足的にはよくないけど、まいっか。

そんなこんなで、ザフィーラ飯が完成するまでごろごろしていた。

「ん、ふ……………あ、おはようございます」

「あ、こっちはガチで寝てたのか。俺の左足が持たかたそうなんで早めに起きてくれますか？」

「え？ あつ、きやあつ!？」

おい悲鳴やめろ！ なんで俺が悪いみたいになつてんだ。

それから、お前らは左足つつくのやめてください。あつ、触るな！

触るなあつ!!

21 今日も月夜に仕事の飯

煌々と光を放つ画面から目を離し、ぐつと背筋を伸ばす。するとそれに合わせて、背後でドアの閉まる音が響いた。

うん？ と振り返った先にいたのはシグナムである。

時刻は深夜にさしかかり、はやてもとつくに寝てしまったはずだが。はて、なんだろう？

喉でも渴いたのかなと思っていたら、こちらに気付いて寄ってくる。ホントになんだよ。

「お前はこんなところでなにをしている」

「いや、夜風が気持ちいいなと思って？ トイレなら廊下の奥だけだよ？」

「お前はデリカシーという言葉覚えてほうがいい」

ベランダに座っている俺を見下ろして、シグナムは小さく溜息を吐いた。

今のどこに呆れられる要素があったというのか。

いやそりゃ、梅雨とかいうシーズンらしくてジメジメしてるけどさ。今日は雨も降ってないからマシだし、シールドで虫除けも完璧なんだぞちくしょう！

「なんか用があつて来たんじゃないの？ 俺、仕事に戻りますけど？」

「む、邪魔をしたか。少し話をもったが、作業中なら改めよう」

「お前、わかつてて言ってるだろ。聞くから座れよ」

展開していた画面を片付けると、隣にシグナムが腰を下ろしてくる。

シールドを張りなおして虫除けにしつつ、ちょっと防音効果も追加しておこう。

居間の方では、ザフィーラも寝てるからね。

「そんじゃまあ、お伺いしましょう？」

「別に難しい話ではない。守護騎士の長として、お前が信用できる人物かを問いたいだけだ」

あー、まあそのうち来るとは思ってたよ。

結局のところ、なにひとつ疑問には答えなかったからなあ。

主であるはやてが信用してるし、とりあえず疑ってはいないくらいの扱いだつて知ってた。

「ううん、どうすればいいかね。正直、俺の経歴くらいなら喋ってもいいんだけど」

だが、言ったら信頼度はうなぎ下がる気がする。

そういう自信だけなら誰にも負けないよ俺。

「ほう、お前の経歴というのも気になるところではあるな」

「……はやてには言わないって約束するなら教えてやろう」

まあ、はやてのことだから察してるところはあるんだけど。一応、一応ね。

無意味に血生臭いこと聞かせる必要なんてないんだし。

「うーん。まあ、ここはケツを割って話すしかないな」

「割るなら腹にしてくれないか？」

これは腹筋スレが必要になる予感。

「さて、どんな話を聞きたい？ 荒事専門の民間派遣会社にいたとき、

どれくらいの成績だったとか教えてやろうか」

「首級の数を自慢するのは、あまり感心しないな」

「そりゃあ立派な騎士様と違って、こちとら所詮は傭兵くずれのチンピラですから」

「騎士、か……やってきたことだけ見れば、お前とあまり変わらない気もするが」

どこか自嘲でもするような声色に、俺の背中を嫌な汗がつついていく。

おかしい、なんで今の流れでやぶ蛇になったし。そうか、これが噂の深夜テンション！

あれ？ もっと楽しいのがキマった感じになるって聞いてたのになあ。

「まあ、天下の闇の書だからなあ。確か、ちよつと前にも管理局の戦艦を沈めたとか聞いているけど」

「なに？ 管理局の戦艦だと？」

「えっ?」

「えっ?」

あれれ、おかしいぞ。

しかもこれ、嫌な予感がマッハなんですけど。いったいどういうことですかね?

「守護騎士なら、闇の書がやったことくらい知ってるんじゃない?」

「いや、私たちだって万能じゃない。状況によっては戦闘不能になるし、そういうときは主の修復を受けなくては復帰できないんだが。その、魔力の消費を抑えようとする主も多くてな」

「ああ、つまりエコブームだったわけか」

え、なんか違うって? あっ、そうですか。

「んー、管理局のサーバーにクラックかければ資料引つ張ってくるくらいはできるんだけど。時期が悪かったなあ」

「時期が悪いという?」

「実はこの辺の次元中域で、先月の最後くらいに中規模クラスの次元震があったんだけど。その影響で、小さな次元断層が発生してるらしんだよね。管理局の本部があるミッドチルダ方面に、今は直接通信とかできなくなってる」

守銭奴曰く、どっかの次元世界が1つ飲み込まれたなんて眉唾の噂も出回っているとのことだ。その真偽は別にして、少なくとも断層の付近はぐっちゃぐちゃに違いない。

通常の次元転移も、しばらくは控えるのが得策だろう。

管理局本部も、おそらく断層は観測しているはずだ。しかし、本格的な調査をやってみないことには被害状況がわかるわけもない。

一番近くにいたアースラの帰還を待って、観測チームを発足。あるいは安定中域に入り次第、通信による報告と観測隊の派遣するのが妥当だろうか。

いや、流石にそこまで管理局の腰は軽くないだろうな。

アースラにだって、重要参考人としてフェイトが乗っているはずだし。それなら、裁判云々を抜きにしても一時帰還は強制されそうさ。

「もちろん、遠回りに次元転移を繰り返して安定領域まで行くって手

もあるけど。流石に2、3日で帰ってこられないだろうからなあ。デバイスも直したばかりで未調整だし、荒事になったら対処できる気がしない」

「まあ、確かに気になるところではあるが。あまり無茶をしてまで過去を知りたいわけでもない。それに、必要とあれば闇の書の管制人格がなにか知っているだろう」

管制人格……デバイスのAIか？

ベルカ方面の技術はさっぱりだからなあ。

せっかく環境が整ってたんだから、ちよつとくらい勉強しとけばよかった。

「裏技もなくはないけど、あれは金かかるからなあ。せっかく少し返済したばかりだから、できれば控える方向で……まあ、悪い話ばかりでもないさ。ちよつと次元断層の規模をシミュレートしてみたんだが」

守銭奴と連絡を取ったついでに、軽く集めて回った周辺空間の観測データを空間モニターへ呼びだす。

そこから次元断層の規模を予想。ついでに第97管理外世界とミッドチルダの座標に、アースラのカタログスペックから算出した航行速度も出してみる。

全てが表示されたモニターを覗き込みながら、シグナムは小さく頷いて見せた。

「なるほど。これならアースラという艦がミッドチルダへ辿りつくには、だいたい半年といったところか」

「それも休まず航行し続けられただけだな。安定中域までの移動でも、だいたい4ヶ月はかかる。もし次元断層の調査隊が来るとして、調査隊の編成と装備の補填にもろもろの認可を取ったりで2年つてところか。少なくとも、今後どうするかつてのを決められる猶予はできた」

ついでに、次元断層が完全に安定化するのに5年くらいだろう。

ほとんど停止してるから、触らなければ今さら再活性化もしないだろうけど。最悪、あれをつつけば管理局の目を釘付けにできるかもし

れない。

「逃げる算段は完璧だな。」

「いや、情けなくなんかないし……」

「できれば、主には平穏な生活を送って欲しいが」

「俺だつてそうしてやりたいけど、世の中に絶対はないからな。いざというときの行動は決めといてくれ」

「じゃないと、こっちも対応できなくなる。」

「下準備なしで人助けができるヒーロー様とは違うんでね。」

「別に妬んでなんかねーしカツコ白目。」

「あつ、あともう1つ頼みたいんだけど」

「持つて帰つてきたトランクか?」

「よくお分かりで。あの中身、バイタルチェック用の医療器具なんだけどな。使い方はそんなに難しくないので、はやての健康診断やつてくれない?」

「2人して、居間の隅に置いてあるトランクを振りかえる。」

「それほど大きなものではないが、アルミ製の嚴重な代物だ。」

「持つて帰つてきた当日は、はやてに密輸を疑われて酷い目にあつたが。」

「もうちよつと信用つてもものがあつてもいいんじゃない?」

「足の原因を探るためか?」

「それもある。あとは、魔力量の正確な測定とか。きつと、あとで役に立つさ」

「え、どこで役に立つつて? さあ、どこでしょうね。」

「わかんないなあ。どつかで役に立つんじゃない?」

「果たしてただの考えなしか、あるいは壮大な策士なのか。判断に迷うところだな」

「孔明もびつくりの智将っぷりを披露してやんよ!」

「誰だそれは?」

「はやての部屋に三国志って漫画があるから、それ読んでこい」
「今度読んでおこう、とシグナムが立ちあがる。」

「そういえばなんの話しに来たんだこいつ。」

……あつ、信用できるかの確認？　ダメな気がするんだけど大丈夫かこれ。

「おやすみ。あまり根を詰めすぎるなよ」

「ああおやすみ。そっちはやての健康診断よろしく」

「まあ、身内まで警戒するのも疲れるな。」

背中を撃たれるなら、それも仕方ないかなってことでひとつ。

最初に閉じた空間モニターを開き直し、夜の暗闇に煌々とした明かりを灯す。

夜はまだこれからだ。

22 失敗は味の素

カチャカチャと卵を溶きながら、目の前で作業するシャマルさんを見張る。

ちよつと目を放すと、大変なことになりそうで恐ろしい。

この緊張感はなんだろうか。

「よし、じゃあその肉に下味をつけよう。まずは塩をひと摘み……違うそれはひと掴み！」

「え？」

いや、そんな不思議そうな顔されても。

「今はトンカツを作ってるんであって、干し肉を作るわけじゃないからね？ 塩漬けにしてどうする」

「え、でも今ひと摘みって」

「いやだから摘まめよ、なんで掴んだ。実は力士かなんかなの？」

ふ、太ってなんかいません！ とシャマルさんが腕を振り回す。

よし、今度からテメエの名前は関取だ。目指せ横綱！

だから、その塩まきは本場所までとつといてくれませんかね。

「シャマルさんが俺を塩漬けにしようとする！ ミイラになって発見されたら、犯人はこいつなんでよろしく!!」

「ち、違うんです！ 手が滑っただけなんですう!!」

半泣きでごめんなさいされたらどうしようもない。

でも、とりあえず頭洗ってくるわ。海水浴したあとみたいな気分だし。

「いいか、俺が戻るまで絶対に続きをやるなよ？ 絶対だぞ？」

「お前は夕食を台無しにするつもりか」

足元から声がすると思ったら、ふくらはぎをザフィーラにかじられました。

痛え。

もしかして、下味つけられてたのって俺か？

た、食べても美味しくなんてないんだからね！

「あのマジ痛いんで勘弁してくださいお犬様」

「お前に生類を憐れむ精神などあったのか」

「あの、とりあえずワインを振りかければいいですか？」

おいだからやめろって言っただろ。

あと、テメエが今持つてるのはワインじゃなくてお酢だから。

「ちよつとザフィーラ交代。肉に下味つけるところで躓いてるから」

「思ったよりも早い段階で足踏みしているな。シャマル、続きをやるぞ」

「頑張ります！」

やる気だけはあるんだけどなあ。

空回ってるというか、トリプルアクセル決めて被害が出るレベルと
いうか。

台所に立つなって言いにくいから困るよねこれ。

せめて、生贄は最小限にしよう。身内から殺人未遂とか笑えない
し。

「でもなんでだろう。不安で胸がいつぱいなんですが」

「ごちゃごちゃ言ってる間にシャワーを浴びてこい」

再びふくらはぎをがぶりといかれる。

だから、痛いって言っただろ!?

いい加減にしろよ？ 頭から薄力粉ぶっかけて携帯のCMに引つ
張り出すぞ！

「面白い格好で道頓堀に投げ込まれなくなかったら、今すぐ風呂へ行
け」

「いえつきー」

ザフィーラはやると言ったら必ずやる。きつとたぶんおそらくそ
ういう奴だ。

だが舐めるなよ？ 俺は33—4なんて展開はきっちり回避して
やる。

そのためにも、まずは大人しくシャワーだ。

なんでや阪神関係ないやろ！ とはやての悲痛な叫びに背中を押
されて一端風呂場へ。

ついでに湯船の掃除もしてから居間へ戻る。

「あれれー?」

ドアを開けて最初に見えた光景は、全員が着席している姿だ。これだけならおかしくはない。飯が完成したので、俺を待っていただけという風にも見える。

問題はテーブルの上にあるカップ麺と、あとはなにかが焦げたような臭いか。

え、なにこれどうなってるの?

「マモレナカッタ……」

「腐界に手を出したらこうなるんやな。身を持って理解したわ」

「あれがメラゾーマではなくメラだと? ありえん……」

ヴィータ、はやて、シグナムが死んだ目でなにか呟いている。

ちよつと言っている意味がさっぱりんだけど、こいつら大丈夫か?

「あれ、そういえばザファイラは——」

「中に誰もいませんよ?」

視点の定まらない瞳で、シヤマルさんが食い気味になにか言っている。

っていうか、それあかんやつ!

ちよつと目を放した隙に、本気でなにかあったんだよ。

このお通夜みたいな状況の説明くらい、あつてもいいんじゃないかな。

「おい、ザファイラ?」

とりあえず、台所にいるんじゃないかと覗いてみる。

結論から言うと、そこにいた。真っ黒焦げの壁を虚ろな瞳で磨くザファイラさんが。

空鍋かき回してないだけマシなんだろうかこれ。

そして、なんで火災の痕跡? まさか本気でフランベやったの?

揚げ物だって言ったよね。炎上どころか危うくぼや騒ぎじゃないですかやだー。

「こんな短時間で昼ドラばりの急展開とか」

「ああ、お前か。今日の晩飯はカップ麺だ」

あのテーブルはそういうことか。
まるで最後の晚餐みたいになってたが、あながち外れてもいなかったらしい。

明日までにコンロ直さないとな。

「カセットコンロの発掘は……今やつてるんだな。手伝おう」

「すまない。引き戸が変形しているから、なにかで切断して開けてくれ」

「もうガチの火災じゃねえか」

シヤマルさんが、完全に戦略兵器化してるんですがそれは。

あの人を敵地に潜入させれば、それだけで勝てる気がしてきた。

もういっそ、管理局の本部にでも放り込んどこうかな。

「ところでザファイラ」

「なんだ」

「その尻尾は……」

「なにも言うな」

アツハイ。

どうやらちりちりの尻尾には触れて欲しくないらしい。

なんというか、ほら、ね？ ファイト！

「……………」

すげえ怖い目で睨まれたため、さっさとコンロとヤカンを持って脱出する。

台所の片づけは任せてしまっただろう。

どうせ修理は俺の仕事になるんだろうし。

「台所のリフォームなんて初めてだわ。まさか俺こんなことをする日がくるなんて」

「一級建築士も裸足で逃げ出すようなん頼むわ」

「なるほど、耐震偽装をすればいいと」

そういうのは一部の話しであって、全体ではないんやで？ と軽く説教される。

サーセン。

とりあえずコンロに火を点け、ミネラルたっぷりのヤカンをセツ

ト。

こう言っておけば、多少なりとも料理してる感が出るんじゃないかなたぶん……

「それにしても火災騒ぎか。シヤマルさんの破壊力パネエ」

「違うんです！　ちよつと失敗しちやっただけなんです!!」

ちよつとの失敗でこれか。

大失敗したら街が1つ吹き飛ばんじやなからうか。

そう言えば最近、食材に包丁を入れるだけで爆発する謎のアニメを見たな。

あんな感じで起こった事件なのかもしれない。

どうせなら、食った後に口からビームが出てくれる方が嬉しいんだけど。あれがどういう感じなのか、ちよつと気になるんだよね。

「シヤマル、もう料理は諦めろ。なんか、あたしの方がまだ上手くできる気がしてきた」

「まあ、なんだ。料理ができなくとも死にはしせんさ」

「シグナムがトドメを刺したように聞こえたのは俺だけか？」

全力でシグナムが視線を逸らした。同時に、シヤマルさんがテーブルに崩れ落ちる。

湯加減を見ているはやてが助け舟を出してくれるわけもなく。カップ麺作りに精を出しているヴィータに関しては、もはや興味すらないらしい。

こいつら自由だな！

「まあなんだシヤマルさん。はやての手伝いはできてるんだし、加減をもろもろ覚えていくところから始めよう」

「うろうう……やぐもぎーん!!」

うわっ汚い！

鼻水まみれでこっち来ないで!?

「わあー、ヤクモさんはイケメンやなあ」

「おう、吃驚するぐらいの棒読みやめーや。あと、料理教えるのははやての役だからな?」

「事故になりそうやったら、ヤクモさんが颯爽と現れて助けてくれる

んやろ？」

なにそのとてつもなく高いハードル。

言っとくけど、俺はスーパーマンじゃないしそんなことできないからな！

でも、とりあえず台所に安全装置はつけとこう。耐熱板とスプリングクラーが完備のやつ！

「ホント、世の中って結局金だよな」

「渡る世間は鬼ばかりやしなあ」

鬼っていうか金だけどね。

借金やつほい!! カッコヤケクソ。

23 過ぎたるは満腹がごとし

喫茶翠屋でシュークリームを食べる。

黙々と食べていく。

もう、食べて食べて食べ続けた。

「ぐう、胸やけが……」

「に、20個もシュークリーム食べたならそうなるに決まってるじゃないですか」

「どうしていいのかわからない。そういう表情で、正面に座るのはがおずおずと言ってくる。」

「いやまったくその通りだわ。間違いないね。」

「どれだけ美味しかろうが、流石に20個も30個も食べるもんじやない。」

「あつ、また食べた！ もうやめといた方がいいんじゃない……」

「はははっ！ ムシヤムシヤしてやった、後悔は……ごめん、ちよつとだけしてます……」

胃の中を糖分に占拠されている気がする。

「余分三兄弟もついにシェア争いか。人の腹の中で始めないで欲しい。」

「ところで、さつきから俺が食ってばかりだが。お腹はいっぱいか？」
「えっと、気分的にいっぱいって感じですよ」

「誰が上手いこと言えと。」

「それにしても、目の前には山盛りのシュークリームと高町なのは。さて、どうしよう。」

「はやてがイクゾー！ というからホイホイ着いてきたけど、ホントそれでよかったのか、コレガワカラナイ。」

「てつきり、東京に行きたいのかと思ってたのに。ベコか山か知らないけど、噂の秋葉で買いたいものでもあるのかと思ってたわ。」

「魔法を使えば一瞬だし、アッシーにされるのはいいんだけどなあ。」

「どうしてでしょうね……」

なのはと2人して、少し離れたテーブルへ目を向ける。

はやてとアリサとすずかが座っている席だ。

さつきからちらちらこっち見てるけど、バレないとしても？

「お前の両親までグルになってシニークリーム祭りは始まるし。もうこれわかんねえな」

「は、はあ……」

うーん、この一方通行な感じどうしよう。

ネタの共有とか以前に、お互いの会話が手探り過ぎるんだよね。

そりや最近ちよつぴり口論っぽいこともしたけどさ、たぶんもつと根本的に問題があるような気がするんだ。

これは仕方ないね。

「ああ、そういえばフェイトの方はどうなった？」

「へ？ ああ、その。まだアースラで帰還の途中らしいです。断層を迂回して進むそうなので、時間がかかるってビデオレターで」

「ビデオレター？」

「はいっ！ 数日前にフェイトちゃんから届いたんです。通信はできないけど、これならって」

つまり、あの艦長さんは守銭奴を上手く使ってくれているらしい。

管理局なんて大口の顧客が増えて、あいつに大きな貸しができたじゃないかぐへへ。

これでちよつとは借金もチャラにしてくれたり……うん、たぶんしないな。

それはそれ、これはこれだろうし。別件で譲歩させるときのカードにしよ。

「まあ、元気そうだなにより。あつ、その仏頂面した店員さーん。コーヒー貰えます？ ちよつと濃いめのブラックで」

「……………」

ちようど近くを歩いていた恭也に声を掛けたらすっげえ睨まれた。そこは「はい喜んでー」って言おうよ。

まあ、なのはと違って物理的に喧嘩したし、この反応は予想してたけどね。

にしても、こいつまでここにいてことはやっぱりそうなんだろう。

今日、どうしてここへ連れてこられたのか。

「この、お見合いに来てみたら相手が中学校で仲の悪かったやつみたいな空気。間違いなく仲直りしろとか、そんな感じのあれなんだろうなあ」

「変に具体的すぎてちよつと意味が……でも、お兄ちゃんとは仲直りした方がいいと思います」

「出来るもんなら今ごろ……仲直り、してる？」

「そんなこと聞かれても」

してないかもしれない。

メリットというか、必要性というか。なんかそういう感じのが、微粒子レベルですら存在していないような。

実際、困らないような気がする。

せいぜい、翠屋へ来ることにガン飛ばされるくらいか。本格的にどうでもいいジャマイカ。

「まあ、この話は保留で。そのうちなるようになるんじゃないかな？」

「そんなに適当でいいんですか……」

「イインダヨ！ グリーンダヨ！」

「他のお客様の迷惑になるから、あまり騒がないで貰おうか」

アツハイ。

乱暴にコーヒーを机に置いて、恭也君が全力で睨みを利かせてくる。

マジこええつす。

「仲良くやろうよお義兄さん」

「今すぐ引導を渡したくなってきたがどうすればいいと思う？」

笑えばいいんじゃないかな？

「軽い冗談はさておいて、土朗さんと桃子さんの好意が胃に重くてな。暇なら一緒に食っていかない？ けっこう限界ギリギリなんだよね俺」

「生活習慣病になればいいと思うが」

「糖尿はちよつと……」

あれ割としんどいらしいし、なによりまだ若々しさとか残ってるんで！

お、おっさんちやうわい！

そんなことをやっていたら、再びジロリと睨まれた。

もうやだこのお兄ちゃん、普通にマンドクセー。

「コネクティブはやて！」

「残念デカップリングや!!」

いやお前、アクセプトって言えばよください。

でも、不意に叫んで反応してくれる優しさには感謝しよう。

例え「しもた!?! つい、いつものノリで……」とか言っても、今の俺は聞かなかったことにしてやる。

なんせ、この山盛りシユークリームを処理しないといけないからな

！ 答えたからには巻き込まれてもらうぞ!!

さあ食らい尽くせ！ 俺もう無理だから!!

†

まさか、お代を払おうとして拒否られるとは思ってなかった。

一応、半額だけ無理やり払ってきたが。

あれだけシユークリームを放出して、食いきれなかった分は持ち帰り用に包み。挙句の果てにお金はいいなんて。

かなり至れり尽くせりだが、あの人たちは商売するつもりあるんだろうか。

いや、嬉しいんだよ？ 嬉しいんですけどね？

「謙虚な日本人としては思わず遠慮しちゃう場面ですわー」

「ヤクモさんが出生地を詐称しはじめた件について」

たまに、本気で地球出身な気がしてくるから不思議だわ。

過ごした時間は3カ月くらいなのに不思議な話だ。

「そういうえば、もうじき夏休みやなー。みんなでどっか行きたいわ」

「毎日夏休みみたいなのやつがなに言ってんだ。海は足が動かないと危ないし保留として、山とか？ レンタカーで旅行って手もあるけど」

「なんやかんや言いながらも、行き先考えてくれるヤクモさんのツン

「デレ乙ー！」

「これは乙じゃなくてポニーテールなんだからね！」

予想以上にポニーテール好きやんな。ポニテ萌えだってこの前言ったじゃないですかやだー。

なんて言いながら八神家への帰り道をてくてく歩いていく。

いつの間にか日も長くなってきた、つい最近まで梅雨だったなんて嘘みたいだ。

まあ殆ど引き籠りだったから、雨？ なにそれ美味しいの？ 状態ってのが本音だけど。

「普通にピクニック行く人もアリやなあ。運転手に一抹の不安は残ってるけど」

「ふふん、甘いなはやて。最近じゃ、戦車に乗り込んで戦場にも出てる俺を舐めてもらっては困る。ネトゲだけど!!」

「一抹どころか不安で埋め尽くされてもうた。どうしてくれんのかや！」

「これは控訴も辞さない!!」

「まあまあ、落ちつけよ。あれだな。ゆつくりできる釣りとかどうだ？ クツキーダソクパートノイザヨイヤクザ的な意味で」

「おう、釣りキチおばさんやめーや」

ホント、はやてはどんなボール投げても拾ってくれるからびっくりするわ。

未だに守護騎士たちは半分も理解してないってのに。

「この場合、もうそこまでネタ仕入れてるヤクモさんがおかしいやろ」

「ほら、俺は極めて特殊な訓練を積んでるから」

「素人がなにを言うてるんや」

「素人？ 違う、スペシャリストだ！」

ふもつふが好きだったよ。わかってるやないか。

とか言ってるうちに、我が家の玄関へとたどり着いた。

ヴィータ辺りがシュークリームで狂喜乱舞しそうだな。虫歯になったら笑ってやろう。

「んー、旅行のことなんて言おう？ 変に扱い使われて、行き先が絞られるんとか嫌なんやけど」

「それくらい心配はさせてやれよ。愛されてるってことだろ？」

「忍びないなあ」

「かまわんよ」

言いだしたら、俺だって色々と氣遣ってもらってるし。今日の仲直り会らしきものとかね。

必要だったかは微妙なところだけど。

「あ、やっべ。そう言えば仲直りっぽいことしてない気がしてきた」

「茨の道やな。あんまり時間経ってからやと、ごめんなさいし辛くなんで？」

「あつ、問答無用で悪いのは俺なんですな、察し」

「何があったかは知らんけど、こう言うときはだいたいヤクモさんのせいやろ。常識的に考えて」

ひでえ。

俺のハートがブロークンなので、今日のディナーはカリーを所望します。

「カレーやからルー語とか、安直やなあ」

「この高等なギャグが理解できないとは。説明されて俺のライフはもうゼロです……」

「ご希望通りカレー作ったるから、と半笑いで言われつつ俺は玄関のドアを引き開けた。」

24 課題を見て犬を見ず

今日も今日とて平日の昼下がり。

適当にパスタでお昼を済ませ、週に数日あるお約束のお時間がやってきた。

いや、ゲームじゃなくて。それもそうだけど。

「はい、じゃあここに60円のリンゴと80円のリンゴがあります。お買い物に来たヴィータは、手元に5万7千とんで30円持つてるとします。買えるだけ買ったとき、60円が最大個数になるようにした場合と80円が最大個数になるようにした場合でそれぞれの量を答えなさい」

「無駄に手持ちのケタがでけえよ！」

それでも律儀に答えを出そうとする辺り、ヴィータは素直で扱いやすい。

これがはやてだと。

「まず60円のリンゴの中から質のええもんを選ぶとつからやな」

「おいそこの主婦、そういう問題じゃないから」

なんで安い方からいいもの選んだら勝ちみたいなルール作ってんの？

自宅学習の時間くらいボケなくていいから。真面目にいこうよ、真面目に。

「皮を剥くのが大変そうだな」

「ちよつとそこの腹ペコ騎士は黙ってる！ 冷蔵庫にプリンあるから、それ食いながら大人しくしてくれませんかね!!」

む、プリンだと？ といいながらシグナムが台所へ消えていく。

騎士の本懐はどこ行った。もうちよつとプライドっていうかさ。ほら、ねえ？

「プリン……リンゴでプリン？」

「もうお前は料理からいったん離れる。ってかお願いだからお勉強くらい普通にやらせて！ 真面目に計算してるのヴィータだけじゃねえか、どうなってんだこれ!!」

ホントに勉強しなきゃダメなやつが遊ぶんじゃないやありません！

「いや、根本的に問題のチョイスが間違っていると思うが？」

「それは言わない約束だろ？」

お前が真面目にやらんかと、ザフィーラの犬パンチを貰った。いい右を持ってやがる。

まあ、そんな冗談は置いといて内容を変更。ヴィータにはひらがなの書き取りドリルを渡しておいて、はやての方は学校で出ている課題から引つ張ってくる。

歴史について喋りはじめると、どこからともなくシグナムが顔を出すので今日はやめよう。

特に日本史の幕末と、世界史でゲルマン大移動とかやると確実に……いや、やらないって言ってるんだろ。大人しくプリン食っててくれるかな？ ハウス！

「じゃあ、今日ははやても国語の勉強にしよう。ごんぎつねと100万回死んだねことどっちがいい？」

「私を泣かしてどうしたいんや！」

あれ？ 読み甲斐のある内容を選んだだけだったんだけどな。

それならエルマーの竜とかでどうだ。これならわりと読みやすいだろ。

「ああ、それやったら普通に読んだことあるで？」

「ですよー。仮にも文学少女だってこと忘れてた。じゃあもうこれにしよう。これまで読んだことのある作品のあらすじを完結まで800文字で書きなさいってやつ」

そこ、雑とか言わない。こまけえこたあいいんだよ！

と、こんな感じでお勉強の時間へと突入していく。

最初はやてが自宅学習をする時間で、俺がそれを手伝う立ち位置だった。

しかし、守護騎士たちやってきてからは手持ち無沙汰なのか周りをうろろうしはじめ。

ええい鬱陶しい。そんなに気になるならお前らも勉強しろ！ と俺がちやぶ台をひっくり返し。

そうして始まった八神家お勉強タイムである。

いや、八神家にちやぶ台ないんだけどさ。

「それにしても、ヤクモさんが思いのほか勉強できる件について」

「まあ、次元世界によって通貨の単位とか違うし。文化とか言語は勉強しとかないと困ることもあるからなあ。習慣？」

驚きと困惑の目が俺に集まった。

なんだお前ら、喧嘩売ってんのか？

「でも、教えるんは相変わらず回りくどいと」

「ぐっ……や、やかましい」

性格なんだよ慣れてください。

「つうか、テメエもなんか読んでるよな。なんだよそれ」

「え？ 簡単にできる家庭菜園」

「フラテツロは誰や」

いや、社会福祉公社とかに勤めるつもりはないから。

「ってか、それ本編開始前に死ぬキャラじゃねえか。」

眼鏡のプレゼントだけはしないように気をつけないと。

「傭兵なんてやってるとな。どこで手に入れた知識が役に立つかわからないもんなの」

「おー、なんか本物みたいなこと言うとな」

「いや本物ですけどなにか？」

再び驚きと困惑の目が俺に集まる。

さつきからなんだこれ。そういうレクリエーションか？

「なんにしても、頭で負けてる気がすんのは気に入らねえ」

「じゃあ、まずは鉛筆をグーで握るのから直していこうか？」

「箸も未だ満足に使えんしな。いっそ手に括りつけてみてはどうだ？」

「普段、皿に顔を突っ込んで食べるお前が言うのか」

プリン食いながら揚げ足取るお前もどうだろうね。

いや、じゃなくて勉強！

あのさあ……どうしてこう脱線ばかりするかなあ。

「はいヤクモさん。とりあえずあらすじを完結まで書いたで」

「ここでボケないとか、お前はやてじやないな？」

「私になにを求めんてんのや」

まあ、今のは無茶ぶりだった自覚あるんで勘弁してください。

そんな感じで、勉強になつてんだかよくわからない時間を過ごす。はやてと一緒に勉強したがったり料理本凝視したり萌えよ剣熟読したり、みんなやることは割と自由だ。

ザファイーラなんて洗濯してたりするしね。主夫の貫録とか出てる気がするんですがそれは。

「んー……気になるのは、無暗に変に難しい言葉で書こうとしなくていいってことくらいかな。内容はちゃんと纏まつてるから、よく書けてると思うぞ」

「ほほう、ずいぶん上から目線やな。それやったらヤクモさんのお手本とやらを見せてもらおうやないか。四畳半神話体系を三行で！」

「いや褒めたよね俺!! 完全に三行でつて言いたかっただけじゃねえか!!」

しかも、あの内容を三行に纏めろつて? どんな鬼畜仕様の難易度だよ!

「ええつと……」

これは、主人公が選んだサークルによって如何に違う大学生活を送ったかを描いた作品だ。

並行世界として描かれる作中、必ず小津という悪友に関わつて主人公は酷い目にあう。

最後には主人公が並行世界を横断するなど、魅力溢れる作品である。

「うん、絶対伝わらないよねこれ!」

「微妙なところやな。読んだことある人やったら、それで通じると思うけど?」

誰がマジレスしろつて言ったよ。

まったく無茶苦茶やらせやがって、これは責任者に問いただす必要がある。責任者はどこか。

「また阿呆なこと言いだして。ヤクモさんもそれ言いたいだけやろ」

「どうせやるなら、ここまで言つとかないかね」

じゃないと、お前らなにやってんの？　って目で見てくる守護騎士たちの視線に晒されただけになってしまふ。

それはもう、俺の心が耐えられない気がするんだよね。

「四畳半神話……この国の宗教か？」

「違う違う！　違うからベルカの教会みたいなの想像するのストップ！」

「え、でも神話なんですよね？　そういうことなんじゃ？」

シグナムとシャルマルさんが、そろって首を傾げている。

変な知識を植え付ける前に、小説読ませた方がいいだろうか。

あ、でもこれがその宗教のコーランとか言われてもめんどくせえな。

いや、言わないよね？　流星にそこまで突飛な思考回路してないよね？

「なにを騒いでいる。四畳半ならアニメの録画があるだろう。それを見せれば済む話だ」

「お前天才か！」

急に現れたザフィーラがいいこと言ったので、さっそく録画DVDを引つ張り出してくる。

言いだした本人は、なにやら洗濯カゴを抱えて庭に出て行ったが。あれ放つといていいのかな。

もうあれ、完璧に家政婦さんだよ。守護獣の威厳どこいった？

「どうした、早く再生しろ」

「私、この国のアニメ好きですよ。凄く面白いので」
こいつらもこいつらで騎士の誇りはどこいった。

もう、完全にサブカルで毒される直前の一般人じゃねえか。

いいのかなこれ。

「かまわん、やっておしまい」

「あらほらさっさー」

はやてさん、混ぜるな危険って言葉知ってますかね？

そんなことを思いながら、円盤をプレイヤーに入れて再生ボタンを

押す。

始まったアニメに、いつの間にか一番前を占領していたヴァイターも含めて全員が視線を向ける中。あれ？ そういえばなんでザフィーラはアニメのこと知って……なんて思ったけど口には出せない俺だった。

25 猿も穴からボツシユート

こつこつと足音が響く。

それ以外、俺の耳を叩く音はない。

ただ、人がいないということはないだろう。

今日会いに来た人物と、それ以外に何人かの過激な先客がいるはずだ。

「冗談きついなあ」

ぼそりと呟いた声が、奥に伸びる暗がりへと吸い込まれていく。

自然の洞窟と人工物が半々で残る通路は、足元の非常灯が点々と続いていくだけ。異様な静けさに包まれて、不気味なことこの上ない。すぐにでも帰りたところだが、そうもいかないから困る。

ここは、数年前のクライアントが所有するラボ。

時期的には、プレシアの前に受けていた案件だが。その依頼主というのが、問題はあるものの名医と言って差し支えない技術を持っている。

はやてのことを聞いたらこいつに。正直、嫌で嫌で仕方ないけどそうするのが一番早いと考えていた人物だ。

「……………」

ゆっくりと進む。

視界は悪いが、今は助かる。

入口を吹っ飛ばした跡があったので、おそらく先客は穏便なやつらじゃないだろう。

出会わないことを祈っているが、いざというときは闇に紛れるしかない。

逃げるが勝ちだ。

とはいえ、どうしたもんかな。

この施設の持ち主に用があつて足を運んだら、まさか襲撃者がいるとは予想外デス。

タイミング悪すぎワロタ、というやつだ。

しかし、それに対する予定の変更もなければ、こちらの呼びかけに

も答えがない。

彼なら易々と死んだり捕まったりしないとは思うが、なにも言つてこないなら予定通りの場所へ出向くしかないだろう。

最悪、いなくてもなにか手がかりくらい置いてある可能性だってある。

「はい、お邪魔しますよ。誰もいませんように」

ホントに。心からお願ひします。

そう願ひながら、会う予定だった部屋の前で壁にへばりつく。

デバイスを構えながら開閉パネルを操作すれば、欠片の抵抗もなく扉は開いた。

ぷしゅーとエアの抜ける音が、やけに大きく聞こえてで泣きたくなる。

こういう場合、部屋の中で死体食つてるやつがいそうで怖いよな。

「誰もいないかなー？　いないならいませーんって返事してくれてもいいんだよ？」

静まり返つた室内を、やはり足元の非常灯だけが照らしていた。

どうも、最低限の電力しか生きていないらしい。

主電源は死んでいて、非常時の予備電源に切り替わっているのだからか。

「あの野郎、会つたら一発殴つてやる」

中は無人で、特別なにかいる気配はなさそうだ。

家探ししたいところだが、これで日記とか見付けるとフラグがなあ。

かゆ……うま……とか書いてあつたら、きつと恐怖で漏らしちゃうよ俺。

濡れる!!　なんてね。

まあ、冗談はさておいて。

「中に誰もいませんよ、っていう確約がないんだよなあ」

これが入つてみたら誰かいて、実は息を殺してましたってオチだけは勘弁して欲しい。

念には念を。まあ、怪しい扉の前で聞き耳は予定調和だしね。

「アクティブソナー、エコー」

やることは単純。

まず手に魔力を集め、砕いてそこらへまき散らす。

同時に受信用の術式を展開し、跳ね返ってくる魔法の残滓を拾っていく。

そして、最後にそこから演算した周囲の輪郭を意識内へ作り出せば完了だ。

なんの捻りもない魔力ソナーである。

サーチャーに比べて精度は劣るものの、維持と遠隔操作が必要ないから燃費は悪くない。

室外でも一定の精度を誇るし、室内なら初見で打破できたりはしないだろう。

サーチャーを誤魔化せるハイド系の魔法も、一部はこれで看破できる。

欠点は一回で処理する情報量が多いことだが。

「あれ、ホントに誰もいない？ そんな馬鹿な」

発光スフィアを展開して、周りを照らしながら室内へ進む。

端末と作業台、機材の数々が整然と並んでいる。

急な襲撃に慌てた様子がない辺り、家主の性格が出ているというか。むしろ、これ事前に知ってたんじゃないかなとすら思えるレベルだ。

おそらく、端末の中身は初期化済みだろう。

起動してみても警報とか鳴っても笑えないし、とりあえずハードだけ引っこ抜いとくか。

なにも残ってないとは思うけど、万が一という可能性だってある。足取りを掴むためにも、大人しく解析しておこう。

「まあ、それ以外に手がかりもなさそうだしなあ」

小さな魔力刃で端末を解体して、中から手帳サイズのハードディスクを引っ張り出す。

ん？ そういえば、なんでこれがまだ残ってるんだ？

襲撃者が、まだここまで到達してないだけってことはないだろう

な。

同じ場所から入った俺が、そいつらより先に着くはずもないし。

「じゃあ素通りしたとか？」

いや、それもないか。特にロツクもかかってなかったし、全部の部屋を確認するくらいはしたはずだ。

ということとは、襲撃の目的が殺害とか拉致だったという可能性か。膨大な量の研究データを盗むより、人間をさらう方が早いかもしれない。

それはそれで困るなあ。いくつか協力して欲しいことがあったから来たのに、完全な無駄足じゃないですかやだー。

また最初から探し直しか。

どうせ殺しても死なないようなやつだし、どっかにいるとは思うけどさ。

「にしても、襲撃者の目的が見えないなあ。まさか管理局とか……あ、やばい。今、なんか変なフラグ立てた希ガス」

「そこにいるのは誰だ」

ほらね！ ほらね！！

咄嗟に発光スフィアを入口へ撃ち出し、自分は大急ぎで機材の影へと滑り込む。

たぶん牽制くらいにはなったと信じた。

「こちらは次元管理局、首都防衛隊所属のゼストだ。無駄な抵抗はするな。大人しくしてくれれば、悪いようにはしない」

「首都防衛……エリート様がこんなところでなにしてんだよ」

ホントやめてよね。

それにしてもどうしよう。首都防衛隊とか、まともにやり合ってる気がしない。

あいつら選り抜きの人員だもん、仕方ないね。

これがせめて航空隊だったら……うん、俺のなんちやって空戦じゃ追いつけないわ。

戦技教導周りのやつらは論外として、陸士隊ならワンチャンあるか？ でも、飛べないだけで現場のやつらはタフネスあるんだよなあ。

うわ……こうして考えてみたら、誰にも勝てなさそうなのが不思議だよ。

し、自然保護隊とかのやつ相手なら遅れはとらないし！ たぶん。「俺はこの関係者じゃないんだけど、できたら見逃して欲しいなあ。なんて」

「それはわかっている。先ほど妙な魔力反応を感知するまで、人の気配は欠片もなかったからな」

ああ、ソナーのせいか。

探知のつもりで相手をおびき寄せるとか、俺天才じゃないかな。

「だが、ここにいるということにはなにか知っていることがあるはずだ。拘束はしないと約束する。代わりに、保護という形で一度こちらへ身柄を預けてくれ。事情聴取がしたい」

保護されたあと、手が後ろに回るコンボ持ちの場合はどうすればいいですか。

救いが欲しいよ。切実に！

「ちよつと探られたくない腹とかある人なんだけど、そういう場合はどうすれば？」

「……大人しく投降しろ。これ以上の罪を重ねるな」

「さっきの意見と180度違うんですがそれは!!」

あかん。これ完全にあかんやつ。

ともかく逃げ道だ。それを探さないと、始まる前に終わってしまう。

入口……は、管理局員が居座ってるからアウト。それ以外の出入り口も、全面壁だから無し。

よし、じゃあこういうときの鉄板は通気口！ と思ったけどないんだなこれが!!

「やつべ、なんだこれ。ちよつと楽しくなってきたやつたぜ」

どっかに隠し扉とかないかな。まあ、あってもこの状況じゃ見付けるのは無理臭いけどさ。

いつそ開き直って真正面から特攻してみるか。

予想外の行動過ぎて怯んでくれるかもしれない。

右へ左へ、ちよつと上がってから下がる。スパイラルっぽいのも抜け、つておいなげえよ！

これどこまで続いてるんだろう、と不安になってきた辺りでようやく出口が来た。

どぼんと水の中に突っ込むオプション付きで。

搭乗スロープかと思つてたら、ただのウォータースライダーだったで御座るの巻。

「冷てえ。これは下水かな？」

「いえ、地下水です。衛生面に問題はないかと」

振り返れば、そこに1人の少女が立っている。

ウエーブがかた紫の長い髪が特徴的だ。確か、ドクターのところの秘書だったかな。

えつと、ウーゴくんだっけ？

「ウーノです。とりあえず、そこから出てください。タオルはこちらに。ドクターのところまでお送りいたします」

「上のやつらは？」

なんとか淵によじ登り、ウーノから受け取ったタオルで顔を拭く。

まさか、こんな形で濡れる羽目になるとは。

下着までびっちょやびちょですけど。

「今回ご協力いただけただけなので、彼らの正体は掴めました。対応策は考えておきます」

「無断で協力とはいい度胸だあの野郎」

ぜったいぶっ飛ばす。

転移魔法陣が起動する中、それだけは固く心に誓った。

26 痛い腹を探り合う

先導するウーノに続いて、武骨な鉄板に覆われた通路を進む。さつきまでの、半分ぐらい自然洞窟だった隠れ家とはずいぶん雰囲気が違う。

近代的という言葉もあまりしっくりこないが、なかなか巨大な人工物の中にいるようだ。

なんせ、直接室内に転送されたんでね。

ここどこだよ。

「それにしても、ウーノはでかくなったな？」

「確かに身長は伸びましたが、なぜ疑問形なのでしょうか」

いや、クローン体の成長速度とか知らないんで俺。

最後に会ったのは5年くらい前か。あのあと、ほぼ間を置かずにプレシアの仕事が舞い込んだからよく覚えている。

というか、あの頃はまだ試験管の中にいたからなあ。

適当に寄りかかったら、幼女が入っててガチビビリしたのはいい思い出。

っていうか、あれ？

どこからどうみても、今のウーノは高校生くらいなんです。

やっぱり、普通の判断基準で成長速度わかんないじゃないですかやだー。

「まあ、俺らがちゃんと喋ったのって最後の方にちよこっただけだったよな。よく覚えてたね」

「それだけ印象が強烈だったということですよ」

ははは、こやつめ。

こんなに善良な一般傭兵を捕まえて強烈とか。

そこら辺にいくらでもいる量産型ですけどなにか？

「そういえば、今はなんとお呼びすればよろしいでしょうか。前と同じではないのですよね？」

「ヤクモ・ナナミでよろしく」

わかりました、と短く答えてウーノの歩みが止まった。

通路の端によつてこちらを振り返り、浅く頭を下げながら背後の扉へ進むよう言ってくる。

彼女の道案内はここまでらしい。

最後まで付いてこないのは、別にやるべきことがあるからだろう。なにかは知らないが、さつき首都防衛隊の対応がどうか言っていたから、あるいはそれだろうか。

まあ、別になんでもいいけど。

適当に礼を言つて、扉の奥へと進んでいく。

かなり広い空間だ。

大型のモニターに機材の数々。地下までぶち抜きハンガーまであり、そこにはよくわからない機械が何台も押し込まれている。

なんだあれ。

「あれはまだ試作機でね。解析作業が上手くいっていないんだ」

大型モニターの方から声が来た。

愉快気で粘着質な声色は怪しき満載だが、慣れてみればどうということはない。

むしろ純粋な知的好奇心に突き動かされる彼は、そこらの権力者より信用できる。

裏切られるときは単純明快。最初から実験素材として見られていたか、利用価値がなくなるかのどちらかだろう。

「また変なもん拾つて来やがって。相変わらず、碌なこと考えてないだろお前」

「酷い言われようだね」

ジェイル・スカリエツィ。

稀代の変人科学者が大仰に肩を竦めて見せる。

まあ、信用できるって言つても芥子粒ぐらいの差だ。

下手に気を許すと大変なことになるので、取扱いには注意しないと
いけない。

とりあえず、はいはいと言いながら雑に手を振っておく。

挨拶代わり冗談はここまでという暗黙の合図である。

お互いに無駄話が好きすぎるので、仕事に支障が出ないように取り

決めたものだ。

「まあ、積もる話は後でいいだろ。先に仕事を片付けよう」

「なるほど、では私から。大まかに解析作業とシステム構築を頼みたい。今は人手が足りなくてね」

詳細として飛んできたデータを、空間モニターへ出して流す。

多脚式の機械が解析対象。見たことのない無人機だが、どこかの新兵器だろうか。

あとのシステムの構築は、個人兵装の適合補正。それに砲台らしき施設も載っている。

どちらも質量兵器らしいが、なんぞこれ。

「えらくでかいな」

「管理局からの依頼でね。地上の防衛に使うそうだよ」

それはまた。

質量兵器禁止の集団が、ずいぶん思い切ったことをしてるね。

反対意見は……まあ、出たんだろうな。

じゃなきゃ、こいつに制作を任せるわけもない。

「個人兵装の方は、私の娘たちにだ。もうすぐ調整も終わるから、親としては贈り物の一つも必要だろうか？」

「お前が親ね。まあ、その辺はウーノのときと同じか。了解した、優先度とかあるか？」

「砲台は後回しでかまわない。解析を優先させて欲しいが、兵装も娘たちの調整に合わせてほしいね」

まあ、せっかく出てきてもやることありませんじゃ手持ち無沙汰か。

解析ちよろちよろ兵装ぱっぱ、意見を言いつつ調整して、管理局泣いても砲台取るなって感じで行こう。

基礎設計図は完成してるようだし、管理局のために働くのも嫌だしな。

「資料に目を通したら作業を始めよう。で、今度はこっちの要件だけ。今から送るデータを見てくれ、こいつをどう思う？」

「……これも、興味深いね」

セーフ。ギリギリだけどセーフ。

作業服じゃないし、ベンチもないから大丈夫。たぶんきつとおそろく……

「これは、誰のバイタルデータなんだい？」

「闇の書保有者のデータだ。下半身に身体的障害とは別の理由で麻痺が広がっている。理由の解析と治療方法を探して欲しい」

ふむ、と唸りつつスカリエツティは画面から視線を外さない。

あそこにあるのはただのデータだけど、なぜか犯罪の匂いがする。

変態科学者が幼女の身体的データを凝視。

字面だけ見るとダメなやつだなこれ。

「出来れば、本人を連れて来てくれる方がわかりやすいんだがね」

「それはダメ。あと、そのデータから個人を特定しようとも思わないこと。この条件が飲めない場合は、俺が自動的にお前と敵対することになる」

つまり、イエスロリータノータッチだ。

わかるな？

「まあ問題ないだろう。闇の書のデータがもう少し欲しいところだが」

「確か、何年か前に暴走した闇の書が管理局の次元艦食ったんだろ？」

あのとときのデータが管理局にあるはずだ。あとでクラックしてくるから、それを参考にすればいい」

回線借りるぞ？ と付け加えて、可能な範囲で解析した闇の書のデータも送っておく。

端末がデバイスだったため、表層部分の情報しかないが。それにしただけでいいぶんな情報量だ。

解析の役には立つだろう。

「闇の書の保有者に対しては不可侵を約束しよう。だが、闇の書を解析するにあたって手に入れたデータは私の自由にさせてもらうよ？」

「それくらいは好きにしてくれ。保有者とその周辺にお前が手を出さなければ、俺はなにも言わない。管理局に嗅ぎつけられても、俺を含めて他言は無用で頼む」

わかったとスカリエツティは頷くも、こんな所詮は口約束だ。
冗談半分くらいに信じておくしかないだろう。

最終的には、こちらではやての安全を確保していくしかない。

ホント、こいつは興味を持った対象なら無遠慮に突っ込んでくるド
変態だから困る。

これだから頼りたくなかったんだよなあ。

「君の作業部屋を用意しておいた。ウーノに案内させよう」

「わかった。とりあえず、ウーノの兵装から稼働データを取りたいん
だけど」

「自由にしてくれ。機材も揃えてある」

さつき入って来たドアが開く。

そこに佇んでいるのはウーノだ。もしかして、あそこでずっと突っ
立ってたんだろうか。

「ばっかもーん、廊下にたつとれー！ 的なの？」

「君のレアスキルは、私にとって非常に有用だ。上手くやってくれた
まえ」

「はいはい、報酬はしつかり働きますよ」

振り返りざまに、もう一度機械群に視線を向ける。

ハンガーに収められてるってことは、おそらく稼働兵器だと思う。

つまり、さつきの多脚機が試作機？ でも、やることは解析なんだ
よね。

あのままでもハンガーの機械群は稼働しそうなんだけど。もしく
は、解析してまで組み込みたい機能があるのだろうか。

うーん、そこら辺を探ればはやての防波堤にできる情報が出るかも
しれない。

叩けば埃がぼろぼろでるような人間だし。いや、俺も人のこと言え
ないけど。

「じゃあウーノ。とりあえず脱いでみよっか？」

無言のパンチが顔を襲う。

あざっす!!

「確か目が覚めたときの第一声は、いい尻してるねでしたか。欠片の

進歩も見られないようですが」

「ウーノは羞恥心と右ストレートがいい感じで育ったね」

羞恥心ではなく条件反射ですと短く返して、ウーノはさっさと歩いて行ってしまおう。

背後でにやにやしている馬鹿も気になるところではあるが、ここは選択肢を間違えるとフラグが折れる場面だ。

冷静に選択肢を見極めよう。

「へーい彼女、ちよつとお茶しない？」

「仕事をすべきかと思えます」

アツハイ。

27 敵地に入らずんば情報を得ず

モニターに目をやりながら、流れる文字の羅列を眺める。

内容はウーノの先天固有技能の稼働データ。

インなんとかさんっていう、略してISとかつて能力らしい。

人口レアスキルがどうか昔言ってた気もするが、忘れちゃったどうでもいいです。

「フローレス・セクレタリーの稼働率は悪くないか。でも、やっぱり兵装との同調率が悪いね」

「やはり、私のISに装備を乗せるのは難しそうですか」

別に無理じゃないけど。ただ、乗せても乗せなくても性能に差が出ないんだよなあ。

これなら、いつそ無くてもいいという話になってしまっただから仕方ない。もう、必要ないならしないで使わない方が建設的じゃない？

そもそも、フローレンス・セクレタリーは知能加速及び情報処理能力の向上させる技能なんだし。戦闘に出るような能力でもないじゃん。

高機能ステルスの能力も完備してるらしいから、こっそそ隠れて嫌がらせスタイルの確立した方がよくね？

「それは、ヤクモ様の行動を真似ろということでしょうか」

「おう、その本気で嫌そうな顔やめろ。俺のガラスハートが粉碎するぞ」

ちなみに、フローレンス・セクレタリーのモデルは俺のレアスキル。

とは言っても、こっちはただ思考の演算処理を上げるだけ。スペック的には圧倒的に格下なんで、大っぴらなことは言えないんですけどねえ、白目。

こっちは頭が賢くなるわけでもなければ、情報の並列処理量が爆発的に増えるわけでもない。ホント、声を大にできない微妙なレアスキルなこと……

な、泣いてなんかないやい！

「同じ系統のスキル持ちとしてアドバイスするただけど。兵装は超

長距離で火力重視、変に意識が介入するとややこしくなるからストレンジ型がオヌヌメってところかな」

「二理あります。しかし、私はそもそも戦闘を主眼として生み出されたわけではありませんので」

そうなんだよなあ。

前の最終調整で用意したのは、ネットワークと直結するヘッドギア型の兵装だったのだが。しかし、まあこれがあってもなくても大して変わらないと。

むしろ、本格起動するとネットワークに意識がダイブするため、本体の方がガラガラになってしまう。

欠陥品もいいところですね本当にありがとうございます。

それでもあえて使用し続けてもらっていたのは、稼働データのサンプルを作るため。今後もいくつか固有兵装を作ることだったので、それに先立つ試運転をしてもらっていた形だ。

「産まれてくる妹たちのためにサンプルが取れたなら、それで十分ですが」

「まあ、ナノマシンで脳波とネットワークを繋ぐとかも考えたけど、お前ら半分くらい機械だからなあ。変なところでエラーが出る可能性も否定できないし、今のままでも管制役としては充分だろ。あとは、個人的に戦略なり身につけるしかないと思う」

投げやりですねと聞かれたから、だって俺のことじゃないもんとか答えておく。

俺のドヤ顔ダブルピースがお気に召したのか、ウーノさんが大変白い目でこちらを見てくる。

やだ、なにか目覚めちゃいそう。

「よし、稼働データは回収できた。もういいよウーノ」

「首尾はいかがですか?」

「上々だ。お前が特殊例なだけで、俺の作った兵装はとっても優秀ってことが証明された」

「今のお言葉、自分にも跳ね返ってくるということを忘れないでくださいいね?」

ど、同系統でもスペック差は歴然としてるから大丈夫だよ……………
たぶん……………

そもそも、俺のデバイスは自作だけどちゃんと稼働して……………ない
な。どうしよう。

「そういえば、形状が変わったような気がしますね。前はもつと大き
かったような？」

「デチューンですしおすし」

「おす？ まあ、いいのですが。原始的な質量兵器の構造も見て取れ
ます。その辺りはどういう」

「公開処刑とかやめてもらおうか！」

逆ギレ？ 上等だよコノヤロー！

文句があるなら言ってみろ。聞かないけどな。

アアン？ ナンダコラヤンノカ!? セーゾコラヌツコロスゾ!!

「セーノコラヨツコラシヨ？」

「なにそのミラクルな聞き間違い方」

こいつ、真面目な顔してボケ担当だったか。

はやてに合わせたら楽しいことになりそうだな。

立ち上がるのは自由ですが、仕事をお願いしますと言い置いてウー
ノは部屋から出て行く。

とりあえず、お達しどおりやることをやろう。管理局のサーバーに
闇の書の記録があるらし、とりあえずそこから手をつけようかな。

ここの端末なら前ほど面倒なこともない。ぱぱっと目的の情報を
引っ張り出してしまおう。

「さーて、超働いちやうよお！」

この無駄なハイテンションに反応はない。

静まり返った部屋の中で、機械音だけが微かに聞こえるだけだ。

最近、無駄に賑やかだったからなあ。

い、いや別に寂しくなんてないんだからね！

†

管理局のサーバーへ侵入するのも何回目だろう。

今回に限らず、結構な割合でお世話になっている気がする。

まあ、それもこれも無限書庫なんて便利な施設を持つてるからだけ
ど。

無断使用、待ったなし！

「惜しむらくは、資料の整理がされてないところだよなあ」

噂によると、文字通り無限の空間を持つ資料室らしい。

あまりにも広大すぎて、どこになにがあるのかもさっぱりなんだと
か。

必要な情報を探すときは捜索隊を組み、見付かるかどうかは運任
せ。

見付ければラッキー。そうじゃなくても、元から大して期待してな
い。

そういうイメージの場所らしい。

果たして、それは機能していいと言えるのかが謎だ。

誰か、汚部屋の掃除とかしてくれないかなあ。

「相変わらずのザルフアイアーウォール、進入し放題だけどいいのか
これ」

そろそろシステムの保守性とか見直さないと、管理局は酷い目にあ
うと思うんだ。

例えば仮面の反逆者が出たときに床を崩されたりとか、変態研究者
に足元すくわれたりとか。

……前者はともかく、後者はやりそうだな。

あの機械群とか、どう考えてもその準備じゃないのか？

管理局に攻め込むメリットがあるのかは知らないけど、面白半分と
かでやりそうだから困る。

下手にそつちまで足突っ込みたくねえと愚痴りつつ、なんなく壁を
突破してお目当ての記録を呼び出していく。

とは言え、遠隔操作で現物を触れるわけでもない。

探す場所は、一度抽出されてバンクの中に保存されたデータだけ
だ。

数年前にも闇の書に関する事件があったようだし、そつちだけ探せ
ば足りるだろう。

「足りなかつたらどうしよ……」

え、侵入？

無限書庫に忍び込むの？ マジで？

それやるなら、とんでもない準備期間とか必要になるんですけども

……

「情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ。そしてなにより金
が足りない……悲しいけど、これって現実なのよね」

いつもならこころ誰かのレスポンスがあるってのに、ホント一人つ
て寂しくて泣きそう。

まあ、言っても始まらないので作業へ集中する。

いったいどれが必要な情報か、正直なところよくわからない。

とりあえず、検索ワード『闇の書』に引つかかるものは全てコピー
しておくのが無難か。

流石に、管理局のサーバー上で取捨選択していれば発覚のリスクも
ある。

今回は回線も太いので、遠慮なくやらせてもらおうとしよう。

「……ん？」

回収したデータの中で、一番最近のを開いてみる。

どうやら映像ファイルらしく、作成日は11年ほど前。内容は、闇
の書が輸送中に暴走したというもので。

どうやら、当時の状況が映像記録として残っているらしい。

クライド・ハラオウンなる人物の行動により、被害は最小に抑えら
れたようだ。代わりに、彼は侵食された輸送船と運命を共にしたよう
だが。

「ハラオウン？ どっかで聞いたような……」

管理局の関係者だと思うんだけど……ああっ！

アースラの乗員リストで、艦長と同行の執務官がそんなファミリー
ネームだったような。

あの微妙に世紀末な肩をした少年と、食えない女艦長さんは血縁の
ようだが。

はて、いったいどんな関係だろう。

「でも、問題はそこじゃないんだよなあ」

更に詳しく検索結果を絞って、最新の報告結果を探してみる。

もちろん、管理局サーバーの中に置き忘れないかも含めてだ。

「細かい情報の更新はともかく、ないとおかしいデータが見当たらないなあ。つまり……」

どうということだつてばよ。

ないとおかしいデータというのは、当然のことながらはやてに関するものだ。

いつそ、見付けたら消去してやろうかとも考えていたんだが。

「家の近くにあったスフィア。あれの調査報告がないのはなんでだ？」

もちろん、闇の書が起動してからは俺とはやての2人暮らし風に映像処理はしている。

だが、監視スフィアは俺が来る前からあったようだし。なにより、闇の書の本体は一目でわかっちゃうような場所に堂々と置いてあったのだ。

未起動状態だから手が出せないだけで、管理局はこのことに気付いていると思っていた。

というか、そうだったとしたらあのスフィア誰のだよ。

「なーんか、キナ臭いんだよなあ」

いつそ今からでも回収して、発信元の解析でもしてやろうか。

地球に戻って、またここに来るのも手間だが仕方ない。

守護騎士たちに頼んで、せっかく隠蔽していた存在が露見するよりはマシだ。

だが、あのタイミングではやてを襲わずに見張っていただけだったし。発信源は間違いなく管理局だろう。

変に人道主義なところがそれっぽい。

暴走するとわかってても、発動前なら強硬手段には出ませんとかそういうの。

「あのスフィアが、個人的に幼女の私生活を覗こうって目的じゃなければ。あるいは……」

誰かが個人的に所有して、隠している可能性もある。

あつ、これはどっちにしても1回は管理局に忍び込む流れですわ、察し。

どうすっかなあ。

「とりあえず、どうでもいい情報しかでなかった。凄く嫌だけど、聖王教会の方にも顔出さないとダメかな。今度こそ、頭から真つ二つにされそうなんですすがそれは」

あそのこの暴力シスターマジ怖い。

ついでに腹黒騎士もオメガ怖い。

用があるのはヴェロツサつて言う、昔スラムで知り合ったやつだけなんだけど。

やだなあゝ、怖いなあゝ。

軽く吐息しながら、集めたデータを適当にまとめてスカリエツテイの端末に放り込んでおく。

殆どどうでもいい情報しかなかったが、11年前の映像みたいに掘り出し物的な収穫はあった。

放っておけば、その内なにかしらヒントを見つけてくるはず。今度はどう探せ、とかRPG的な指示が来るのを待っただけだ。

「じゃあ、休憩挟んでから解析つてことぞー」

「お茶をお持ちしました」

くあwse drft gyふじこip!?

お前、今どっから出てきた！

「普通に入口から入って来ましたが。飲み物をお持ちしたら、ちょうど休憩という言葉が聞こえましたので」

当然のことでしょ？ と言わんばかりの表情で、ウーノがトレイ片手に首を傾げている。

なんだこれ。ステルス機能つてここまで有効だったのか。

「どうぞ。お茶とお菓子を用意いたしました」

「おう、ありがとう」

横の簡易テーブルに『2人分』のお茶を置いて、ウーノが何気なく対面の席に座る。

ん？ なんのようだがしよ？

「解析作業を、私もお手伝いするようにと言われてきました。固有能力の稼働テストにもちょうどいいだろうと」

「ああ、なるほど。まあ助かるからいいんだけど、このお茶は？」

「先ほど、お茶しないと云ったのはヤクモ様ですが」

うわああ、そんなの真に受けてたのか！

まあ、今さら冗談とか言ったら回し蹴りくらいやられそうだ。

ここは大人しく席につこう。

「じゃあ、久しぶりの再会にかんぱーい！」

「お酒が欲しいのなら余所へ行ってください」

なんだよもう！ 冷たいのか優しいのかどっちだ！

あれか、これが噂のツンデレ？

デレはどこいったんですかね……

28 言うはヤクモ行うはウーノ

さて。頼まれていた解析作業だが、多脚式の機動兵器というのになり厄介だ。

半分以上ブラックボックス化してるところか、システムと構造の両面で異様に固いプロテクトがかけてある。

中身を開けてみないと、ホントにブラックボックス程度で済むかもわからないのに。

これで、本格的なオーパーツとか出てきたらどうしよう。

「ぐぎぎぎ……こいつ、CTも受け付けないのかよ。超音波の構造解析はどうよ」

「進展はありませんね。以前からドクターと話していたことではありませんが、やはり切断してみるのが早いかと」

ウーノに言われて、思わず吐息が漏れる。

わかつちやいたけど、既に一通り試したあとだよな。

お手軽じゃない方法を取るから、人手が足りないんだろうし。

「どこまで切れば、内部を傷つけないかによるなあ。せめて、装甲の厚さとかわかればいいんだけど」

関節を外して無理やり引っぺがすのもありだが、装甲そのものも特殊なステルス仕様らしい。

貴重なサンプルだ。出来れば、完全な状態で解体したいな。

構造解析を邪魔してるのも、おそらくこの装甲だろう。それだけの完成物を、わざわざ壊すだなんてご冗談。

「それにしても、ホントわけわかんないなこれ。見た目はただの鉄板のくせして、目視困難レベルで透過しやがる。構造解析を阻害してる辺り、ただの透過ってわけでもなさそうだが」

そこらのステルスが裸足で逃げ出すわ。

ハイド系魔法でも似たようなことは可能にしろ、人と機械じゃ意味が一気に変わってくる。

こんなのが量産された暁には、管理局の転覆くらい余裕じゃないかな。

「AMFに干渉されていない辺り、私たちのインヒューレントスキルに近いのかもしれませんが」

「んー、どうかな。確かに、最初から特殊な素材を使ってる可能性も否定はできないけど。量産されてたことを考慮するなら、機構として組み込まれてたはず。そう考えたら、やっぱり後から処理したって可能性の方が高いんじゃないか？」

まあ、その処理方法はさっぱりなんですけどね。

やっぱり、ばつさり切るか。ついでに、剥がした装甲の成分解析とかもとききたいし。

「……あれ、今AMFって言ったよな。まさか、アンチ・マギリンク・フィールドのこと言っていたりする？ あ、もうこれフラグだよの略じゃなくて？」

「あなたは、まだふざけ足りないようですね」

偶然か意図的か判断しづらいが、凄じ上手いこと返されてしまった。

そして、心なしかウーノさんの視線が冷たいような。

あ、でもこれはこれでなんか……いややめとこう。

とりあえず、空間モニターに資料を開き直して目を通す。

機械的構造とシステムで発動するAMF。あれって確かAAAAリンクの高位魔法だったと思うんだけど、そんなことできんのかよ。

小型の魔力炉を積んで、術式をあらかじめ転写しとけば……

いやいや、発動はするかもしれないけど誰が制御すんだ。全部にインテリジェントデバイス並のAIでも積むつもりか？

「途方もないな。システム面からアプローチかけて、とりあえず仮組やるか。このトンデモ装甲よりはわかりやすそうだ」

はい。つてことで、装甲はばつさりやりまーす。

ぶつちやけ、わからないこと多杉ワロタって気分なんで全体の構造解析は後回しだ。

装甲の成分解析と、ついでに内部の調査を先にやろう。

OSの吸い出しとか出来るかな。

まあ、何台か解体してればその内なんとかなるだろ。

そんなじゃあまあ、ここは様式美というやつで。

「はい、ウーノもご一緒。いつてみようー!」

「……は?」

そこは、やってみよう! って返して欲しかったけど、はやて以外にこれを求めるのは酷か。

うん、だからそのゴミを見るような目を止めてもらっていいですかね!

‡

もうやだ、お家にかえりゆ……

危うくそんなことを口走りそうになる今日この頃。

八神家のみなさんはいかがお過ごしでしょうか。

今回も無断で外出して、早1ヶ月になりますね。

ぶつちやけ、今から帰ったときが非常に恐いです。

なんにしても、これで前回の記録も更新となりました。やったぜ。

「うふふふ、この恥ずかしがり屋さんめ。そろそろ観念して、俺の言うことを聞いてもらおうか」

「い、いけませんヤクモ様。ドクターに呼ばれていますから、早く行かないと」

顔を逸らし、抗議してくるウーノなんてなんのその。

あんなやつ待たせとけばいいんだよ。そんなことより、俺の欲を満たす方が先ジャマイカ。

手を滑らせるように動かし、輪郭をはっきりさせるように撫でる。

すべすべの手触りと、ひんやりした温度が心地いい。

顔を上げれば、不満のこもったウーノの表情がうかがえた。

「じゃあ、続けるぞ?」

「……………」

手を下へ。

慎重に動かしながら、内側へと潜り込ませる。

指に絡みつくモノを押し退けて、奥へ奥へと進んでいく。

目指す場所が一番深いところ。そこにある大事なところに触れたくて。

「あばばばばばば」

「通電を停止します。やはり起動状態のコアを確認するなら、取り出した方がいいのでは？」

「ごもつともだね。」

もうそろそろ、この感電マラソンも疲れてきましたわ。

「ともかく、ドクターが呼んでいますので来てください」

「今いいところなのに」

「電気ショックを浴び続けて、脳活動に異常がでていませんか？」

失礼な、俺の頭は今日も絶好調だぞ。

そんなことを言っていたら、ウーノが強固手段に訴えかけてきた。首根っこを掴まれて、荷物よろしく引きずられていく。

体に機械を埋め込んで強化してあるらしいが、少女が成人男性を引きずるって凄くね？

これすっごいゴリラだよ！ ゴリラにしようぜ！ かなりゴリラだよコレ！

「今、なにかとんでもない中傷を受けたように思うのですが」

「気のせいだよきつと。ほら、まな板ではないし？」

まな板？ と不思議そうな表情をされたが、詳細は知らないほうがいいと思うんだ。

俺の命とか危険が危ないし。

「それにしても、不思議な装甲だな。成分は特に変なところもなかったし、やっぱ構造なんだろうけど。金属の精製段階で、光を透過するように処理する方法なんてさっぱりわからん」

要は、携帯の覗き見防止シート逆転バージョンみたいなものだ。

電子制御で分子を綺麗に整列させてやれば、それで光が通るかもしれないが。

ただ、そんなこと金属みたいな高密度の物質で可能かは怪しい。なにより、無闇に分子を弄って素材の性質まで変化しては意味がない。

仮に脆い装甲に変化したとしたら、それはもう兵器として使えない代物だ。

雑に言うなら、光の透過はできたけどダイヤモンドが炭になったと

かね。

「AMFの方は、ただのブラックボックスだったしなあ。構造を真似すれば、すぐに量産はできると思うけど。あの装甲は諦めたほうがいいかもね」

「そういう話はドクターとしてください。私に言われてもなんと答えていいか」

声に出して確認くらいさせてよ、あんまり頭よくないんだから。

しかもこれ、1人でやってるとブツブツうるさいって言われるんだぜ？

ははっ、超理不尽！

「ところで、これいつまでこの感じなんですかね？」

「もう、面倒なのでこのまま行こうかと思えます」

ああ、なるほど？

せめて、もうちょっと丁寧に扱ってくれませんか。

このままだと、人としての尊厳的ななにかがアボンしそうなんですけど。

なんなら、お姫様抱っこでも可。

「ご要望とあれば、そうしますが」

「すいません冗談なんでやめてくだちい」

いい加減、ウーノの中で俺の株が大暴落してるよねこれ。

大丈夫かな？ 大丈夫だよな？

気にすんなよ！ くよくよすんなよ！ 大丈夫、どうにかなるって

！ ドントウォーリー！ ビーハッピー！ なんて迷言もあるくらいだし大丈夫かな、たぶん。

うん、とりあえずお米食べろ！

「それで、俺はなんの用で呼ばれてるの？」

「私たちの固有兵装に関して、意見の交換がしたいそうです。あとは、解析の進捗具合などではないでしょうか」

まあ、そんなところか。

解析対象を一機バラしてるわけだし、ここらでちよつとくらい進歩とか欲しいよね。

とりあえず、俺は資料の準備とかしとけばいいのかな？

もうこのまま連れてってくれるらしいので、今からちやちやつと作ってしまおう。

わかったことは多くないが、まったくないわけでもない。

ただ、これをスカリエツテイに見せる上で、不安もあるにはある。

例えばラボに着くまで、襟の耐久度がもつかとかそういうの。

大丈夫、だよな？

29 痛しあべし！

万歳突撃よろしく向かってくる機動兵器を、まずは右手の武装で撫で斬りにする。

特に力を入れる必要もない。長細いカプセル型の機械は、それだけで鉛細工のように切断された。

ドロリと溶けた断面が、申し分ない威力を物語っているが。

んー、ちよつと熱量がなあ。

熱切断だから仕方ないけど、これは自分も怪我するかもしれん。

「つと……」

続けざまで、右と左斜め後ろから同時に2機。

ぎりぎり視野内と、完全に死角からのコンビネーションとは恐れ入る。

さっきの突撃も、これの誘導じゃないですかやだー。

「流石はウーノ、学習能力高いなあ」

ホント、これだから天才様は。

俺の人生経験を数時間で上回るのやめてもらえませんかね。

先に右へ大きくワンステップ。

これで挟撃のタイミングをずらしながら、更に大きく前に跳ぶ。

先に到達するのは右だが、斜め後ろも気持ちくらいのラグしかないだろう。

だから、今度は振り返りつつ左の武装を振りかぶる。

1機目を切り裂き。だがそこで動きを止めることなく、体を大きく捻って刃を振り抜く。

こちらも特に抵抗は感じない。

先ほどと同じように、武装はすんなりと2機を切断して見せた。

やっぱ、エネルギーエッジは威力と安全面が両立してるなあ。

問題は燃費の悪さか。どこから電源ひっぱってこよう。

小型化にも限度があるし、かと言ってバックパックみたいなの背負わせるわけにも。

「んー……でも、提供者としてはこっちを推したい。熱切断って、割と

危ないんだよなあ」

『次のターゲットを出しましょうか？』

「あれ、若干声が震えてるけど悔しかった？　ねえねえ！　全機撃墜されちゃったけど、今どんな気持ち？　ねえ、どんな気持ち？」

問答無用で6機の機動兵器が野に放たれ、全力で逃げる羽目になりましたマジ怖い。

か、軽い冗談じゃないの！

『くっ、またしても』

「あ、あつぶねえ！　近接は俺の専門じゃないんだから加減してくれませんかね!!」

今回はギリギリ各個撃破でなんとかあったけど、そのうち絡め手と通用しなくなるんだらうなあ。

あとは、機動兵器も実験段階だし。完成品が仕上がれば、ちよつと怪しくなる可能性も微レ存。

「ついでに、試作型AMFの稼動実験もいつとこうか。今は魔力供給で稼動させてるし、この近接武装は使えなくなっちゃうけど」

『今度こそ吊るしてみせます』

超物騒なんですけど、誰か超なんとかしてくれませんかね。

とりあえず、逃げるか？　いや、逃げたらテストにならないじゃねえか。

もうマジ無理。敵機反応が別れた。

どンドン分裂していまわ8体になってる。

うちに勝ち目わないんだって。

完全にかこまれてる。

つよい。

勝てない。

とりあえずリスクはしたくないので、この後滅茶苦茶鬼ごっこする。

†

イイイイイイヤッヒイイイイイ!!　とか叫びながら走り回っていたら、たまたま通信してきたスカリエツティにドン引きされ

た。

なんだろう、この負けた気分。

お前にだけは言われなくなかったのかを感じてるんですけど。

『なんというか、楽しそうでなによりだね』

「いやお前、もっぱらエキサイトしてんのはテメエの娘だからな!？」

そろそろAMFの実験もいいんじゃないですかね。

発動はしてるけど、範囲設定やら発動維持が甘いのはわかったことだしさー！

『ところで、君に頼まれていた闇の書に関する調査だけ。知りたいかい？』

「朗報でありがたいんだけど、これ今はちよつとそういう話が聞ける姿勢じゃないかなあ」

だつてほら、そんなこと言ってる間に後ろから2機も3機も追つて来てつてうわああああ！

「ぎやあつ！ 前からもキターーーーキターーーー!!」

4機の影が同時に躍り出たので、その間をスライディング気味に抜けていく。

うねうねと動くコード状の触手を必死に避けつつ、こういうのは女の子の担当でしょ！ と悪態を吐くことも忘れない。

流星は俺。思ったよりも余裕あるっぽいぞ！

『さて、細かいことは資料にまとめて送っておくけど……』

「さてさて、この状態で始めんじゃないやねえよ！ 頭に入ってくるわけないだろ!!」

はい、ここで右に跳んで。更に受身からのヘッドスライディングだ

ズザー。

あつ、やばい。ちよつと今、アドレナリンとかどばどばでてるんじゃないかなこれ。

俺のキャラが崩壊しちゃうよ。

『いつもと変わらないように思いますが？』

『ふむ。私も通常運転のように見えるがね』

こいつら、そろいも揃って喧嘩売ってんのか。

もういいから、とりあえず後ろのやつら止めてくれませんかね。

追い掛け回されながら喋るのも、結構しんどいんだよ！

『ああ、それから。君が言っていた、管理局にあるはずのデータがないという話だけれどね。ちよつと面白いことがわかったよ』

「は？　なんでお前そんな……ちよ、待てよ！　ウーノ、ホントに止める!!」

了解しましたと言って、ウーノは素直に機動兵器へ停止命令を送ってくれるようだ。

でも、ちよつとタイミングが悪い。

左手側から現れた3機に、ちよつと捕捉されてしまっている。

1機が大きく先行して、残りが後を追ってくるという形だ。

たぶん、しばらく逃げ回っていれば命令が浸透して止まると思うけど。

「待ってられつかくそつたれ！」

振り向くのと同時にヴアリアブルブリットを展開。続けて準起動状態のアンカーバレットを、M1903にセットしておく。

厄介なのはAMFか。範囲内に入ってしまったえば、問答無用で魔力結合が妨害されてしまう。

もつと言うなら、フィールド内での術式展開は骨が折れるし魔力だつてごっそり持っていかれる始末だ。

厄介なことこの上ない。

まあ、だからって手がなわけじゃないですしおすし。

「機動兵器壊すべし！　慈悲はない!!」

ヴアリアブルブリットは対フィールド魔法である。

通常魔力弾を膜状バリアでくるむ多重弾殻射撃ともいうが。

早い話、バリアの部分フィールド魔法を中和して中身を守る構造と言えいいのか。

暴走状態の汎用人型決戦兵器が、なんか似たようなこととしてた希ガス。

まあ、どうでもいいや。とにかく、ギリギリまで引き付けた1機目

をこれで撃ち落とす。

相手フィールドに反応して効果を中和するから有効なのは間違いないけど、ちよつとばかし処理工程の多いところがこいつの難点だ。インテリジェントデバイスとかいると楽かもしれない。

「あとは物理を上げて殴れば勝つる！」

他にAMF対策といえば、もうとりあえず殴ることだろう。

アンカーバレットで残骸を拾いながら、後追いの1機に叩きつける。

いくら魔法が無効化できても、慣性なんかの物理現象まで消せはない。

だから、こういう原始的なのは逆に効果的でしたというアレだ。

魔法技術が草葉の陰で泣いている気がするんですがそれは。

「よし、スカリエツティ。詳しく」

『ははは、あと1機残っているようだがいいのかい？』

うるせえ、余計なお世話だ。こちとらデチューンして半分質量兵器化したデバイス持ちだぞ。

爆破の煙を掻き分けてやってきたそれも、一対一なら恐くない。

後にレーザーが実装されるはずのレンズ部分。あそこが一番脆いところだ。

まだ光学兵器も実装されてないし、弱点丸出しでご苦労様です。

突っ込んできた機械に蹴りを合わせ、レンズに銃口を押し付けつつ5連射。

AMF環境下で身体強化魔法しんどい……

「無駄に固い。もうやだ消耗武装は使うとお金が……」

リアル課金弾とか、マジ勘弁してください。

『ご苦労様、今のはいいデータが取れたよ。AMFの弱点もわかったしね』

「いいから闇の書の情報。あと、テメエ持ち主のこと調べやがったな？」

『手を出さなければ、という話だったからね。大丈夫、観察しかしていないよ』

変人科学者がロリコンの称号まで得てどうするつもりだ。

あれ？ でも、ある意味で最強のコンボじゃね？

管理局辺りにタレこんだら、即逮捕待ったなしって感じだわ。

「人として終わってる系のなにかだな」

なにか言ったかい？ と聞かれたので、なんにもと答えておく。

目先の変態よりも、子供の未来が大事だろ常考。

そんなことを思いながら、受け取った内容を空間モニターで確認する。

どれもこれも目新しい情報だらけだが……ううん……ん？

「あの監視スフィア、やっぱり管理局のだったのか」

『そのようだね。だが、より正確には個人の差し金だったようだよ』

つまり、管理局そのものは関わってない？ どういうこつちや。

とりあえず、今の仕事保留にしてグラナガンに行こうかな。

聖王教会の方も覗いときたいけど、正直はやての方も時間に余裕がなさそうだ。

さて、どうしてみるか。

30 踏んだり蹴られたり

ギル・グレアム。

時空管理局歴戦の勇士という通り名を持ち、これまで多くの偉業を成し得た彼は、苦い表情で通路を歩いていた。

こつこつと床を叩く靴が、まるで心情を表わすかのように神経質な音を響かせている。

(どうすれば……)

目下、グレアムを悩ませている案件は闇の書と呼ばれるロストログイアについてだ。

思い出されるのは、十数年前の失態。クライド・ハラオウンという、大切な部下を失ってしまった事件のこと。

私の失態で……

そう悔やみ続けて、個人的に闇の書を追い始めたのだが。

どうにも、気付いてみればあまりよくない状況に陥っている。

苦悩と共に思いやられるのは、娘のように可愛がつてきた自信の使い魔たちだ。

(ロツテとアリアは無事だろうか)

数年前、彼は八神はやてという少女を見付ける。

両親を早くに亡くして天涯孤独だった彼女こそ、今回の生贄に選ばれた人物だった。

消滅と同時に無限転移を繰り返す闇の書。それをようやく見付けられた喜びと、こんな幼い子がという困惑がグレアムを襲う。

闇の書を封印するには、どうしてもこの子まで巻き込んでしまうのだと。

しかし、そこで思い出されるのは良き友人であり大切な部下であったクライドの死だ。

これは必要な悪。そう信じて彼は動き出す。

先ず、手始めに頼るあてのなかったはやての後継人として名乗り出る。財産管理や資金援助を行ったのは、おそらく良心の呵責だったのかも知れない。

偽名を使わず、グレアムと名乗ったのもその一環。少なくとも時が来るまでは自由に生活できるよう、よき『おじさん』として彼は振る舞っていた。

「あの断層さえなければ」

計画は順調に進んでいるはずだった。

数か月前には闇の書の起動も確認している。

監視用の魔法が不調だったため、使い魔であるリーゼロッテとリーゼアリアを送り込みもした。

そして、身元不明の男が同居しているという報告を聞いて。

プレシア・テスタロッサが事件を起こしたのは、その直後である。

(どうすれば……)

と最初の苦悩に帰って、グレアムは短く吐息した。

いつの間にか辿り着いていた執務室の扉を開け、その中に踏み込んでいく。

現状、第97管理外世界と連絡をとる手段はない。

向こうまで行くにしても、時間がかかり過ぎる。

現場の判断に任せようにも、闇の書をはやてごと封印する切り札はグレアムの手の中だ。

本当に、どうしてこうなったのか。

「あれ、帰ってきちゃった。どうしよつかない」

「無計画という言葉が滲み出ていますね」

「仕方ないだろ。急だったから、個人のタイムスケジュールとか調べられなかったんだし」

不意に背後から声に来て、グレアムは慌てて振り返った。

入口のすぐ横、そこに帽子を目深にかぶった清掃員風の男が立っている。

反射的に叫ばなかったのは声が出なかったからではない。彼の手に銃があり、グレアムの方を向いていたからだ。

「君は誰だ」

「ただの不法侵入者かな？ まあいいや。ちよつと聞きたいこともあったし」

肩を竦めて見せる男の横に、同じく清掃員の格好をした少女もいる。

彼女は小さく首を振って、手元には空間モニターをいくつか呼び出しているようだった。

「立ち話もなんだから座ろうぜ。せっかくの立派なソファがもつたない」

「自分がなにをしているのか、わかっているのか？」

「そりやもちろん。あれだったら、可愛らしく悲鳴でも上げればいいんじゃない？ ヒーローが助けに来てくれるかもよ」

顎で促され、グレアムは大人しくソファに腰掛ける。

対面には清掃員の男が、少女は動かずモニターの操作を続けたままだ。

本来、来客用に使われるソファに座り、お茶もないテーブルを挟む。喉を潤すものはなくとも、突きつけられた銃が彼の喉から水分を奪っていくようだ。

「さて、こつちも時間がないからサクサク行こうか。八神はやては知ってるよな？ あの子から手を引いてもらおう」

「……………どういことだ」

そのままの意味だけ？ と肩を竦める男をグレアムは注意深く観察する。

銃口はこちらを向いているが、引き金に男の指はかかっていない。敵意はあっても殺意はない証拠なのだろう。

また、壁の花に徹している少女も動く気配はない。

展開しているモニターの内容も気になるが、直接的な害になるような相手ではなさそうだ。

そして、相手の口から出た『八神はやて』の言葉。わざわざ使い魔を送り出した理由を思い出せば、なんとなく想像はつく。

「言葉通りの意味だけど。うーん……………今はあんまり腹の探りあいとかしたくないんだよね。だからズバリ聞けどき。あんたは使い魔を2体ほど持つてるらしいじゃないか。今、どこにいるの？」

「……………」

黙秘を貫いたグレアムに対して、特に気にした様子もなく男は銃を揺らしてみせる。

暗に喋れという意味表示だが、大人しく従う意味もないだろう。じつと睨み返していると、程なくして彼は僅かに肩を竦めてみせた。そのまま壁の少女に視線をやり。

「どうだようっちゃん?」

「少し前に他次元世界への渡航記録がありますね。行き先は不明ですが……うっちゃんはやめませんか?」

「あー、なるほど。向こうに戻ったら掃除もしないとだめか」

面倒だなと男が息を吐き、同時にグレアムは息を呑む。

少女が言ったことは、おそらくリーゼロッテとリーゼアリアのことだろう。

しかし、彼女たちの渡航はできうる限り隠蔽してある。それこそ普段は使わない権限まで使ったにも関わらず、こうもやすやすと判明した理由がわからない。

グレアムの表情から驚愕の色を見て取った男が、苦笑いを返しながら。

「事後報告になるが、机の端末からID情報を引っこ抜いて使わせてもらった。クレジットカードの番号も含めて、次からは逐次消していくことをお勧めする」

「……君が八神家に転がりこんだ男だな。あれがどれほど危険かわかっているのか? いや……その前に、どうやってここへ」

「こつちのアドバンテージを、そんな簡単に教えるわけないじゃないですかやだー」

プレシア・テスタロッサの起こした事件に関しては本局にも伝わっている。

というのも、最寄りの管理世界でアースラが補給を受けた際に報告を飛ばしてきたからだ。

今回の次元震で発生した断層が、小規模だったのも幸いしただろう。いくつかの管理世界で通信の中継をすれば、メッセージの送受信くらいは可能だったのだ。

資料のない状況報告に管理局は揺れ、とりあえず安全の報を聞いてアースラの帰還を待つという結論がでた。

第97管理外世界と管理局本部のあるミッドチルダの間は、今そういう状況である。

文章のやり取りすら中継機のある特定の場所ではできないのに、この短時間で人の行き来などできるはずもない。

もしくは、彼もミッドチルダへ来た直後に次元断層に巻き込まれて立ち往生を？ という可能性を考えたところで、グレアムは即座にそれを否定した。

どう見ても、男の顔に焦りはない。

だいたい、アドバンテージとまで言っていたのだ。どれほどのものは知らないが、それだけの自信がある代物なのだろう。

内心で舌打ちをするグレアムの背中を、嫌な汗が伝っていく。

「まあでも、あんたの発言でわかったこともある。御礼にヒントつても変だが、あの艦長さんも食えねえなって言っところか」

「……知っているかね。自己完結の言葉は、それらしく聞こえてもヒントにはならないんだよ」

苦悩に眉間の皺を深くするグレアムを見て笑っている辺り、男はわかっていてやっているのだろう。

ついでに、このタイミングで銃をちらつかせることも忘れない。

質の悪い話だ、とはグレアムの率直な感想である。

頭から抜け落ちかけていたこともあって、苦い表情が更に濃くなるというものだ。

苦笑い気味の男は肩を竦め、仕方ないなあと膝に肘を付きつつ口を開く。

「んー、じゃあそうだな……話をしよう。あれは今から36万……いや、1万2000年前から愛してるだったか。まあいい。私にとってはつい昨日のことで、君たちにとっては多分明日のできごとだ」

ここまで話の主導権を持って行かれたまま、男は更に話をしようと言う。

はつきり言って、グレアムにとっては不利な状況ばかりだ。

早く終わってくれと思いはすれども、この状態を続けたいだなんて願うはずもない。

いったいなにを聞かれるのかと身構え。そして、そこでようやく彼の口から間抜けな疑問が飛び出した。

今、なんか凄い変なこと言わなかったか？ と。

慌てて正面に視線を投げれば、人を食ったような笑みで男は肩を揺らしている。

(なんだ、どういうことだ。まさか……なにかの暗号だったのか!?)

この場で暗号を使ったとして、伝える対象は1人しかない。

壁の花に徹していた少女だ。

そうなる、彼女が端末を操作しつぱなしだったのも気になってくる。

あるいは、今の暗号で新たな動きがあるのでは。そう思い、微かな動作も見逃すものかと顔を振り向け。

なんのことはない、ため息混じりに頭を振る姿が目飛び込んできた。

「……は？」

まさか呆れるという暗号でもあるまい。

もしくは、上手く伝わらなかったの可能性もあるが。

正面でニヤニヤ笑う男に、呆れを通り越して白い目を向ける少女。グレアムにとって、これ以上に困惑を生み出す状況もないだろう。

同時に、言葉を失った彼の姿を笑顔で見ている男はとても愉快気だ。

楽しそうな雰囲気隠そうともせず、再び口を開きかけ。

「いい加減にしてください」

不意に、その姿が視界の外へと吹っ飛んでいった。

後日、グレアムは語る。

幼い少女の身で、あれは見事なドロップキックだったと。

31 売りはやてに買いヤクモ・前

久しぶりに帰ってきたなあと思ったたら、もう夏真っ盛りだったでござるの巻。

やばい。マジやばい。

いやほらさ、俺も久々の研究でテンション上がったって言うか。そりゃ基本的には、傭兵としてどんぱちする方が多いんだけどね。レアスキルの特性上で言うなら、俺って研究者よりのそれだし。

思わず熱中してたら、ついつい時間を忘れたよテヘペロ的な？

「ヤバイよヤバイよ。これ、どう考えてもドックフードコースだよ。いや、もっとヤバイ可能性もあるけど」

既に玄関まで帰ってきたといてなんだけど、やっぱり胃薬買ってからにしようかな。

でも「寄り道するとか、ずいぶん余裕やなあ」なんて言われたら死ぬる自信がある。

主に食糧事情的な意味で。

こういうのも、胃袋を掴まれるっていうんだらうか。

もしそうだったとして、尻に敷かれるの前提なんですけどそれは。

「おつ。なんか不審者がいんど、シグナム」

「なんだと？ よし、斬り捨てるか」

「ちよ、おまー！ ノータイムでアグレッシブな行動に出るのやめてくれませんかね!!」

買い物帰りらしい2人の発想が恐ろしすぎる。

なんで、こんな危険人物が世に放たれてるんだよ。

もしくはアレか。今宵のレヴァンティンは血に飢えてたりするのかもしれない。

そういえば、萌えよ剣とか読んでたもんなあ。

燃えよ剣じゃなくて、萌えよ剣ね。ここ重要。

「まあ、我々が手を下さずとも……」

「それもそうか。ヤクモ、強く生きろよ？」

こいつら……

それにしても、やっぱりはやてさんはご立腹か。

まあ、わかつてたことだけどさ。

しばらく、飯の避難所を確保しといた方がいいかもしれない。

「あつ、俺ちよつと急用が」

「なるほど。やはり、機動力を削いでから主の前に連行するか」

「どうせなら、サンダーブレイクつての試してみたいんだけど」

おい、それ機動力じゃなくて運動性削ぐやつ！

命中率80%の当たらなさ舐めんよ!!

「すげえ。まったく久しぶりの感じがしねえ……」

「概ね通常運転と言うことだ、お前が」

「だいたいいつも通りつてことだな、テメエが」

これは酷い言葉の暴力を見た。

まあ、でも守護騎士特攻隊長のヴィータと総番のシグナムが大人しいのなら一安心か。

場合によっては、もっとぴりぴりしていたはずで。少なくとも、俺を宇宙人が捕まったスタイルで引っ立てている場合じゃなかっただろう。

それにしても、どうしようかな。

こつちにはギル・グレアムの使い魔が来ているはずだ。

あまり多くのことを彼は話してくれなかったが、いくつかの懇願と共に特殊なデバイスも預かっている。

手出しする方法がないから諦めるが、もしやろうとしてることが失敗したらこれでうんたらかんたら。

これ以上の被害者を出さないためにとか言われたけど、俺がそんなの知るわけないじゃない。

世界を救いたいなら、英雄とかそういうのに頼んでほしいね。

なににせよ、通信手段もないから使い魔は独自に動いていることになる。

自棄になってはやてに突っ込んでたらどうしようと思ったけど、この感じなら大丈夫そうだ。

「主、玄関前でうろろうろしていた不審者を捕まえました」

「ケーサツ呼ぼーぜ、ケーサツ」

「お前ら、せめて洒落にできる範囲でお願いします」

え、もちろん冗談だつて？

お前ら自分の目が笑ってない自覚あるか？

「おー、ヤクモさんやん。ようやく帰ってきたんやな」

「うわあ。はやてさんげきオコスティックファイナリアリテイぷんぷんドリームじゃないですか」

だつて言葉の柔らかさに反して、冷たい視線が俺の体に穴を開けようとしてるもの。

せいぜいム力着火ファイアーくらいだと思つてたら、最大級の地雷を踏み抜いてたつぽい。

どうしようどうしよう、あわわわわ。

「まあ、いいわけくらいは聞いたる」

「え、ホントに？ 実はね」

「いいわけするんやない!!」

「理不尽!!」

流石に冗談やと言つて、はやてがいいわけを聞いてくれるポーズに入る。

五体投地状態になった俺の後頭部に、足を置く感じの姿勢だ。

車椅子のフットレストを畳むとあら不思議、人の頭を綺麗に踏めるよ！

「はやてさん、これなんかおかしくね？」

「ええから言つてみ」

ウツス、姐さん。

ということ、いなかつた2ヶ月くらいの話をかいつまんでしていく。

技術者としての仕事をしたとか、未知の技術を解析してたとか。あとは幼女にドロップキックくらつて2回転したとか。

ギル・グレアムについては伏せておこう。

あえて話す必要はないだろうし。はやてにとつて、いいおじさんのままでいてもらう方が建設的だ。

「なるほど、仕事をしとったと。それで？」

「それで、つて言われてもなあ。それだけですけど？」

こういうとき、顔が見えないって怖いなあ。

もし理解してやってるとしたら、はやての将来が非常に心配だ。

そのうち悪女になるかもしれない。

あるいはやり手のネゴジエイターとか。最後には物理で交渉するタイプのだけだ。

「シャルル」

「えつと……はやてちゃん、ホントにやるんですか？」

シャルルさんの不安そうな声が追加される。

あの方向は台所かな？

さつきまでいなかったし、そっちに引っ込んでたんだらう。

うん、嫌な予感しかしいんですけど。

「えつとその……この前に試しで作ったときは、思ったよりもドロつとしちやいましたけど」

「ええんよ。どうせなら、もつとドロつとさせてもええで」

「わかりました。頑張ってみます！」

「ねえ、なにを頑張るの？ 努力の方向音痴って言葉しってる!？」

どうやら台所へ戻っていくシャルルさんの耳に、俺の悲痛な叫びは聞こえなかったらしい。

だいたいドロつとってなんだよ、ドロつとって。

それ食べ物の話でいいんだよね？ 変な新物質とかの話してません？

というか、俺の記憶が正しければシャルルさんの飯って頑張れば食えるレベルだったよね。

もしかして悪化してんの？

え、悪化じゃない。レベルアップ……そんな馬鹿な。

「まさか、ドックフードよりも酷いものが待っているなんて。誰が予想できるよ」

「今は別の居候がドックフードを独占しているからな」

「ザフィーラ、お前とうとうドックフード食うようになったの？」

おそらく、シャマルさんと入れ替わりで台所から出てきたのだろう。

久しぶりの青犬様は、なんの躊躇もなく脇腹に噛み付いてきた。痛い。挟れる。千切れる。いきなり野生に還るのはやめちくりう！

「お前は相変わらずそうだなによりだな」

「おかしいなあ。俺の生活環境が、どんどんハードモードになってる気がするんだよなあ」

自業自得やろ、とはやてに言われてしまつてぐうの音も出ない。変わりにお腹がぐーと鳴いたけど。

「お腹減つてんのやったら、丁度よかつたんやない？　なあ、ヤクモさん」

「いやこれは腸の収縮運動であつて、必ずしも空腹を示す音ではないと言ふか！」

ドロつとしたのは勘弁してくれませんかね。

まだ流動食頼るような歳でもないんで。

「ホンマにもう……無断外泊とか、八神家では極刑なんやで？」

「とんでもない治外法権っぷりを見た。いやあの、ホントすいませんでした。なにしてたか正直に言うんで、どうか堪忍してつかあさい」

「……内容によりけりやな。言うてみ」

「ハイ、ヨロコンデー！　いや実はね。はやての足を治せるかもしれない算段をつけてきたんだわ」

不意に、がたりと色んなところから動揺の音が上がった。

まあそりやそうだよな。

あえて言葉にはしなかつたけど、みんな気にしてたことだし。

とりあえず後頭部からの重みも消えたので、そつと顔を上げる。

目の前には期待と不安で、よくわからない表情になっているはやて。

その後ろに買い物袋からお菓子を取り出そうとして固まっているヴィータ。

真横にお座りするザフィーラと、なぜかレヴァンティンを大上段で

構えているシグナムもいた。

ん？ なにやってんの？

「や、ヤクモさん！ 今の話は本当なんですか？」

「おう、ホントだよシャマルさ——うわっ、なんだそのどろどろの鍋！！」

鍋の中身じゃなくて、鍋がどろどろってどういう状態だよそれ！

へ？ フルーチエ？

嘘だろ。ってか、なんでフルーチエを加熱したのか教えてくれませんかね。

「まあ、もろもろ思うところがあるのはわかる。あくまで可能性だから、期待されても困るんだけど。俺が戻ってきたのは一定の目処が立ったし、準備をしようと思ったからだ。はやての足も、あんまり放つとくとよくないみたいだしな」

「……歩けるようになるん？ 私か？」

「歩く？ まさか、とんでもない」

ぐつと周りの空気が重くなる。

心持ち、シグナムのレヴァンティンが降りてきたるのは気のせいだろうか。

あれ？ おかしいな。ここは喜ぶところじゃね？

……あ。

「すまん、言い方が悪かった。治れば、流れる汗もそのままに走れたりするよ」

「誰が爆走スランプや！！」

瞬間、かつと目を見開いたはやてが車椅子を全力で前進させた。

足元の方で、とても鈍い音が鳴ったような希ガス……

たとえば今は小さく、弱い痛みだとしても。

言葉もない俺の声、ひどく熱くなった俺の脛。

ごろんごろんのた打ち回る俺に、紛らわしいこと言ったらあかんとはやてさんが説教をくれました、まる。

32 売りはやてに買いヤクモ・後

さて、脛の痛みも適度に引いた辺りで八神家家族会議と相成った。つつても、主に俺の報告作業なんだけど。

あの不思議な食い物も、ちゃんと消費しましたよ？

まあ、後ほどスタッフが頑張っていた良かったですと言ったところか。

見た目はともかく、いつも通り頑張れば食える味だったのが怖いな。

どういう調理法ならあんなことになるのか、ちよつと気にならなくもない。

「えー……それでは第26回、キノコの山、たけのこの里戦争の開幕を」

「ぶっ飛ばされなくなかったら、さっさと本題に入りや」

はい、すいませんでした。

いやだって、それ以前に気になることがあるんだもんカルダモン。

『おい、誰か答えろ。この猫どこで拾ってきた』

『『『………』』』

念話では全員黙秘と。ついでに目まで逸らしやがった。

つてことは、はやてだな。

「はやてさん。その猫だけど、どこで拾ってきたの？」

「ん？ かわええやろ？」

まあそうかもしれないけど、そういう話じゃなくてね？

現在、俺とはやてと守護騎士4人。あと猫が2匹。計6人と2匹が居間のテーブルを囲んでいる。

俺の知る限り、八神家は6人で勢ぞろいだったはずだ。

しかし、なぜか今はやての膝の上には猫がいて。あまつさえ、俺のことを全力で威嚇していたりなんかしてくれちゃったりなんかしやがる。

うん、なんだこれ。

『おい、なんで誰も止めなかったの？』

『我々が主の意向に文句を言えるとも思っているのか』

威張るな。そこは止めろよ。

王様の愚行を戒めるのも騎士の仕事だろうに。

いやまあ、別に猫を飼うのがダメだって言ってるんじゃないんですよ？

ただ、この圧倒的魔力反応を前になんでスルーしたのか、小1時間ほど問い詰めたい。

「はやて、その猫は化け猫だからこっちへ渡しなさい」

「なんにもおらへんで。なんにもおらへんつたら！」

「渡しなさい、ナウシ——いや冗談とかじゃなくて!？」

なんで今、ちよつと腐界に吞まれる感じになっちゃったのかな？

あと、この流れでいいつたら俺そのうちベッド生活アノド討ち死にが待ってるんだけど。

本編開始前に死んでたり、討ち死にしたり。福祉公社のときといい、俺はそんなキャラばつかか！

「えー……別にええやん、猫飼うくらい」

「猫が飼いたいなら、俺が別のやつ用意するから。とりあえず、それはこっちに渡してくれない？」

「絶対に嫌や。この子らは私が飼うって決めたんやから」

2匹の猫を抱き寄せながら、不機嫌全開のはやてが俺を睨む。

なにやら潰れたような声も聞こえたが、きつと気のせいだろう。

それにしても弱ったな。

この猫はどう考えても黒だ。

ギル・グレアムの使い魔は2人。そして、ここに魔力を持った猫が2匹。

うん、完璧にこいつらのことです本当にありがとうございます。

「はやて、そいつらはこっち側の生き物だ。普通の猫を連れてきてやるから、それで手を打たない？」

「……………」

「うーん、よしそうだなあ。お兄さん気前いいから、翠屋のケーキとシュークリームも付けちゃおう」

ヴィータ、シグナム。お前らは座れ。

あと、ザフィーラは腕組んでないで逆に何か喋ってくれませんか。

「約束するから。な？　はやて」

「……約束なんて、守ってくれたことあらへんやん」

不機嫌そうな目を、更にぐぐりと吊り上げてはやては言う。

あれ？

猫の音がさつきから聞こえないが、きつと気のせいだ。

いや、そうじゃなくて。

う、ん？

「はやてさん？」

「ヤクモさんが、一回でもちゃんと約束守ってくれたことあったかいな？　空の散歩は忘れとったし、誕生日プレゼントも当日には貰えへんかった。相変わらずなんも言わんとおらんくなる上に……なあ、覚えとる？　言ってる間に、夏休み終わってまうんやで？」

なんの話を、とか言うつもりはない。

わかっている。たぶん、いつかの帰り道で喋っていた旅行の話だ。

確かに行ってない。

その直後から家を空けていたというのもあるが。

「いや待て、わかっている。旅行のことは覚えてる。けど、その前に足のことをなんとかしよう。動くようになれば、いける場所も増えるだろう？」

ああ、いいわけをしてるなあという自覚はある。

もちろん、旅行の話を忘れていたわけじゃないけど。俺の中で、優先度が低くなっていたのは否定できない。

「ヤクモさんが、私のこと考えてくれてるんはわかっとる。さつき足が治るかもしれないって聞いて、嬉しかったんもホンマや」

けどな、と続けるはやての声は低い。

怒ってるのか泣いてるのかわからない表情に、思わず息が詰まってしまう。

約束を守らなかつたからか？

いや、違うな。きつと、そうじゃない別のなにかだ。

「私には私のやりたいことがあるんや。なんでもかんでも、ヤクモさんの言うこと聞くロボットと違うんやで?」

「いや別に、俺はお前をロボットだなんて——」

「せやったらわかるはずや。1つも約束守ってくれへんのに、なんで今度も私が信じて猫を渡さなあかんのや?」

はやての眼差しが、まっすぐ俺を射すくめている。

その複雑な感情が浮かぶ瞳を見下ろしていて、不意に自分が立ち上がっていることに気付いた。

椅子の背もたれを掴み、重心はやや後ろか。

どう考えても、体が逃げている。

「ヤクモさん、私の足のこと話してくれへん? それ聞いたら部屋に戻るわ」

「……ああ、わかった」

そこからなにを話しただろう。

今のはやての病状を聞いた上で、その原因が闇の書にあること。

過去の闇の書の事例と、守護騎士たちの記憶がないことに対する推論。

用意した打開策に伴う危険性に、その準備で忙しくなる旨。

必要なものが揃い次第、作業を始めようという提案。

たぶん、回らない頭でもこれくらいは喋ったはずだ。

わかった、とだけ言って出て行ったはやての声が頭の中で反響しているようだ。

「おい、ヤクモ。いつまでそうしている」

肩を掴まれて我に返る。

当然だがはやてはいない。

ヴィータとシヤマルも見当たらないから、たぶんついて行ったのだろう。

「シグナム、ちよつと一発殴ってぐがっ!」

貫通力満天の拳が、頬に刺さる。

ホント、そのノータイムなのやめてくれないかな。

ここはちよつとくらい躊躇するところだろ。

「お前はやるべきことをやって来い。話を聞いていた限り、あまり猶予もないのだろうか?」

「そうね、そうなんだけどね。首がもげるかと思った」

「首を落としたいなら、全部終わった後に斬首でもなんでもやってやろう」

お前が言うのと冗談に聞こえないんですがそれは。

にしても痛えなあ。ちよつと涙出ちゃったかも shouldn't.

「あー、なんだろうなあ。浮かれてたかなあ、俺」

「気持ちはわからなくもない。我らとて、主はやてに巡りあえたことに少なからず浮かれたからな」

「たぶん、俺のはそういうのと少し違うんだけどね。まあいいや。いろいろ発注してくるから、あとはよろしく」

領き返してくるシグナムと、依然として腕を組んだままのザフィーラ。

おい、あのバカ犬寝てないよな?」

「ちゃんと聞いている」

「寝てたら額に犬つて書いてやったものを」

いいから早く行けとシグナムに家を蹴り出される。

グダグダやつてる時間くらいくださいよマジで。

俺にも思うところくらいあるんだからね!

†

そいつはふらりと店にやってきて、コーヒー一杯とシユークリーム1個でずいぶん粘っている。

いや、まあそれはいい。

どれだけ嫌なやつでも客は客だ。

ただそいつの雰囲気は、いつものそれと違うような気がする。

第一印象としては、人を食ったような性格だと思っていた。

それが今はどうだろう。まるで場末の飲み屋で酒を煽る中年のようだ。

「おい、その陰気なのやめてくれないか。他のお客様の迷惑になる」

「よう恭也君。やっぱり陰気に見える? いやあ、もうどこら辺で失

敗したかなあと思ってき。確かに押し付けがましかつたとは思うんだけど、やつぱ浮かれてたのかなあ」

約束守ってればなあ、とか意味のわからないぼやきを呟いて七海八雲は机に崩れ落ちた。

めんどくさい。

「なんだ、押し付けがましいってのは。まかさ、八神さんと喧嘩でもしたのか」

突っ伏したままの八雲が、ぴくりと体を揺らす。

どうやら凶星らしい。

それにしても、この2人はそれなりに上手くやっていると思っただが。

まさか喧嘩1つで、ここまでこの男が弱くとは思っていなかった。

「さっさと謝って来い。それが一番手っ取り早い」

「謝る内容で迷ってるからこうしてんだよ」

姿勢はそのままに、顔だけがこちらを向く。

困ったように笑っているが、誰だこいつ。

俺の知っている七海八雲という人物は、こんな弱々しい顔をするやつだったろうか。

「実はちゃんとした喧嘩とか、したことないんだよね。参考までに、なのはと喧嘩したらどうしてる？」

「お互いに話し合って謝るだけだが」

それが難しいんだよなあ、と八雲は再び顔を伏せる。

ホントに誰だこいつは。

最初からこんな風だったなら、もしかすると犬猿の仲にならなかったかもしれない。

あくまで可能性の話だが。

「めんどくさいやつだな。体を動かして気を紛らわせてきたらどうだ」

「恭也君と殴り合ったら俺の顔面が凹むじゃないですかやだー」

「誰が付き合うとிட்டた」

それもそうかとあっさり引き下がって、コーヒーを一口。

更にふうと息を吐いて、八雲は頬杖をついた。

どこかぼうつとした風に空中を見つめて停止し、これはもう相当な重症らしい。

ため息を吐きたいのはこちらのほうだ。

「……もういい、わかった。話を聞いてやるから言ってみろ」

そうして俺は対面の席へ。

眉根を寄せて困惑するくらいなら、初めからそういう態度をとらないでくれ。

「今回だけだ」

「ははっ、ツンデレ乙」

とりあえず、問答無用で一発殴っておく。

右の頬に痣があるから、俺は左側へだ。

これでバランスもよくなっただろう。

333事は強引グマイウエイを以って成る

恭也君にいろいろ愚痴ったあと、お礼に素敵な歌を教えてあげたら全力で追い出された。

最近の俺、なんか追い出されるの多くない？

「なにが気に入らなかつたかなあ」

覚えやすいし、個人的にはリズムが好きなんだけど。

ツンツンデレツンデレツンツン。

「どうせ、アンタが喧嘩売ったんでしょ。だいたい、なんで私にそれを言うわけ？」

「いや、元祖さん的にはどうかかなと思って」

ふっざけんな！ と叫びながら、恐ろしいほど鋭い正拳を放つアリサ・ツンデレ・バニングス。

とても痛い。

ここら界限の人間が、異様に戦闘力高めなのはなんでだろうか。

もしかしなくても、戦闘民族効果だろうな。

そんで、遠くない未来で戦闘力のインフレが起こると。

なにが言いたいかって？

ハハッ、そんなの決まってるじゃん。

俺オワタ……

「まったく……それで、広い場所を探してるんでしょ？ 別に庭は貸したげるけど、この車がなんなのかくらい説明しなさいよね」

「ツンデレおづぼがあ」

吐く。

そろそろ、胃の中にあるフルーチェっぽい物が出ちゃう……

謎の白い液体まみれにされなくなかったら、もうちよい加減を考えてください。

「翠屋の前で黄昏てるから助けてやったのに、ホントいい度胸よね」

「よし待て、もうグーはやめろ!! いやパーならいいって問題でもないけどね!?!」

そこで張り手選択する小学生ってどんなだよ！

「言う、言うから!! 自力で修理を条件に、廃車を安くで買っただけ! 翠屋にいたのは、なのはの知り合いに広い場所を提供してくれるやつがいたから。まあ、追い出されたんだけどさ……」

なんでも、ユーノとかいうフェレット人間がいるらしい。人間なのかペットなのかよくわからないが、少し前の事件で結界を張りまくっていたのがそいつだ。

サーチャーを走らせて、まだこっちにいるのも確認済み。

そして、使えるものはとりあえず使おうと思った結果がこれだよ。結界張ってもらって、スペースの確保がしたいだけだったんだけどなあ。

どうしてそれが、ツンデレ幼女に土下座なんてことになったんだ。

「解せぬ」

「なんか言った?」

いいえなにも。

「まあ、せいぜいはやてのご機嫌を取りなさい。あんたが黙っていなくなつたから、かなり怒つてたわよ」

「それなら大丈夫だ。もう逆鱗に触れてきたから」

今日は帰れないな、たぶん。

あと、わかつてるからそのゴミを見るような目やめてくれませんかね。

「バカだバカだとは思ってたけど……」

「おう、死体蹴るのやめろや」

いや、まだだ。まだ終わらんよ!

人生の勝ち組が、戦力の決定的差だよどうしようどうしよう……

まあ、もともと謝り方のプランなんて欠片もないんですけどね、白目。

「修理してドライブに誘うとか、そのためじゃないってこと?」

「これは俺の純粋な足として……すげえ、俺なんでか幼女にとんでもない目で見下されてるんですけど」

やばい、なんかゾクゾクする……じゃなくてだ。

ウーゴといいツンデレといい、俺をなにも目覚めさせるつもりだ

よ。

あれ、今なんか違うの混じってなかったか？

……気のせいかな。

「とりあえず、ご機嫌うかがいは置いてだ。1週間くらい置きっぱなしになるけど、本当に大丈夫なのか？」

「ハア……いいわよ。今さらダメなんて言わないから安心なさい」

「そいつは助かる。ただでさえ、もろもろの費用で足が出るからな場所代の節約は死活問題だった」

やっぱお金って大事だわ。

お金で買えないはあるかもしれないけど、ぶっちゃけ無いと困る物だし。

まあ、どう言ってみたところで無いものは無い。仕方ないね。

「同情するなら金をくれ！」

「なんも言っていないでしょうが!!」

再び、拳が俺の鳩尾を抉る。

この子、俺をサンドバックかなにかと勘違いしてやしないだろうか。

というか、そろそろ真剣に臓物とかブチ撒けそうなんですけどそれは

……

略してマジハラね。

「どうも、俺の周りは冗談が通じないやつ多い希ガス……」

「アンタがTPOをわきまえて発言しないからでしょ」

まさか、小学生にそんな正論浴びせかけられるとは。たまげたなあ。

「で、見た目は特になんともなさそうだけど。どこが壊れてるのよ、これ」

「動力周りかな。エンジンとかエンジンとかエジソンとか」

「……おじさんが走って発電してるとこ想像しちやっただじゃない、どうしてくれるのよ」

いや、半笑でそんなこと言われても困るわ。

しかも、回し車にオッサン乗つけて全力疾走とか。もはや虐待以外

のなにものでもねえよ。

「だいたい人力で車動かすとか。ちっちゃいオツサン何人連れてくりゃいいんだよ」

「……ちっさ……エジソ……ぷふっ……」

なんか変なツボに入ったようだ。

ああ、でもちっちゃいエジソン集団なら送電とか凄い効率になるかもしれない。

それこそ、頭の上に電球が光ってティンとくる感じの発想とかで解決しよう。

「まあ、せつかく車もあるんだから。はやてを助手席に乗せて、どっか連れてってあげなさい。それで仲直りできるわよ」

「えー、あれガチギレだったんだけど。そんなんで許してくれるか？」

「アンタが、あの子の我がままを全部聞いてあげればだけどね。丸1日、馬車馬のごとく働けば許してくれるわよ。きつと」

それはそれで覚悟がいきりそうな気がする。

にしても、今日は不思議な日だ。まさかダブルツンデレに慰められようとは。

アレか。もしかして、今の俺ってそんなに弱って見えるのかな？

「これは小動物系なんたらで売っていける予感！」

「普通に気持ち悪いわね」

「俺のライフはもうゼロよ……」

容赦なさすぎワロエナイ。

現代っ子マジ怖い……

「さて、じゃあ適度に戯れたんで作業を始めていこうかな」

「今さら大人ぶられても……」

聞こえなーい、なんにも聞こえなーい。

うわあ、エンジンルームが真っ黒だあ。バッテリーも……え、死んでる？

よし待て、ラジエーターが……空っぽじゃねえか喧嘩売ってんのか!!

†

結局、業者に連絡をつけたら「長いこと放置してたんで、てへぺろ」

とか言い出しやがった。

ちよつとイラツとしたから、寿司とピザを10人前ずつ注文して送りつけておく。

1人でレッツパティーしてればいいよ、マジで。

「あー……う、ん？　もうこれ大改造のレベルだな」

欠けたギアに折れたピストン、ベルトも磨耗してるしバッテリーもダメだった。

オイルの交換とラジエータの掃除に給水と……

エンジンは載せ変えよう。その方が早い。

これでまだ、肝心の魔力炉も見ないとだめなんだろう？

作業量ががが。

「シャフトとかステアリングとか、根本的な構造が無事だったのは奇跡か。まあ、油差さないと怖すぎるけど」

おうふ、ブレーキオイルが……これは酷い。

とりあえず、全面修理はここじゃ無理だ。

その辺りは一旦諦めて、これから必要になる魔力炉の周りだけさつさと直してしまおう。

で、修理計画を立てると同時にスカリエッティにもメールを送っておく。

必要な機材なんかを、守銭奴経由で転送してもらうためだ。

この辺りは、後日の職場復帰を交換条件にしてあるから存分に使わせてもらう。問題があるとすれば、バニングス家の関係者に見られないよう注意するくらいか。

今はツンデレちゃんも屋敷に戻ったので、遠慮なく空間モニターを開いているが。

「魔力炉の設計図が全然違うやつなんです……あの野郎、車が直つたらルーフに括り付けてカーアクションしてやろうか」

これは構造解析からやらないとダメっぽいな。

スカリエッティに、その手の機材も送るよう追加でメールを書いておく。

ついでに、ザルな仕事した馬鹿からは安価で車の部品をせしめよう

そうしよう。

「これは思ったよりも時間かかるな」

ってことは、こつちよりも先にもう1つの方へ着手しとこうかな。

どうせ時間が必要な内容ではあるし、今のうちにやっとかないと間に合わないって可能性も微レ存だ。

『つうわけで、シグナムさん闇の書持って来てくれない？』

『お前の唐突さには毎回驚かされるな』

そもそも昼前によく帰ってきて、主と喧嘩していたと思ったら、そのまま外出とはどういうことだ！ と闇の書を持ってきたシグナムに軽く説教されてしまった。

まあ、ごもつともですわ。

俺の1日どろり濃厚。

「とりあえず、言われて通り持ってきたが。なにをするつもりだ、なんだその車は、どこだここは」

「質問の多い守護騎士だなあ」

「塩を振ってシャマルに調理されたいか？」

「ちよつとスライムに転職はしたくないな……」

なら話せと言われたので、車と場所については短く説明しておく。

ここから先は、結界を張ってもらってからだ。

「こういうのはシャマルの分野だ。次からはそつちに頼んでくれ」

「おっけ、そうする。んで、本題なんだけど。とりあえず、闇の書で俺のリンカーコアを収集してくれる？」

理由としては、闇の書の管制人格と話しがしたいこと。

1度収集したリンカーコアを、再び取り込むことはできないらしいこと。

治療のためには闇の書へアクセスする必要があるも、根本的に稼働率不足であること。

手始めにこの辺を解消させる必要があるから、俺のリンカーコアを

……あれ、シグナムさん？

「腹ペコき——ひい!!」

いつの間にか顕現したレヴァンティンで、危うく足を串刺しにされ

そうになった。

シエラスコとか、そういうのは食用のをお願いします!!

「……貴様、正気か？」

「いや、なにも死ぬまで引っこ抜けて言ってるんじゃないよ？ 最低出力でいいから、闇の書のスリープモードを解除したいだけだからね？」

これを気に亡き者、とか考えられてたらどうしようか。

それに、これは今のうちにやっておかないと間に合わないというものもある。

リンカーコアを差し出せる人間が、この世界では圧倒的に少ない。知っている範囲だと、俺となのはとフェレットもどきくらいか。

もちろん、探し出せば資質を持った人物を見つけることも可能だろう。だが、手間も暇もかかりすぎる。

魔法生命体である守護騎士たちは、リンカーコア抜くなんて自殺行為もいとこなんで論外だし。

「きつと、はやては他人に迷惑をかけたがらないだろ。その点、俺なら問題ない」

そういえば、なのはが魔法関係者って知らないんじゃないかな。

本人から口止めもされてるし、言わないほうがいいかもしれない。

守護騎士たちにはモロバレだけど、自発的に気付いたんだからノーカンで。

「また、主は怒るんじゃないか？」

「お前らが優先して考えるべきは、俺とはやての関係じゃなくて主の安全と安息だろ？ じゃあ、俺が宿無しになるかどうかの心配は端に置いてけよ」

「いやしかし……」

「いいから、死なない程度にさっさとやってくれ。それが嫌なら、対案でも持ってこい」

それでもまだ渋るシグナムを、YOU！ やっちゃいなYO！ とか言いつつ煽りまくる。

日も傾き始めた夕暮れ時、果たして俺はなにをしてるんだろうかと

疑問を持ってしまった瞬間だった。

34 隠してなかったけど見るるはなし・上

リンカーコアというのは、魔道師にとって生命線というか第二の心臓というか。

まあ、有体に言ってしまったえば『とつても大事なもの』ということになる。

これを失うということは、つまり魔法が使えなくなるということの意味する。

体は重くなり、今まで当たり前前にできていたことができなくなる恐怖は計り知れない。

そして、闇の書が有する『収集』という機能はこれを実行するためのものだ。

魔道師がこれまで積み重ねてきたものを、容易く蹴り崩す悪魔の象徴。そんなイメージがしっくりきてしまう。

「あー、やつべー。なんもしたくねえ。これきつと五月病だわー。マジで、つべーなあ」

無言でザフィーラに頭を齧られた。

すいません、反省するんでオレオマエマルカジリススタイルはやめてもら痛い痛い痛い！

テメエ、俺のエクセレントな脳みそ噛み砕くつもりか!!

「エクセレント? エキセントリックの間違いじゃないか?」

「最近、ペットからの当たりがきつくて辛い……」

誰がペットだ、と言って再び顔面に食いつかれた。

すいませんすいませんもう言いませんから米神はらめええええええええええええ!!

「お前らが、俺ならなにしてもいいと思ってる気がしてきた」

「お前は殺しても死なんから大丈夫だ」

いつから俺は不死身の男になったんだろう。

奥さんの愚痴言ったり、司令官に猛アタックかけながら敵に突っ込めばいいのかな。

ああ、でもどつちもテロに巻き込まれるじゃないですかやだー。

「むしろ、テロリストはお前じゃないのか」

「おいこら、傭兵とテロリスト一緒にするんじゃないやねえ」

世の中には、ダンボール1つで全部解決する伝説の傭兵だっているんだぞ。

えっと……ほら、あのちよつと名前思い出せないけど。

「ああ、あれか」

「知っているのかザフィーラ」

「その発言も、伝説の傭兵も、激しくなにか違う気がするぞ」

こいつ。なんでゲーム内容はもちろん、とんでも塾の話まで知っているんだろう。

そりゃ俺だってはやての話題についていけるよう、この世界のネットワーク総ざらいしたけどさ。

よくわからん掲示板の、変なところで優しい不特定多数の手も借りたけどさ。

あれ、こいつはいったいどこでこんな知識を？

「それより、用事があるから起こせと言ったのはお前だ。作業があるのだろう？」

「ごもつともだけど、こちとらリンカーコアなくてダルいんだ。もうちよい優しくしてくれても、罰は当たらないと思うよ？」

「そういうのはシャマルにでも頼め」

俺の安らぎはどこだ。

いや、シャマルさんもご飯さえ作らなければ十分安置なんだけどなあ。

流石に、あんなの毎日胃に流し込まれたら穴が開くと思う。

あくまで、無理すれば食べられるレベルだからね！

「というか、そのシャマルさん待ちなんだけど。ちよつと今日は魔力炉の辺りとか触りたいし。管理外世界のやつらが見てわかるもんでもないと思うけど、念のために封時結界をだな」

「シャマルなら、どこかの馬鹿が原因で部屋に籠もりがちな主の様子を見に行っている。あとで現地へ行くように伝えておこう」

「言葉の端々に棘しか感じないんですがそれは……」

いいから行けと言われたので、今日は蹴り出される前に家を出る。
8月も終盤だが、夏の暑さはまだまだ続きそうだ。

それにしても、リンカーコアなくてダルいのは本当なんだけども
あ。

太陽の暑さと体の不調で、溶けるんじゃないかと思えてくる。

「こんにちはワン」

「は？ ああ、うん。こんにちは？ 車の修理で来たのよね。勝手に裏へ回ってちようだい」

「ありがとウサギ」

「……なに、アンタ。暑さで脳みそが溶けたの？」

「魔法の言葉で楽しい仲間が増えると聞いてたけど、どうやらガセだったらしいな」

「ちよつと、本気で沸騰してるんじゃないの？」

誰の頭がポポポポ〜んだ。喧嘩売ってんのかツンデレ！

「おかしいわね。どう聞いても喧嘩を売られたのってアタシじゃない？」

「すまん、ちよこつと八つ当たり気味だった」

「アンタが素直なのって、びっくりするくらい気持ち悪いわね」

アリサ・ツンデレの中で、俺の評価はどうなっているのか。

いや、深くは考えまい。

しっしと手で追い払われつつ、さっさと行きなさいと言われたので一応礼だけは言っておく。

ぐるりと巨大な屋敷を迂回すれば、これまた広大な庭がこんにちはだ。

アウデイR8から少し離れたところでは、複数の犬が自由に駆け回っている。

「ホント、お金持ちの家って想像を絶するものがあるよね」

だってお前、森まで付いてるんだぞこの家。

いや、森が付いているって意味が既に俺の理解を軽く超えてるからわけわかんないんだけどさ。

「一瞬、座標ってここであってるのか不安になりましたよ？」

「合ってるから困るんだよなあ。あつ、シヤマルさん来てたんだ」

え、気付いてたから話しかけてきたんじゃない!? と軽く驚愕されてしまった。

ただの独り言ですけどなにか？

おい、その寂しいやつって表情やめろ。

「とりあえず、封時結界を頼みます。維持ができるなら、そのまま帰ってくれてもおつけーだから」

「それはかまいませんけど、絶対に必要なんですか？ 確か、近くに他の魔道師もいましたよね？」

ん？ ああ、なのはのことかな？

小規模なら気付かれないと思うし、なにより犯人は俺だと思っじやないかな。

乗り込んできても、今は敵対してないから見逃してくれそう？

ただ壊れたものの修理してるだけだし。

「まあ、それならいいんですけど。くれぐれも、闇の書とはやてちゃんのこととは黙ってるんですよ？」

「あれれ〜おかしいぞ〜。既に俺が捕まる前提で話しが進んでるのは気のせいかな？」

につこり笑顔で誤魔化して、シヤマルさんはさっさと結界を張ってしまう。

俺を内部に取り込み、自分は外へ退避したのだろう。

目の前から彼女は消えうせ、世界は通常時空からちよつとズレた場所に移動した。

ははは、やりおる。

「逃げ方の手口が鮮やかになってませんかね？」

まったく、誰の影響だろうね。

そんな愚痴をこぼしながら、ルービツクキューブみたいなビーコンを起動する。

これで守銭奴を通じ、スカリエツティに頼んでいたものが届けられるだろう。

足元に展開される特殊な魔法陣。

次々に転送されてくる、構造解析やら大型工具やらの機材たち。

背後から2人分の悲鳴も付いてきて、これで準備は完了……完了？

「この流れで、聞こえるはずもない女の子の悲鳴……なるほど、ホラーだなー！」

「そんなわけあるか!!」

不意に襲い来るドロップキック。

背骨から凄い音がしたような気もするけど、これもご愛嬌か。

襲撃者の正体なんて、わざわざ振り返るまでもない。

こんな華麗に俺を痛めつけられる人間なんて……いかん、ごまんといるわ。

「だ、大丈夫ですか？」

「よお、久しぶりすずかちゃん。今日も可愛いねぺろぺろし痛い痛いその四の字ダメな入り方してるから待ってええええ!!」

タップ！ タップするから!!

「反省の色が見えない、続行ね」

「あ、アリサちゃん……」

そこからしばらく極められ続け、すずかの説得でようやく解放してもらえる運びとなった。

足が、膝が、腰骨が……

「この状況の説明をしないで。そうすれば許してあげるわ」

「……数分前まではお前らのように歩いていたのだが、膝に四の字を食らってしまったな」

「立てないなら素直にそう言いましょうよ……」

微妙な顔のすずかに代わり、アリサの乱暴なローキックで強制的に立ち上がらされる。

この幼女怖いお……

「ここはなんなの？ 光つてるところから色々出てきたのはなんで！

さあ、答えなさい!!」

「うーん、どうやって誤魔化そうかな」

黙って拳が握られたので、音速の土下座というものを披露しておく。

頭を踏まれた。あれ？ デジャブ？

「よし落ち着け、まずは深呼吸だ。ほらひっひっふー」

「……仏の顔も3度までって言葉、知ってるわよね？」

うつつ。正直に話すんで、頭に全体重のつけるのやめてもらっていいですかね？

これまたすずかの説得によって解放された俺は、2人を正面に座らせて考える。

どこまで話して大丈夫かなあ。

「宇宙世紀0079年……ごめんなさい冗談です。実は俺、魔法使いなんだよね！ あと10年もすれば賢者にジョブチェンジするけど」「いい加減、本気で殴るわよ」

「ホントだもん！ 本当に魔法使いなんだもん！ ウソじゃないもん！」

問答無用で顔面に拳が突き刺さる。超痛い。

意識の遠いところで、誰かが「ヤークモちゃーん！」と呼んでいる気がした。誰だお前!?

「いろいろ容赦ねえなあ。万が一にも、マジカルヤクモンって可能性を考えようぜ」

「えっ、でも今自分で万が一って……」

すずかがいいところに気付いてしまったことで、追撃のエルボーが炸裂した。

将来、アリサの彼氏になるやつは真性のドMに違いない。

少なくとも、俺より頑丈なのは確かだろう。

それにしても、どうしたもんか。

「一応、嘘とか冗談抜きで魔法使いなんだけど。悪い、今ちよつと証明ができないから凄めの手品師だと思ってくれない？」

「詐欺師なら一発で納得してあげるわよ」

「マジで？ 俺、詐欺師になれそう!？」

「なんでそこに喜んでるんですか……」

いや、傭兵なんて危険な職業辞められるかなって。

ホイホイ辞められるものでもないから、無理なのはわかってるけど

さ。

あーあ、できるもんなら俺も神殿でお手軽に転職してえなあ。

「あの、魔法使いって言ってましたけど。本当なんですか？」

「嘘は言ってない。現に周りの風景がおかしいだろ？俺としては、なんでお前らが結界の中に入れたのが疑問だな」

可能性としては、こいつらも実は魔法適正があるとかだろうか。

なのはがあれなんだ。

ねーよ、とは一概に言えないから困る。

個人的には、もうこれ以上の面倒は御免だが。

「そうだなあ。あと証拠になりそうなのは……魔力炉？聞いて驚けて見て笑え！これがたまたま拾った俺の秘密兵器！」

「動いてないわね」

「動いてませんね」

そーですね。

ツーシートのアウディR8は、座席の後ろが丸々魔力炉の設置場所になっている。

せっかくそこを開いてやったのに、こいつらの反応ときたら。

いや、見てわかったらこいつら天才なだけどさ。

「ところで、俺はお前らに魔法使いがバレないようにと結界を張ったわけだが」

「自分からバラしてりや世話ないわね」

「あ、あはは……」

あれれ、おかしいぞ……

35 隠してなかったけど見るるはなし・下

身バレしてから数週間。

もう、いろいろ開き直って結界無しの作業を今日も続ける。

バニングス家の執事さん辺りは、いつの間にか運び込まれた機材に眉を寄せていたが。

誤魔化すのは俺の仕事じゃない。

がながれアリサ。

「んー、配線がごちやごちやしてやがる。もうちよいメンテのこと考えて作れよな」

「あのヤクモさん。部品磨き終わりました」

「おうありがと」

敷かれたブルーシートいっぱいに置かれた車の部品たち。そのどれもがピカピカに磨かれてある。

これらは、ここ数日でアリサとすずかがやってのけた功績だ。

いやもう正直びっくりだよ。女の子って、こういうの苦手だと思ってたから。

あつ、守護騎士の女傑たちは別枠ね。

「私、機械とか触るのが好きなんです。将来は理工系の学校へ行きたくて」

「なんか、小学生が『野球選手になりたい!』とか言ってるレベルじゃない将来設計が見えるな」

はやてにしてもそうだけど、最近の子供ってこんななか？

好きなことやりたいのはいいとして、現実味ってやつがあふれ過ぎてやしませんかね。

「あんまり危ないものは触るなよ? あと、磨いてもらって悪いんだけど車体に手を付けるのもっと後なんだ」

この間の件で業者に文句を言ったら、即行で各種部品なんかを送りつけられてきた。

しかも、おまけに定型文の謝罪手紙付きで。

リカバリーの速さは評価するけど、かなり腹が立つのはなぜだろ

う。

「あの。設計図とかで指示してもらえれば、細かい部分は組み立てられますよ?」

「うそん……お前はホントに小学生か?」

いやまあ、実際にやってみたらできませんでしたってパターンもあるか。

よし、やらせてみよう。

これで出来なかつたら、そつと横から俺が助言をやるわけだ。

その的確さに惚れたすずかが、キヤー素敵! 抱いて! とうろなる……なつたらどうだって言うんだ俺!

落ち着け、相手は小学生!!

「わあ、エンジンルームの構造つてこうなってるんですね。冷却水槽がここだから、ラジエータと繋ぎ合せがこうですか」

「……そう思ってた時期が、俺にもありました……」

不安そうに、ごめんなさい。どこが間違ってますか? と聞かれたので、全部合ってますと答えておく。

最近の小学生つて、設計図見て車の組み立てできんの? マジか!

マジか!!

「才能の格差社会を感じるよね」

「なに?ごちやごちや言ってるのよ」

不意に後ろからアリサの声が来る。

どうやら、今日もお家への言い訳は済んだらしい。

「次から次へと物を増やされて、こっちはたまったもんじやないわ」
「安請け合いました過去の自分を呪ってくれ」

軽口に対し、いい笑顔とボディブローを貰った所で作業を再開。フロントのエンジン周りはアリサとすずかの好きにさせよう。

どうせ、後で俺がチェックするんだし。

重いエンジンとギアには触れないよう嚴重注意して、俺は後部の魔力炉だ。

「しかし、わかっちゃいたが改造が凄いな」

アウディR8の修理にあたり、設計図を参照してわかったことだ

が。こいつのは本来、エンジンが後部についているはずの車だ。レースカーのテクノロジーが組み込まれている上に、とんでもない高級車である。

カタログを見たときは元が高級車という情報しかなかったけど、蓋を開けてみればこれだよ。

誰だ、こんな車に魔改造施した馬鹿。

「どう考えても、魔力炉を載せるのに邪魔だからエンジンをフロントに持ってたってことだよなこれ。車体バランスガン無視とはいい度胸だ」

もうやだ。

この世界の住民って、実は右から左までトチ狂ってるんじゃないかな。

いやごめん。この世界じゃなくても、頭のネジが残らず吹っ飛んだ狂気のマッドサイエンティストがいたわ。

とりあえず、文句を言っても始まらない。

車体は恐ろしく軽いので、フロントのエンジンとリアの魔力炉でバランスを取るしかないだろう。

前か後ろが重過ぎて、曲がるごとにスピンの恐怖と戦うのは嫌過ぎる。

なお、これは完全に余談なのだが。フロントにエンジンが載っているといことは、そこにあったはずの収納が死んでいるということだ。なんのことって、荷物を積み込む場所どこだよって話だよな。

旅行？ なにそれ美味しいの？

†

どうも、魔力炉を作ろうとした前任者は独学で作業を行っていたらしい。

機構はむちゃくちゃだし、無駄な配線は多いしで。挙句の果てには、未完成の物体だということも発覚した。

これももう修理っていうか改修じゃないかなあ、なんて思いながらも進捗具合は良好である。

まだまだ問題は多いが、この調子なら9月の後半くらいまでにな

んとかなるだろう。

はやての件に関しては、もろもろの手回しも込みで11月くらいに
縛れこむかもしれない。

微妙なラインだなあ。

どっちにしろ、俺のリンカーコアが回復しないと詰むんだけど。

闇の書が吸い出したページ数は1ページと少し。これくらいなら、
言ってる間に復活しそうな気はする。

……いや、決して俺の魔力量が悲しいことになってるとかそういう
アレじゃないんであって西から昇ったお日さまが東へ沈むあつ大変
なんてことはないんです。

察しろください……

「で、なんで今日ここに来たのかって言うのだな。すまん、俺が魔道師
だってアリサとすずかにバレちゃった」

てへどろ。

「そ、そんな!?!」

なのはの顔が、みるみる青くなっていく。

ちよつともちつけ。身バレしたのは俺だけで、お前も魔道師だとは
言っていないから。

「まあ、俺も魔法を使って見せたとかじゃないから。半信半疑くらい
だとは思うけどな」

バレたくないなら、リアクションとかに気をつけるよう言い含めて
おく。

でだ、本題はそこじゃない。

こちらら、恭也に睨まれるのを承知でわざわざ翠屋まで来ているん
だ。

まさか、そんな報告をするためだけに来るわけないじゃないですか
やだー。

「2人をこつそりスキャンして、リンカーコアがないのは確認した。
そうやってくると、どうやって結界に侵入したのが気になる。思い
当たる節は?」

「……いえ、特には」

あれ、そうなの？

てつきりなのはが警備用サーチャーとか2人につけてて、それが干渉したのかと思っただけだ。

え、違う？

ストーリーカーと一緒にするな？

おい待て、それじゃあはやてに監視用サーチャーつけてる俺はどうなるってんだ。

「は、はやてちゃんにそんなことしてたんですか!？」

「おっと、思ったよりもリアクションが大きいぞ？」

もしかして、本格的にダメなやつだっただろうか。

知らないうちに、また新たな犯罪行為へ手を染めていたとでも？

ハハッ、流石は俺。なぜか警察のブラックリストに登録されているだけはある。

ホントまさか無意識でやらかしてしまうとは、たまげたなあ。

「ヤクモさんって、ストーリーカーさんだったんですか？」

「違う。いやホントに違うから、ちよつと椅子を放すのやめてもらってもいいですかね？」

大丈夫です、私信じてますから！ と欠片も信用してなさそうな表情のなのはに言われた。死にたい。

「……とりあえず、心配ならアリサとすずかに関しては調べとけよ。ここが管理外世界だからって、魔法と無縁ってわけじゃないんだ。どっから事故に繋がるかわかったもんじやないからな」

例えば、どこかの馬鹿が戦闘時に隔離結界とか張ってそれに巻き込まれるとか。

隔離したはいいけど、相手が思ったよりも強くて戦闘が派手になるとか。

あまつさえ、そいつを取り逃がしたら2人の方に直進しちゃったとか？

「おい、なんで目を逸らした」

「ユーノ君には聞かせられないなあ、と思つて……」

「どういうことだつてばよ。まあいいけど。いくら非殺傷設定の魔法

でも、一般人が直撃したら大怪我もんだ。都合よく魔法適正があつて、デバイスが降つて湧くわけ……なんなの？ 実は後ろ暗いこともあんの？」

いえ、別にとかなのはは言ってるけど。じゃあこっち見ろよ！

!!
お前の兄貴ですら、汚物を見るような目をこっちに向けてるんだぞ

「恭也君の妹って、実は反抗期入つてたりする？」

「膝の関節を明後日の方向に砕くぞ変質者」

ああん、ひどうい！

というか、曲げるんじゃないやなくて砕くのか。

なんでこう、高町家の思考回路はえぐい方に天元突破しちゃうかな。

飽和魔力かき集めて地球破壊ビームとか、狂気の波動に目覚めた父親とか、将来有望すぎて心配になるレベルの兄とか。

この店だけで、世界ビツクリ人間博覧会ができそうだ。

「なるほど、遺言は聞いておこう」

「そもそも給仕するふりして、後ろをうろろしてたシスコンがうわなにするやめ!?!」

ギブギブ！

違うわギブミーじゃねえよ、ギブアップの方に決まってる!!

男の照れ隠しとか欠片も可愛くねえから、今すぐ首に入ってるスリーパーホールド外してもらつていいですかね!?!

「いぎ、いぎが……川の向こうで、誰かが手を振つて」

「そのまま向こう岸まで渡れ！ 今すぐ!!」

「お、お兄ちゃんもうダメだよ！ なんかヤクモさんが、これまで見たことないくらい顔真っ赤にしてるから!!」

それ以上いけない。

あと、立場逆だから！ このままだと、俺が自由になつて救われちゃうから!!

「ぐ、か……ああ……ぬ、るぽ……」

「え、え？ えつと、えつと!?! あつ、ガッ！ ガッ!!」

なのはさん混乱しすぎワロタ。

というか、これははやての仕込みかな？

せっかく増やした友達を毒で染めるのはどうかと思うよ、俺。

遠くなる意識の中で、やたら白くて顔の長い2人組みを見た気がする。

『早く来て』

『あなた来れば』

『『星になる』』

なにかピースにした両手で凶形を作っているようだが、あれに混じるくらいなら川を渡ろう。

そう固く心に誓って、俺は意識を手放した。

36 雨降って泥沼と化す

残暑お見舞い申し上げます。

立秋とはいえ、連日の猛暑にいささか参っておりますが、リンカーコアさんはいかがお過ごしでしょうか。

本物の秋が待ち遠しい今日この頃、私どもの準備は着々と進行しております。完成の暁には、計画を最終段階へ移せることを今から楽しみにしております。

そろそろリンカーコアさんにもご協力いただけると助かりますね。

残暑厳しき折、どうぞご自愛くださりますようお願い申し上げます。

「なにやってんだテメエは」

「9月に入っても、はやてが相手してくれないから悲しくって」

形容しづらい表情のヴィータに、うぜえの一言で切って捨てられた。

心が折れそうだ……

八神家において、朝と晩は出来るだけみんなで食べるというハウスルールがある。

もちろん、俺がいるからってはやてがその決まりを破るわけがない。

見た目は楽しげにシグナムやシャマルやヴィータとお喋りしつつ、欠片もこつちを向いてくれないだけだ。

「意外と心因性の攻撃によわかつたんだな、俺」

「なんだよ、捨てられた犬みてえな顔しやがって。ザフィーラで間に合っつんどぞ」

とても腑に落ちていない表情のザフィーラが、こつちをガン見している。

ヴィータさん、発言に気をつけよう？

これ、なんも関係ないけど俺が噛まれるフラグだよ？

「はやての前で土下座でもして来い。そういうの得意だろ」

「まるで、俺がいつでも土下座してるみたいに言いやがって」

「実際、いつつもやってんだろ」

まあ、否定はしないけどね。

命乞いは大事だぞ。いきなりやったら、だいたいの相手は戸惑うからな。

あとは、その隙に逃げるだけで生存率が段違いだ。

卑怯？ なにそれ美味しいの。

「テメエがうじうじしてっと、こっちの調子が狂うだろ」

「たまに、実はヴィータってすげえいいやつに見えるから不思議だよな」

あれ、褒めたのになんでグラーフアイゼン？

そのまま、文字通り尻を叩かれるようにして2階へ追いやられる。

いざ行かん、はやての部屋。

とか言っ来てみたものの、さてどうしよう。

別にドアの前でヘタレてるとかじゃなくて、リアルに入れてくれるかなという心配の方だ。

今日までのガン無視っぷりは、びつくりするくらい徹底されてたからなあ。

自分が透明人間になって薄い本まで想像余裕でした。

「まあ、なんにしてもノックからだよな」

掴みは大切だ。出来るだけリズムミカルにやろう。

コンコッココッコン！

「雪だるまつくぶっ」

せめて最後までは言わせて欲しいなと思いつつ、急に開いたドアから顔を引き剥がす。

心の前に鼻が折れそうだな。

いや、ここはそうじゃないか。

少しも痛くないわ、よしこれだ。

「一応言っておくが、主の許可を得てやっている」

「ああ、シグナムもいたのか。そういえば、下にいなかったね」

シャマルはザフィーラ連れて買い物だっけ。さつき傷薬頼んどけばよかった。

どこに行ったかわからない猫共も、あとで探して釘だけは刺しとこう。

俺はどつき芸のボケ担当じゃないんだぞ？ 大丈夫だ、知ってる。ああなるほど、知っててやってんのか！

そんな感じのやり取りを手短に済ませ、入れ替わりではやての部屋へ。

中ではベッドに座り、闇の書を抱えながらこちらを剣呑な目で睨む幼女が1人。倍くらい俺の方が年上なのに超怖え。

「ハローはやて」

「ファツキンヤクモさん」

女の子がとんでもないこと言ってる!?

「流石にそれはどうかと思うよ俺」

「せやったら、今すぐ出てってくれへん？ それで平和になるさかい」

取り付く島もないんですけど。

やばいよばやいよ！ いや、言ってる場合じゃないな。

「今からちよつぴり真面目な話をする。はやての足に関する話な」

「……………」

「ノーリアクションだけど、話は聞いてくれそうで安心したよ」

ぶつちやけ、まったく聞いてくれない可能性も視野に入れたからね。

それに比べたら、多少はマシな反応ってところか。

「あと1カ月ちよつとで準備が終わる。たぶん1-1月前後くらい。はやての足が動かない原因は、闇の書からの過剰負荷が原因だ。だから、それを取り除くためにいろいろやることになる」

「……………いっつも『いろいろ』で誤魔化し取るけど、具体的になにをするんか教えてくれへん」

「んー、詳しく説明するとややこしんだけど……………はやてと闇の書のリンクを切り離して、仮想人格を形成する。闇の書には、そいつが主だと誤認させるんだ。そんで、そのまま封印。闇の書の管制人格とこれから話し合うけど、守護騎士たちもたぶん切り離せるだろ。ただし、その場合ははやての使い魔としてリンクを作るから負担は減らないん

だけど。少なくとも身体に障害が出るほどじゃないから頑張れとしか?」

てきとうやなあ。そーですわね! と返したら、いいともー! という掛け声つきで闇の書が顔面を強襲した。

投擲武器にされて、心なしか闇の書も不服そうだ。

あと、俺の鼻もそろそろギプスが必要かもしれない。

「名目は仲直り、実際の目的は闇の書ってところやろ?」

「最近、はやての慧眼っぷりに戦慄を覚えるんだけど。もうちよつと小学生やつてくれない?」

「いたいけな子供になに言うてんのや。ヤクモさんこそ、もうちよい子供心とか考えたらどうや?」

もう発言からして、いたいけとは程遠い気がしてくるのはどうしてだろう。

ついでに、いろいろ見透かされてるような気がしないでもない。

いや、まあバレてるからってはやてに止める手段はないだろうけどね。

守護騎士たちも、今回のことに関しては一時的に俺の味方だ。

目の前にぶら下がっている『はやてを助ける方法』に、あいつらが食いつかないわけもない。

「前に言ったかもしれないけど、ヤクモさんは勝手すぎやわ。私のことは考えてくれても、私の都合までは考えてへんやろ」

「んー……まあ、否定はしないな。俺はそもそも小悪党で、人の正しい助け方なんて知らないから」

俺の手にある闇の書へ視線を落としてから、睨むような熱視線をばやてが向けてくる。

もしかすると、冗談だと取られたのだろうか。しかし、これはまぎれもない事実というやつだ。

根本的に、救おうと思ったことが稀である。

利害の一致か利益の天秤か、そうしたもので判断した人助けが数回程度だ。

これで漫画やアニメのように、格好よく救済とかできるわけもな

い。

「はやて、そもそも俺を誤解してないか？ 身分の偽造もするし、広域指名手配だってされてる。嘘だらけでどうしようもない屑ってのが、俺の正しい認識なんだが。その辺わかってる？」

「もちろんわかっつるよ。ついでに、たまたま道端で会った小学生の家に居候してまう変態さんやろ」

酷い言われようだが、いまいち否定できなくて困る。

あれ、俺ってロリコンだっけ？ 違うよね？ 違うよね!?

そう言えば、すずかの辺りでも変な感覚に捕われてた気がするけど……気のせい。きつとおそらくもしかするとたぶんだけど気のせいだと思う。

うん、大丈夫。俺はまだ大丈夫。あと10年は戦える。

「なにを言ったところで、ヤクモさんは今回のことを勝手に推し進めてまうんやろうなと思う。やから、私も1つ決めたことがあるんや」「もう既にいい予感がしないなあ。で、なにを決めたの?」

不意に、はやてが人差し指を俺に付きつけてきた。

ゆっくりな動きではあったが、その指先に気圧されて体が逃げてしまふ。

体の重心が後ろに偏っている事実には、内心では驚きを隠せない。

いつの間に、小学生の脅しでびびるくらい鈍っていたのだろうか。

そんなアホな。

「もし、今回のことが無事に済んだとして。将来的に、私はその管理局つてどこに就職しようかと思うわ」

「……その心は?」

「どうせ悪党や言うんなら、私が捕まえたるって話や。自分の手で天罰を与えたいってのもあるしなあ?」

あうあうあ、あうあうあ、それが俺の口癖。

あうあうあ、あうあうあ、ぶっちゃけ言葉にならないけど。

いざとなったら、やられるときややられるのー。

天罰!?! 嘘!?! マジ!?! マジで!?!

「それはまた……立派な志で?」

「手加減はせえへん。足さえ動くようになったら、地の果てまでも追い回したる。だってそれって私の愛やからな」

「おい、なんか撲殺が前提になってんの気のせいかな！」

せめて、生きた状態で確保してくれませんかね。

というか、はやての加入で管理局が過激派になる気がしてくる。

確かに無茶するときはあるけど、仮にも魔法に非殺傷設定を採用してる組織だ。

だから、もしあそこに就職するならばやても穏便に行こうぜ。

「……就職先に文句はいわんのやな」

「まあ、はやてなら入るのは余裕だろ。それに、今は命に関わるから俺も強行してるだけだ。お前の進路とか、足が治った後にまで口を出すつもりはない」

それじゃあ、ただの束縛系メンヘラ彼氏じゃないですかやだー。

流星に、そんな将来の芽を摘み取るようなアホらしいことはしないよ。

「ただまあ、もしそういう構図になったとしてだ。はやてに追いつめられちゃった。くやしい！ でも捕まっちゃう！ ビクンビクン、とはならないからよろしく」

まあ、どう考えても大人しく捕まってやる理由なんてない。

せいぜい、どつかで「あばよ、とつつあん」とでも言つてやろう。

「そんな余裕なくしたるわ」

「出来るもんならやってみろ」

はっはっはっ、とお互いに不敵で好戦的な笑みをぶつけ合う。

なんか方向性はおかしいが、元気になつてくれたのなら結果オーライってことでもいいのかな？

あと、結論から言うとはやてがガチで魔法覚えて守護騎士と一緒に追いかけてきたら、俺は間違いなく秒殺なんですすがそれは……

いや、大丈夫だ。なんとかする。

そのときまでに、なんとか対策とか考えとく。

え、先延ばし？

だからなんだっていうんですか!!

371 はや二なの三フエイト

なんてことない、いつも通りの昼下がりに。

本日の授業は体育で、みんな大好きドッジボールの時間だ。

現在ボールを持っているのは、敵チームのはやて。こちらは最終兵器月村を除けば、残っているのは俺だけだ。

あつちには、まだバニングスもテスタロッサも残っている。

なんとか動揺を誘いたところだ。

「ピッチャーびびってる、ハイハイハイ！」

「うるっさいわ!!」

渾身の勢いで放たれたボールが、綺麗に俺の顔面へと吸い込まれてくる。

ちよつと競技を間違えたくらいでこの仕打ち!

驚きの吸引力にダイソンも裸足で逃げ出しそうだ。

「顔面はセーフだけど、ちよつとすつきりしたわね。ナイスはやて!」

「おい、あそこのツンデレとんでもないこと言ってるぞ!!」

相手に暴言とか、レッドカードで退場させる!

え、レッドカードの前に俺が退場?

なんで……って、うわあつ、鼻血でてんじゃん!?

レッドはレッドでも、まさかの流血とか勘弁してください。

「誰か交代を選んで、お前はさっさと保健室へ行ってください」

「シグナム先生、加害者がはやてだからって揉み消そうとしてない?」

いや、そんなことはないって言うならこっち向いてくれませんかね。

どこ見てんの? 空が青い? 今日は曇ってますけど!

「いいから、さっさと交代選手を選べ」

「えー……じゃあ高町さんで」

「ど、どうしてここで私の名前がでるの!?!」

そりやお前、盾にすればテスタロッサが混乱するからだろ常考。

卑怯だなんてご冗談を、これも兵法ですよハイハイホー!

飛んでくる「サイッター！」とか「外道！」とかの黄色い声に手を振りつつ、保健室へ凱旋する。

これで鼻血さえ出してなかったら、もっと決まっていただろうに。残念だなあ。

とりあえず、上を向いて首の後ろをトントンしながら保健室へ向かう。

ドアを開けて「たのもー！」と踏み込めば、思ったよりも驚いたらしいシャマル先生に迎え入れられた。

次からは、もう少し静かに入って来なさいと釘まで刺される始末。俺のアイデンティティを奪おうとするなんて。それなら、次はダンボールをかぶることにしよう。

そんな俺の心中を知ってか知らずか、もしくはドパドパ出てる鼻血を気にしてかシャマル先生が治療魔法を鼻先にあててくれる。

あの、あたってるんですが。え……ああ、あててんのよ？ と呆れ気味に返してくれる辺り、やっぱりこの人はやての家族だなあ。

ついでだから、この暇な治療途中の雑談にグラウンドでの勇姿とか語ってみよう。

「相変わらず、ヤクモくんのメンタルって凄いわね」

「いやあ、まだ料理を諦めてない先生ほどじゃないです」

あははは、とお互いに笑顔が浮かんだところでこの話題は打ち切りだ。

どこことなく、シャマル先生の中からハイライトが消えた気がする。

これ以上はやばい。主に俺の生命的な意味で。

「えつと、新しい話題……話題……趣味は？」

「またヤクモが、脊髄反射でわけのわからないことを言ってる」

「あれ、テスタロツサ？ ドツヂボールは？」

振り向いた先で、ドアから金髪ツインテが顔だけ覗かせている。

どこか呆れの混じったジト目だが、概ねいつも通りなので大丈夫だろう。

グラウンドでは、参戦と同時に速攻で高町がアウトになった後、月村による無双が始まったらしい。

あえなく最初の犠牲者となったテスタロッサが、保健係ということもあつて俺の様子を見に来たようだ。

「例え今の高町を倒したとしても、いずれ第二、第三の高町が」

「なのはが凄いことになってるんだけど……」

「まあ、魔王的には間違つてないんじゃないかなつて」

「な、なのはは魔王じゃないよお」

「血は止まったから、そんなに元気なら2人とも授業に戻りなさい」

「あつ、ごめんなさいシヤマル先生」

「だが断る。だが断る!!」

「この人、なんで2回も言ったんだろう……」

重要なことだからさ！ とサムズアップしたら、真顔のテスタロッサに親指を掴まれてあらぬ方向へ折り曲げられてしまった。

痛い。

転校当初の遠慮がなくなったのはいいことだけど、ちよつとバイオレンスに走りすぎてないかな。

バニングスのプロレスとはやてのツツコミに加えて、フェイトのテロが恐ろしすぎる。

もう俺の体はボロボロよ！

「フェイトちゃん。痛めつけるんやったら、もうちよい見えへんところ選んでやらなあかんぞ？ 例えばボディとかな」

「はやてが今流行りの苛めっ子に！ これは学級崩壊の危機だな」

「ザフィーラが担任やし、ヤクモさえ生贄になれば平和なままやろ」

「とんでもない計画を聞いた気がするんですがそれは……」

冗談や冗談と流されたが、あんまり安心できないのはなぜだ。

あつ。でも肉体的に苛められてるのはいつも通り、なのか？

まあ、深く考えると引きこもりになりそうだからやめとこう。

どうせ引きこもっても、部屋のドアを蹴破られて学校へ連行されそうなのもするけど。

「はやてまでこっちに來たつてことは、月村の快進撃がとんでもないことになってそうだな」

「とんでもないどころか、1人に完封されてもうたよ。投げたはずの

ボールが、太極拳みたいな動きで投げ返されてくるんやで？ あれは悪夢やわ」

なにそれ怖い。

みんな人間の範疇で行動してほしいよね。

ただでさえ、このクラスは超人が多くてからかい甲斐があるっていうのに。

月村までネタを提供し始めたら、俺一人で捌ききれなくなりそう
だ。

「あんまり余計なこと考えとつたら、頭スコーンと割ってストローで
脳みそちゅーちゅーしたるからな」

「鼻の穴から割り箸突っ込まれて、下からカツコンされないだけマシ
かなと思う」

「え、それどつちもどつちなんじや……」

フェイトが頭と鼻を押さえ、いやいやと顔を振っている。

次のネタは鼻フックで決定か。付けるのは俺だろうけど。

「またよくないこと考えてるやろ」

「もう少し俺を信用してくれても、罰は当たらないと思うんだ」

「アホなこと言わんといってくれる？ そんなんやから、死んでしまっ
んやで」

「そうそう死んで………は？」

不意に辺りが暗転した。

保健室もシャマルもフェイトも、なにもかもが闇に飲み込まれて消
えていく。

そして、顔のパーツが全て欠落し、のっぺらぼうと化したはやてだ
け目の前に立っている。

まるで笑っているかのように、そいつは俺を指さした。

頭の中で誰かが叫ぶ。

危機を知らせるため、警鐘を鳴らす。

見下ろせば、腹から刃物が生えていた。

赤く滲んだ色に沈む、鉄の塊がずしりと重い。

視線を戻せば、のっぺらぼうがくつくつ笑っていた。

ほら見ろと。お似合いじゃないかと。目の前でのっぺらぼうがあげ笑っている。

おもむろに伸ばした手が届くはずもなく。そのまま目の前は真っ暗になり。

それでも誰かが、俺の手を掴んだ気がした。

†

「……ブハアッ!? ハア……ハア……何回目だこれ」

「今ので43回目だな」

動悸が激しい。

呼吸も荒く、肩が大きく上下している。

意識が朦朧として、しかし右手の感触だけは確かなものだ。

ひんやりとした誰かの手が心地いい。

「大丈夫か? 少し休め」

「いやあ、それがそうもいかないんだよなあ。予定よりも遅れてるから、むしろもう1回行ってくるわ」

それにしても、もうそんなに周回してるのか。

ご丁寧に、毎回違う風景を見せられている気がする。

闇の書の睡眠プログラムが優秀すぎるだろ。

「お前は、思ったよりも普通のことを願っているんだな」

「人の願望なんてそんなもんだ。自分が体験できなかったもしもは、いつだって眩しい気がするんだよ。まあ、俺の場合は庭がドドメ色で隣が青く見えすぎるってのもあるけど」

俺の話に、女が微妙な表情を浮かべる。

長い銀髪が栄える、赤目の女だ。

名前を聞いたら闇の書の管制人格とか言われたので、仮称漱石さんということにしておく。

吾輩は魔導書である。名前はまだない。

「あまり何度も繰り返すのはよくない。それに、復帰方法はあれでないとダメなのか?」

「別に、夢だつて気付けるトリガーならなんでもいいけど。ここ最近見た中で、一番きつついやつを再現してみた」

普段からどんな夢を見ているんだ。仮にも血と硝煙が似合う傭兵さんなんで、キリツ。

漱石ちゃんの見線が、少し冷たくなった希ガス。

いや、考えまい。

「そつちも、守護騎士プログラムの切り離しは順調？」

「現状、闇の書が吸収したのはお前のリンカーコアだけだ。稼働率が低すぎて手のつけられない領域も多いが、なんとかなるだろう。お前に夢を見せている間は、防御プログラムも少ない領域をそちらに割り当てているからな」

なんとか目は掻い潜れそうだ、と付け加える漱石さんはどこか安堵に包まれている。

はやてと守護騎士たち。とりあえず、その両方は救えそう嬉しいのだろう。

「当初の予定通り、俺は夢を周回しつつプログラムを打ち込んでやてのダミーを作る。お前も一緒に切り離せそうだけど、代わりに融合機としては終わったと思ってくれ。人格AIだけ抜き出すので精いっぱいだから、記憶も欠落も多少は覚悟しといてくれ」

「……守護騎士たちのことと、主はやてのことさえ覚えていれば十分だ。この先、私力が力になれないのは心苦しいがな」

欠落と言っても、サルベージできないほど古いベルカや転生時の記憶だけで済むはずだ。

まっさらになることはないし、少なくともはやてに関する記憶領域は新しいから心配ない。

むしろ、問題はどこに漱石さんを置くかだよな。

凄く嫌だけど、またスカリエッティを頼るか？

はやての精巧なダミーデータ作ったのもあいつだし、サイボーグくらい作れるだろ。たぶん。

「とりあえず、お前の人格は八神家のパソコンを増設して流し込むことにしよう。体はそのうちなんとかします」

「なにからなにまで済まないな」

「おいおい、それは言わない約束だろ？」

ぐつとサムズアップしてみせると、おもむろに漱石さんが親指を掴んであらぬ方向へと折り曲げた。

仮想世界だから痛くないけど、見た目があまりにショツキングすぎて思わず悲鳴を上げてしまう。

ちよ、ぎゃああああああ!!

「こういうのを願っているのかと思ったんだが」

「誰も指折り曲げてくださいますかと言ってみませんか!!」

憧れてるのは日常なの！ と叫んでみるが、漱石さんは首を傾げている。

おかしいな。俺が変なキャラ付けになってない？

38皮を切って肉を切られ、肉を切られて骨を砕く。
前

意識の浮上を感じて、重い瞼を持ち上げる。

見えるのは青。雲ひとつない晴天が、視界の端から端までを埋めていた。

知らない天井ってというか、天上ですね本当にありがたいがとうございませぬ。

ここまで言つといてなんだけど、我ながらアホっぽいなあ。
気にするだけ無駄かもしれないけど。

とりあえず体が重い。蒐集されたときほどじゃないけど、倦怠感がマジやばい。

あー、これ五月病だわー。このダルさは間違いなく五月病だわー。
……そろそろ、半年前の症状を言い訳にするのも苦しいか。

「みんな、大丈夫なんっ！」

不意に、足元の方からはやての聲が飛び込んでくる。
焦りと心配が混じり合った、半ば叫びに近い声だ。

知ってたけど、あんまりゆっくりしている時間はないらしい。

いくら最悪の状況を考えてたからって、なつてくれと言った覚えはないんだけど。

リアルラックとか俺にあるはずもなかった。

「俺の人生に苦行が多すぎて泣きたい」

そして、小声で呟いたはずなのにはやての首がぐるんどこつちを向いた。

こわっ！

ため息とか吐きたかったけど、これはやめといた方がいいかもしらん。

アツハイ。ハタラクマス。

まずはチェックね。右手に闇の書よーし。左側に、車から積み下ろした魔力炉よーし。

闇の書の表紙に、無理やりぶっ刺した端子は……もういいか。
ヘッドギアも脱いでしまおう。

しかし、ウーノ用の失敗作がここで役に立つとは。たまげたなあ。
伊達に俺のレアスキルがモデルじゃないね。再調整とつても楽でした。

「おー、やっぱり守護騎士も防御プログラムも動けなくなったか。無駄に漱石さんの人格データ多いからなあ」

しかも、各守護騎士の記憶領域に圧縮転送してるわけだし、負荷率がパナいことになってると思うんだよね。

いやあ、他に避難領域とかまったく思いつかなかったもんで。てへぺろ！

まあ、ただの処理落ちだよ処理落ち……あつ、はやてさんその目怖いです……

「び、びっくりするほどユートピア？」

「あとで白目剥くぐらいケツバツトしたるから覚悟しときや？」

「ちよつとプレイがハードすぎやしませんかね……」

骨盤が砕けそうなんですすががが。

無断でやったのがマズかったかな。

あれ、無断？ 確か守護騎士サイドには軽く説明したはずなのにな

あ、白目。

伝わってないなら仕方ないね。

俺は俺で、自分の仕事をしましょうか。

「どつこいしういち」

「緊張感とか、欠片も感じられへんのやけど。ほんまに大丈夫なんか？」

「ダイジョブダイジョブー、ヤクモを信じてー」

突き刺さる視線が、まるで「こいつホントに大丈夫なんだろうな」とでも言いたげだ。

はやてどころか、過負荷に耐えているシグナム、シャマル、ザフィーラもこつちを見ているから間違いないだろう。

どうしよう。とりあえず手を振るところか。

なんか、凄い絶望的な表情を向けられてしまった。解せぬ。

「はやて、足が治ったらやりたいことは？」

「ヤクモさんにタイキックやな」

「わあ、はやてちゃんこわーい」

けど、その殺る気だけは買ったちゃう。

マズじゃないけど、タイキックされる日を楽しみにしようじゃないか。

……幼女に蹴られるため頑張りますって色々ヤバくない？

「か、考えたら負けかなって思う!!」

ステイ、ステイ。深く考えるな、きつと闇に呑まれるから。

闇の書をはやてにパスし、魔力炉に蹴りの一喝を入れる。

低く唸るような起動音を聞きつつ、引つ張り出したコードをデバイスへ。

複製魔法でデバイスのコピーを作れば、擬似的な魔力バイパスの完成だ。

オリジナルは魔力炉から供給を受け、コピーはオリジナルから魔力を使用する。

俺が複製を維持する限り、煩わしい有線からも解放されることだろう。

「さあ、始めてみようか」

標的は、守護騎士たちに包囲されて立っっている闇の書の防御プログラム。

上半身だけは管制人格に似ているが、下半身がちよつと虫っぽい。アラクネと言われれば納得してしまいそうな外見で、不動の姿勢を保っている。

恐らく管制人格を引っこ抜かれたことで、プログラム内の命令順位を書きかえているのだろう。

たぶん、もうしばらくは動かないな。

待ってやる義理なんてどこにもないし。

「さあて、お勉強の時間だ。弱いやつが、どうやって卑怯に勝つか教えてやろう」

普段は連射できないけど、今日は大盤振る舞いだよ！

さあ、1発目の収束砲いってみようかーっ!!

「ヒヤッハー！汚物は消毒だー！」

なんとなく、はやての視線が痛い気がした。

†

眩い閃光が走り、続いて爆音が響く。

先ほどから、それが何度も繰り返されては無駄に終わる。

その事実にも重い頭を抱えながら、シグナムは思わず歯噛みしていた。

(頼まれたことも果たせないとは、不甲斐ない！)

閃光の正体は、魔力の収束砲である。

放っているのはヤクモで、着弾点にいるのが闇の書の闇だ。

敵はよく見知った管制人格と似た顔の、しかし似ても似付かない化け物。

魔力の充足率こそ最低だが、かなり厄介な相手であることに間違いない。

つい先ほどまで剣を交わして、シグナムはその事実を嫌と言うほど理解していた。

短いチャージ時間で、連打される高出力の魔力砲が飛ぶ。

ヤクモ曰く、レアスキルがあるから出来る芸当とのことだが、それでも決定打にはなっていないだろう。

なぜか。

闇の書の闇を、最後の対物理防御層が守っているからだ。

(くっ……なんとか、動いてくれ！)

心中で吐き捨てるように呟いた願望も、体が重すぎて叶えられそうにない。

管制人格の圧縮データを、分割して守護騎士の記憶領域に退避させるという話は聞いていたが。

まさか、それがここまで行動を制限するものだったとは、流石のシグナムも予想外だったのだ。

彼女たち、守護騎士がヤクモから頼まれたことは2つ。

闇の書に侵入する間、無防備になる体の護衛。

そして、恐らく出現するだろう防御プログラムを可能な限り削ること。

書への干渉で強制転移の心配もあったが、そこは管制人格と連携が取れているらしい。

なんとかする、と言いきったヤクモが珍しく真剣な顔をしていたのがシグナムには印象的だった。

「固い、強い、遅……くはないんだろうな泣きそう!!」

なにやら泣きごとを叫びながら、更に魔力砲をヤクモが放つ。

だが、あれでは無理だ。

もちろん、やっている本人も気づいてはいるだろうが。

(我々が削りきれてさえいれば)

物理防御層を突破するには物理干渉が必要であり、恐らく純粹魔力の砲撃ではびくともしない。

それでも彼が攻撃の手を休めないのは、他に打開策を思い付けないでいるからだろう。

だが、いくら魔力が無限供給でも魔法の発動と制御しているのは人間。精神的な疲労から、ヤクモの表情も段々と曇りはじめている。

このままではジリ貧だ。

「ヤクモ!」

「わかってんよ!」

苦しげなシグナムの叫びに、苦々しげなヤクモが叫び返す。

叫び返すが、行動に変化はない。

まるで『なにかを待っているように』同じ動作を繰り返すばかりだ。どうしたと言いかけて、シグナムは気付く。

ここまで一方的に砲撃を受け続けていた防御プログラムが、僅かに顔を上げている。

防御層にぶち当たる砲撃を無視したまま、彼女が睨んでいるのはヤクモだ。

遅れて気がついた本人も、いったん砲撃を止めて様子見に回る。

どことなく口の端が上がっているのは、気のせいだろうか。

「——ッ!!」

不意に、防御プログラムの咆哮が空気を揺らす。

まるで悲鳴のようにも聞こえる金切り声が、無理やり鼓膜の奥へと押し込まれていく。

誰もが耳を手で覆った。

刺すような痛みに耐えて表情をしかめた。

しかし、その中でヤクモだけは確かに口の端を釣りあげ笑っている。

額に脂汗を浮かべ、耳を塞ぎながら眉を寄せているのには変わりないが。

それでも、シグナムには彼の口が「待ってました」と呟いたように見えた。

39皮を切つて肉を切られ、肉を切られて骨を砕く。
中

ヤクモの目の前で防御プログラムが顔を上げる。

管制人格と同じ作りの顔なのに、真つ赤な瞳と銀髪以外からは欠片も面影を見いだせない。

まるで違和感の塊みたいなそっくりさんが、表情の抜けおちた顔をこちらへ向けた。

全長は約2メートル。

全体的な大きさも、過去の資料にあつたものに比べれば圧倒的に小さい。

流石は取り込んだ魔力量が少ないだけある。

(だけど涙が出ちゃう！ だつて魔導師なんだもん!!)

はやてのリンクを切断し、守護騎士と管制人格も切り離れた今。ランダム転移で逃げてくれれば、どれだけ楽だっただろう。

しかし、闇の書がそうする気配はない。

システムの監視網を黙らせていたのは、ヤクモが中にいた間だけだ。

つまり、なんらかの意思を持つて残っているのか。はたまた、主がいなければ純粹に転移ができないのか。

このどちらかと言うことになる。

そこまで考えたヤクモは、技術屋の悪い癖が出てるなあと吐息した。

別にどつちでもやることは変わらない。

「さあて、こっからだ。気合い入れていこうか」

いくら魔力の供給ラインを作ったとは言え、無暗にこの場を動くのは得策じゃないだろう。

このまま戦闘を始めるとして、はやてが少し近すぎる。

短距離転移魔法を構築、シグナムの近くへ送っておけば間違いない。

守護騎士たちも過負荷に苦しんではいるが、単純な防御魔法くらいなら発動できるはずだ。

最悪の場合でも、彼女なら身を盾にして守るだろうという判断でもある。

なにかを訴えるようなはやての視線を意識的に無視し、ヤクモは魔法陣を3重に展開した。

「魔力炉、正常に稼働。魔力供給ライン、安定。術式構築テスト、成功」展開した魔法陣が碎け散る。

きらきらと光る粒子が飛び散り、同時に闇の書の闇も準備を整えたらしい。

この程度の準備で大丈夫か？ と自問して、ヤクモは大丈夫だ、問題ないと頷く。

相手は万全に程遠い稼働率の防御プログラム。

単調な迎撃判断ぐらい、なんとでも騙す自信が彼にはある。

そもそも、ヤクモ自身が囲みたいものだ。

目の前で注意を引いて、最後まで立ってれば俺の勝ち。

これはそういうレベルの戦いである。

(頑張れ頑張れできるできる絶対出来る頑張れもつとやれるって！)

やれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ！　そこで諦めんな絶対に頑張れ積極的にポジティブに頑張る頑張る！　よし自己暗示も完璧だな、困惑)

本当に大丈夫なのか自分でも不安になりながら、ヤクモは正面へ目を向けた。

闇の書も様子を窺っているのか、いまいち動きが感じられない。

基盤になっっているのが防御プログラムなんだから当然か。指令系統の入れ替えも、今やあれがトップなのは間違いないだろう。

「ついでにフラグ効果も足しとくか……まあ、囲とは言ってみたが。別に倒してしまっても構わんのだろう？」

激しくなにかを間違えた気分を抱えつつ、先ほどと同じ砲撃魔法を発動した。

バレットブレイズ。

誰かの地球破壊砲撃ほどとは比べられないが、ヤクモの単発威力としては最大級の火力を誇る。

平時なら2発撃つだけで限界を迎えるこれも、今のチートブースト状態なら無尽蔵だ。

とは言え、物理防御層が残っている状態では無駄に近いのだが。

「——ッ！」

2度目の咆哮と同時に、闇の書が魔法を展開する。

深紅のナイフを思わせるスフィアが8、16、24……と数を増やす。

壁のようにすら見えるそれに軽く絶望しながら、ヤクモはトライシールドを展開してこれに対応した。

彼の手持ちで最大の防御力を誇る、三角錐に3面のシールドを展開する特殊防御魔法。

大型魔法生物のブレスだって耐えられる強度を持つが、もちろん弱点だって存在する。

なんのことはない、背後ががらがらなのだ。

放射状に広がったため、いくつか素通りしてしまったスフィアが急反転してくる。

慌ててヤクモもラウンドシールドの蓋を作るが、こちらの強度はさほど高くない。

5発受けたところでシールドが砕け、6発目が左肩へ突き刺ささつてしまう。

「くっそがつー！ アルターデコイ、ランダムバースト!!」

シールドを解除して魔力炉の防御に回しつつ、幻影魔法で分身を作る。

続くように左肩のスフィアが炸裂し、これが煙幕の代わりになった。

左腕をだらりと下げた姿で煙から跳び出すのは、十数人のヤクモたちだ。

ばらばらに走りだす彼らを、闇の書が困惑気味に目で追っている。魔力炉のそばに1人、それ以外が散り散りに包囲する立ち位置だ。

「さて、本物どーれだ」

異口同音に漏れた声をぐるりと見回して、闇の書は魔力炉へのそばにいる個体へ狙いを定めたらしい。

黒々とした、もうなんと名状していいのかもわからないものが砲撃として吐き出した。

殺到する攻撃を防ぐため、トライシールドが展開される。

半無尽蔵に供給される魔力がある今、ヤクモがこれを凌ぐのはもちろん難しくない。

闇の書も似たような予測を下したのか、追撃として赤いナイフを発射する。

迫る脅威に少しだけ顔を上げたヤクモへ、その禍々しい砲撃が直撃——しなかつた。

幻影は『魔力炉ごと』一瞬で消し飛び、なにもない空間を赤い線が切り裂く。

どういうことだと全員の思考が停止し、防御プログラムですら状況判断のために次の動きを躊躇う。

残った幻影たちが、お互いに指差しつつ首を振る以外の動きが止まった。

「あー、ホント物理結界マンドクセ。こういうの、一番苦手なんだよ勘弁してくれませんかね」

不意に声が来る。

ちようど闇の書の背後へ、短距離転移で現れたヤクモの声だ。

手には銃。ケーブルは既に切断されたのか、魔力炉の影はどこにもない。

右手を大きく突き出し、直列に3枚重なった魔法陣が展開されている。

種類は単純な物質加速系。

だが、それを競合させることなく同時に3つ発動していた。

『レアスキル』多重展開処理（マルチプル）。

頭が賢くなるわけでもなければ、情報の並列処理量が爆発的に増えるわけでもない。

ただただ魔法の威力を直列に繋げてパワーアップさせる、技術屋には全く必要ない微妙なレアスキル。

魔力量の少ないヤクモでは、そう何度も使えないという欠点すらある。

「俺のリンカーコアを取り込んでレアスキルを読み取っても、思考加速系のかなにかだつてことしかわからなかったろ？」

威力を分散させないための環状魔法陣が、同じように3つ追加された。

ぐるぐると回転を始める見た目は、もはやドリルのようにすら見えてくる。

ここまでの全てが囷だ。

全力で砲撃を撃ちまくったのも、用意した魔力炉すらもこの直前までの消費を補給すれば役目は終わり。

人為的に闇の書へ飲み込まれ、夢を見ながら作業をしていたのも。守護騎士たちが動けなくなって、直接対決のような構図になったのも全て。

たった1つのことから目を逸らすためだけに用意した『囷』である。防衛プログラムは、ヤクモが搦め手を使う人間だと悪夢から情報を得た。

リンカーコアから、攻撃手段とレアスキルを読み取った。

ならば、フィールドに多くの選択肢を置くことで勝手に余計な計算をしてくれる。

多くの手数に対応しようと思えば、自ずと動きは最適化されるだろう。

現にこうして、最適でない不測の事態に闇の書はエラーを吐き出し停止した。

原始的な質量兵器にデチューンされたデバイスM1903にとって、質量加速系の魔法は相性がいい。

防御方法を無視すれば、バレットブレイズよりも威力があるだろう。

少なくとも、この好機に弱体化した物理層を抜くことは可能だ。

「あつ……」

手順は間違っていない。

時間と金のかかった、ただの罠も上手く機能した。

あと一手。

この弾丸が当たれば、それで殆ど詰める。

ただし、それは闇の書が予想外の行動で完璧に動作を停止して
いれ
ばの話だ。

ヤクモの足元から、異形の怪物が湧き出す。

鋭い牙を剥き出しにして、それは容易く右腕を噛み千切った。

40皮を切つて肉を切られ、肉を切られて骨を砕く。
後

痛いと思う前に、熱さが脳みそに競り上がってきた。

この感覚は、いつ以来だろう。

野垂れ死にそうだったところを拾われ、非殺傷設定なんてクソ喰らえな世界を走り回るハメになり、死んだ方がマシだったと激しく後悔していた頃ぐらいだろうか。

いや、今こんな走馬灯見てる場合じゃないな。

大量の囀情報の中へ、1つだけ紛れ込ませた真打が宙を舞う。

噛み千切られた腕は上空へ伸びる怪物に持つてかれたが、銃は咄嗟に手を放すことができた。

大丈夫。まだ途切れていない。

「あ、き、ら、め、て、たまるかアあああー！」

頭の中にいる冷静な俺が、柄にもなくテンション高いなあとか言っている気がする。

袖を噛んで無理やり左腕を持ち上げるのなんか、ホントにらしくないと思う。

こういうときは、尻尾巻いて逃げた振りして後ろからズドン！ がデフォルトだったのになあ。

届けと体を投げ出しながら伸ばした手で、お手玉をしつつもM1903を掴み取る。

制御から外れて崩壊しかけていた術式を再起動。綻びを修正しながら、銃口を闇の書へ。

もともと長期戦は得意じゃないが、今回は長引くと血が足りなくなつてダウンしそうだ。

これでミスつたら、文字通り身を以て責任を取るしかなくなる。

まだ死にたくはないので、出来たらそういうのはご遠慮願いたい。

「チェック、マーキング。遅延呪文、自動展開、タイミングを、射撃直後へ！」

投げ出した体が、地面の上を滑るように転がっていく。
超痛い。

撒き散らした血が、見えている範囲をスプラッタに彩った。
引き金を絞る。

僅かに振り返った闇の書と、しつかり目が合ってしまったてやり辛い
ことこの上ない。

感情の乗らない表情で、目だけ大きく見開いて、漱石さんと同じ顔
の敵が口を開く。

その口から絞り出される悲鳴が響く前に、加速した弾頭が物理防御
層をぶち抜いて進む。

闇の書は腹に弾丸を受け、その反動で薙ぎ倒されたようだ。

仰向けに体を投げ出した今の状態では、近付いて戦果の確認は出来
そうもないが。人の部分と蜘蛛っぽい部分の、ちょうど境目が大きく
挟れているのがギリギリ見える。

ホントは頭を吹き飛ばすつもりだったが、どうやら結界に当たって
起動がねじ曲がったようだ。

「あと、任せるわヴィータ」

「おうー」

朦朧とする意識の端っこで、血と同じぐらい真っ赤な影が立ち上がる。
る。

どうせ意識が持たないだろうと思っていたが、大正解すぎて大草原
とか築けそうだ。

念のため、ヴィータにマーキングを付けておいてよかった。

1から対象を指定したんじゃないや、遅延呪文でだけで対応出来なかった
気がする。

「俺はもう疲れたよ。なんだかとても眠いんだ」

ちよ、勝手に死にやがったブツ殺す！ とか無茶苦茶言ってる声
が、聞こえたような聞こえなかったような。

ひんやりとした空気に撫でられ火照った体に心地よさを感じながら、
俺は微かに残った意識を手放すことに成功した。

体が重い。なんか、最近こんなのばかりで滅入りそうだよマジで。

おかしいなあ。俺ってば、もっとうぱんイチで屋上から飛び降りてターゲットの眉間を撃ち抜く系だった気がするんだけど。

「眉を今の2倍は太くしてから出直せ」

「俺、たまにザフィーラの有能っぷりが怖くなるんだけど」

地味に高い家事スキルとかもあるし、実は正義の弓兵さんだったりしないよね？

「……すまない、ちよつとなにを言っているのか」

「ファツ!? なんで逆にこっちは知らないんですかねえ」

「知らないことくらいいくらでもある。幸運Eも月の加護もさっぱりわからんな」

「ちよ、おま。どう考えても知ってるやつのセリフなんですけどそれは」
「流石になんでもは知らん。知ってることだけだ」

おう、遠回しに万能アツピルやめろや。

それにしても、目が覚めて一発目が男とか。華やかさが足りないんじゃないかな、白目。

できれば、物理的にも精神的にも癒しのシャルマさんとかがよかった。百歩譲ってシグナムでも可。

え、ヴィータ？ あれはダメだ。絶対に大騒ぎするから。

「消毒液のかほり。ここは病院でファイナルアンサー？」

「少し溜めて答えを言って欲しいか？」

「ファイナルシャルコンプライアンス」

「会話のキャッチボールという言葉を知ってるか？」

もの凄い心配そうな目で見られるのは心外すぎる。

今にも、頭は大丈夫か？ とか言われそうだけどなんなの？

「お前の失血具合が酷くてな。石田医師の話では、植物状態になることも覚悟するよう言われている」

「なにそれ怖い。ところで悠長に言ってるけど、患者が目を覚ましたら医者と呼ばよ常考」

それもそうだな、と言いつつザフィーラが備え付けのナースコール

へ手をかけた。

スピーカーに向かつて、俺の意識回復を早く伝えている。

首を巡らせて窓を見れば、外は暗い。

夜か。これじゃあ、季節感から寝てた時間を計算できないじゃないか。

「闇の書って、あのあとどうなった？」

「当初の予定通り、控えていたヴィータが本体の破壊。それからデュランダル、だったか？ お前が持ってきたあれで、自己修復の妨害とシステム凍結を行って回収した」

「あつ、あれでちゃんと凍結封印できた？ いやあ、できてよかったあ」

「おい」

賭けだったのか？ と詰め寄って来そうなザフィーラから、体を捻って逃げる。

危うく胸倉を掴まれそうになったところで、ちょうど医者たちが傾れ込んできた。

おつ、いいタイミング。

「ど、どいてください！ 意識が戻ったと聞きましたが!？」

「おお、名前も知らないお医者様。ぶっちゃけ誰だこいつって思ったけど、あなたは間違いなく俺の救世主!」

「ああ、やっぱり脳に異常が！ 早く、精密検査をする準備を!!」

今なんか、とんでもなく失礼なこと言われたような気がするなあ。

ストレッツチャーに移し替えられ、ずいぶん大事になってるけど……まあいつか。

これでザフィーラから逃げられる。

「アディオス・アミーゴ!」

「くつ、貴様！ 逃げられると思うなよ!」

「ああダメだ。この患者もうダメだ。きつと緊急手術とかしないとダメなんだ！ メロンパン！ メロンパンを用意して!!」

「……ザフィーラさん、やっぱり助けて！ なんかこの医者、ちよつと頭おかしい!!」

メロンパンってなんに使うんですかね！ まさか、俺の頭に詰めるつもりなの!?

やめよう？ こういうときは、まず精神治療から始めようよ。ね？
あと、そっちの御犬様も見えないでヘルプ！

そんな感じで助けを求めた瞬間、ザフィーラは追いかけるのを諦めて見送りに徹し始める。

おいこら、ふぎけんなよこの駄犬！

「ザフィーラの母ちゃんデービーソー!!」

最後の負け惜しみにと言ってみたが、なんかよくわかってない感じの表情が返ってくる。

そりやそうか。

俺だって、見たこともない母親の悪口を言われたって反応に困るわな。

思わず吐息しながら、廊下をドリフト気味に抜けて行くストレッチャーにしがみ付く。

こいつら、患者を治療室に届けたのか振り落したいのかどつちだよ。

まあ、このまま付いていくわけにもいかないよね。

頭蓋骨開かれて、中身をメロンパンと入れ換えられるのだけはやめて欲しい。

「アルターデコイ・シングルモーション」

不意に、もう一人の俺がベッドから飛び降りて明後日の方向へ走っていく。

慌てたのは医者と看護師たちだ。

昏睡から覚めたばかりの患者が、やたら元気に走っていくから当然か。

捕まえろ！ と叫びながら、山狩りでもする勢いで追いかけて行くのはどうかと思うけどね。

「なんでこう、この病院はアグレッシブなやつらが多いかなあ」

はやての親衛隊らしきマッチョ共と言い、そういう呪いでもかかってんの？

取り残されたストレッチャーの上に座ったまま、再び盛大なため息を吐き出す。

今、何日だろ？

右腕の付け根が、めちやくちや痛いなあ。

お腹が減りすぎて、頭がくらくらする。

もういいや、とりあえず帰ろう。

ほら、なんだっけ。尻を出したら一位になれるやつでも言ってるじゃないか。

ぼくも帰ろう、お家へ帰ろう。でんでんでんぐり返って、ラウンドワン！ファイ！

脳内で変な言葉に変換されたフレーズを思い出しつつ、なぜか引き返して来た医者たちから逃げるために俺は必死で走りだした。

オレタチノタビハ、マダハジマツタバカリダ、震え声。

空白期 追い回され編

41 右腕無しの振りヤクモ

軽く脱出ゲーム感覚を味わえそうな鬼ごっこから、ようやく逃げることができることができた。

なんだよあいつら。

もう、途中から目が患者を取り押さえられそれじゃなかったよ？

どう見ても、ホラー展開っぽいなにかが滲みだしてたもの！

「そういうのは夏場にやれよな。真冬にやるなよ……」

ホント、あの病院はホラーハウスでも開いたら儲かるんじゃないかな。

まあ、愚痴っても仕方ないんだけど。

とりあえず、八神家に行かないと。俺のデバイスなんかも、たぶんはやてが持っているはずだ。

病院着のまま出てきちゃったし、服の方もなんとかしたい。

「にしても寒いな。丸1年寝てました、なんてオチじゃないといいけど」

記憶が正しければ、闇の書の相手をしたのが11月の下旬のはずだ。

魔力炉の仕上げに時間を取られ、ずるずると予定が伸びてしまったのは記憶に新しい。

まあ、俺が新しいと思ってるだけで古い可能性も微レ存だけでも。

当時、クリスマスに向けてはやてとヴィータのテンションが上がり、同時に外の気温はかなり下がっていた。

今の正確な日には不明にしろ、雪が降りそうな寒さはあの時と同じ。

果たして一周して冬なのか、あるいはそれほど時間が経っていないのか。

うーん……たぶん後者かな？

なんせ目が覚めて、俺の体が動くようになるまでが早すぎる。

鬼ごっこも普通にできたし、この鈍り方ならラグも1か月がいいところだろう。

「あとは、右腕がなくてバランス悪いってことくらいかな」
むしろ、問題はこっちかもしれない。

逃げ回るときに、何度となくこけそうになってホントに焦った。

やっぱり、腕1本は代償がでかかった気がするよね。

俺の不注意だから、誰にも文句とか言えないんだけどさ。

こんなの守銭奴にバレたら、冷やかな目で見下されながら「またか」とか言われそうな希ガス。

そんな趣味はないはずなんけど、昔から俺に厳しく当たるやつはなぜか多い。

なんなの？ 目覚めさせたいの？

「この格好で大通りは、流石に自殺行為だよな」

どう見ても、通報待ったなし。

寒空をこんな薄着で歩いてたら、誰だって不審者が浮浪者だと思うよね。

あつ、でも今は病院着だから脱走者って思われるのかも？

……よし、凄いだつちでもいいのはよくわかった。

とりあえず、見付からないようにしないと。

なにより、今は防御魔法で冷氣遮断してるから職質されると洒落にならない。

魔導師が捕まった。なんて見出しで、黒服に両手を引かれながら新聞に載るのは嫌すぎる。

「かと言って、短距離転移をデバイス無しでやるのは不安がいつぱいすぎる」

座標を間違えて、壁の中にいるとか笑い話で済まないレベルだ。

というか、あれリアルでやるとどうなるんだろうね。

もともとそこにあった壁を、切り裂いて俺登場！ ってことになるんだろうか。

「違う違う、そういう話じゃなくてだ」

とりあえず、デバイス無しの状況で展開できる魔法には限度があ

る。

今だって寒さ対策はしているが、ヘイト系の魔法は負担が大きくて発動できそうもない。

となると、空に行くのも危ないか。

誰かに目撃されて、ニュースでUMAの報道まで想像余裕でした。あんまり騒ぎを起こすと、管理局のブラックリストも怖いしなあ。……て、手遅れじゃねえし!!

「大丈夫。きつと大丈夫、おそらく大丈夫、そこはかたなく大丈夫。ちよつと次元断層を発生させたバカの共犯やって、変態の研究手伝つてるだけだし」

密輸とかの余罪は、こうなったら四捨五入で切り捨てですよ先生！まあ知つてたけど、俺の人生終わってんなあ。

とりあえず、無難に人目を避けて歩こう。

曲がり角にさえ注意すれば、高速移動もできるよね。なんて考えながら踏み出した瞬間、不意に後ろから声があった。

聞いたことない女の声だ。

「ちよつと、あなた。その格好つて病院の服よね？まさか、脱走してきたの？」

「そんな急にアナタだなんて、先ずはお友達からお願いします」

「事故つたとは聞いたが、頭の治療にはならなかったらしいな」

フアツ!?

女の声が、急に聞いたことある男の声に変わって脳みそ大混乱。

実は気付かなかつただけで、俺はこんなにも恭也君を愛してたんだろうか。

ハハツ、言つといてなんだけどきめえ！

「そして、振り向いた先には恭也君でファイナリティアトミック！」

「……ファイナルアンサーって言いたかつたのか？」
すげえ！

なに、なんで今の拾えたの？愛なの？流石にちよつと引くわ。

そのうち、ウホツとか言い出したら要注意だな。

「なんとなく、殴らなくてはいけない気がしてきたんだが」

「怪我人を殴ろうだなんて、戦闘民族は野蛮だなあ」

「なんで俺は煽られてるんだ」

そんなの、怒らせると面白いかごぶつ……

「ちよつと恭也、凄い音したわよ？」

「大丈夫だ忍。これくらいで駆除できるなら、こんなに苦労してない」

仕返しのもりか、人のことをゴキブリ扱いとは。

こやつ煽りおる。

というか寒い。

急に殴りかかってくるから、防御魔法解除するので精一杯だったよパトラツシュ。

「それで、入院して意識不明だったと聞いていたが。なんでこんなところにいる」

「意識不明で入院してたらしい人物の顔面を、容赦なく殴る恭也君のスタイルとかマジパナイ」

次は踏みつぶすとか聞こえた気がしたので、慌てて立ち上がった。

ホント容赦って言葉を覚えようよ！

久しぶりに見た気がする顔は、対して変わってないように見える。

やっぱり、1年も2年も経ってないっぽい。意識不明だったのは1ヶ月前後つてところかな。

隣の忍さんって人は、どことなくすすかに似ている気が。まさか親族だったりして。

そういえば、アリスの家は豪邸だったけどすすかの家は見たことないな。

同じくらい金持ちだったりするんだらうか。

「どうも、私が村長です」

「え？ ど、どうも月村忍です……村長？」

「真面目に取り合わなくていいぞ、忍。こいつは基本的に適当なことしか言わないんだ」

「改めまして、信用の欠片もない七海八雲です。名字が同じだし、すすかの血縁かな？」

「七海八雲……ああつ、機械に詳しい変な人ってあなたのことね」
変な人。変な人かあ。

そうですね、私がつてやったらどうなるだろうなあ。

「まあ、変な人は否定できないからいいや。ところで、実は月村家ってお金持ちだったりする？」

「えつと……まあ、それなりにつてところかしら」

「なるほど。ちなみに、絶えず護衛を連れてたりとかする？」

俺の問いに、忍さんは首を振る。

アリサとすずかの方だけ護衛が付いてるのは、前に誘拐未遂があつたかららしい。

世の中は物騒だね。

「まあ、よく考えたら恭也君いる時点で護衛とか必要ない事実気付いてしまった。あつ、ちなみに御2人さん、不審者が後ろからついて来てるよ」

「なつ、不審者に挟まれただど!？」

「テメエ、人が親切で教えてやったのに」

病院着で怪しいのは否定しないけど、それはないだろ。

涙が出ちゃう。だってだってなんだもん。

さつそく恭也君が、振り返つて辺りを警戒している。

右から左まで舐め回すように見ているが、残念そこじゃないんだなあ。

どうせデバイスないから、今はそれほど威力でないかな。こつそり手伝つてしんぜよう。

「アクティブソナー、ソニック」

小さく呟くと同時に、音源を頭上に展開した。

アクティブソナーは反響即位で索敵をする魔法だが、裏返せば強い超音波を発射することもできる。

三半規管を狂わせる程度から、鼓膜をパーンするレベルまで威力は自在だ。

ただ、正直なところデメリットが多くて普段はあんまり使っていない。

対象の設定はできないし、指向性を持たせなければ自分の鼓膜もパーンする。

敵も味方も巻き込む系のMAP兵器みたいな感覚が近いかな。

「ほれ、上から来るぞ気をつけろ」

「は？」

困惑で振り返ろうとした恭也の前に、上からおっさんが降り注いだ。

親方、空から親方が！ おっ、親方……死んで……

そんな感じが近い。いや、死んでないけど。

「い、今あなた、いったいなにをしたの！」

「そんなのナニに決まって……おっと、これ以上はいけない。まあ、冗談はさておき。おっさんが降るなんて、今日の天気はアグレッシブだなあ」

せめて雪を降らせろよ、とか文句を言ったらホントに降ってきたでござるの巻。

とりあえず、防御魔法を張り直して寒さをしのぐ。ついでに雪が俺の頭上で消えるのを指さしてやれば、忍さんはなにかを察したらしい。

運よく、恭也君は落下したおっさんにかかりきりだ。

落ち方的に、ちよつと死んでも不思議じゃなかったから当然か。

見られてないのはこれ幸い。

あとのことば任せて、俺は静かに八神家へ向けて走り出した。

42 戦う傭兵少女を恐れる

寒空を裸足で駆け抜け、八神家の邸宅へと帰ってくる。

すっかり日も落ちてしまったが、今ごろ石田先生とかブチ切れてそうだなあ。

大丈夫かな……うん、大丈夫だな！

そういえば、俺の信用とか元から底辺だったもんね泣きそう!!

ともかく、早めにまともな服が欲しいのです。

え、玄関なにそれ美味しいの？ ベランダからこんにちはに決まってるじゃないですかやだー！

「まあ、玄関開いてなかったし。仕方ないね」

ついでに言うと、部屋の中も真っ暗だ。どうも、みんな揃ってお出かけ中らしい。

いつもなら、誰か1人はいるはずなんだけど。おかしいな？

まあ、留守なんだからどうしようもない。別にザフィーラ連れてくればよかったなんて思っていないんだからね！

「まほうのことばで、おうちくのまどが、ポポポポーン！」

いや、吹っ飛んだりはしないけど。

基礎魔法の応用で、内鍵をマツガーレ！ するだけですよ。

魔法文化がないおかげで、こういうセキュリティが甘くて余裕ですねぐへへ。

なんか最近、傭兵ってかコソ泥みたいなことばっかりしてる気がするなあ……

「ホントに誰もいない。あれ、晩飯の時間じゃねえの？」

『なぜ入院しているはずのお前がここに』

飯を食った痕跡すらないと思ったら、不意に横から声が割り込んできた。

まさかのホラー展開に草不可避！ 大草原で怖さを緩和しなくては、使命感。

いやまあ、なんのことはない漱石さんなんだけど。

八神家の居間には、共同のデスクトップパソコンが設置されてい

る。

俺が来てからは、空間モニターばかり使って埃をかぶっていたんだが。確認してみたところ、1人暮らしの小学生が持っているとは思えないほどハイスペックなゲームパソコンだった。

うん、ゲームパソコン、ここ重要。

これどうしたの？ と前に聞いたときは、財産管理をしてくれてるおじさんが送ってくれたとか言ってたっけ。

あのおっさんは、いったいなにをしてるんだろう。

「小学生にゲーム用パソコンを渡すとか、ある意味自殺行為だよね」
『頼むから、会話のキャッチボールをして欲しい』

画面の中で、銀髪赤目の女が眉を下げ困ったような表情をしている。

いつもみたいな激しいツツコミがないって、こんなに安心できるとだったのか。

ちよつと感動しそう。

「パソコンの中は快適ですか？」

『多少の違和感はあるが、概ね問題ない。ネットという環境が面白くもあるな』

うん、とりあえず大丈夫そう。ただ、そこでなぜソシヤゲの画面を引っぱり出して来たんだらうこの人。

え、事前登録してたのに着工できない？ 知らんがな。

「俺がいなくても、問題なくインストールできたみたいで一安心ですわ」

『あのヘッドギア頼りになってしまったが。あれがなかったら、いつたはどうするつもりだったんだ』

「うーん……脳みそに直接電極をブツ刺すとか？」

『なんとというか、安いスプラッタ映画が始まりそうだ』

「きつと羊も黙るだろうな」

『個人的にはオリーブオイルがいいのではないかと思う。材料はお前が提供してくれ』

うーん、食への冒流とかではやてにギルティされる未来が見える。

って言うか、なんで元ネタ知ってんだよおい……

闇の書を封印するに当たって、管制人格の仮設住居はパソコンにと最初から決めていた。これは、守護騎士たちと話し合って納得させたことでもある。

理由は単純に2つ。

闇の書から引き剥がす際、人格と記憶を優先したせいで管制機能を捨ててしまったことと。

あとは手近に大容量の記憶スペースを用意する場合、ここが一番楽だったからだ。

「体の用意が間に合わなくて、ちよつと心配だったんだよね。ガイノイド技術とか専門外だし、ここじゃ生産施設もないからなあ」

『これでも十分すぎる。私が入れるよう、増設作業をしてくれていたそうじゃないか』

そりやそのままぶち込んだら、間違いなくパンクするし。多少オーパーツ化しちゃうけど、これくらいなら管理局にもそうそうバレないって自信があつたからなあ。

逆にはやてと喧嘩してたおかげで、作業を見られないまま進められたのは幸運だったか。

もしバレても、知らなかったら罪にはならないしね。

ハードの増設には、この前スカリエッティのところまで回収したものが役に立っただけだ。まさか、こんなところで使えるとは思ってなかったけど。

中身はゴミデータだったくせに、流石は研究者ただの変態じゃないね。

適当に取り外した記憶装置が、思ったよりも高スペックで助かった。

CPUだけは、こつちで新造しなくちゃいけなかったけども。

「あれだけはやて怒らせたんだし、これくらいの成果はないとな。あつ、ちよつと着替えてくる」

ああと見送ってくれる漱石さんに手を振りつつ、とりあえず服を取りに二階へあがる。

部屋はシグナムとシャルさんに明け渡したが、俺の衣類は未だにあそこだ。いい加減、こつちもなにか考えないとダメじゃないかな。

案の定、部屋の中は真っ暗だ。皆どこ行ったんだらうね。

とりあえず、電気を点けてさっさと着替えてしまう。

途中で無くなった右腕も見てしまったが、あんまりショックじゃなかったのは意外だった。

思ったよりも未練とかなかったんだな、俺。

「ほい、ただいま。そういえば皆は？」

『お前の見舞いに行ったんだが。今ごろ大騒ぎだらうな』

「あー。それはやっちゃったな」

石田先生どころか、八神家がそろって敵にまわりそうだ。

どうしよう。いったん逃げるか？

「ま、なるようになるだろ。ちよつと出かけて漱石さんの体も作つてくるつもりだし、逃げ道は完璧だぜ」

『声が震えていないか？』

気のせいじゃないかな……

「あのヘッドギア、まだ使うから大事に保管しといてくれ。痼癩で壊されると、作り直す手間がだな」

『そもそも逃げないという選択肢は……まあいい。お前には助けられた。今回くらいは大目に見よう』

まあ、あいつらも怒ったからって物には当たらないと思うけど。

せいぜい、俺が帰ってきたらフルスイングと兜割りと犬パンチが飛んでくるくらいか。やべえな、死ぬかもしれん。

『それから、私も新しい名を主から頂いた。リインフォース。祝福の風という意味だ、いい名だろう？』

「おお、可愛らしい名前つけてもらったじゃないか。俺もはりきって体を用意しないとな。はやての足も回復していくだろうし、リハビリが終わる頃までにはなんとかしたいなあ」

ホントはミッドのデバイスとかで代用する方が早いんだらうけど。そもそも古代ベルカ技術の粋を結集した人格が、ミッドのデバイスに馴染むとも思えないなあ。

融合機としての機能が吸い込めなかった以上、そつちで組んでも意味はないだろうし。

やっぱりガイノイドが、現実的な選択肢な気はする。

まあ、これならスカリエッツィの技術を応用してなんとかなるだろう。

あの兵器を調整する仕事も、放り出したままにはできない。

「俺のデバイスは？」

『ソファの後ろにあるはずだ。停止させた魔力炉も一緒に置いてある』

覗きこんでみれば、確かに俺のデバイスが魔力炉の上に置かれてあった。

そういえば、そつちもだったか。アウデイに乗せ直して運転……右腕ないと不便だな。

「結局、俺ってあんまり家にいたことなかった気がするなあ」

『大丈夫だ。その内、主がお前に首輪をかけるようになる』

「飼いきれぬと怖すぎるんですがそれは」

自業自得だろう？ そーですね！

なんて言いながら、デバイスを起動して魔力炉を持ち上げる。

よし、浮遊魔法も良好。デバイスがぶっ壊れてなくて一安心だ。

「そんじや、行ってきます」

『ああ。次に帰ってくるときは、人生の覚悟を決めておけ』
帰宅1つで大事だなあ。

そんな風に笑いながら、夜空に向かって飛びあがる。

いつかと違って、抱えてるのは無機質な魔力炉だけ。

43 悲しみの中の神頼み・前

夜に訪ねるのもどうかと思ったけど、もう出てきちゃったからどうしようもない。

別に泊めろって言いに行くわけじゃないし、限りなくアウトに近いセーフってことでひとつ。

「な、なんであんたがここにいんのよ!？」

「よお、ツンデレちゃん。こつそりやろうとも思ったけど、見付かって手錠のパターンが見えたから正攻法で来ちゃった」

来ちゃったじゃないわよ!! と叫ばれたので、ご近所迷惑だよ? と教えてあげたらローキックを食らった。

せつかく親切心で言つてやったのに……

あつ、でもよく考えたら近くに民家なんてなかったな。

これだから金持ちは!

「さつき、はやてから脱走したとかって連絡が来たところなのに」

「え、もう来てんの? はやての包囲網すげえな。いや、行動パターンがバレてるだけか?」

なんにしても、ここへは車を取りに來ただけだ。

魔力炉は持つてきているが、別に積まないと動かないわけじゃない。とりあえず納めて、接続関係は後回しでも問題ない。

最後に魔力炉を降ろしたときのままなら、ガソリンも多少は入っているはず。

稼働テスト時の余りだが、ガソリンスタンドまでは十分足りるだろう。

これなら、逃げ切るのも簡単かな。

いや、別に逃げなきゃダメってことはないんだけどね?・

でもまあ、捕まったらしばらくは部屋の柱とかに括りつけられそうじゃん?・

「一応、来たら連絡してって頼まれてるわよ?・私」

「別にすればいいよ。俺が出ていった後にしてくれると嬉しいけど」

「あんたの頼みを聞く義理がないわね」

そりやそうだ。

でも、流石に今すぐ連絡されてはやてたちが転移して来たら困る。一般人のアリサがいる以上、やらないとは思うけど。

やらないか？ ホントにやらないか？ アーッ！

いや、やりそうだな。

友達に下手な隠しごとするくらいなら、いつそバレてもいいやとか考えそうだ。

どうしようどうしよう。

「……よし、交渉材料が思い付かない。脅迫してもいいですか！」

「まさか、こんな力いっぱい脅迫宣言される日が来るなんて思わなかったわ……」

大丈夫。俺もこんなわけわかんない脅迫したのは初めてだから、錯乱。

「仕方ない、この手は使いたくなかったが……あれ？ よく考えてみたら、俺なんではやてから逃げてんの？」

「えっ、いや私に聞かれても？」

ん？ 俺、今回は特に悪いことしてないよね？

そりや、怒られるのは怖いけどそれだけなんじゃ……

なんで逃げたんだ俺！

「なるほど、条件反射の神秘を見た気がする」

「真面目な顔して言ってるけど、それただのおっちょこちよいよね」

「ドジっ子には愛嬌があるらしいぞ？ ほら、俺からもこんなに愛嬌が溢れだしている！」

「……………」

「なんか言ってよ!!」

いい加減、ホントに寂しくて泣くからね？

それにしても、よく考えてみたらスカリエッティに資料を送って貰えばいい話じゃないか。

ついでに仕事も一緒に送ってもらえば、途中で投げ出してる試作品の仮組みもできるだろう。製造と実験は向こうでやってもらおうことになるけど、大した問題じゃない気がする。

実際、俺が立ち会ってもウーノが立ち会っても同じだしね。

細かい調整ならまだしも、大雑把なすり合わせは指示書を添付するだけでなんとかできるし。

「ああ、うん。別にいいや、はやてに電話しても。とりあえず、車のところまで庭に入らせてもらえる？ 魔力炉を積みこみたいんだけど」

「別にいいけど。って、えっ?! 浮いてる!!」

「今かよ」

ここまで持ってきた魔力炉を見て、アリサが目を剥く。今更だけど。

まあ、魔法で浮かせてるから普通の反応だろう。今更だけど。

さつきまでは、まるで持つてるように見せてたつてのもある。今さらだけど。

「今さらだけど!」

「うっさいわね!!」

そして右わき腹に突き刺さる回し蹴り。ありがとうございます!!

また1つ腕を上げたなアリサよ。

しかもソバットのつま先蹴り方式とか、どう考えても殺しに来てるよね。

「あんたってホントに……あれ、今なんか感触がおかしくなかった?」

「ああ……いや、うん。ちよつと腕を一本ほど落つことしてきたから、今ガードが薄く……げふっ」

「ハアツ!? 落つことしたって……」

言葉が見付からないのか、アリサは困惑気味だ。

怒るか心配するかで迷ってるんだろう。みんな優しいなあ。

半分でいいから、幼少期にこの優しさが欲しかった。

今からでも、半分が優しきで来てる薬とかキメれば楽しくなるだろうか。

……あれ、なんかニューアンスおかしくね?

「はやてのやつ、変なところで隠しちゃうんだもんなあ。どうせ勝手に言っちゃうのは、とか思ったんだろうけど」

「あんたもはやても、人の心配はするくせに自分のことは全然言わな

いわよね」

「ツンデレのアリサがこんなに優しいわけがない。ダウト！　ダウトオ!!」

鈍いサウンドがアンダーから響いて、弁慶のクライがベリー痛い。おう、もうちよい加減って言葉を覚えろよ。

「とりあえず、はやてに連絡するわ。あんたは、迎えが来るまでここから動かないこと。いいわね？」

「いやー、ちよつと約束はできないなあ。少なくとも、車のところまで勝手に移動するし」

はあと大きく息を吐いたアリサが、なにも言わず家の中へと引っ込んでいく。

特別、監視や妨害の人員も残していかない。つまり、そういうことだ。

言うべきことは言ったし、それ以上の責任はないということだろう。

いつの間にやら、デレ期が来てたなんて。これは驚愕を禁じ得ない。

これ、本人に言ったらドロップキック食らいそうだなあ。

「あ、そうか。帰れない理由が1つだけあったわ。空からオッサン降ってきたやつ……」

「はい、その件でお迎えにあがりました。ご同行願えますか？」

何気ない独り言のつもりが、不意に背後からレスポンスが。

え、なにこれ怖い。

恐る恐る振り返ると、そこにはメイド服の女性が1人。見たことない人だけど、誰だろう。

というか、この人。悪ふざけで「俺の後ろに立つな!!」とかやったら、一撃で俺を沈めてくる気がする。

おかしいな。

恭也君とかは別格だから仕方ないけど、一般人相手に気圧されてるだど？

「デバイス起動から振り返って射撃、射撃前にボディブローを食らう。

魔法の自力発動で迎撃、足払いからの顔面強襲を食らう。純粹に格闘術で応戦、普通に殴り負ける。あ、あかん。これあかんやつ……」

「なにを言っておられるのかわかりませんが、ご同行願います」

ざつとシュミレーションしてみても、勝てる見込みがない。

そもそも、背後を取られた時点で詰んでるだど。

ええい、地球のメイドはバケモノか。

「つかぬことをお伺いしますが、車の運転とかできますかね？」

「問題ありません。最近、免許を取りました」

表情の動きが乏しいのに、なぜかドヤ顔に見えるメイドさんは免許証を掲げて見せる。

ホントに取り立てだよ。

どうしよう、アウディR8なんて特殊な車両を運転させて大丈夫かな？

よもや、一回も乗らずに廃車とか勘弁してほしいんですががが。

「お話によると、お庭の方に車を置いてあるそうですね。そちらも持ってくるように言付かっております」

「まさか、こんなところで自分の右腕を惜しむことになるとは思わなんだ」

危機を感じとって生えてこないかな、右腕。

この際、肌がちよつと緑になるくらい大目に見ますよ？

「神に祈る時間をください」

「構いませんが、お早くお済ませてください」

アーメンハレルヤピーナッツバター！

どうかこの窮地を御救くださいファッキングゴツト!!

祈りも空しく、タイヤの悲鳴が鳴り響くのは数分後の話である。

44 悲しみの中の神頼み・中

吐くかと思った。ゲロるかと思った。リバーズするかと思った！
やっぱ、免許取り立てにスポーツカーとか運転させるもんじやない
ね。

踏み込み過ぎたアクセルと、華麗なブレーキ捌きで4回転くらいし
た気がする。

普段の車ならば安全運転ができますなんて言われても、俺は酷い目
にあつたから関係ないよね。

正直、2回は死んだと思つたよ。

「こんなに酸っぱい唾液、いつ以来だろう……」

「私、普通に連れてきてつて言わなかつたかしら？」

「認識の違いではないでしょうか」

おい、無茶苦茶言つてんぞあのメイド。

言つとくけど、あのオッサン迎撃してやったの俺だからね？

感謝されこそすれ、拷問される覚えなんてないですけど！

「あ、あの。大丈夫ですかヤクモさん」

「正直、生まれそうになったらごめんとしか」

この状況で、唯一の味方だったはずのすずかが僅かに身を引いた。

正しい判断だね。色んな意味で、今は近くにいることをお勧めでき
ない。

「えつと、ごめんなさいね。私は月村忍。アナタの後ろにいる恭也は、
知ってるのよね？」

「ソーデスネ。体調不良の年上に、刃物突き付けるド外道な恭也君の
ことは知ってる」

「人間きが悪いな。こんな対応、お前を含めても限られた人間にしか
しないぞ」

ああ、つまり敵を前にしたときの対応つてことね。把握。

無駄に高そうなソファに座らされ、目の前にはすずかの姉らしい
忍。その背後に控える2人のメイド。俺の背後に違う意味で控える
恭也。

今上げたやつら全員が、今のところ俺の敵だ。

例外的に中立なのは、こつちを本気で気遣ってくれてるすずかだけだろう。

もう女神じゃないかなこの子。ファツキンゴットとか言つてごめんなさい。

「よし、ちよつと治まつてきた。で？　天気予報が曇りときどきオツサンとかじゃなければ、あの愉快的状況の理由を聞こうか。アイツ、電柱の上に立ってたみたいだけど……アグレッシブなストーリーカー？」
「……ストーリーカーのレベルが高すぎて言葉が出ないわね」
ホントにね。

俺も、恭也君と鉢合わせしちゃったから周辺探査して気付いただけだし。なんにもなかったら、居るのすらわからなかったかもしれない。

達人？　というか、あれ人間でいいのか？

ちよつと、電柱の上なんて小さな足場に平然と立ってる人間に心当たりは……真後ろにいたよ。

万国人間ビックリショーの会場、翠屋になら他にもいたりしてな。

「まあ、ある意味ではストーリーカーよ。私たちの家系を狙ってる意味でだけ」

「家族ぐるみのストーリーカーか。なかなか楽しそうだな」

「本当に楽しそうだとでも思ってるのか？　そのせいで、昔すずかちゃんが攫われたこともあるんだぞ」

勤めて声は抑えているが、どこか怒気を含んだ恭也の声が後頭部にぶつかる。

俺の心臓はドツキドキだ。

これだから煽り耐性のないやつらは。

会話を、もうちよつと華やかにしようぜマジで。

じゃないと、首筋に添えられっぱなしの刃物で発狂しちゃう俺。

「なんだ、すずかちゃんハイエース仲間かよ。俺の場合、自分で車両提供したけど」

「えつとその、ハイエースってなんですか？」

ちよつと小学生には教えられないかな。

意味はわかってないみたいだけど、どうせ碌なことじゃないって目で恭也君も見てるし。

というか、いい加減に状況の説明とか欲しいな。

「そろそろ、俺はどうすればいいのか教えてもらっても?」

「そうね。そのために来てもらったんだから、話し合いをしましょう」
そこで忍さんは、一瞬の間を置く。

こちらを試すような視線を送ってくるので、なんとなく余裕ぶって返してやった。

特別な状況でもなければ、こういうとき弱そうに見せる意味はない。
い。

こちらら、伊達に虚勢とハツタリだけでやりくりしてないぜ。

「……はあ。そう、そうよね。さすが魔法使いなんて言ってたから、普通の側の人間じゃないとは思っていたけど。こっちのことなんてお見通しというわけね」

「前置きが長えよ。あんまり焦らされると、俺って醒めちゃうタイプなんだよね」

やばい、なんのことを言ってるのかさっぱりわからん。

背後の恭也君が、父さんが只者じゃないと言ってたのは本当だったか……なんて言葉を漏らしている。

言っとくけど只者です。お前の親父は、絶対になにかを勘違いしてます!

「私たちは少し特殊な家系なの。さっきのストーカーはそれを狙ってきていた……と言うより、私と恭也を監視してすずかを攫うタイミン
グを計っていたんでしようね」

血を引いていれば、誰でもいいのよ。なんて忌々しげに付け足されても、俺にはなんのことかさっぱりだ。

特殊な家系? まあ、そりゃ月村邸もアリサの家に負けず劣らず金持ちの建物だった。

つまり、人質を取って身代金を要求したかったのだろうか。

もしくは、血筋に権力があるって可能性もある。

確か、だいぶ前に指導者の家族が拉致られたから救出して欲しいなんて依頼があつたな。

あれは酷かった。6人でチームを組んだら、1人死んで2人逃げたし。

残った内、俺以外の2人がランボーとコマンドーみたいなやつらだったから完遂はできたけど。

いや、懐かしい記憶は置いとこう。今は月村家の因縁に巻き込まれたっぽい、ということの方が重要だ。

けどこれ、別に俺は関係ないよね？

もうよくわかんないから、てきとうに返事しておく。

さつさと帰りたい。

「わ、わかった、わかったわ。もう試したりしないから、私の話を聞いてちょうだい……あの雪を弾いていた見えない壁とか、こちらとしてもあなたは未知の存在なの。はつきり言って、警戒しないわけにはいかないわ。わかってちょうだい」

やたらと早口で、忍さんがなんか言っている。

あれ？　なんか俺、今いろいろ間違えた気がしたよ？

それも、けっこうヤバい感じで。

「いや、落ち着け。俺には関係ない。それ以上はやめといた方が、お互いによい気がする」

「確かに、少し前までなら私たちは見て見ぬふりもできたでしょうね。けど、ストーカーを迎撃したのはあなたの力よ。向こうも、そう認識したと思うわ。だから秘密を知ってしまったという意味でも、あなたには協力してもらわないといけないの」

「お、おい待てやめろ。俺は秘密なんて知らん。勝手に巻き込むじゃない」

「いいえ、もう巻き込まれてるわ。私たち『夜の一族』のことを知ってしまった以上、もう後戻りはできないのよ」

確か今、夜の一族って言ったな。

ああ、俺がなんのこともかさっぱりわかってないとも知らないで。

まさか、あのやり取りでここまで勘違いしているなんて夢にも思う

まい。

ええー！

聞いちゃったよ俺!?

「今日から毎日家を焼こうぜ」

「えっ、それはいったいどういう暗号かしら」

「すげえや。今ならなにを言っても、それっぽく取ってもらえる気がしてきた。」

他になにを言って混乱させてやろうかなあ、カッコ現実逃避。

「すいません、夜の一族ってなんですか」

「えっ？ 夜の一族っていうのは、私たちの特殊な家系で……いろいろ割愛すると吸血衝動があるというか……えっ？ えっ？」

おー、困惑してるなあ。

大丈夫だよ、俺もかなり混乱してるから。

吸血衝動？ つまり、吸血鬼？ つまり、鏡に映らないの？

「ちよ、ちよっと待って。えっと、七海八雲さん、あなたは私たちのことを知ってるのよね？ けど、自分も特殊な家系だから関わらないようにしてたんじゃないの？」

「え、特殊な家系って他にもあんの？」

「私知ってる限りでは、いないけれど……え、違うの？」

ぜんぜん違いますね。

魔法使い……正確には魔導師だけど、とりあえず家系とかじゃないです。

少なくとも、俺より強い魔導師って他にもいるし。白いのとかね。

「イエス、ウィーキャン！」

「えっ、あ!! ノ、ノエル！ ファリン！ 捕まえて!!」

どごぞの偉い人は、やればできると言いました。

だから、俺も逃げようと思ったらできると思いました。

けど、とんでもない速度でメイドさんが追いかけてきました。

まるで、ジャパニメーションのメイドさんみたいでした。

地球のメイドさんは本当に怖いと思いました。

あと、とても重いということを知りました。

人間の重さじゃないですこれ、潰れる潰れる潰れる!!

45 悲しみの中の神頼み・後

さて、どうするか。

これは思ったよりもピンチかもしれない。

敵と敵と敵と敵の中に、敵っぽいのが増えてしまった。

おお女神よ、私を見捨てるというのですか!!

「やはり、お前を信用するのが無理な話だった」

「恭也君って、基本的に俺のこと嫌いだよね」

なにを今さらとか言われたけど、俺は言うほど嫌いじゃないんだよなあ。

高町の家系は、なぜかいじると楽しんだ。命がけだけど。

「あと、そっちのデカイ方のメイド。お願いしますそれ以上は左腕を捻らないで、そっちもなくなると困るんだよ痛い痛い痛い」

「ご安心ください。折れても治療は可能です」

未来じゃなくて現在の話をしませんかね？

まず折らない方向で対話を重ねるところから始めよう！

あと、出来たら体重かけるのも止めて欲しい。こいつら、どう考えても成人女性の平均体重を20キロくらいオーバーしてるんですけど。

けどまあ、これで背後に立たれたら勝ち目が消えた理由もわかった。

アリサがドアを閉めて、ほぼノータイムで背後を確保。それまで目視範囲に気配は無かったとなれば、とんでもない移動速度だなあととは思ってたけどさ。

ハハッ、人間じゃないとかバロス……

「まさか、管理外世界にガイノイド技術なんてあるとは思わなかった。それも2体。是非とも研究させてほしいね」

「うちの大事な家族を、はいどうぞなんて言うわけないでしょ。というか、あなた本当に魔法使いなの？ もっと抵抗されると思ったのだけど」

「え、もっと凄い抵抗していいの？」

手加減なんて出来ないけど、ホントにいいの？

一応、すずかの家だからって遠慮してただけどホントにいいの？
そんな感じのことを、思わせぶりに言ったら背中のメイドさんが本
気出してきた。

すいません嘘です。ただのブラフなんで、それ以上の握力上昇は手
首が千切れちゃう!!

「魔法的な抵抗は可能だけど、このメンツ相手に逃げ切れる気がしな
かったから速攻で諦めました」

「素直でいいわね」

ノエル、と忍さんが一言かければあら不思議。

なぜか握力が更に強まっていくという謎の展開に。

あれ、今のは緩めろって合図じゃないかな？

「指先の感覚が……」

「ノエル、その辺にしてあげなさい」

「申し訳ありません。モーター制御回路の信号が逆転していたようで
す」

お前、それ普通に故障じゃねえか。

なんだったら俺が診てやろう。

なあに心配ないよ。ついでにちよつと構造解析はさせてもら——
うぎい千切れる……

「ノエル、やめてやれ。お前も少しは自重しろ。次は御神真刀流の真
髄を見せることになる」

「なんて物騒な名前の流派、頭から真つ二つにされるところまで想像
した」

「真つ二つにされたいのか」

「そんなバナナ」

「あなたたち、実は仲良いんじゃないの？」

いやそれはないな。

確かに嫌いじゃないとは言ったけど、仲良しなんてことはない。

りぼんもちやおも絶対でない。

「色々と予定が狂ってしまったわ。とりあえず、無駄な抵抗をしない

のなら拘束は解くけれど?」

「隙あらば逃げます!」

「なんでヤクモさんは、その状態で自信に満ちあふれてるんですか……」

飛び出して来た部屋の扉から、顔だけ出すようにしているすずかに聞かれて考える。

どうしてだろう。

その場の勢いで動いてるから、考えたこともなかった。

「無策、無謀、無計画と三拍子そろった俺に死角はなかった」

「それは自慢になるのかしら? ともなく、ノエルとファリンは彼を押さえたまま部屋に引き摺り戻してちょうだい」

忍さんが鶴の一声を放ったことで、再び俺は交渉の席へと連れ戻される。

どう考えても、このまま一方的な展開になりそうで怖い。

あと、右腕の代わりに頭を掴むのやめてください。

人間の首は、そんなに耐久度高くないんだからね!

「よし、俺がまだ原形を留めてる内に話をしようぜ。流星に命の危険を感じてきた」

「これで少しは普通に会話できそうで安心したわ」

ん? 今まで割と普通に会話のキャッチボールしてたじゃないか。

今さらなにを言って、すいませんでした調子に乗りました。

「迂闊だったわ。まさか、勘違いしてこちらの秘密を喋らされるなんて」

「泣いてもいいのよ……すいません、手をどけてください頭蓋が碎けそうです……とりあえず、俺は秘密を漏らさないと約束しよう。今日のことは聞かなかった、お前も見なかった。それで手を打とう?」

「駄目よ。さつきも言ったけど、迎撃したのはあなたなの。それも私たちの知らない力でね。次に来たとき、きつとあいつらは警戒して来るわ。そうなったときに、あなたがいないと厄介なことになると思わない?」

それ、俺にどう関係が……

いやそうか、すずかの家に関係してるんだっけ。

過去には誘拐されたこともあるって話だし、場合によってははやてが黙ってなさそうだな。

今や守護騎士という最高戦力を保有してしまっている彼女だ。余計なことをしたやつらを殲滅、なんて恐ろしい未来が見えてしまう。

しかも、実際できるだろうから手に負えない。

「あんたらが負けなければいいんじゃない？ 協力者が他にもいるって相手が気付いたとして、それ以前に倒しとけば問題ないと思うけどな」
「俺一人で守れる範囲には限界がある。今日までは危ういバランスで睨みあいをしていたが、こちらに新たな協力者がいるとなれば……」
もつと力を付けられる前に、なんとか手を打とうって考えるかもね。

そこまでしてくる相手なの？ マジで？

「そもそも、なんで狙われてるんだよ。特殊な家系とか、血とか、吸血鬼とか、流石に断片的すぎて判断のしようがないんだけど」

「……いいわ。どうせ今の敵をなんとかするまでは、手を貸してもらわないと困るもの」

小さく吐息して、忍さんは眉間を解しながら語りはじめる。

夜の一族というのが、見た目は人間と変わらないこと。

物語上の吸血鬼みたいに、日光で溶けるとか十字架が嫌いというわけでもないらしい。

長命かつ人間離れた身体能力を持つ代わりに、人の血を摂取しないと長生きできないとのことだ。

そこからしか吸収できない栄養とかあるんだろうか。

でも、血中にはアンモニアとか混じってるからあんまり綺麗なものじゃないと思うけど。

これは言わない方が吉だろうな。頭に手を置いてるメイドさんによって、俺の頭身がいくつか減らされそうだ。

「ふーん、血液摂取による特殊能力の維持ね。面白い事例だな。で、具体的にそのなにを狙われてるんだよ」

「狙ってきているのが親族の誰かなら、月村の遺産だけで済むからいいのよ。でも、中には夜の一族という血筋そのものを狙っているやつもいるわ」

「血筋？ え、なにそれ混ぜられる血なの？」

てつきり、純血種同士じゃないとダメなのかと思った。

そういえば、さつき物語の吸血鬼とは違うって言ってたか。ということは、家系の中にランダムで発現する特性なのか？

いやいや、親族はいるらしいから純血なら確実に発現するんだろう。

つまり、一般人との混血になった場合のみ確立論になると。あるいは、血が薄まって能力が劣化する可能性も……

どうでもいいなこれ。よし、考えるのやめ！

「あんまり知っても厄介そうだから、血の話はもういいや。言い方的に、今回は後者だと思ってるってことでいいの？」

「ええ、少なくとも親族の誰かじゃないわ」

やけに確信もってるなど聞いてみたら、信頼できる人が教えてくれたのよと返ってくる。

どうやら敵ばかりって状況でもないようだ。

「さて、ここまで聞いて思ったんだけど。俺にどうして欲しいの？」

敵の殲滅か、もしくは搜索かな？」

「いいえ、そんなに難しい話じゃないわよ。とてもシンプルな解決方法があるの」

なんだそれ。

そんなのあるなら先に言って欲しいね。

俺がメイドにボコられたの意味ないじゃん。

「ま、待て忍。やっぱり考え直そう。改めて思ったが、やっぱりどうかしてる」

「恭也君の一言で、碌でもないことだったのは理解した。今度こそやめよう？ なにも言わない方が、お互いにとって最良の結果になるって！ ほら、すずかからもなにか言って!!」

「えっと、その……ヤクモさんは、夜の一族が怖いとか思わないんです

か！」

「おい俺じゃなくてお前の姉に……まあ、場所によっては怪獣大決戦みたいな相手の相手にしたりとかしてるし。見た目が人間ならいいんじゃないか？　へボな科学者が改造人間を作ろうとして、鷹と蛇とライオンと熊をぶち込まれた人間の方がよっぽど危なげな格好してたよ」

なんだそれ、と恭也君が眉間に皺を寄せている。

流石に、俺もあれを見たときは焦った。

なにがって、あれで新人類作ろうとしてたって事実には本気で焦った。

バカじゃないの？　もうただのキメラだからねそれ。

「ちよつと待て、話が逸れてんじやねえか！　とりあえず、あまりよくない考えは捨てる。穏便に話し合って決めよう。な？」

「大丈夫よ、とても穏便に済むもの」

につこり笑顔の忍さんが、なぜか怖い。

背中の冷や汗は、蛇口がぶっ壊れたみたいに凄い勢いで流れている。

なんだこの嫌な予感。マツハで死亡フラグしか見えない。

「簡単なことよ。八雲さんが、うちへ婿入りすれば全て解決するわ。すずかの旦那様ってことね」

……………ん？

「忍、やっぱり俺は賛成できない。人格的にも問題はあるが、そもそも歳の差を考えるべきだ」

「大丈夫よ。きつとすずかの方が長生きするもの」

「えっ、その理論はおかしくね？」

というか、それ以前にすずかの意味を確認しろよ。

なにを勝手にトントン拍子で決めてんだこいつらは。

ほら見ろよ。いきなりこんな話になってるから、本人も相当困惑して。

「そっか、ヤクモさんは怖くないんだ……えへへ」

ダメだ。なんか取り込み中らしいから、今は触れないでおこう。

とうか、落ちつけよ俺！　すずかの意思を確認ってなんだ！！
なんでちよつと乗り気になってんだよ、現実を見ろって！！

俺は20歳。すずかは10歳未満。

数字をよく見ろ、見事な犯罪だよこれ！　ただの事案じゃねえか！！
確かに可愛いし優しいし女神だし、あれおかしな最高の婚約者
じゃね？

どの道、法律的に16歳までは婚約なんだろうし心変わりとか考え
たら今のうちはそのままでも首が縮む痛いぐぎぎぎぎ……

「ははっ、まさか頭掴みっぱなしのメイドに助けられるとは……あの、
もう正気に戻ったんでそれ以上の荷重は首の骨ががが」

顎の位置がごりごり沈んでいくのを感じる中、自首すればセーフや
でと言う誰かの声を聞いた気がした。

誰って、言うまでもないわな。

お巡りさん私です！！

46 一寸先はゴリ・前

弾倉をリリースして足元に落とし、M1903の格納空間から新たなマガジンを呼び出す。

片腕のない不便さつたらないが、この際文句を言ってる場合でもない。

こちらから迎えに行く形で装填し、スライドを噛んで引く。

「クソッ！ なんなんだお前え!!」

時間にして10秒にも満たない動作だったが、敵からしてみればチャンスに見えたはずだ。

半分も工程が終わってない状況で、物陰から若い男が走り込んでくる。

仕方がないので、突進してくる彼には空の弾倉をくれてやろう。

落下途中のそれを、顔面狙いの軌道で蹴りあげプレゼントフォーユー。

驚いて崩れる男の姿勢に、リロードが終わった俺のデバイス。

ここまで状況が揃ってしまえば、結果は言うまでもない。

俺のサマソツが顎に入って一発KOです。

「まさかあそこで蹴りにいくとは……流石に予想できなかつた」

「なにごととも正攻法だけが解決策じゃないって、恭也君も奇策とかやってみろよ。もしかしたら、新しい世界が見えるかもしれん」

御神流にもフェイントの技くらいある。あ、そうなの？ と適当にやりとりをしながら、ラウンドシールドを通路一杯に展開する。

続く銃弾の雨を全て阻み、お返しに炸裂系のスフィアを打ち込めばだいぶ静かになってくれた。

やっぱ、世の中にバケモノ級なんて中々いるもんじゃないよね。

こんなに対処が楽だよ。

「魔法っていうのは、ずいぶん便利なものなんだな」

「まあ俺の間合いで戦えれば、恭也君なら完封できるくらいには便利だけど」

でもこれ、魔法がどうか別に関係ないよね。純粹に間合いの話

じゃないかな。

確かに魔法の応用力は高いが、別に代用できない万能さがあるわけではない。

銃弾を防ぎたいなら物陰に隠ればいいし、一掃したいなら手榴弾でも投げ込めば十分だ。

懐に入られた瞬間、恭也に完封される自信があるのがいい証拠か。実際、俺はお前の妹に完封されてるわけだし……っと、これは言っちゃダメなんだっけ。

「二長一短だと思っけどなあ？ 本来、俺って芋スナポジションなんだよね。そりゃ、絶対に安全なんてないから近接戦闘も多少はできるけど。喧嘩に毛が生えたレベルというか？」

「毛が生えたレベルで、あんな動きはできないと思うが」「魔法アシスト先輩のおかげです」

あんな動き、素で出来たら人間じゃねえよ。

だいたいはやとゲームやってなかったら、あんな面白い動き思い付きもしなかっただろう。

火を噴いたり放電したり、驚きの発想力だよね。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。今日で拠点も4ヶ所目。俺はいつたいたいまでこんなこと手伝えばいいわけ？」

「少なくとも、この組織を倒すまでだな」

どこまでやれば、倒したことになるかって話をしてるんですががが。

それに倒すたって、殺すのは無しってルールまで設定されている。それでどうやって排除すればいいって言うんですかね。

心をへし折るの？ 廃人コース行っちゃう？

「まったく、お前ら俺にいつたいたいなにしたらんだよ。やってることは一銭の得にもなんねえし、急所狙おうとすると思いが止まるし。セルフ非殺傷設定とかマジ勘弁」

「お前のいた環境がどうかは知らないが、ここで安易に殺しをやらせるわけがないだろう」

「あのね？ 恭也君。わけわかめなまま1週間も拘束されて、プチプ

チどうでもいい拠点潰しに連れ回されて、拳句の果てに解除不能なマインドコントロールだよ？ 流石に俺のイライラも有頂天ですよ？」
っていうかね。

俺が知らない間に、なんか逆らえない精神汚染とかどういう了見なの？

マツハで動くメイドに拘束されて、車でメリーゴーランドって意味不明な記憶しかないんだけど。

気付いたら忍って人の命令には逆らえないし、なんにも覚えてないってどういう状態だろうね。

これで平静を保つ方が無理じゃないかな。

目下、激オコスティックファイナリアリタイプンぷんどリームだから覚えとけ。

「できれば、俺だってお前に頼りたくはない。だが、この1週間で戦力になることはよくわかってしまったからな。今さら必要ないとも言えなくなった。それに、どっちにしろ俺にはお前の暗示を解除してやる手段がない」

「……まあ、確かにここで文句言っただけじゃなかったねえわな。帰ったところで、逆らえないから嫌味の1つも言えないけどな」

なんにも覚えてないってのが、また性質の悪い話だ。

自分の性格上、たぶん交渉っぽいことはしたんだろうけどなあ。

よっぽどぶっかけて相手を怒らせたのか、もともと信用されてなかったのか。暗示なんてかかっている辺り、後者が濃厚な気はする。

どっちにしろ、どうしようもないなこれ。

「さて、今日の仕事はもう終わりでいいの？」

「……いや。まだ残っているらしい」

あれ？ 撃ち洩らしたなんてあったかな。

さっきので処理しきったと思ったけど。

「アクティブソナー、エコー」

展開した魔法式で、跳ね返ってきた音響を分析していく。

今いる場所から、更に奥の映像が輪郭だけの映像として処理され俺の脳内に流れ込んできた。

死屍累々の人たち。廊下。廊下。廊下。ゴミ。廊下。人影。廊下……人、人影？

「おい、どうなってるんだこの人影。生体反応がないぞ。夜中の廊下を疾走する人体模型とか？」

「生き物じゃない、か。よかつたな、今回は当たりかもしれないぞ」

人体模型って当たりだったのか。初めて知ったわ。

というか、この見えた地雷も何個目だったかな。

そろそろ貧乏くじにも、嫌気が差してきたんだぜ。

「行くぞ。そいつに聞きたいことが……いや、捕獲して連れ帰りたい」「一気にホラーっぽくなってきた。学校じゃないのに学校の怪談とはこれいかに」

やだなー怖いなー、と思いつつながら恭也の先導で廊下を進む。

途中で爆散したスーツ集団を跨ぎ、ゴミをクズカゴにシュートする遊びをやって恭也に殴られつつも更に奥へ。

廃墟を再利用したのか専用に使った施設なのか、微妙に判断し辛い汚れ具合の建築だ。

匠さんこつちです。

早く更地にしてあげて！

「その角を曲がったところだな。ピクリとも動かないんだけど、ホントにマネキンってオチは？」

「たぶん、ないだろうな。戦力は未知数だから気を付けろよ？」

「その中途半端な優しさに涙が出そう……」

こつそり通路から顔を出して、奥の様子をうかがってみる。

見えるのは、直立不動で通路のど真ん中を占拠するガチムチマツチヨ。

レスリング会場はここじゃない。さっさと淫夢の世界に帰るんだ！
！と言つてやりたい兄貴がそこにいた。

いや、スーツ姿なんだけどね？

「こつちには気付いていると思うんだが……動かないな」

「ああん？ ホイホイチャーハン？」

「……腹でも減ったのか？」

「よかった。恭也君がこれを理解できちゃったら、今すぐ逃げるところだった」

正体不明の敵を前にケツドラムとか……いや、落ち着け俺。

たぶんこれ、暗示のせいでマルチタスクが乱れてるだけだから。きつとそうだから、白目。

「なに、あの危なそうな人。立ったまま死んでるの?」

「そもそも生き物じゃないだろうな。たぶん、ロボットだ」

なるほど、ロボット。ロボットね。ふーん……

「知り合いに、石田先生っていう優秀な医者があるんだけどさ」

「俺の頭は正常だ」

あ、そうなの?

「じゃあなんだ。あれがロボット? 確かに生体反応はないけど……は? マジで? あれがアンドロイドって? おいおい、この世界の文明レベルで精巧な人型なんて作れたのかよ。阿波踊りが限界じゃなかったのか……」

あとは、自転車にも乗れたっけ?

……今どうでもいいなこれ。

目視した限り、おそらくガチムチは人工皮膚で覆われている。

違ったとしても、それに近い滑らかな素材なのは間違いない。どれだけ評価を下方修正しても、特殊メイク以下の素材にはならないだろう。

ぶつちやけ、普通の肌に見えるレベルだ。

果たして、あんなものが管理外世界の技術で製造できるだろうか。

いや、出来るかもしれないけど。少なくとも、この地球で可能な技術水準なのかは怪しい。

つまり……どういうことだっばよ。

「ごちやごちや言ってないで、あれを確保するぞ」

「マジかよ。最近、俺ってば荒事ばかりな気がしてくるなあ」

相変わらず、ガチムチ1号に動きはない。

隣で恭也が刀を抜いたが、やっぱり停止したままだ。

視覚情報にだけ頼っているのか、もしくは起動してない可能性もある

る。

起動してない方に全力でベットしたい。

「魔法で援護してくれ」

「俺をRPGの魔法使いと勘違いしてないか？ あんまり便利屋扱いしてくれるなよ」

いいからいくぞ、と叱責を残して恭也が飛び出す。

同時に、俺もバインドをガチムチ1号の両手足に発動する。

リングバインド。

空中に発生させたリングで、相手を拘束する一般的な捕縛魔法だが。

なにが起こったのか、これがガチムチ1号を拘束したと同時に歪んで霧散してしまった。

ハアツ!? ふっざけんな！

「恭也、さがれ！」

恭也が急ブレーキをかける。

その横を抜ける軌道で、スフィアを複数ばら撒く。

直撃するかしないかというところで、やはり魔法が強制解除された。

これは、アレだな。なんとというか……やべえ。

ガチムチ1号の顔が僅かにあがる。

怪しげに眼が光った気がした。

47 一寸先はゴリ・後

ところで、あのガチムチ1号を見てくれ。こいつをどう思う？
すごく……大きいです……

いや、冗談とかではなくてね？

近付いてみてわかったけど、こいつ2メートルくらいあるんだよね。

正直、黒のスーツも相まってゴリラにしか見えない。

ヤバイ。強そう。

「おい、なにをやってるんだ！ 魔法はどうした!!」

「まあ待て。まだ慌てるような時間じゃない」

唸りを上げる拳を、余裕で避けながら恭也君が声を荒げる。

いったいなに見てたんだよ。今、魔法無効化しただろこいつ！

しかも、実弾くらって平気ときた。思わず声が震えちやいそう。

頭の片隅で、アイルビーバアアアアック!! とか誰かが叫んでいる。

きつと気のせいだよな。

「うわあ……これはAMFですね。なんだこれは……たまげたなあ」

「おい、あんまり悠長に言ってる場合じゃないぞー」

わかってるわかってる。

だから、もうちよつとその調子で逃げ回っててくれよ。

今いろいろ考えてるんだから。

「あれは機械。じゃあ、俺のリミッターも作動しないよね。ぶっ壊してもいいなら、なんとかかなるけど?」

「できるだけ、原形は残すように忍から言われている。なんとかしろ」
俺の近くまで跳び退いてきた恭也が、とんでもないことを言っている。

そんな無茶な。

じゃあ動力を切るか、もしくはCPUを切り離してもいい。

人型だし、順当にいけば頭に処理領域を作ってると思うけど。

首をばっさりやってみればいいよ。

「そんな安易な場所に、あえて弱点を作るのか？」

「わかってないねえ、恭也君は。人間の構造って、ある意味で奇跡的なバランスしてるんだぜ。できなくはないけど、あえて人体構造を無視して人型にするのは難しいんだ」

特に、あれはAMFなんて特殊な機構も搭載してるっぽい。

十中八九、CPU関連は頭部に集約されているだろう。

「とりあえず首を落とそう。こつちも戦術を変えるから、それでもダメな場合は破壊させてもらう」

「……わかった。その案でいこう」

ごつんと武器をぶつけあって、お互いの連携を確認する。

まったく。まさか、こんな形で共闘することになるとは思わなかった。

完全に予想GUYです。

「はい、ちょっと邪魔だから射線を空けてねー」

「気軽に言ってくれる！」

先に跳び出した恭也に後ろから声をかけて、通常弾をガチムチ1号の顔面へ叩きこむ。

だが、やっぱりというか穴は空けども無傷といった感じだ。

仕方ないので弾倉を変える。

その間に突っ込んだ前衛の攻撃も、あえなく弾かれてしまったらしい。

どうでもいいけど、あの装甲固すぎやしませんかね。

「流石ガチムチ。きつと体の鍛え方が違うんですね、錯乱」

果たして、ロボットスクワット何回分の筋肉なんだろう。

……ん？ 筋肉？ ってか、ロボットスクワットってなんだよ。

ダメだな。わけのわからん暗示で乱れたマルチタスクは、しばらく当てにできないかもな。

「ほい、そこでもつかい離れる！」

「さっきからお前は……後で覚えとけよー」

わあ、怖い。

大振りな胴への一撃でガチムチ1号のガードを誘いつつ、恭也が体

を大きく沈める。

おかげで顔面までのコースがガラガラだ。

遠慮なく『ペイント弾』を叩き込む。

センターに入れてスイッチ！

「H A H A H A！ まさか、演習弾を使ってくるとは思わなかっただろう。俺も思わなかったよ!!」

「なるほど、目潰しか」

「いや、たかがメインカメラをやっただけだから油断しないように。絶対、他にもセンサーあるだろ」

ペイント弾だって、ワンマガジン分しかない。

改修したM1903の試射用だったから、あんまり持ち合わせがないんだよな。

「だが、これで攻めやすくなった。あとは、あの固い素材をどう突破するかだが」

「そこは恭也君の仕事だろ。なんかないの?」
秘奥義とかそういうの。

海賊王の船員には、刀で鉄が斬れるとんでもないのがいたぞ。

なんの話だ。マンガだね。1センチ単位で刻むぞ。しゅみましえん!

とか言ったら、突如ガチムチ1号が突進してきた。

するりと横に逃げた恭也と、タイミングを逃して逃げる俺。

なんとか壁を蹴って頭上を抜けられたが、勢い余って突っ込んだガチムチ1号が壁を突き破る。

いやいや、なんだあれ。あんなのくらったら、骨がバラバラになるわ。

「さっきまで、あれと接近戦やってた恭也君マジパネエ」

「そう思うなら代わってくれ」

絶対いやです。

「アルターデコイ、セット恭也」

壁の向こうから這い出してきたガチムチ1号の前で、恭也が複数体に分身する。

どうやら相手は、一気に増えた対象にAIが追いついていないらしい。

戸惑うように首を巡らせ、判断を迷っているようだ。

「なるほど、センサー類はこっちの基準にしてあんのか。あんの変態科学者め……」

よし、ようやくいろいろわかってきたぞ。

あの装甲もAMFも、正直ここにあっていいもんじゃない。

管理局に嗅ぎつけられたらどうするつもり……ああそうか。今、こつて手が出せない場所だっけ。

「変なところでちゃんと考えてあるのが、無性に腹立つな！」

「さつきから、なにをぶちやぶちやと！ それに、なんだこれは!!」

「ただのめくらましだ。相手のセンサー類は騙せたみたいだから、あとは恭也君のリアルラックに祈ってるよ！」

無造作に振られたガチムチ1号の腕が、近くにいた幻影を簡単に吹き飛ばす。

やっぱり、触られると消えちゃうか。

こうなつてくると、フィールド発生領域の安定化をやらないまま出てきて正解だったかもな。

完全に魔法を封じられたら、今のままだとお荷物になっちゃう。

「よし、落ち着け。ぶつ壊さないで捕まえる方法……首を落とす方法。なんで壊したらダメなん、とか考えるな」

そうだ、落ち着け。クールにいこう。

AMFの弱点は、魔法行使によつて発生した物理現象は撃ち消せないことだ。

つまり、闇の書にやったのと同じことをやれば有効打にはなる。間違はなく、頭はパーンするだろうけど。

じゃあ、他に俺の手持ちで同じようなことができるのと言え……「あつ、すつげえ嫌な方法を思い付いちやっただ……」

なんだ！ と恭也君が怒鳴るように言ってくる。

10人近く出した幻影も、この狭い場所じやいいのだ。今や、減りに減つて3人しか残っていない。

「恭也君、なんの疑問も持たないで敵に突っ込んで行ける？」

「お前を信用しろって意味か？ 難しいな」

「ここまで信じてもらえないとか、いっそ清々しくて目から汗が……いや、行ってる場合じゃないな。」

「わかった。じゃあ、恭也君は困ね。あと、なんか壊れてもいい刃物持ってるかい？」

「持ってるわけないだろ。さっき倒してきたやつらが持ってるかもな」

その手があったか。

とりあえずデコイにランダムな踊りを命令し、加速魔法で一時的に戦場を離脱する。

さっさと行ってこいって目をしてたけど、恭也君大丈夫だよな？

戻ったらミンチなんて、ちよつと笑えそうもない。

「ぐつ、いったいなにをして……」

「ナニしてるように見えるんですかね？」

意識を取り戻しかけたスーツを華麗に沈めなおし、懐からコンバツトナイフを拝借する。

デバイスが自動的に持てなくなるが、贅沢は言ってもらえない。大人しくホルスターへ仕舞って、ナイフの握り心地を確認する。

こいつら、無駄にいい装備もってやがるな。

刃渡りも20センチ前後あるし。うん、これならいけるだろう。

大急ぎで引き返し、辛うじてたんたんだぬきを歌いながらヒンズースクワットをしていた最後の幻影恭也が潰されるタイミングで合流できた。

あとは攻めるだけだ。

「さあ、ヤクモさんの異次元CCCを見せよう」

「喧嘩に毛が生えた程度のCCCってなんだ」

よく覚えてんねえ！

投げ出すようにガチムチ1号へと突っ込み、直前で急停止する。

敵の視線は俺に釘付けだが、もう1人いるの忘れてませんか？

卑怯？ フハハ！ なんとでも言うがいい！！

「あ、ちよ、おい！」

刃物が効かないと判断したのか、恭也が背後から強烈な打撃を叩きこむ。

姿勢を崩すガチムチ1号。

そのまま俺に向かって倒れ込んできて……おいおい、このままだと俺が潰されちゃアツー！

「……生きてるか？」

「死ぬかと思っただわ!!」

「というか重い！」

ガチムチの愛が物理的に重すぎる!!

できたら、押し倒されるのは女の子でお願いしたいね。

人生初の体験がこれって、ちよつと悲しくなってくるよ。

俺の貞操、カムバツク……

「む、機能が停止している？ ああ、首に刺さったナイフがケーブルを切断したのか。どうやって刺した？」

「お前、男に刺す刺さないの話はすいませんすいません今は避けられないから振り上げるのやめてください!!」

凄く怖い顔で刀を振りあげたまま、恭也は顎で先を促してきた。

今回はお手柄だったんだし、労いの言葉とかあってもいいんじゃないかな。

思わず漏れ出す溜息を隠さないで、体から力を抜きつつ考える。

「どうやったたら伝わるだろう。」

「とりあえず、高周波ブレードってわかる？」

あ、眉間に皺が寄った。

これは無理だな。諦めよう。

48 痩せ吸血鬼、魔法使いを恐れず

ガチムチ1号をなんとか確保し、構造分析してわかったことがある。

俺がいない間に機動兵器の装甲解析を終えたのかと思ったけど、どうやらそうじゃないっぽい。

アンドロイドのフレームとして構造を成型する際に、透過の効力はなくなってしまったようだ。

よかった。これで透明化なんてされてたら、苦戦ですまなかつただろう。

ガチムチ1号はなかまをよんだ！

ガチムチ2号があらわれた！

ガチムチ3号があらわれた！

なんとガチムチたちが……!?!

くんずほぐれつしてキングホモになった！

「気持ち悪い、普通に気持ち悪い。この発想を、あの変態に教えてはいけない気がする」

せめて、助言は合体ロボくらいにしとこう。

もしかしたら、継ぎ目ができて弱点になるかもしれない。

「にしても、装甲の強度は保ったまま加工できたのか。あいつ、研究者のくせに技術屋の仕事とるなよな」

それが証拠に、ぶん殴ったらスパナが曲がってしまった。

こちらに魔法アシストがあつたとは言え、流星に道具が歪むとは。武器そのものを強化するか、相応の質量をぶつけないと効果は薄いかな。

「その辺、ベルカ系は効果ありそうだなあ。まさか、量産機をこのレベルで揃えてくるとは思えないけど」

「量産？・これが量産されるかもしれないの？」

不意に忍さんの声が割り込んできて、思わずドキツとする。

声にびつくりしたっていうより、その内容にだけど。

ガチムチ量産とか勘弁してください。

世紀末が到来するぞ。

「せっかく部屋をくれたのかと思つたら、プライバシーとはいつたい」「いいから教えてもらえるかしら?」

「どうせ逆らえないし、いいけどね」

とりあえず、これがいかに非効率で製造コストの無駄かを教えてやる。

わざわざ人型にする辺り、作者の嫌がらせが見て取れるようだ。

なにをどうやって売り込んだのかしらないが、頑張れば量産できそうでしょ? って構造なのも含めてだが。

実際は、こんなの作るぐらいならラジコンに銃を背負わせた方がマシかもしれない。

「精巧な人型なら、汎用性の広さもあるんじゃないかしら」

「それは意見の相違だな。汎用性を求めるくらいなら、安くて大量投入できる専用性を重視すべきだ。餅は餅屋だよ」

目的と用途に合わせて分業させる方が、構造も簡略化できるしね。

ロマンは認めるけど、単機に全部やらせるとか効率が悪すぎるだろう常考。

無駄が省ければ、それだけコストダウンも見込める。安くなれば量産しやすいし、製造ラインの削減もできるだろう。

道具つてのは、ただ強力な物を作ればいいわけじゃない。

「なるほどね。1機しかいなかった理由も、それで説明がつくわ」

「まあ、敵さんが何機ぐらい保有してるかは知らないけどな」

わからんと言えば、あのタイミングで出てきた理由もか。

ガチムチ1号を倒したあと、当然のように恭也と施設を調べまわった。しかし、あの施設に重要なものは見付かっていない。

防衛のためでもなく、決戦のためでもなく。

じゃあ、なんで出てきたんだろう。

今のところは、嫌がらせが一番ありそうな理由だけだ。

「とりあえず、これはこっちで製造できる代物じゃないから。相手の保有量が増えることはねえよ」

「そうかしら? 造れなくても、新しく仕入れる可能性があるわよ?」

「ルートは抑えさせたから、たぶん大丈夫だと思うけどな。ちなみに伝手について尋問するのは自由だけど、俺の所属と同じで聞き出したあとは自己責任だからよろしく」

少し考えた素振りのあと、わかったわと言葉を残して忍が部屋を出ていった。

引き続き、機体の解析でもやってろってことかな？

「んー、時間の経過に違和感はないか。記憶の混濁なし、整合性もおつけー。今回は使われなかったか」

まあ、違和感すら消せるレベルの暗示なら意味ないんだけどさ。どっちにしても、判断基準としては曖昧だよー。

暗示がかかる前の俺、なにか布石の1つでも置いとけよ。

孔明先生が草葉の陰で泣いてるぞ。

「布石……布石、ねえ。俺の性格を考えたら、あんまり期待はできないんだけど。アンドロイド関係で、なにか忘れてるような？」
はて、なんだろう。

この辺りの違和感を突き詰めていけば、意外と簡単に答えが出たりするかもしれない。

突き詰める前に、暗示の邪魔が入らないという前提は必要だが。

……はいはい、無理ゲー無理ゲー。

まさか、一般人に顎で使われる日がこようとは。プロの傭兵ってなんだっけ？

「あんばんっー！」

「えっ……お腹が減ったんです、か？」

本日2度目のビックリに振り返ると、入口でもじもじしているすずかを見つけた。

姉妹そろって、気配を消すのが上手すぎて困る。

とりあえず、ご飯は出てるからおかわりは結構です。

「今日は来客が多いな。どうした」

「いえ、その……やっぱり、怒ってますよね」

強張った表情で、肩を締めながらすずかは声を震わせる。

しばらく見ないと思ったら、どうやらなにか言われるのが怖いから

逃げてたらしい。

悪態を吐く相手くらい選びますけど？

もしくは、キレキャラだとも思われてたのかな。

「その、ごめんなさい！ 私にできることなら、なんでもしますから！！」

「ん？ 今なんでもって」

いやいや、いかんいかん。

なんか、すずかの相手をしてると変なタガが外れそうになるな。

自制心が吹っ飛ぶというか、思考が勝手にそっちへ傾くというか

……

「あれ、この感覚は暗示？ お前も使えんの!?」

「え、いえ。よくわからないです」

じゃあ、無意識に？

なんて迷惑なロリコン製造機。これは俺が貰うしかな、ちげーよ落ち着け。

マルチタスクをフル回転させる。邪な思考と正常な思考を切り離せ。

必要な内容だけ推考を続け、不要なものはプールし続けるんだ。

大丈夫。いける。

絶対、暗示なんかには負けない！

「よし、あとはこれで邪な思考をサーキットさせて閉じ込めれば」

「凄い汗ですけど、大丈夫ですか!」

「おう心配するな。しかし、ホントすずかは優しい上に将来美人になりそうで優良物件——ダメだこれ！」

暗示には勝てなかったよ……

もう、いろいろ投げ捨てて楽になりたい。

お巡りさんこつちです！

「レアスキルとか専門外すぎてどうしようもないよね。魔法構築理論とかになるのかな？ いや、そもそもこれレアスキルなのか？」

「ごめんなさい！ あの、暗示にかけたいわけじゃないんです!!」

「わかってるから落ち着け、無意識下の発動なんだろう？ となると、嫌

われたくないっていう深層心理からきてるのか」

強い思いが、隠された力を発動させている。

うはっ、なんて中二チック。

内容が強制ロリコン電波じゃなければ、少年漫画展開も夢じゃなかっただろうに。

それにしても、どうするかな。

原因はわかったけど、記憶が消えてる間にやられたことのフォローなんて俺にはできない。

なに言ったかも覚えてないし、なにされたのかもわかんないからね。

「嫌われたくない、の反転だから強制ロリコン電波までは理解したんだけどなあ。ともかく、俺がお前を嫌うことはないから安心しろよ。お前の姉がやったことだって、許すことはないけど理解はできる」

隠したいことがあるから記憶を消す。

信用できない相手に、余計な情報を持たせたくはない。

能力は必要だから、自分が有利になるよう状況を整える。

まあ、この辺は道理だな。やり方は強引だけど。

「ここは管理外世界だ。俺の基準から言えば、お前らなんてただの珍しい能力を持つてるだけの人間だな。基本的に、周りと違うの言うのは迫害の対象になる。この世界じゃ、お前らの能力は不必要に強力なんだろうよ」

「……………けど、私たちは血を飲みます。人の血を。ヤクモさんの世界でも、やっぱりそれは異端なんじゃありませんか？」

「血？ お前、血液はアンモニアを含んで——いや、これはやめとこ。う。はつきり言うが、そんな理由で俺の記憶が消されたなら泣きたくなるレベルだ。吸血？ お前、ガチのドラゴン目の前にしても同じこと言えんの？」

え、ドラゴン？ と困惑気味なすずかちゃん可愛いです。

……ダメだな。もうこの感情抑制は諦めよう。

手を出さなきゃセーフだ。

イエスロリータノータツチ。いい言葉を教えてもらっていてよ

かった。

「それにお前らの暗示って、別にレアスキルじゃなくてもできるだろう？ こつちにだって、5円玉くるくる回して空に投げると蟲が飛ぶって聞いたが？」

「確かにそうですけど、蟲は飛ばないと思います」

え、そうなの？ これははやてに騙されたかな。

まあいいや。

「こつちじゃ、生体技術もそれなりに進んでるからなあ。その気になれば、脳みそに電極刺して洗脳とかもできるぜ？ そこへいくと、お前らの場合は良心が邪魔して能力が半減してるだけマシだよ」

やろうと思えば、記憶全消しの廃人とかもできそうだしね。

制御できてないはずかでの影響力だ。なにかの条件があつたとしても、忍の方はやろうと思えばできただろう。

「そんなことより、確か機械いじり好きだったよな？ ちょっとこつち来て手伝ってくれ。長年の恋人に愛想尽かされてな。左腕1本だと不便でしかたない」

「恋人？ よくわかりませんが、お手伝いなら任せてください！」

ようやく入口から1歩踏み出して、さすががこちらへ駆け寄ってくる。

さつきよりは、表情もいくらか明るい。

元気になってくれたようだなによりだ。

「このロボット、首のところが凄いいことになってますね。どうやってらこんなことに」

「ああ、俺の魔法に音響探知系のバリエーションがあつてな」

「振動だけ抽出して、高周波に変換したんですか？ 超音波振動メスなんていうのもありますけど、魔法って本当に便利なんですね」

お、おう。音響探知って聞いただけで、そんなに出るのか。

やっぱこの子ばないわ。

暗示とか吸血より、この学習能力の方が異常じゃね？

49 現実にも夢を求む

あの、右腕はどうしたんですか？

ちよつと落つこととしてきちやつた、テヘペロ！

え!? 落としたって、どうしてそんなことに……

坊やだからさ!!

「あの、それだと漏れなく男の子が腕を落とすことになると思いますけど」

「とんでもない世の中が到来しそうだな」

きつと、みんな錬金術で人体練成とかするに違いない。

鎧な弟が賢者の石で水を克服するんですねわかります。

「まあ心配しなくても、そのうち代わりの腕でも作るさ。ロケットパンチとドリル、どっちがいいと思う?」

「ヤクモさんって、いつでもポジティブですよね」

「それは褒めてるのか?」

別にいいけどな、と付け加えて再び手元に集中する。

今はガチムチ1号の人工皮膚を全て取っ払い終え、胸部を開いている真つ最中だ。

光学迷彩が死んだおかげか、こいつの構造解析にはアクティブソーナーがとても役立つた。

ダメもとの超音波検査が、すんなり通ったのには驚きだが。

まあ、楽になるのは大歓迎!

「厚さ20ミリの装甲とか、ホントふざけんよ。どこの戦車だよ」
「そんなに薄い装甲の戦車あるわけ……あっ」

よし、チハさんの悪口はそこまでにしてもらおうか。

というか、よくそんなの知ってたな。流星に引くわ。

「ちよつとここ持ってくれ。右手ないとホントに不便だな」

「持ちました。魔法でなんとかならないんですか?」

「バイオ方面が専門じゃないのもあるけど、生やすとかそういうのはちよつと……」

考えたことはあるけど、できたら人間はやめたくはない。

強いやつを、片っぱしから丸呑みにしてくのも勘弁だ。そのうち、肌が緑に変色しても困る。

「ああ、でも義手とかはできるかもな。そのうちなんか考えるよ」
仮に自作するとして、ロケットパンチとドリルのどっちがいいだろう。

迷うな。

え、そんなの機能付けてどうするのかって？

ロマンだよロマン。

「あ、腕を取り外すから邪魔な制御基盤を取り外してくれ」

「わかりました。でも、この構造だと下のサーボモーターごとになっちゃいますよ?」

そこは仕方ないね。

きつと、装甲の厚さ優先で構造を簡略化したんだろ。

整備がし難そうなことこの上ない。

「ところでその。実はまだ別にお話があるんです」

「ん? ああ、サーボに繋がってる配線は切ってくれていいよ」

いえ、そうではなくて……と言いつつ淀みながらも、てきぱきした動作でガチムチ1号の肩が取り外される。

にしても軽いなあ。これだけ厚い装甲なのに、さすがでも持てるとか。

質量とかどうなってんだよ。

「実は、はやてちゃんのお家のクリスマス会に呼ばれてるんです。明後日なんですけど」

「なるほど。それで良心の限界値が来て、逃げ回るのをやめたと」

「ごめんなさい……」

別に謝らなくても。いや、今のは俺の言い方が悪かったか。

やっぱり、はやてが異常なんだよな。

つい普段の調子で喋っても、あいつは気にせず返してくるし。

これも包容力でいいんだろうか。

「まあ、楽しんでこい。それにしてもクリスマスかあ。俺にはよくわからん行事だけど、なにすんの?」

「えっと、プレゼントの交換とか。他にもケーキを食べたり遊んだりします」

「誕生日となにが違うんだ。さっぱりわからん」

でも、よく考えたらキリスト生誕を祝ってる日なんだっけ？

こんな盛大に祝われるなんて、当時の本人は思いもしなかつたろうな。

重い十字架背負っただけの甲斐はあつたってことだ。

今ごろ、草葉の陰で「イエス！」と喜びの声を上げているに違いない。

「イエス・キリストだけにな！」

「キリスト教に、なにか恨みでもあるんですか？」

いや、勢いで言っただけだから。

今の一瞬で、世界中のいろんな人を敵に回した自覚はあるけどね。

もう敵ばかりだけど根性さえあれば関係ないよねっ、白目。

「おっ、やっぱりあつたかAMF発生装置。あれ、なんか小型化されて……」

「AMF？ なんですかそれ」

「ある程度の魔法を無効化する装置だ。俺が描いた図面よりちっちゃくなってるけど」

ガチムチの腹に収められた機械を、さすがに興味深そうに眺めている。

未知の技術だし、機械いじり大好きな彼女にはさぞ輝いて見えるのだろう。

ただ、俺からしてみれば恐ろしさしか感じられない。

あのアホ、実は自力で解析できるんじゃないかな。

「問題は範囲設定と、それを支えられるだけのエネルギー源か。やっぱり、出力が足りないってのは大きいな」

「この前の、不思議なエンジンとかじゃダメなんですか？ 見たこともない技術ばかりでしたけど」

「あれを小型化するのは流石に骨が折れるな。やってできないことはないけど、量産するにはコストがかかりすぎる」

こんなロボットをいっぱい作るんですか？ と不安気なすずかに言われて言葉に詰まる。

いや、このガチムチを量産するつもりはないからね？

こんななん向こうから大量に走ってきたら、戦力以上に見た目がきつい。

精神攻撃は基本なんて、いったい誰が考えたんだ。

「安心しろ。なにか起こるとしても、ここじゃなくて遠くのどこかだ。お前も家族も友達も、そうそう危険な目には合わねえよ」

正直、何人かは例外もいるけど。

あいつらの場合、おそらく自分で首突っ込んでくるだろうからノーカンってことで。

俺はそこまで面倒見きれんよ。

「……それって、ヤクモさんはカウントされてませんよね？」

「解せぬ。なんで俺を頭数にいれようと思った」

おいおい、あんま気安くすんなよ友達なのかと思っちゃうだろ。

え、ぼつち？ ちちち違いますけど？

いっぱいいるし友達！ ネットとかで大人気だし俺!!

メイン盾キタ！ これで勝つる！ って言われるくらいにはモテモテだし、震え声。

「とりあえず、俺の心配は必要ない。あと、これ以上この話を続けるということは俺の心を抉ることになるのが確定的明らか……うん、この勢いは俺にはとても出せないな……やはりブロントさんは格が違った」

「えっ?」

はやてだったら、最後まで責任もってやりきらんかいとか言ってくれたかな。

難しいんだよあの言語。

それにしても、どいつもこいつも俺のこと心配しすぎじゃない？

もしかして貧弱に見えてんのかな。まあ弱そうに見えるのは、油断を誘えていいんだけどさ。

「えっとよくわかりませんが、私は心配します。ヤクモさんは、私を

怖がらない初めての理解者ですから」

「アリサとかなのはとかはやてとか。別に言っても受け入れると思うけどなあ。どうせ、首筋に噛みついて相手が干からびるまで血を吸うわけじゃないんでしょう？」

「そ、そんな怖いことできません！」

ですよねー。

俺のいた環境だと、人間よりデカイ吸血種だって存在したからなあ。

ぶつちやけ、あれは吸血っていうより捕食なんだけど。

生きるために体液が必要で、それ以外は排泄物にするっていうんだから丸呑みにされたやつらが報われない。

「いかん、仕事のことを思い出すと暗い記憶しか蘇ってこないな。どうかひとつ、暗示でこの辺のを消してやくれませんかね？」

「ま、間違えて全部消しても怒らないなら努力してみます！」

廃人まっしぐらなんですがそれは……

というか、それも怒れないよね？

真っ白に燃え尽きて、もはや動かなくなるやつだよねそれ！

もしそうだったらどうしてくれる。責任取れんのか！

「大丈夫です。もしダメだったら、私がちゃんと面倒を見ます。ヤクモさんは家族以外だと初めての理解者なんですから、安心してください」

「お前の愛が重すぎて漏らしそう……」

ちよつと不安になって「冗談だよね？」と聞けば「ええ、もちろんです」と笑顔で答えがくる。

元気が出たってことでもいいのかな、これ。

実際、やろうと思えばできそうだから怖いんだけど。

え、冗談だよね？ いや、やめろ。真剣な顔で「もう、冗談ですよ」とか言うな！

どれ信じていいかわからなくなるだろ！！

「でも、ヤクモさんを心配してるのは本当です。私だけじゃなくて、きつとはやてちゃんも。あんまり無茶するなら、私にだって考えがあ

りますからね？」

「わー、こわーい。ロリこわーい……」

なんだ。この辺りは、もしかして逞しい幼女を量産する土地柄なのか？

明らかにステ振り間違ってるだろ！

この哀れなメイン盾に、ちよつとはボーナスステくれませんかね！！

50 開いた口を塞がない・前

その日、警察はとある家からガラスの割れる音と発砲音が聞こえたという通報を受けた。

この平和な日本に発砲音など、普通ではあり得ないことだろう。もちろん誤報という可能性を考えつつも、すぐさま近くの交番から警官が数名派遣された。

だが、行かされる方は冗談じゃない。

そんなまさかと自分に言い聞かせながらも、言い知れない不安は込み上げてくる。

慌てて駆け付けるまで、彼らは一様に押し黙ったままだった。

「ごめんなさい。ちよつとクリスマスパーティーがヒートアップしてもうて、ご近所さんに迷惑かけてしまいました」

玄関先で彼らを出迎えたのは、車椅子の少女と金髪の女性だ。

なぜかドアは外れ、横にたてかけてあるが。しかし、それ以上に申し訳なさそう表情で頭を下げる2人が警官たちを困惑させた。

聞けば、この八神宅では友人を呼んでクリスマスパーティーを行っていたらしい。

今日が12月24日であることを考えれば、特に不審な点はないだろう。

集まった友人たちは、美味しい料理やケーキやミニゲームで楽しく騒いでいた。そして、今回のことはそれが盛り上がりすぎたせい起こった事故だという。

窓の割れる音は、同宅で飼っているペットが音に驚いて突撃したからとのこと。

事実、検分した犬はかなりの大型であり変なまゆ毛をしていた。

「では、発砲音が聞こえたというのは」

「ああー……きつとクラッカーの音やと思います。けっこう、いっばい使ってしまったんです」

「なるほど。では最後に、一応ガラスが割れたところを確認しておきたいのですが」

「どうぞ。庭の方から回れますよ」

金髪の女性に先導され、警官たちは八神宅の庭へと回り込む。

現場には散乱したガラス片と、頭を下げる参加者たち。なぜか1人だけ土下座しているが、それはまあいいだろう。

庭の端に集められたガラクタの山が気になるも、それ以外に不審な点は見当たらない。

あれはなにかと聞けば、この騒ぎで出てしまったゴミだと言う。

確かにこれだけの惨状なら、壊れた物の1つや2つぐらいあるはずだ。それをまとめているのだろうと判断して、警官たちは安堵の息を吐く。

通報は勘違いだった。

平和な日本は、今日も変わらずに平和だったのだ。

「では、本官たちは帰ります。クリスマスを楽しく過ごすのはかまいませんが、次からは気を付けてください」

「はい。ホンマにすいませんでした」

最後にいくつかの注意勧告をして、彼らは交番への帰路につく。来るときと違って、その足取りは軽やかだ。

しかし、彼らは見落としている。

ガラス片の多くは、室内に散乱していた事実を。

‡

少し時間は戻る。

この日は八神宅でクリスマスパーティーが開催され、話しでしか聞いていかなかった者同士の対面が果たされる日だった。

例えば守護騎士たちは高町なのはがどんなバケモノかとビクビクしていたし、アリサは大型犬のザフィーラと会えるのにわくわくしていた。

すずかも久しぶりにはやと会えて、嬉しい反面後ろめたい気持ちで溢れている。

いっそ言ってしまう方がいいのかもしれないが。ここでヤクモのことを言ってしまうえば、嫌われてしまうんじゃないかと不安になってしまふ。

そうじゃなくても、下手に暴露すれば忍が暗示で解決してしまうかもしれない。

もうこれ以上、すずかは友達の気持ち書き換えるような真似はしたくなかった。

「どうしたんや、すずかちゃん?」

「あつ……ううん、なんでもないの。その、ヤクモさんが心配だなんて」

「ああ、そのことかいな。大丈夫や思うよ。腕の1本や2本で野垂れ死ぬタイプやないし。傷口だけは塞がったって、石田先生もびつくりしてはったからなあ」

もちろん、激しい運動は論外と言っていたが。きつとヤクモは大人しくしていないだろうと、はやては思っている。

家から出るなど言おうが言わまいが、気付いたらいなくなっている人物だ。

もしかしたら、止まると死ぬ生態なのかもしれない。

「まるでマグロやな。ヤクモさんはマグロ、意味深」

「え?」

不思議そうな表情のすずかに、苦笑いで返しながらはやては思う。

きつとヤクモさんなら、築地のマグロモノマネくらいしてくれたやろうなあ。

どこか物足りなさを感じながら周囲を見回せば、ゲームに興じたり談笑したりする友人や家族がいる。

それでもどこか寂しい。

楽しそうにしながらも、ときどき玄関に続くドアへ視線がいつてしまふ。この場にいる誰もが、そんなはやての心中を直感で理解していた。

(ホンマ、早よ帰ってこえへんとドックフードで許したらへんで……) 足りないなにかを埋めるように、クリスマスパーティーは盛り上がる。

騒いで食べて遊んで笑って……そんなとき、不意に玄関の方でごりと音がした。

参加者は全員居間にいる。

しかし、誰かが間違はなく廊下を歩く音が続く。

一瞬で静まりかえり、全員が唯一のドアに視線を注ぎ。

そして、不意に庭側の窓ガラスが粉碎した。

「ダイナミックお邪魔します!!」

窓を割って乱入した声も姿も、みんなが知っている馬鹿のそれだ。

床で綺麗に一回転して、ヤクモは止まることなくドアへと走る。

え、そつちから？　と言いたそうな守護騎士たちは、固まったまま

動かない。

もうなにか起こっているのかわからない小学生メンツは、鳩が豆鉄砲を食らったような表情になっている。

唯一、死んだ魚のような目になったはやと、眉をぴくりと動かし、たザファイラだけが動いていた。

前者は近くにあった闇の書を投げつける動作で、後者は必要なら防御魔法を発動させるための準備である。

ヤクモの突撃で居間のドアが蹴り倒され、その表面を突き破って、厳つい男の顔が生えた。

そこへ勢い殺さないままナイフを突き立て、ドアと地面でサンドするように踏み潰す。

一仕事やり終えたぜと汗を拭いかけたところで、追撃の闇の書が直撃した。

「ふっ、いい肩してやがるぜ……」

ぶるぶるしながら後頭部を押さえている馬鹿に、追撃のなにかを投げつけようとしてはやてはやめる。

ふざけた態度を一瞬で消し、ヤクモが玄関へ向かって銃を向けたからだ。

おいちよつと待て！　と慌てて制止に入る守護騎士を無視するよ
うに、高らかな銃声が住宅街に鳴り響いた。

†

時間は更に巻き戻る。

クリスマスパーティーにすずかが出かけ、月村邸には恭也と忍とメ

イド2人、そしておまけのヤクモだけとなった。

ささやかながら豪華な料理を作り、こちらは落ち着いた雰囲気のレストランを過ごす。

そこにヤクモの同席が許されたのは奇跡だろう。

呼ばれた本人も予想外すぎて、メイドが迎えに来たときは5秒ほど固まっていた。せいぜい、ちよつと豪華な飯が出ればラッキーぐらいに思っていたからだ。

「まさか、お前がテーブルマナーに精通しているとは」

「おう、今から驚掴で飯食ってやろうか？」

「行儀が悪いようなら、今すぐ退席願おうかしら」

軽い談笑じゃないか、と相変わらず完璧な動作で肉を切って口へと運ぶヤクモ。

仕事で必要になったから覚えた知識だが、どこで役に立つかわからんねと内心で呟く。

実際、ノエルに勧められるワインを断ってミネラルウォーターを頼む姿は完璧だ。

普段のおかしな姿を見ているだけに、食事をする面々は驚きを隠せない。

「普段からそうしてれば、真人間になれそうだな」

「俺が真人間になると、なにも残らない気がするんですがそれは……それに傭兵なんてやってるけど、俺は技術屋だからな。ワインより油、ナイフより工作カッターってところか」

「申し訳ありません。料理が御口にあいませんでしたか？」

「いや、美味しいけどさ。なんていうか、そう冷静に言われると怒られる気がするよね」

言外に食いたくないなら食うなど言われてる気がする、すまんと謝りながら彼はフォークを置いた。

軽く口元を拭って水を一口。それで人心地ついたとばかりに息を吐く

「まっ、純粹にこの状況が俺に似合わないって……ん？」

「どうした？」

「？」

不意に言葉の途中で停止したヤクモへ、全員の視線が集まる。だが、返事はない。テーブルの一点を見つめたまま、完全に動きが止まっているようだ。

どう見ても普通じやない様子に、それぞれは思わず眉をひそめた。全員が最初に考えたのは、侵入者の可能性だ。

魔法による探知力が優秀なのを、恭也達はよく知っている。

だから、なにかの反応をキャッチしたのではと考えて、その可能性をすぐに打ち消した。

もし危険があるなら、真っ先にヤクモが排除へ走っているだろう。そういう類の暗示もかかっているからだ。

ならなんだ？ と首を傾げるのに合わせて、ガタリとヤクモが立ち上がる。

「……ふざけやがって!! あの変態野郎、いい度胸だな」

「おい、どうしたんだ」

視線を巡らせるように恭也を見て、そのまま忍へと視線を送りながらヤクモは動く。

乱暴に扱われた椅子が床を打ち、心配して立ちふさがったファリンを押しつけながら彼は進む。

目指すは出口。この家の玄関ホールだ。

「ちよつと、どこへ行くつもり!」

「悪いが、お前の暗示よりも優先度の高い状況が発生した。勝手に行動させてもらう」

冷たさすら感じる声に、忍がびくりと震える。

普段、空気を無視して冗談を言ったり無駄に煽ってきたりするヤクモだが、対応そのものは非常に柔らかい。

メイドが頭から熱々の紅茶を注いでも、床を転げまわるだけで怒ったりはしなかったし。恭也をからかって殴られるときも、大人しく身構えているぐらいである。

忍は、暗示で怒りのような感情まで縛った記憶はない。

それは道徳心からくる行動で、自分のやっていることを考えれば罵

冒雑言も受け止める覚悟だったのだ。

しかし、蓋を開けてみれば出てきたのは不満の声ばかり。休ませろとか腹減ったとか、文句は言われても罵られた記憶がない。

だから、心のどこかで安心していた。

酷いことをしている自分に、ヤクモは怒ってはいないのだと。

だから、勘違いしていた。

すずかも懐いているし、決して悪い人間ではないのだと。

だから、出来ると思っていた。

危険が去ったあとで、ちゃんと謝れば許してもらえるのだと。

忍の横で、恭也が不意に立ち上がった。

待て！ と叫ぶ声に応えて、彼は振り返る。

色も温度も感じられない、冷たい目をしたヤクモがそこにいた。

51 開いた口を塞がない・後

警官が帰って行き、各々が部屋の掃除を開始している。

非常時だったとはいえ、流石に窓を破ったのはまずかったか。

片付けているやつらの視線が、なんとなく突き刺さっているような。

「ようやなくて、突き刺さつとるんやで」

「すいません。何回でも土下座するんで、菜箸でつづくのやめてもらっていいですか？」

参加を拒否られた俺とはやては、パソコンの前に固まって大人しくしている。

車椅子と隻腕じゃ、作業の邪魔になるとのことだ。

みんな優しいね。

「八神家のツハアーアー！ 八神家のみならず！ 参加者みんなの、日本中の問題じゃないですか!!」

「謝る気あらへんやろ。そもそも、ダイナミックお邪魔しますとか舐めとるんか？」

「え、ダイナミックエントリーの方がよかったか？」

「ヤクモさんが全身タイツのゲジ眉に……」

人質救出じゃなくて、先にそっちが出るはやてさん流石ツス。

アイエエエエ！ ニンジャ!? ニンジャナンデ!?

「まあ、冗談はさておいて。正直すまんかったと思ってる。緊急時な上に、みんなの位置関係がわからなかったから短距離転移するわけにもいかず。結果的にぶち破りました。今では反省している」

「ついでに後悔もしてほしいわ」

2人して風通しのよくなった窓を見る。

これはアレだね。夏場だったら虫が入り放題だったろうね。

「今は冷氣入りまくりなけどな」

「キリガミネが裸足で逃げ出すレベル」

「冷房一択とか、欠陥どころの話しやあらへんわ」

ホントだねー。だから反省しいやー。なんて言い合いながら、菜箸

で頬をぐりぐりされる。

あつ、なんか凄く久しぶりな感覚だ。

……そういえば喧嘩してなかったっけ？

「ああ、あれな……もうええよ別に、ヤクモさんが過保護やってのはよ
うわかったし。けど、私やつて怖いんやで？ 腕一本で済んだ言うけ
ど、一歩間違つとつたら死んどるところや」

家族が増えて嬉しいけど、誰かおらへんくなるんはまっぴらやわ。
そう付けたして、はやてが困ったように笑う。

うーん、なんか本格的にこつちが悪い気がしてくるから困る。

いや、これでも俺なりにいろいろ考えて行動してるんですよ？

今日みたいな危ない目に合わせないようにとか、知らなくていい舞
台裏は隠しとくとか。

でもまあ、やっぱ人のために動くのって難しいんだなあ。

「さて。教えてくれへんとは思うけど、一応聞いとこか。病院抜け出
してまで、どこでなにしとつたん？」

「夢の国で、さっきのガチムチロボと大乱闘」

「ヤクモさんが淫夢のテーマパークにハマつてると聞いて、白目」

アーツ！

いや、ハマってないしハマてもないから。

俺のイメージって、いったいどこに向かつてるんですかね？

「そういうえば。やっぱり、石田先生とか怒ってたか？」

「脱走のこと知ってからは、終始笑顔やったけど？」

超キレてるじゃないっすか。

しばらく病院には近寄れねえな。道端でばったり会ったりしたら
どうしよう。

そうなつたら逃げるしかないんだけどさ。これどう考えても詰ん
でるよね。

はあ……どうも、思考が逃走犯に近付いてきた気がする。

えっ？ 近付くっていうか、そのものずばりだって？

ハハッ、ご冗談を。

「ほとぼりが冷めたら、ごめんなさいしに行こう。つと、ちよつとすま

ん。フアナモってくるわ」

「うちのトイレをアートのスペースにせんといてや」

「ダイジョブダイジョブー、ヤクモを信じてー」

一気にはやての目が、疑いの色を濃くしていく。

おかしい、相手を安心させる魔法の言葉だと思ってたのに。

また掲示板住民に騙されたか！

「んー、ついて来るかな？」

「あのっ、ヤクモさん！」

お、来たね。

俺が蹴破ったドアを越えて少しすると、後から見知った影がついて来た。

下手に事情を知っているだけあって、俺がここにいる状況がわからないのだろう。

追跡者、月村すずかの目は動揺で揺れている。

「よう、すずか。なにか用か？ お花摘みなら先を譲るぞ？」

「え？ いえ、そうではなくて……」

ちっ、天使の使用済みトイレ落ち着け俺！

よし深呼吸しようか。すずかの匂いをいっぱいに吸い込、もうとする鼻はこいつか引き千切るぞ!!

「あの、大丈夫ですか」

「ハアハア、すずか、ちよつと待て。ハア、相当怪しく見えるだろうが、

俺は今日も元気です」

「そ、そうですかね？」

誰が見ても大丈夫じゃねえよ。

大丈夫、すずかの暗示は不完全。目さえ見なければ、そのうち解除される。

「わあ、このまま自画撮りしてアップしたら指名が入るレベル！」

「すいませんけど、話を進めますね」

あっ、動揺しなくなった。この子も逞しくなったなあ。

目元を隠しているのだからわからないが、間違いなく呆れた表情をしているだろう。

幼女に白い目で見られるのも、最近ちよつと慣れてきちゃったよね。

「暗示のかかっているヤクモさんが、どうやってここに」「それな！」

沈黙が返ってきたので、怖いから謝っておく。
見えないって恐ろしいな。

特に、あの優しいはずが鬼の形相になってるんじゃないかって不安感は洒落にならない。

普段から怒らないやつは、キレると怖いって言うし。

「いやごめんって。先に言っとくと、俺の暗示は解けたわけじゃない。優先順位の入替わりで、一部が無効になっただけだ」

だから、封じられた記憶辺りは今もそのまま。

思い出せないことがあるまま、忍の命令遵守が解除された状態だ。人間の不殺も生きているので面倒だが、まあなんとかなるだろう。

どうせ、しばらく相手にするのは無機物だろうし。

「それってどういう……お姉ちゃんの暗示は、簡単に解除できるようなものじゃ」

「だから、解除じゃなくて無効化だ。厳密に言うと、命令遵守の暗示も残ったままになってるんだよ」

どういうことですか？ と聞かれて回答に困る。

うーん、どうやって説明しようか。

すずかは今までで一番優秀な生徒だけど、喋ったのは機械に関することばかりだしなあ。

「まず、俺はこの家の周りに探知魔法を張り巡らせている。なにかあれば俺のところで警告が鳴るわけだ」

それと同時に、短距離転移のポイントが八神家の屋根上へ設定されるようになってる。

あらかじめマーキングしてある場所に、即行で跳ぶためだ。

もちろん俺が次元の壁を跨いだり、総魔力量で補いきれないほど遠くにいたら意味ないけど。

「暗示って言うのは、記憶を消すんじゃないかって封じるものだ。命令を

遵守させるのだって、思考の優先順位を最上位に設定し続けてるだけだろ。そこで問題です。自己言及のパラドクスって知ってるか？」
「えっ？」

まあ、そうですね。

こんなの小学生にする話じゃねえよ。

「噛み砕くぞ。俺は忍の命令を遵守しなくてはならない。しかし、はやてが危ないなら命令を無視して助けに行こうと考える」

このとき、暗示のせいで命令遵守は優先順位が強制的に1位となるだろう。

はやてを助けるには命令を無視するしかないが、2位の救出は暗示に流されて1位を真実と判断する。

そして、1位にある命令遵守は2位の救出を偽りであると判断する。

するとあら不思議。

1位が真実である場合、2位は偽り。つまり、1位を真実と判断したことで否定してしまう。

また2位を真実とした場合、1位は偽り。つまり、2位の救出を肯定することになってしまう。

結果的に思考は同じところを回りはじめ、暗示は上手く機能しなくなるわけだ。

「まあ、そういうことだよ生徒君。魔導師にはマルチタスクっていう、並列思考が必須能力なんだけどな。それを上手いこと使うと、こういうこともできるんだよ。頭の中で思考がぐるぐるしてうざいけど」

正直、この解決方法の欠点だよな。

パラドクスのためだけに、マルチタスクを1枠使わなくちゃいけないんだし。

不殺の暗示が残ってるだけに、戦闘能力の低下がまた進んでいく……悔しいです！

「よ、よくわからなかったんですけど。つまり、もうお姉ちゃんの命令には……」

「従わなくてよくなった。一度サイクルを作っちゃえば、あとは俺が

思考を止めなければいいだけだ。治療方法も考えてあるし、完全開放も近いな」

これで勝つる！

え、フラグじゃないよ？

「ヤクモさーん！ まだ聞くことあるんやで、いつまでトイレに……もしかして大やったー？」

「女の子が大とか言うんじゃないやありません!!」

はやては羞恥心をどこに置き忘れてきたんだ。

居間にいるやつらも、誰か止めろ！

「えっと、なんの話だっけ？ ああ、そうそう。とりあえずだが、暗示の対策も考えてある」

「……それは、どんな……？」

「ん？ 目だよ。今やってるみたいなのに、目さえ見なければ暗示にはかからんらしい。とは言え、目を瞑って恭也に勝てるほど心眼持ちじゃないからなあ。アクティブソナーの連打で、短時間ならなんとかなるかってところか」

探知範囲を20メートルくらいに絞るとか。もしくは最初の一発で地形データを習得し、あとは集音だけに絞って敵の位置把握だけするとか？

燃費と思考の処理量を減らすのは、目下の課題かなあ。

いや、いつも目を瞑って戦うわけじゃないけどさ。

「そう、ですか。じゃあ、もうヤクモさんは、家から出ていく、んですね」

「まあ、そうなるな。安心しろって、別にお前らのことを怨んでるわけじゃない。仕返しは考えてないし、今回のことを言いふらす気もない」

そりゃ、こんな事実はやて辺りに言ったらどうなるかわからないけどさ。

八神家と月村家で潰し合いとか、誰も得しないしね。

別に酷い目にあつたのは俺だけだ。だいたいいつも通りだし、復讐したところで利点も見当たらない。

黙って無かったことにするのが、大人の対応じゃないかな。キリッ！

「お前らの敵とやらも、今回はサービースで処理しといてやろう。ちょうど俺も聞きたいことがあるからな」

そう、ですか……と言いつつ、残して、すずかはトイレの方に歩いていく。
ん？ なんだらう、我慢でもしてたのかな。

我慢は体に悪いぞ？

「真つ黒ヤークモ出ておいでー、出ないと目玉をほじくるでー！」

「誰が真つ黒——つて、怖い！ 目玉とか拷問のレベルじゃねえか!!」
とりあえず、はやてが呼んでるので居間に戻ろう。

でも、なんかすつきりしないな。

残尿感じゃないけど、喉のところになにかつつかえてる気がする？

52 舌の根を乾かすうちに

クリスマス会から一夜明けて、現状の酷さを再認識した。
お正月前でよかつたぜ。

これで業者が年末休業に入っていたら、目も当てられない状況だっただろう。

粉碎したガラスの修理に業者が来て、ぶち抜いた居間のドアに段ボールを貼り、ガチムチに引剥がされた玄関の戸を金具ごと取り替える。

案の定、俺は隻腕なので作業させてもらえなかったが。代わりに指示だけ出したら、殆どザフィーラがやってくれた。

こいつ、手先の器用さははんぱない。

「ザフィーラすげえ」

「さんをつけんかいデコ助野郎」

いや、禿げてねーし。

「譲歩してザフィーラ兄貴と」

「略してザフィニキヤな」

ビバツザフィニキ！ ザフィニキサイコー！ ザフィニキサン

ダー!!

そんな感じではやてと連呼してたら、なぜか俺だけ拳骨を食らった。

解せぬ。

「日頃の行いやな」

「主従の問題だと思っ件」

追加で獣化したザフィーラが噛みついてくる。

いや、なんでだよ。

そんな感じで、楽しく？ やっているお昼下がりの居間にて、はやてが神妙な面持ちで俺を見てくる。

惚れたか？ はいはいそやねー、と雑なやり取りを挟んで本題へ。

「実は、ヤクモさんに頼もうと思っつたことがあんねん」

「なんじゃらほい」

「魔法の使い方教えてくれへん？ 石田先生曰く、足の麻痺が徐々に回復しだしたって驚いてはったんやけど。これって闇の書が止まったからなんやろ？」

まあ、厳密には止まってないんだけどね？

主の登録データを読み込んでリンカーコアへアクセス。しかし、リンクは切断済みだからエラー。生体データの検索。はやてのダミーデータを検出。読み込んでアクセス。エラー。検索。読み込み。アクセス。エラー。検索、読み込み、アクセス、エラー……………

たぶん、今の闇の書はこんな感じで無限ループに入ってるはずだ。なに、それは本当かね!?

それは…………お気の毒に…………

「前にも言ったがな。下半身の麻痺は、はやてのリンカーコアが闇の書の過負荷で圧迫されてたからだ。原因がなくなれば、そりや回復するに決まってる。けど、それがなんで魔法覚えたいになったの?」

「なに言うてんの、将来的にヤクモさんを捕まえるって言うたやろ？ 習得できるもんは、今のうちからやるところと思てな」

ああー、言ってた言ってた。

闇の書を顔面セーブしたときね。そういうえば、そんな話になつたなあ。

本気だったのか。

「これ敵に塩を送ってるような…………まあいいか。けど、年明けまでは座学だけね。実技は禁止の方向で」

「えー、私も魔法でどかんってやーりーたーいー!」

「魔法の先入観がおかしなことになってる!?!」

どかんってなんだよ、どかんって。

言っとくけど、始めるなら浮遊魔法とか基礎からだよ？

それに、はやてのリンカーコアは最近まで過負荷に晒されてたんだ。

問題ないとは思うけど、一応ちゃんと休めてやった方がいい。

急ぐ必要はないんだから、せっかく治った体を酷使するのはNGで。

「ホントなら、リインフォースの機能があれば一瞬だったんだけど。その辺は仕方ないね」

「あー……ユニゾンデバイス、やつけ？ そんなに凄いもんなん？」

まあ、個人的な感想を言うとチートクラスの代物だな。

ユニゾンデバイスってのは、使用者と融合して魔力の管制や補助をしてくれたりする。

もちろんそれだけならインテリジェントデバイスと変わらないが、そこは流石のベルカ式だ。

尖った性能というか、こと殴り合いならとんでもない威力を叩き出す。

アレだね。主人公機が複座型になって、常に熱血を積んでる感じに近い。

一撃必殺系が怖すぎる。あと高い。

「そんなにお金かかってるん？」

「そりやお前、原形は古代ベルカの遺産だぞ。素体のデータなしでゼロから作るってなると、一大プロジェクトになるレベルだな。あとは、適合率ってのもある。ダメだと体中の穴という穴から血が噴き出すらしい」

「なんやそれ怖い……」

確か、その辺とコスパの問題で製品化しなかったと聞いている。

あまりにも酷いんで、管理局が違法研究として取り締まった例もあつたぐらいだ。

1体造るだけで金とか金とか金が凄いことになってたろうに、きつと研究者は破産してるな。

世の中、金さえあればだいたいのこととはできる！

やっただぜ、涙目。

「そうなんや。まあでも勉強すればええだけやし、リインフォースはなんも悪くあらへんよ」

最後の方は、パソコンを見ながらはやてが言う。

電源が落ちているはずの本体に、ほんのり光が灯る

不可視モードのサーチャーが1つ、彼女の目と耳になっているはず

だ。きつと、今のやり取りもセーフモードで聞いていたのだろう。

2人して場所を移し、会話に参加者が1人加わった。

『その、申し訳ありません主』

「どっちも気にせんでええよ。皆が無事やってんし、私は一安心やわ」
画面に映し出されたリインフォースは、俺が漱石さんとして見たときと同じ姿だ。

そういえば、ボディを用意するって言ってたな。

暗示の影響がこんなところにまで……

あれ？ 今なら作れるんじゃないか？

「突然ですが朗報です。外のガラクタ流用して、リインフォースの体が作れるかも？」

「ホンマか!?!」

ホンマでつせ。

とはいえ、フレームの再生成とか専用の施設がないと厳しいけど。それを考えたら、廃品利用しないで新品つかってやりたいなあ。

月村邸でやった解析結果もあるんだし、こつちでパーツを……どこで加工するんだよ。

「そうだな。年明けに、はやてが実技を始めるくらいまでには……なんとか、うん……」

「またそれかいな。はいはい、期待せんと待ってますー」

懐疑的な目で、はやてが投げやりに言ってくる。

やだ、俺の信用度低すぎ!?

いや知ってたけど。

「今さら信じてよ！なんて言わないけどな。俺の領分で俺の仕事なら、誰かに任せたりはしねえよ。腐ってもプロだからな」

『私はまだ付き合いが浅い。お前がそう言うのなら、私は信じて待ってよう』

「……なんや、私がワルモンみたいなんやけど」

いやいやいや。

全面的に、俺の自業自得だから心配しないでください。

「で、魔法の練習に話を戻すか。リインフォース、お前の中に魔法理論

の記録は？」

『む。残っているが、ところどころが抜けている。講師には向かないだろうな』

「そうか。じゃあ、ベルカ系の基礎教本でも取り寄せるか。リンカーコアの安定もだけど、無知なまま魔力が暴発しても困る」

たぶん、教材さえあればシャマルさんとかシグナムが教えられるだろう。

ヴィータ？ あいつはダメだ。

きつと説明の殆どが擬音になる。

「さつき誰かに任せたりせんとか言ってたくせに、もう投げとるやないかい」

「ははは、俺は技術者であって教師じゃないからノーカンですよ。領分でも仕事でもないしな！」

『それは屁理屈というのでは……』

おっと、さつきまで味方だったリインフォースが敵に。

こういうことしてるから、逃亡生活ばかりなんだろうなあ。

わかかって直るもんでもないんだけどさ。

「では、今日はざっくりベルカ式とミッド式の魔法特性について講義をします」

「お、やる気になったん？ 授業してる限りは、当然家におるんやんな？」

「……すみません、今晚からちよつとお出かけします」

再び、はやての目が懐疑的な色を含む。

こいつはまた、とかたぶん思ってるんだろう。

いつものことですか？

「1回、縄でぐるぐる巻きにでもしてみよかな」

「蓑虫スタイルからの大脱出。これが、ハンドパワーです！」

『それは、お前の頭がきているという意味か？』

うわっ、きつついこと言ってくるなこの人。

頭はきてねえよ！ むしろキレッキレですから!!

「教本は業者に頼んどくから、とりあえず特性に関するパワーポイン

トでも作ってくれませんか」

『引き受けよう』

なんやかんやで、第一回はやての魔法訓練講座が始まった。

俺の説明に乗せて、リインフォースが説明図を構成していく。

これ、実はこのままの方が便利なんじゃないですかね……

533 根を立てて人を枯らす

夜も更けて、誰もが眠りにつきかけた頃。

一部だけ明かりが残った中古車販売所に、2人分の影があった。片方は店員の格好をした若い男で、もう片方はナナミ・ヤクモのものだ。

彼ら是对面に座った状態で、気怠そうにため息を吐く。

「で、結局どこが売りつけたのかはわからなかったと」

「申し訳ないツス。表も裏もルート of 監視はしてるんで、これ以上の流入はないと思うツスけど」

話題に上がっているのは、魔法技術を詰め込んだガチムチロボについてだ。

構造上はともかく、中身は地球の技術を軽く越えた代物。こんなものを放っておけば、管理局の介入は時間の問題だろう。

そして、そうなったときに困るのはヤクモだけじゃない。

今日まで違法なやりとりをしていた業者たちが、一斉に危ない立場へとなってしまふのだ。

なにごとも、やり過ぎはよくない。

「こつちの業界にも、ある程度のルールつてのはあるんすけどね。どこのアホか知りませんが、いい迷惑ツス」

「同感だな。持ち主の情報が入ったんだろ？ 仕方ないから、そつちに聞くしかないな」

教えてくれるか以前に、知ってるかの問題だけだな。とヤクモが付け加えると、再び2人してため息を漏らす。

偽装工作くらい、どこでもやっている。

連絡先が偽物でした。名前も偽名でした。会社もありませんでした。

いざ調べてみたら、そういう結果になることも珍しくはない。

もつと言うなら、売り付けたのは魔法世界の関係者だろう。

場合によるが、もうここにはいないという可能性もある。

「幸い、今は次元断層がある。管理局も、今回のことはキャッチしてな

いはずだ。なんとか2年以内に全機を回収処分でできれば……」

「どれだけ持ち込まれたのか知ってるんスか？」

苦い表情のヤクモは、店員の一言を聞いて更に顔をしかめた。

それがわかっていているなら、今頃お互いに動いている。

こんなところで油を売っているのは、そこがわからないからだ。

「製造者に、いったい何機造ったのかは問い合わせてる。今は返事待ちだ。ただ、そのうちどれだけが地球に来てるかなんて知らんだろうけどな」

「……じゃあ、全部来てるって最悪のパターンも考えた方がいいんスね」

何気なく出た言葉に、彼らの目から光が消えた。

ただの事実確認で、ここまでの絶望を突きつけられるとは思っていない。

2人はどこか遠くを見つめて、軽く現実逃避へ走る。

まあ、だからどうなるわけでもないのだが。

「言っても仕方ないから、とりあえず行ってくる。持ち主の方のアホは？」

「所在なら調べといたツス。あとは、ささやかな贈り物をそこに」

店員が指差す方を見て、ヤクモは首を傾げた。

そこには、やけに細長いアタツシケースがある。

銃器の類というには小さいが、追加の装備で必要なものも今はない。

車のパーツまで視野に入れ、いったいなに排気筒なんだ！ と考えたところでアホらしくなった。

さっさと近寄って、蓋を開ける。

「ほう、これはこれは。なるほどね。よく持ち込んだな」

「そりやもう。お客さんには期待してるツスからね」

アタツシケースの中身を引っ張り出しながら、ヤクモは同封された紙切れに目を落とす。

表面に書かれた文字へ視線を滑らせ、彼は薄く笑った。

「さあ、仕事の時間だ」

言葉と同時に、小さな魔法陣が展開。紙切れは一瞬で分解された。

↓

遠くから響く散発的な音に、男は書斎の机から立ち上がれないまま息を飲む。

日本では聞き慣れない発砲音と、ときおり小さな振動まで伝わってくる。

明らかな異常事態に、しかし彼は一步も動けない。

それは果たして恐怖からか、あるいは心のどこかに余裕があるからか。

本当のところは、彼自身にもわからない状態だった。

（いや、違う！ 大丈夫、大丈夫だ。高い金を払って買ったロボットがあるんだから、大丈夫なはずなんだ）

自分を納得させるように言い聞かせ、知らずに止まっていた呼吸を再開する。

忘れていた分を取り戻すため、肺が目一杯の空気を取り込み心臓は早鐘のように鳴っていた。

彼が購入した兵器は、月村に協力している剣士とも互角以上に渡り合っている。

実際、初見のときは向こうが逃げたくらいだ。あのときに見失っていないければ、今ごろは全ての決着が付いていただろう。

2度目は流石に対応されたが、あの強靱な装甲は簡単に刃を通さない。

一進一退の攻防を繰り返して、ギリギリ剣士が勝利したが。それはつまり、多数で攻めれば圧倒できるという証明となった。

「そうだ、なにを臆病になつていたのか。1体ずつぶつけるから負けていただけで、数を揃えれば……」

そこまで言つて、彼はふと思ひ出す。

クリスマスの夜に投入した4機が、全て沈黙させられた事実を。

あの場に厄介な剣士はいなかったはずだ。ならば、対応したのは最新新しく現れた月村の協力者だろう。

強靱なロボットを一瞬で、しかも4機同時に叩き潰せる実力者。そ

んなのが敵にいるのかと、思考が絶望に染まりかける。

(いや、違う。きつと剣士も駆けつけたんだ。2人でなんとかしたに違いない)

それでも剣士が同時に倒せるのは1体。少なくとも3体は同時に撃破されているという事実から、彼は必死に目を逸らして爪を噛んだ。

逃げるべきかもしれない。

いくつかの隠れ家をピックアップして、しかしどれもが襲撃で潰されていたことを思い出す。

これも剣士と未知の協力者がやったことだ。

「クソッ！ クソがッ!! なんて俺ばっかり——」

そこで、彼は不意に気付く。

さつきまで響いていた音も振動も、今はすっかり止んでいる事実

に。耳が痛くなるほどの静寂が、空気を包んでいる。

(……どうなった?)

自分の鼓動がやけに大きく聞こえ、呼吸や唾を飲む音すらもうさくてたまらない。

しばらくの静寂を置いてから、ゆっくりとドアが開いていく。

開け放たれた向こう側で、闇に誰かの影が浮かび上がっていた。

「だ、誰だ!!」

思わず出た怒鳴り声に、しかし応えはこない。

代わりに音もなく進み出て、ロボットが姿を現した。

頼もしい味方が、ただ悠然と立ち尽くしている。

「……は、ははっ……勝った。勝ったぞ!」

「よくわからんが、それはおめでどう」

不意に背後から声が来て、男は硬直した。

咄嗟に振り向けるはずもない。

一気に血の気が引いて、寒さすら感じられる。

息苦しい。どれだけ吸っても、酸素が入ってこないような錯覚があった。

「どうした、少し落ち着け」

どこまでもフラットで、感情の乗らない『音』に背筋を撫でられる。これが本当に人の声なのか、本気で疑いたくなるほど温度を感じない。

全身が総毛立っていた。ぞわりと、首筋を不快ななにかが駆け抜けていく。

「調子が悪そうだな。まあ、座るといい」

声と同時に、後ろから椅子が差し込まれる。

膝裏を強く打たれた男は、吸い込まれるように椅子へと落ちた。

同時に、目の前のロボットも数センチ落ちて倒れこむ。

立っていたのではない。なにかに吊るされて、立っているように見えただけだ。

その事実を理解して、男の体が震えだす。

喉の奥から水分が消え、息を吸うごとに針を飲むような痛みが走る。

「拠点潰しのおきに1機。この間の襲撃で4機。ここに来て13機。ずいぶんと数を用意したな。いったい何体ほど仕入れたんだ？」

声が、静かな足音を伴って誰かは男の背後へ回ってくる。

先ほどまでとは打って変わって、わざと気配をさとりさせる動きだ。

逃げなくては。

不意に浮かんだ思考のまま、男は立ち上がりうとして失敗する。

いつの間にか、手足が光の輪で椅子に拘束されているからだ。

半ばつんのめるようにして、椅子ごと顔面から落ちていく。

「凄い音がしたな。前歯が折れたんじゃないか？」

顔に滑りを感じるのは、鼻血が出たからか。

混乱する男は、襟を掴まれて無理やり椅子ごと持ち上げられた。

元の位置に戻されたあと、ああと納得するような声が続く。顔の横から右手が伸びてきて、鼻を掴まれたかと思った瞬間に激痛が走った。

やたらと固い指に引っ張られ、パキッと小さな音が鳴る。

「ガアアッ!？」

「ほら、これで鼻の骨は大丈夫だ。感謝の代わりに、どこで、誰から、どれだけ仕入れたのか教えてくれ」

「ふ、ふぎけるな！俺が勝ってたんだ！もう少しで勝てたはずだったんだ!!」

「これだけ派手にやったんだ。どうせ、別の依頼で潰しに来てたとは思うが……まあ、この調子だと提供者に担がれただけだな。ご愁傷様」

心底どうでもよさそうな声に続いて、後ろから再び手が伸びてきた。

今度は、その延長に銃を握った左手だ。

待て！と男の声が叫ぶ前に、弾丸が飛び出す。

膝に突き刺さる痛みと、顔に当たった排莖の熱さが彼を襲う。

どうして！なんで！と喚く姿に、背後の誰かがため息を吐いた。

「ここで朗報だ。今、俺はいろいろあって人が殺せない。つまり、お前を始末することはできない。まあ、死にたくても死ねない拷問ならできろ。少し時間がかかりすぎる」

これも却下だな、と救いの言葉を聞いた男は笑みを作る。

死ななければ、仕切り直しが可能だ。

いろいろの意味はわからなかったが、やり直せるなら次こそは勝てるだろう。

足りなかった情報も、今度は完璧に揃えて挑む。

そんな算段をたてている途中で、また腕が伸びてきた。

撃たれると身構え、なんとしても耐えてやると腹を括るが。しかし、決意を裏切るように銃撃は来ない。

「どうも根性だけはあるらしい。だから、ここらで悲報も伝えておこう。これ、なんだと思う？」

差し出された手に銃はなかった。

代わりに四角いプラスチックの箱からコードが伸びた、なんだかよくわからない物を摘んでいる。

いったいそれがなんなのか。

思い当たる前に、男の正面で動きがあった。

間接から軋む音を発しつつ、崩れ落ちたロボットがやおら立ち上がろうとしている。

だが、何度か挑戦して二足歩行は無理だと判断したのだろう。ならばと、緩慢な動作で這いずるように進み始めた。

「はっ。」

「これな、識別装置の補助モジュールなんだ。レンズで読み込んだ顔情報と、メモリ内の情報を参照する装置って言えばわかるか？」

目の前にぶら下がった機械と、正面のロボットを見て男は考える。識別装置が正常に機能していないということは、いったいどういうことだろうか。

確か、自分は敵を殲滅するように命令を出したはずだ。

敵と味方の区別がつかない場合、それがどうなるのか。

「俺は人を殺せないが、勝手に死ぬのを止める義理はないな」

後ろから伸びていた手が、すうっと透けるように消えていく。

残った機械が膝上に落とされ、ここまで来てようやく男は理解した。

あのロボットは、見えるもの全てを敵だと認識している。このままでは、間違いなく自分が死んでしまうと。

「頼む！ 話を！ 話を聞いてくれ!!」

「俺が聞きたいのは命乞いじゃない。そこで元気に這いつくばっているおもちゃの出所だ」

「パソコン！ パソコンだ!! 私の部屋にあるパソコンの中に、業者とやり取りしたメールが残ってる!! 頼む！ 頼むからあれを止めしてくれっ!!」

「メールか……使えんな。どうせフリーメールだ。IPを辿ったところでないも出ないな」

「他にも、他にもある！ えっと、ええっと……そう、そうだ電話！ 連絡するときの手段も、まとめてパソコンに入っている！ 全部持つて行ってくれていい！ だから——」

その先を言う前に、ロボットが男の足を掴んだ。

体をよじ登るようにして、ゆっくりとそれは立ち上がる。

「た、たすけ……」

「ああ、すまない。そいつには簡易の爆薬を仕掛けたんでな。その位置だと、破壊したらお前が死んでしまう」

だから、手は出せそうもない。

平坦な声で告げられた言葉が、完璧な死刑宣告だった。

振り上げられたロボットの腕が、顔面に向かってふってくる。

痛い。

だが関節が故障しているせいか、壁を砕くほどの威力は出ていないようだ。

痛い。

それでも、頬の骨が砕ける音がした。

痛い。

また鼻が折れたのか、熱くどろりとした液体が喉に流れていく。

痛い。

片目が押しつぶされたが、もう声も出ない。

「ご、ろじで……」

「安心しろ。そのうち死ぬ」

冷たい声が、遠くで聞こえる。

書斎の入口が静かに閉められたのを、男は最後に残った目で見た気がした。

54行きあたりハツタリ・前

男の私室らしき場所で、ちょうどパソコンのプロテクトを突破したころのことだ。

階下で小さな振動が走った気がする。

再起動から20分経って、爆弾のタイマーが起動したんだろう。

どうでもいい。

「聞こえるか。パソコンのデータをそつちへ流す。解析は任せるからな」

『了解ッス。しかし、始末しちゃってよかったんすか？ これで記録が嘘なら、手がかりなくなるッスよ？』

「あの口ぶりじゃ、相手と直接会ったこともないんだろ。聞くだけ無駄だ」

不満があるような念話の声に、鼻を鳴らすことで答える。

実際、あの男は生き残るためならどんな屈辱でも耐えるだろう。そういうねじ曲がった根性が見え隠れしていた。

あれは、命さえあればチャンスなんて何度でもあるとか考えているタイプだ。

そんなやつが、死ぬかもしれないときに出し惜しみをするとはいえない。

『あー、事業拡大して月村財閥ともめたんすね。どうも形勢不利だったみたいッスよ』

「それで本人たちを狙うのか。事業内容から手を引けばよかったらうに」

『どうも徹底的に潰されたみたいッスね。他の事業でも月村が対立してきて、経営は火の車って感じッス。デカイ家に1人で住んでるのも、その辺が理由なんじゃないッスか？』

「あの女、自分で蒔いた種かよ」
頭が痛いな。

もう少し、穏便に解決する方法を考えて欲しい。

とりあえず敵は全て粉碎なんて、思想があまりに世紀末すぎる。

「世の中、もう少し優しさがあってもいいと思うがな」
『こっちは潤うんすから、それは言わない約束ツスよ』
まっただだ。

平和が蔓延するなら、俺らは今ごろ食いっぱぐれてるだろう。
それが良いか悪いかは別にして。

「……ん？ ああ、少し解析を急いでくれるか？」

『増援ツスか？』

「いや、個人的なお客さんだ。気配を察知する天性でもあるのか、こっちに直行してる」

流星に拠点潰しするとき、感覚だけでガチムチ1号の存在に気づいただけはある。

一応、玄関にサーチャーを仕掛けておいてよかった。

正義の味方が、あの状況に居合わせたら怒り狂っていただろう。

『お、仕入れ伝票あったツスよ。えっと……買ったのは20機みた
いツスね。今、こっちの業者リストと照会するツス』

「手早くな。客はこっちで誘導しておくから、ここの処理業者も呼んで
おいてくれ。死体が1に機動兵器が13——」

ん？ 13？

ちよつと待て。全部で20機の仕入れで、ここにいたのが13機？

最初に1機。はやての家で4機。ここで13機。

あと2機はどこいった。

「おい、ホントに20機か？」

『そうツス。全部で20と、他は武器類を仕入れてるみたいツスね』

「不味いな、2機ぐらい足りない」

マジツスか!? と店員の焦った声が頭に響く。

うるさいと言いたいが、こっちもそれどころじゃない。

乱暴にドアが開け放たれ、肩で息をする恭也が現れたからだ。
目が血走っている辺り、宥めて落ち着く感じでもないだろう。

「よくこっかがわかったな」

「黙れ。ここに来る途中、嫌な物を見て気が立ってるんだ」

ああ、死体を見てきたのか。

通りで、玄関を通過してから時間があると思った。

「さつきまでなら遊んでやる時間もあつたが、少し状況が変わった。部屋の隅で大人しくしててくれないか？」

「お前を殴り倒したあとなら、そうしてやる」

GPS情報を検索中、もうちょい待つツスと念話が飛んでくる。

見つかるまでは下手に動くだけ体力の無駄だろう。

どうせ居場所さえわかってしまえば、こちらはショートジャンプで直行できる。

だが、問題は恭也だ。

転移魔法の展開には多少のラグがある。

その小さな隙を、おそらくこいつは見逃さない。

むしろ、チャンスとばかりに斬りかかってくるだろう。

「仕方ないな。前に言った魔法の優位を、今から実地で教えてやる」

「そんなこと言っているのか？ 俺の間合いだぞ」

ぐつと姿勢を落として、恭也が刀に手を掛ける。

入口から俺の位置まで、だいたい4mといったところか。

成り金の私室は広くて助かるな。

「お前はなにか勘違いしてるな。俺の本領は中から遠距離戦であつて、今は俺の間合いだ」

うるさい！ と叫びながら、恭也が1歩目を踏み込んでくる。

全身を砲弾のようにして突っ込んでくる姿は勇ましいが、残念ながらそれだけだ。

例え間合いだとしても、刃が到達するのに数秒もあつては意味がない。

「バラージショット、トリプルアクション」

魔法を展開し、3つの弾丸を生成。

そのうち1つ目を直進させ、2つ目を右から大きく迂回させる。

わずかに目配せをして、恭也はこの2つを迎撃することにしたらしい。

大きく右に跳ぶことで、迂回する弾丸との距離を稼ぎにきた。

「一応、ヒントをやろう。バラージショットは、何種類かの魔力弾を同

時に撃ち出す魔法だ」

「だからどうした!」

叫びながら、恭也は正面のスフィアを横風にも断する。生身で魔法を斬れるだけでも異常だが、打倒したいならまだ足りない。

斬られたスフィアは哀れ爆散、恭也も巻き込んで広範囲を吹き飛ばす。

床をごろごろと転がる姿は、見ていてとても痛そうだ。

炸裂系の魔力弾は、確か拠点襲撃のときにも見せたはずなんだけだな。

「ぐ、うつ……」

「ほら、追撃がくるぞ」

ハッと恭也が振り向いた先には、迂回していた魔力弾が迫っている。

今度は警戒して避けるつもりらしいが、残念なことにそれはバックショット弾だ。

直前で弾け、無数の雨が横殴りに相手を襲う。

当然のように避けきれなかった恭也が、威力に押されて入り口へと逆戻りした。

片膝をついたままだが、逆に倒れていないとかパナイ。

「さて、ここに1発残ってるわけだが。バックショットとグレネード、どっちだと思う?」

「……っ」

答えもないままに、再び恭也は突進してきた。

姿勢は地面に付きそうなほど低く、更に小刻みなフェイントが織り込まれている。

正直、早すぎて目が追いつかない。

生身ってなんだっけ。

「もらったぞー!」

「バカ、これは幻影で本体は上だ」

俺の言葉に、一瞬だけ恭也の意識が上を向く。

あれ、今のハツタリは癖で出ただけだったんだけど。まさか引つかかるなんて、たまげたなあ。

そもそも、戦闘スタイルを見直した方がいいと思う。

斬るときは律儀に真つ正面から来る辺り、本人の性格は出てると思うんだけどね。

おかげさまで、手元の加速弾を叩き込みやすくて仕方ない。

顎をアツパー気味に打ち上げ、形振り構わず振り下ろされた刃は防御魔法で防ぐ。

届いたはずの攻撃が通らず、恭也が驚きで目を見開いていた。

例え、これが完璧な一撃であっても同じ結果だっただろう。

スフィアを斬るのと、防御魔法を斬るのでは意味が違いすぎる。

結局のところ、この布陣を魔法なしで突破するのは無謀という証明になったが。

まあ手の内がわからない相手へ突っ込んでくる時点で、この結果は確定していただろう。

「魔法を食らった感想は？」

「な、んで……」

いいところに入ったせいか、仰向けに倒れたままよくわからないことを呟いている。

脳震盪かな？

そのまま大人しくしててくれると助かるね。

「安心しろ、あとですずかの家まで送ってやる。お前を始末するメリットがないし、土朗さんを敵に回したくないからな」

だって、あの人かなり怖いんだもの。

魔法があっても勝てる見込みが五分五分なところとか、ホントにやばい。

実はあと2回変身を残してるとか言われても、普通に納得できそうだから困る。

『あつ、終わったツスか？』

「一応な。そつちはどうだ」

『良い知らせと悪い知らせと悪い知らせがあるツス』

「……泣いてもいいか？」

気持ち悪いツスからやめてください、と一蹴されて涙以外のなにかが込み上げてきた。

戻ったら一発殴ろう。

そう心に誓って、念話を口頭から思考へと切り替える。

恭也の意識は朦朧としているが、万が一にも聞かれたらめんどくさい。

『じゃあ、さくつと良い報告からいくツス』

『それ最後に絶望しか残ってなくね？』

『……見あたらない2機の内、1機は少し前に撃墜されてるみたいツスね。だから、残りは1機ツス』

こいつ無視しやがった。まあいいけど。

とりあえず、残りの数がわかったのはいいことだ。

あとはさっさと回収すれば、それでお終いにできる。

『ごつからが悪い報告ツス。流してもらったデータの中に、ロボットの状態や位置情報をGPSで管理するソフトがあつたんすけど』

『ん？ それは良い報告なんじゃないのか？』

『いえ……管理ソフトによると、現状で最後の1機は戦闘モードに入ってるツス』

ん？ う、ん？ ええつと……

つまり、どういうことだつてばよ？

『位置情報は、ついさっき月村邸の真上に重なったツス……』

「ファツ!？」

おい待て。

それつてお前、ちよつ、うわああああああ!!

「やばい! 斥候? いや、威力偵察? ナンデ!? ニンジャナンデ!?!」

『落ち着きましようよ。流星に慌てすぎじゃないツスか?』

『まあ、そうなるな』

『いや、それは冷静になりすぎじゃないツスカね!?!』
うるせえ。

「こちとら頭の中が凄いいことになってんだよ察しやがれください！」

『仕方ない。今すぐ急行するから、ここの処理だけ任せる』

『ずいぶん急ぐツスね。暗示とやらは、思考矛盾なんかで無効化したとか言っただけだったスか？』

ああ、アレね。

自己言及のパラドックス。

クレタ人がクレタ人は嘔吐き、はつきりわかんただねって言うやつだ。

『お前、あれ本気で信じてんの？』

『……え？』

ちよつと面倒な展開になってきたな。

そりゃ、元から月村邸には車とか取りに行かないとダメだったんだけどさ。

もうちよい後に回そうと思ってたのに。

このタイミングだと、あれが上手いこといつてるかどうか五分五分だよ。

『え、ちよ、え？』

『おい、そつちでシステムに割り込めないのか？ 攻撃中止命令とか』

『あつと、その辺はやってるんスけど。ちよつと時間が必要ツスね。解除したところには、血の海になってるか？ つていうか、え？』

なるほど、やつぱり行かないとダメなパティーンですね本当にありますがどうございます。

今まで思い通りになったことなんてないけどね。そろそろ1回くらい、運命の神様がデレてくれてもいいんじゃないかな。

『ちよつと、どういうことツスか！』

『うるせえな。思考矛盾？ 優先順位？ お前バカだろ。魔導師は人間だぞ？ そんな機械みたいに命令文の差し込みなんてできるわけないだろいい加減にしろ！』

『いや、あんたがいい加減にしてほしいツス!!』

聞こえない聞こえない。

とりあえず急ぐから、と適当に念話を切断して恭也を拾う。

処理業者が来るだろうし、置いとくわけにもいかんわな。

「さて、出たところ勝負が多くて泣きたくなるね」

思わず出た吐息が、足元で加速する魔法陣に食われた気がする。

「ショートジャンプ」

発動キ―を小さく呟けば、問答無用で風景は切り替わった。

55 行きあたりハツタリ・後

月村邸の庭に転移した瞬間、アクティブソナーを発動。

エコーを打ちこんで、周囲の状況を頭の中に文字通り叩き込む。

面倒なのは、俺が目をあけるわけにはいかないってことか。せつかく仕掛けを用意したのに、再び暗示をかけられては意味がない。

だから、アクティブソナーで拾った情報を脳内で3次元的な地図に置き換えていく。

たぶんガチムチの着地で抉れた庭の地面。ぶち抜かれて風通しのよくなった窓。ぐちゃぐちゃに荒らされた居間。

床にぐったり倒れるフアリンと、満身創痍だが主を守るために立ちあがるノエル。

忍は妹のすずかを庇って、じりじりと壁際に下がっていた。

「もつとこう、逃げるとか隠れるとかさ」

探す手間がはぶけて助かるんだけど、生存本能的にはどうなんだろうね。

いや、ここはポジティブに行こう。

現在進行形で、あいつらに迫ってる危ないガチムチを倒せば全部終わりだ。

うん、そうだよ！

「ストライクファイア、試験起動」

物体加速魔法を、実弾兵器のみ特化させた魔法を発動する。

闇の書と戦ったときに感じたことだが、普通の加速魔法を質量兵器に適用するとかなり効率が悪い。

まあ、当然と言えば当然なのだが。ならいつそ、それ用の魔法を組めばいいんじゃないかなという発想で試作的に組んだのがこれだ。

忍の命令で動いている間は、あまりにも暇で脳内はやりたい放題だったからなあ。

上手く動くかは知らないけど、震え声。

「まあ、威力分散を防ぐ補助魔法の展開しなくていいのは大きいよね。もう腕も最後の1本だし、発動の素早さは必須というか……」

両手が義手とか、鉄が旋律を奏でだしそうで洒落にならない。使ってるのは超能力じゃなくて魔法だからギリギリセーフ！

ところで、発動するかよりも目を閉じてるから流れ弾が怖いな。他に中っちゃったらどうしようか。

よく考えよー。鉛は危ないよー。

あつ、言ってる間にあいつらがミンチになりそう！

「ダメだな、この距離は無理くさい」

魔法は維持したまま、とりあえず走る。

恭也が邪魔なので途中で捨てたが、たぶん大丈夫。だってあいつ頑丈だもん。

解放感ばつちりの窓を通過して、ソナーを再び打ちこむ。

ずいぶんノエルが善戦しているが、スペック的に勝てなさそうだ。

まあ、技術に差があるから仕方な……え、あれ？　そういえばこいつら、いやそういうの後にしよう。

「よし、これなら外れないな」

がっしりと頭らしき場所を掴み、銃口がAMFに触れないよう注意しながら2発ほど撃ち込む。

右手が生身だったら、今ごろガチムチの頭ごと吹っ飛んでたかもしれない。

いやあ、義手に感謝しないとなあ。今度からミギーと呼んでやろう。

とはいえ、AMFの範囲設定が広がったら使えない戦法だ。

この先、目を閉じて戦闘するような状況がないことを祈りたいね。

「や、ヤクモさん!」

「おう、すずか……だよな?」

天使の声だ。たぶん聞き間違えたりはしない。

ああいや、それどころじゃないか。

「残骸の転送。設定、ショートジャンプ。あれ、受け入れ要請ってし たっけな?」

まあ、向こうでなんとかするだろう。

そんなことより、俺はもう1機の残骸を探さないとダメなんじゃない

いか？

もともと敵対してたのはこいつらだけだし、どっかにあるとは思
けど。

いろいろ面倒になってきた気がする。

「さて、お前らが自力で倒したロボットがいるはずだが。その残骸は
どうした？」

「……いきなり現れて、第一声がそれなの？」

「ん？ ああ、恭也なら庭に投げ捨ててきた」

なにか声にならない悲鳴を聞いた気もするが、たぶん聞き間違いだ
ろう。

いいから知ってることを吐いてくれないかな

あんまり実力行使とかはしたくない。

「テンプレートで悪いが、言わないならノエルかファリンを撃つぞ」

「脅迫のつもりなら無意味よ。あなたには撃てないでしょ？」

だって暗示があるものと言葉が続く前に、跳びかかって来そうだっ
たノエルの膝関節を撃つてやる。

なんとか姿勢を保っていたところにこれだ。

彼女は自重を支えきれなくなって床に崩れ落ちてしまった。

あーあ、だからやりたくなかったのに。まるで俺が悪者みたいじゃ
ないか。

「そんな、暗示が……じゃあ、さすがが言ってたのは」

あーいいっすね。

ようやく、少しだけこつちに流れが来てるじゃないか。

「さて、次は頭を狙う。さっきのロボットと同じにしたくないなら、早
めに知ってることを言ってくれ」

「なんで、家族には危害を加えないよう暗示をかけたのに！」

「さすがから聞いたんだろ。なら、そういうことだ」

そんなことはいいから教えるように促すと、忍は渋々といった感じ
で地下室の存在を明かした。

なんでも研究室があるらしい。

下かよ。そりや地面にソナー打たないと気づかないっすわ。

「そうか。じゃあ、それは回収させてもらう。安心しろ、お前らの敵は始末しておいた。もう解析は必要ない。いろいろと詳しいことは、恭也が起きたら聞いてくれ」

「まさか、殺した、の？ 禁止したはずよね！」

「そうだな。暗示で、禁止されてたな」

息を飲むような声が聞こえる。

暗示がどこまで無効化しているのか、さっぱりわからなくなってきたんだろう。その調子で、もっと誤解してくれると助かる。

もしかしたら、ノエルの足を撃つたこともプラスに働いたのかもしれない。

俺が「ガチムチと同じにしなければ」と言った時点で、変に頭の回る彼女は勘ぐったことだろう。

ノエルとファリンがロボットだという記憶が、戻ったのかもしれないと。

実際は欠片も思い出せないが、思わせる分にはタダだ。

こんな重大事実、記憶を失う前の俺が見落とすとも思えないし。

「あの……ヤクモ、さん？」

「よう、すずか。顔が見えなくても、お前が今どんな表情なのかよくわかるよ」

きつと泣きそうな顔をしてるに違いない。

暗示の無効化も含めて、俺のことをいろいろと忍に喋ったみたいだからな。たぶん、良心とかが痛んで辛いんだろう。

もちろん、俺は「言うな」なんて言った覚えはない。

すずかが悪いことなんて欠片もないが、そこは本人の感性だ。結果的に告げ口をした形なのだから、仕方ないと言えば仕方ないんだけど。

ただまあ、敢えて俺に思うところがあるとするならこれだ。

計画通り！

「気にするな。お前は悪くない」

そう、悪くない。

最近まで、本当の意味で自分のことを打ち明けられる相手がいな

かったすずかのことだ。

なにもかも言ってしまう俺の存在は、そう小さなものじゃなかっただろう。

隠しごとイコール友達に嘘を吐いているのと同じ、なんて考えてそんな節もある。今日までのストレスは、それなりに大きかったんじゃないかな。

正直、密告もかなり悩んだはずだ。

信頼を裏切っている、とか考えたかもしれない。

だが、そうしてでも自分のエゴで忍に俺の情報を流した。

そこに意味がある。

「私たちの暗示を、無効かなんて。自己言及のパラドックスだなんて、馬鹿げているわ！」

「そうだな。じゃあ、俺が本当に人を殺せないか試してみるか？」

普通にうるさいので、一刀両断で黙らせておく。

やったことに対する理解はあるが、許してやるほど優しいつもりはない。

すずかの関係者じゃなかったら、今ごろ不慮の事故で消してただろう。

妹に感謝しとけよ、マジで。

「さて、俺も忙しい。地下室への入口を教えるのと、俺が地面をぶち抜くのと。好きな方を選んでくれ」

「……私の書斎、右側の本棚に仕掛け扉があるわ」

素直でいいね。

とりあえず、もう一度ソナーを打って歩き出す。

流石のすずかも、今日は後ろからついてこなかった。

これでやっと目が開けられると息を吐き、不意にとんできた念話を繋げる。

『ちよっと！ なんかいきなり降ってきたんすけど!!』

『おう、それ1体目な。もう1体回収して、そっちに送るから』

『もうちよい手加減してほしいツス……』

（愁傷さま。）

『ところで、さつき言ってた暗示の件。結局、どういうことなんスか』『ん？ 別に大した話じゃねえよ。俺が1回も暗示に逆らったことないってだけの話だな』

そう、俺はなに1つ逆らってはない。

命令無視のように月村家を飛び出して見せたが、あのときはさすががはやての家にいたのだ。

彼女を守るために緊急出動しただけであって、暗示を無視できたわけじゃない。

あの哀れな主犯を排除したのだから、もともと倒す対象だったのだから問題ないだろう。

恭也を殴れたのは打倒の邪魔になったから、ノエルを撃てたのは家族じゃなくて所有物だから。どれもこれもへ理屈だが、嘘は言っていない。

最後の1機を潰すまでが打倒だ。

メイドズの実在も人格も認めるが、究極的には物だ。

これを理不尽と思うなら、もつとかつちりした規則を作るべきだったな。

例えば、家族を守るだけじゃなくて財産も守るとか。聞かれたことには偽りなく答えるじゃなくて、嘘は一切言わないとかだな。

契約って言うのは、縛るためにあるんだから細かく詰めた方がいいに決まってる。

『まあ、おかげさまで暗示は残ったままだ。あの場で命令とかされなくて助かったよ』

『うわあ、綱渡り感はんばないツス』

手札が少ないんだから仕方ないだろ。

しかも、あとでセルフ暗示解除のイベントまで控えてるんだから勘弁してほしい。

またあのヘッドギア被って、脳内の整理と自己暗示の世界にゴーだ。

今から死にたくなってくるな。

『あつ、ところで処理業者の料金ツスけど』

『お前ら持ちに決まってるんだろ！ 俺に払わせるなら、今日の分の給料要求するからな』

『……こつちで払うッス』

こいつ、一瞬どつちが高いか考えやがったな。

まあ、安く見られてないだけマシか。

『はあ……回収したロボットから装甲と使える部品をバラしとけ。売ればそれなりの値段になるだろうから、お前が捌くなら手数料と保管維持費で2割持って行っていい』

『流石！ 愛してるッス！』

気持ち悪いと言いたいのをぐっと我慢して、目の前の本棚にソナーを打ち込む。

簡単な解析で手早く開いた道は、まるで俺の人生みたいに真っ暗な地下へと続いていた。

56 近くて見えぬは恋心・前

なんかぐちやぐちやになったガチムチを地下で発見した、意味深。たぶん、恭也が撃破した個体だろう。

その証拠に、破損箇所は刃物で滅多刺しにした痕がある。倒し方がわからなかったからって、これはやりすぎなんじゃないですかねえ？

こんなに固くて長いもので奥まで抉るから、いろいろガバガバになつてやがる。拾えるパーツが少なそうだ。

「ああ、そういえば。まだ1機、解析してたのが置きっぱなしだったか。あれも回収しないとな」

あんまりゆっくりしていると、テンション高めの恭也が追いかけてくるかもしれない。さっさと行動しなくては。

また殴り倒すとなったら、新しいやり方を考えないといけないだろうからなあ。

この短時間で、魔法対策もなにもないとは思うけど。万が一にも負けたりしたら、草葉の陰から孔明さんにぶぎやーされそうだ。

ちよつと冗談で済まないなそれ……

「人手も足りねえし、やることは多い。これで借金もなくならないんだから泣きたくなる」

一応、ここを出る前にアクティブソナーですずかたちの位置を確認しておく。

どうやら動いていないらしい。ボロボロの居間を片付け、恭也の手当てをしているようだ。

追いかけてくる様子もないから、あとは勝手にやってもらおうとしてう。

地下から這い出し、自室だった部屋へ向かいながら今後のことを考える。

ガチムチ売りさばいた金で、なんとか借金の半分は返済できるはず。

ドクターの前金は車で消えたしなあ。他でなんとかカバーしない

と。

すごく簡単に捻出できる場所もあるにはあるが、行くなら死の覚悟が必要だから最後にしたい。

いや、でもどっちにしたってはやての件で行くことになるしなあ。

早いこと腹くくった方がいいのかもしれない。

「おい、お前！」

でもなー。

鈍器がなー。

あいつ、撲殺系のお転婆な天使って柄でもないしなー。

なによりミンチを再生させる魔法なんてないんだよなー。

「え？　ちよ、ちよつと！　止まって！　止まりなさい！！　お願い待って！！」

「ウワーネコガシャベツテルー。コレハキツトユメダヨー」

「そ、そんな棒読みで誤魔化されてたまるかあ！！」

叫びながら、猫が人の足に噛みついてくる。

だが残念。普段からザフィーラに噛まれ慣れている俺が、今さら小さな牙ごときで痛い痛いガチ噛みはあかん！！

ギャグつてのは痛そうに見せるだけで、本当に痛いのはダメなんだよ覚えとけ！

「なんで俺は猫に噛まれてるんだろう……」

「私に聞かれてもねえ」

ひよっこりと現れたもう一匹が、俺の独り言に応えてくる。

この2匹、確かはやてが拾ってきた化け猫だったはずだ。

えっと、ギル様の使い魔だっけ？

「お前が父様を様付け!!　え、敵対してるんじや……」

「金ピカと敵対した記憶はないなあ。出し抜いたって方が近いと思うが」

「キン、ピカ？」

愉悦！

いやいやいや、遊んでる時間ないんだった。

「今、それなりに急いでてな。明日の夕方までに処理することが山積みなんだ。話は歩きながらにしてくれるか？」

「わかったけど、あんた性格の変化が激しすぎじゃないかい？」

「余計なお世話だ」

「にやにやい！ とか言いながら猫キックを浴びせてくる使い魔の首を摘み、大人しくさせながら移動する。

もう1匹は普通についてきたが、こっちはかなり大人しいようだ。協力的で助かるね。

「なんなのよこれ」

「ロボットだよ、ロボット」

ふうん……と興味なさそうに呟いて、手元の猫が身をよじる。

なにごともなく俺から逃れて地面に着地したが、内部機構のことを知ったら大騒ぎしそうだな。

よし、黙ってよう！

さっさとこれも転送し、続いて俺自身も庭に転移する。

車の回収もこれでおつけー。

じゃあ、店に戻って他の処理を進めるか。

「ふっぎけんな！ なに1人で転移してんよ逃がさにやいわよ!!」

「ち……お前、慌てるよ猫語が出てるぞ。気付いてるか？」

「え、ホントに!？」

うわあ、恥ずかしいと猫が悶えてる間にエンジンをかける。

よし、このまま発進すれば。

「悪いけど、こちらの話を聞いてくれない？ ちょっとしたお願いがあるのよね」

「……いつ乗り込んだ」

さあ？ と白を切りながら、助手席にいる猫がゆったりと尻尾を振る。

間違いない、こっちが姉だ。

あと絶対勝てない。どうしよう……

†

赤信号に差し掛かり、車体が緩やかに停止する。

ブレーキングは完璧だな。レースカーの技術を組み込んでいるのは、伊達や酔狂じゃなかったようだ。

難があるとすれば、左ハンドルであることくらいか。

今となつては、義手を外すとギアの入れ替えすらできないのが面倒だ。

「ああー、なんで初乗りの助手席が猫なんだ……」

「女の子の方がいいのなら、そちらになることもできるわよ」

「スペース無いからそのままどうぞ」

「というか、あんた確かメイドと相乗りしてたじゃん」

助手席に座ってジェットコースターはノーカンに決まってるだろうがいい加減にしろ！

「だいたいさあ、なにが楽しくて真夜中に猫とドライブしなきゃいけないんだよ。」

「こちとら予定が詰まりまくってるんだぞ。」

「はあ、不幸だ……そもそも、なんでお前らあそこにいたんだよ」

「流石にあんたが帰ってきたからね。宿替えしようってなったときに、あそこなら違和感がなくて都合がよかったのよ」

「他にも猫がいたおかげで、私たちも簡単に受け入れてくれたわ」

「そういえば大量にいたなあ。なんか、猫ルームなんてのまであった気がする。」

まあ、俺はそんなところで遊んでる余裕なかったけどね、白目。

「ん？ お前ら俺が来たときからいたの？」

「そうね、正直に言ってあなたが来たときは驚いたわ」

「また引越しかと思っただけど、案外あんた気付かなかったからさあ」

居ついてみましたってか？ マジかよ……

そりゃ食料事情とかいろいろあっただろうけどさ。そんな灯台もと暗し展開あるか？

というか、気付けよ俺。

「まあいい、どうせミッドに連れてけとかなだろ？ ちょうどギル・グレアムに恩を売ろうと思つてたところだ。ただし、こつちの用事が済む

まで大人しくしてろ」

「出来るだけ急いでもらえないかしら。本当は、あまり向こうを留守にしたくはなかったのよね」

「そう言われてもな。ちよつとこれから、八神家に宣戦布告して闇の書を奪いに行くところだし」

「……はい？」

ああいや、正確には夜天の書だったか。バグは残ってるから、闇の書のままでもいいとは思うけど。

「ちよつと待ちにゃさい。あんた、あいつらの仲間じゃなかったの？」

「猫語でてるぞ。仲間かどうかは別にして、あいつらとは敵対しとく必要があるだけだ」

「はあ!? どういう意味よ」

「……はやては管理局へ就職したいらしい。俺を捕まえるためとか言ってたが、それが本命じゃないのくらいはわかってる」

闇の書がよくない物だってことは、はやてもなんとなく理解していただろう。

だが、実際になにをしたのかまでは不明だった。そのままだったら、あるいは見て見ぬふりだってできたかもしれない。

問題は、守護騎士と一緒にリインフォースも助け出せてしまったことか。

皮肉にも、彼女の記憶が闇の書の罪状を補強してしまった。

「たぶん、過去の闇の書の罪滅ぼしになればってのが本音だろうな。まあ、理由はどうでもいいんだ。あいつが管理局に入りたいなら、それをサポートしてやるのが俺の役目だろ？」

「……犯罪者をかくまっていた過去を、うやむやにするつもり？」

うやむやだなんてそんな。

純粹に知らなかった、それでいいんだよ。

ここで敵対さえしておけば、犯罪者に騙された哀れな被害者が完成する。

「そんなにあの子が大事？」

「当たり前……あれ？ そういえば、なんで俺こんな必死なんだろう？」

ええ……と隣から2人分の声が漏れだした。

言いたいことはわかるけど、ちよつと黙ってようか。

気付けば信号が青に変わっている。

慌ててアクセルを踏み込むと同時に、信号が再び赤に変わってしま
う。

反射的にブレーキを踏み込むと、猫は2匹ともフロントガラスに
突っ込んだ。

57 近くて見えぬは恋心・後

緩くアクセルを踏みながら、ひりひりする顔面をおさえる。

いやまて落ち着け、まだ慌てるような時間じゃない。

え、なにこれ。つまり、どういうことだっただってばよ？

「あれ？　なんで俺、こんなはやてに肩入れしてるんだ？」

境遇が似て……ないな。

じゃあなんだ。

1人暮らし可哀想とか？

んなわけあるか。

それくらいで優しさ振りまいてたら、今ごろ俺は聖人になってるよ
ワロス。

「嘘だろ、いや待ってって。落ちつけよ俺。マジでマジか？」

「異様に語呂がいいわね」

「魔法の力を底上げします」

「は？」

そこは「マジカ」だろうが！

ドヴァキン先生に殴られるぞ。

「あなたの意味わからなさに付き合えるあの子って、実はかなり凄
かったのね」

「どうしよう。私も、あの子の偉大さをなんとなく理解してしまっ
たわ……」

うるせえ、鍋にされたくなかったら少し黙ってろ。

つまりどうということだ。

はやてを保護すれば、俺にも利益が出る？

いや赤字出てんじやねえか、ふざけんなよこの野郎。

「なんだ？　ってことは、俺は今日までなんの得にもならないことを
やってたど？」

そうだよ、便乗。

って違う違う、そうじゃなくて。

流石にそれは知ってた。

すつごく旨みのないことやってたくらいは、ちゃんと自分でもわかってる。

問題は、そこまではやてに加担した理由だが……

嘘だろ、欠片も考えたことなかったぞ!?

「よし、とりあえず深呼吸だ。ヒツヒツフー」

「そういうのいいから、前を見て運転しろ!!」

ん？ おつといかん、ここ左折だった。

ブレーキを強く踏み込んでハンドルを切る。同時に半クラッチでギアを落とし、エンジンブレーキをかけるのも忘れない。

今、車体の重心は前だ。

やや浮いた後輪は、前輪の方向に引っ張られてスライドしている。

一瞬だけ歩道が見える形で、綺麗に尻を振ったアウデイが十字路を抜けていく。

流星は俺。伊達に紙コップから水をこぼさないでステージクリアしただけはあるな。

「あんた！ 公道でいったいなにやってんのよ!!」

「夜中で人がいなかったからセーフだ」

「ふふ、どう考えてもアウトよ。次やったら殺してやるわ」

ごめんって。

まさか、そんな2匹そろってドアに激突するとは思わなかったし。

「もういいや。これ、たぶん深く考えても答えが出ないわ」

「うわあ、そういう投げ方はよくないんじゃない?」

「……どうでもいいいくせにてきとう言いやがって」

まあねーと軽く答えて、猫どもがシートに戻ってくる。

もともとデュランダルで、はやてごと闇の書を封印するつもりだった連中だ。

知り合いでもないやつの悩みなんて、欠片の興味もないだろう。

「お前ら、はやてを封印するってなって躊躇したか?」

「別に、そういうのはなかったわね。暴走して死ぬのも、封印されて仮死になるのも同じでしょ?」

「だよなあ。それが一番安全だし、確実な方法だもんなあ」

でも、俺は腕を1本差し出してまでいろいろ走り回った。そもそも、この世界に来たのはプレシアのせいだ。

あいつの依頼をこなして、管理局に睨まれたから逃げ込んだに過ぎない。

ジュエルシードの件だって、はやてがいなければ無視していただろう。実際、そのせいで管理局に捕捉されてしまったわけだし。

闇の書だってそうだ。はやての身柄ごとこいつらに渡して、俺のことを見逃してもらおう方が建設的だろう。

「ほら見ろ、考えれば考えるほどわけわからん。どう考えても得がない。わけがわからないよ」

「あれじゃないの？ 愛とか」

「なぜそこで愛ッ!?!」

実際、どうなんだろうね。

惚れた腫れたの話で片付けていいんだろうかこれ。

……あれ？ その理屈でいくと俺がロリコンになってね？

「1人暮らししてる幼女の家に移り込んだ時点で、もうその辺りは諦めた方がいいんじゃないかしら」

「ごもつとも過ぎて反論できねえ」

確かに、どう考えても事案なんだよなあ。

今でこそ守護騎士たちもいるが、しばらく幼女と2人で生活していたわけだ。

あれ？ お巡りさんの幻影が見える……

「やっぱり、これ考えるだけ無駄だわ。やめよう、深みにはまると動けなくなるし」

「まあ、こっちはミッドに行ければなんでもいいよ。あんたの用事とやらを、さっさと済ませて欲しいけどね」

「なんなら手伝うか？ 守護騎士の連中を相手取るために準備が必要なだけで、戦力があるなら今からでもいけるぞ」

「あの4人を相手取って、大立ち回りは難しいと思うわよ？」

「んー、それがそうでもないんだよなあ」

こいつらに、これ言っちゃってもいいのかなあ。

あんまり味方って思うのもよくないけど……まあ、なにかあったらギル・グレアムもろとも社会的に抹殺すればいいか。

幼女盗撮の証拠はあるわけだし。

「実は、今のあいつらはかなり弱体化しててな。それなりの備えさえあれば、俺でも守護騎士が無力化できたりする」

「はあ？ そんなわけあるか」

「いいから聞けよ。もちろん、通常時なら俺の勝ち目は万に一つもない。だが、今ならいける」

守護騎士は、闇の書の防御プログラムである。本来は、主を守りながら書の完成を目指すというのがその役目だ。

ところが、今の彼女らにその使命は存在しない。闇の書との接続を、俺とリインフォースが完全に切り離してしまったからだ。

「そんなの知ってるわ。おかげさまで、私たちは怒りの矛先をどこに向けていいのかわからなくなったんだし」

「お前らの都合なんて知らん。ちよつと黙って聞いてろ」

守護騎士たちは、間違いなく弱体化している。

理由は単純。闇の書から、解放されてしまったからだ。

見た目はともかく、厳密に言うといつらは生物じゃない。いわゆる魔法生命体というやつだ。

人工的に生成したリンカーコアを、魔法で肉付けした存在である。

たぶんだが、ジャンルとしてはゴーレムとかそっちの方が近いんじゃないだろうか。

「それがどうしたってよの。つまり、向こうは怪我しても魔力補充で全快できるってことでしょ？」

「そこだ。本来、守護騎士ってのは主との間に闇の書を挟んでリンクを結んでる。ところがどっこい、今はその中継なしはやてのリンカーコアから直接魔力を引いてるんだ」

もちろん、守護騎士にはリンカーコアがある。個々が保有している魔力は膨大だ。

しかし、だからと言って無尽蔵なわけではない。

消費すれば、その分だけはやてのリンカーコアから吸い取ることに

もなる。

「間に闇の書っていう中継がない以上、今のあいつらは使い魔とさして変わらん。使い魔がどれくらい術者の負担になるかは、まあ言わなくてもわかるよな。はやての潜在魔力は膨大だが、それでも今はまだ4人の全力戦闘を支えるのは無理だろう」

はやてのリンカーコアが、疲弊しているというのも大きな理由だ。更に付け加えるなら、今のあいつらには管制役が存在しない。

リインフォースはパソコンの中にいる。いくらなんでも、あそこから全体の把握は難しいだろう。

はやてへのノックバック。リインフォースの不在。あいつらの性格も加味すれば、かなり手加減して戦うに違いない。

「まあ、もともと正面切つて戦うつもりはなかったしな。お前らが手を貸してくれるなら、メイン戦力の陽動を任せることになるか」

「剣士とハンマー使いつてこと？」

「出来たら犬も任せたい。補助があると面倒だろうから、シャマルはこつちで無力化する」

んー、と猫共が唸る。

弱体化したといつても、あくまで守護騎士の技量が落ちたわけじゃない。

今さらだが、ギル・グレアムといえばかなりの有名人だ。

流星に衰えていると思うが、現役時代の強さは今でもときどき耳に入ってくる。

そして、その使い魔であるこいつらが弱いわけがないだろう。

場合にもよるが、守護騎士を全員相手にしても互角に戦うかもしれない。

いや、流星にそれは買い被りすぎか？

「手伝ってくれるなら早朝に宣戦布告して、目的達成と同時にミッド行きだ。そうじゃないなら、明日の夜に戦って事後処理も含めると1週間ってところかな」

「事後処理が必要なことするわけ？」

「そりゃあお前、いくら弱体化してるっても俺が勝てるわけないだろ。」

トリモチとかバケツスライムとか大量に用意するんだよ」

「なんでバケツスライム？」

「なんとなく興奮するから？」

「死ね！」

僕は死にましえーん！

「冗談はさておいて、どうする。手伝うのか？ 出来るだけ早く帰りたいのは、アースラの帰還が関係してるんだよな。確か、闇の書の暴走で死んだのはクライド・ハラオウンだったか？ アースラの艦長と執務官も、そんなファミリーネームだったよなあ」

うーん、なんの関係があるんだろうねえー。

向こうを留守にし続けると、いったい誰にバレて気まずい思いをするんだろうなあ。

ちよつとわかんないやー。

そういえば、クライド・ハラオウン氏が犠牲になったときの責任者って、ギル・グレアムだったらしいねー。

ウワー、イツタイドンナカンケイナンダー。

「あなた、あんまり人から好かれないでしょう」

「好かれてたら傭兵なんてやってらんないんでね」

「くそっ！ 戻る方法さえあれば、あんたなんかここで殺してやるのに」

凄い物騒なことってんなあ。

やだー、ヤクモチやんわーこーいー。

まあでも、これで協力するしかなかったよね、ゲス顔。

最終話かもしれない ヤクモに竹を接ぐ

不意に目の前で閃光が走り、遅れてきた爆風に体をなぶられる。痛い。正直、今すぐ逃げてしまいたい。

ただまあ、そうするわけにもいかないから必死に態勢を元に戻す。このまま錐揉み状態で落ちれば、地上で前衛オブジェの未来が待っているだろう。

「もうちよい手加減とかあっていいと思うんだよな！」

「手加減だと？ 笑わせる!!」

なんとか足場を作って着地したところへ、シグナムが獰猛な笑みと共に突っ込んでくる。

怖すぎてちびりそう。

「さっきも言ったはずだ！ 主はやての所へ行きたいなら、私を倒していけ!!」

「どこの少年マンガだいい加減にしろ!!」

アルターデコイと同時にハイド魔法を発動。幻影だけを残して後ろへ飛ぶ。

さっきまでいた場所を、レヴァンティンが通過するのは見ていて肝が冷える。

幻影とは言え、頭から真つ二つとか。

殺す気だよこいつ。

「よおし、もう一度ちゃんと話し合おう。暴力はなににも生み出さない」「お前が主はやてに会いに来た。だから守護騎士を代表して、私を倒せば通すと言っている」

「どうしよう、理論がぶっ飛び過ぎてて会話にならねえ」

再びシグナムが突進してくる。

とりあえず、接近戦じゃ勝てるわけがない。バラージショットで弾幕を張れば、多少は牽制になるだろう。

足止めになるかは別問題だけどな！

その証拠に弾幕を斬ったり掻い潜ったり、進行速度をちよつとそぎ落とした程度の効果しかない。

恭也に使った量の10倍出してこの程度だ。ホントに嫌になる。

「バレットブレイズ、チャージスタート。バラージショット、炸裂弾を強制発破！」

命令と同時に、弾をばらまいた一帯が吹き飛んだ。

誘爆したバックショット弾も相まって、ちよつとした破壊力になった。

しかし、そんな攻撃ですらシグナムは一撃で切り裂いてくる。

爆風を切り裂くってどういう理論だとか、これでホントに弱体化してるのかとか言ってる場合でもない。

慌てて足場を蹴り、危うくかすりそうになるレヴァンティンを避ける。

バックショットを背中に打ち込んでみるが、加速が早すぎて弾速が追いつかなかった。

悪夢かな？

「マルチプル起動。アクティブソナー、ソニック」

同じ工程を3度繰り返す。

発動位置は自分を中心に前面180度。

破壊力のある攻撃ではないが、流石に超音波まで斬れたりはしないだろう。

しないよね？

「くっ、貴様の多彩さは本当に厄介だな！」

「全然うれしくなーい！」

頭痛でシグナムの動きが鈍る。

長期戦に望みはない。なら、この一点に全賭けだ。

分の悪い賭けは嫌いじゃない！

「アルターデコイ・シングルモーション」

映像がぶれるように、もう1人の自分が俺から分離する。

1人は右へ、もう1人は左へ。

まるで鏡合わせのように、それぞれの方向へ走りだす。

そんな俺の姿を、シグナムが視線で追ったのは一瞬だった。

凜猛な笑みを浮かべ、迷いなく左へ走った俺に斬りかかってくる。

「惑わせた上で収束砲といったところか！ 収束した魔力まで誤魔化せていないぞ!!」

大上段からの一閃が、右の肩にめり込む。

峰打ちなのは優しさかもしれないが、肩の骨がまとめて碎ける威力だ。

斬られた俺が、そのまま碎ける。

収束砲の魔力も、一気に霧散した。

残るのは驚きで目を見開くシグナムと、その背後から全力加速で接近する俺だけだ。

「収束砲なんて、わざとに決まってるだろうがあ!!」

魔法なんて関係ない。

義手になった右の拳と、今の加速度で十分な破壊力を生み出せる。

慌てて回避運動に移るシグナムに、霧散した余剰魔力を利用してバインドをかけた。

逃げ場なんてくれてやるか！

†

なんとか八神家へと辿り着き、玄関を体重で押し開ける。

最後の一撃。まさか避けられないからって、カウンターに肘を入れられるとは思ってなかった。

やっぱり守護騎士は化物だわ。

「まあ、それ以上の魔王様が待ってるわけだが」

「フハハハ、よう来たなヤクモさん」

玄関先に、仁王立ちした少女が立っている。

背中黒い羽が、いかにもって感じだ。

手に持った杖は十字架だが、悪魔なのか天使なのかどっちだよ。

「さあヤクモさん、始めよか。闇の書が欲しいなら、力尽くで奪ってみ!!」

「まったく、連戦とかキツイねえ」

デバイスを呼び出し、M1903のスライドを引く。

魔力は心許ないが、経験値の差で埋めるしかないだろう。

楽しい楽しいラストダンスだ。

「ここはひとつ、気合を入れなおしてやるしかない。

「現役の傭兵なめんなよ！」

「ふふん！ リインフォースと私は無敵なんやで!!」

俺がストライクスファイアの魔法に乗せて引き金を引くのと、はやての杖が閃光を発したのは同時だった。

爆発が生じる。

その中を無理やり突破した俺に、はやての笑みが答えたようだった。

58 ヤクモの嘴の食い違い

午前6時という朝も早い時間帯から、八神家の居間はにわか騒がしくなりだしていた。

集まっているのは守護騎士の面々とリインフォース。いつも最後に起きてくるヴィータですら、眠い目を擦りながら居間に置かれたP Cの前にいた。

「どう思う？」

「結界の発生は感知したわ。まさか、本気なのかしら？」

「とりあえず、行ってぶっ飛ばしてみればわかんじゃねえか？」

「俺は残ろう。万が一ということもある」

いや、だがな……と言葉を濁しながら、シグナムは表情を歪める。方針としては固まりつつある状況だが、それ以上に意図が見えない。

事の発端は、つい先ほど入ってきた念話による宣戦布告だった。

首謀者はナナミ・ヤクモ。内容は、大人しく闇の書を寄越せというものである。

彼がなにをしたいのかわからないのは、今に始まった話でもない。

しかし、今回の発言には明確な敵対発言も混じっていたのだ。

だからこそその宣戦布告だが、そうすることの意味が彼女らにはさっぱりわからない。

おそらく普通に闇の書をねだれば、きっとはやては理由を聞いた上で渡すだろう。

守護騎士たちもそれくらいは想像がつく。そしてなにより、ヤクモなら別に渡しても構わないと思っていた。

少なくとも、悪用してはやての不利を作るとは思えなかったからだ。

「あいつはバカだが、主はやてを害するとは思えない」

「まあ、そうだな。バカだけど、バカはバカなりにはやてのこと考えたたもんな」

「確かにバカナやつだが、無意味にこんなことをするバカではないだ

ろう」

「いつものバカな感じとは、なんだか雰囲気も違いましたし。もしかしたら、また新しいバカを思いついたのかもしれないわ」

『お前たち、彼は一応命の恩人だ。あまりバカバカ言うのは……まあ、バカだとは思うが』

うーんと5人は顔をつきあわせて悩む。

方針として、ヤクモを殴り倒して引っ立てるのはいい。

はやての前に連行して、大岡裁きまで想像した。

問題は、相手が腐っても傭兵ということにある。

はつきり言って、勝算もなしに挑んでくることはないだろう。

「ヤクモは結界が張れなかったんじゃないのか？」

「そういえば私、それで呼び出されたことあったわ」

「つうことは、誰か協力者がいるってことか？ まさか、なのはじやねえだろうか」

「考えにくいな。あの高町が、大人しくヤクモの協力をするとも思えないのだが」

もつともなザフィーラの意見に、他の4人は頷く。

しかし、そうなるともう彼女たちに心当たりはない。

この世界において、魔法が使える人間の知り合いは彼女くらいだからだ。

『まあ、我々に挑んでくるぐらいだ。どう考えても、彼が1人で来るとは考えられない。少なくとも2人、それもプロの戦闘屋がくるのではないか？』

「ああ、それは間違いないだろう。ヤクモの同僚か、もしくは金で雇われた傭兵という可能性も」

「いや、その可能性は低いんじゃないか？ 主はやてに危害を加えそうな人種を、あいつは選ばないだろう。そもそも金がないだろうしな」

「確かに、あいつが金持っているとところなんて見たことねえな」

確かにと、再び5人は頷いた。

おそらくここにヤクモがいれば、死んだ魚のような目になっていた

だろうと守護騎士たちは思う。

金というワードは、あらゆる意味で彼の心を抉る最大の武器なのだ。

最悪の場合、連行する際の最終手段として全員で「貧乏人！」と罵るのも悪くない。

多少トラウマになったとしても、まあ大丈夫だろうというくらいの気持ちだつてある。

これも一重に、守護騎士たちの信頼カッコワライなのだ。

「どうしたん、みんな集まって。なんかあつたん？」

そこへ不意に、はやてが顔を出す。

いつも通りに起きてみたら、隣にヴィータがなくて彼女も少なからず驚いていた。

だいたい、朝ごはんの匂いに釣られて起き出してくるはずなのにと。

「は、はやてちゃん!? えっと、その……年末に、なにかイベントでもと、思つて?」

「いや聞かれてもなあ。イベントつて言ったら、二年参りとかやけど。うーん……まだ足もちゃんと治つとらへんし、車椅子である人ごみに突つ込む勇気とかあらへんで?」

来年こそは、某火星アニメの聖地巡礼でもしたいなあとは思つていたはやてだが。よく考えてみれば、守護騎士たちはこれが初めての年明けだ。

もしかすると、二年参りに興味があるのかもしれないと難しい顔をする。

「あ、いえ、違うんです主はやて! その、二年参りに行きたいという意味ではなく!!」

「まあまあ、別に気い使わんでもええんやで? 流石に私は行かれへんけど、興味があるんやったらみんなで見に来たらええよ。お小遣いもあげるし。あつ、屋台の焼きそばとトンペイ焼き買ってきてな」

「ええー、そんなの楽しくねえよ。来年でいいから、あたしははやてと一緒にいい!」

「主を1人置いて、遊びに行こうとは思えんな」

『優しいお前たちが、こんなにも素直な気持ち可言えるようになるなんて……ううっ……』

なんか話が変な方向へ逸れている上に、いつの間にか悪役にされたらしいシグナムとシャマルは顔を見合わせた。

もう、これで誤魔化せるならいいかもしれないとすら思えてくる。それもこれも、きつとヤクモの悪い影響を受けすぎたせいだ。きつとそうに違いないと、2人は納得して頷いておくことにした。

こういう悪役なら悪くないと苦笑いし合うシグナムとシャマルや、どこか満足そうに腕を組むザフィーラ。涙目のラインフォースと、それを「泣き虫さんやなあ」と優しげに慰めるはやて。オメエは心配し過ぎなんだよ、と少し照れたような仕草のヴィータも悪態を吐いている。

なんだかほっこりし始めた空気は、しかし1人の乱入者によって終わりを告げられた。

彼はラインフォースを押しつけてPC画面の半分に分けて入り、頬の筋肉をひくひくと痙攣させながら。

『あの、なんか感動的などこ悪いんですけどね。一言いつすか？ お前ら遅えよっ!!』

なにやってんのこいつ？ という目で、一同の視線がPCへと集まる。

それを受けて、ヤクモは思わず真顔になってしまう。こいつら………と思いつつも、あえて口に出さなかったのは優しさからだ。

「ヤクモさん、そんなどこでなにしてんの？」
『いや、まだなにもしてないんだけどね……』

みんなの「ホントになにしてんだこいつ」という視線を一身に受け止めつつ、ヤクモは深い深いため息を漏らした。

心なしか虚ろな目は、どこか遠くを見るように焦点が定まっていない。

『いいか？ 30分だ。こちとら、このクソ寒い中を30分も待ちぼうけ食らってたんだ！ まだかなー、まだ来ないなあって待ちっぱなし

なんだよいい加減にしろ!!』

「なに怒つとんの？ 寒いんやったらはよ帰っておいで。今夜は鍋にするさかい」

『わーい、凄い暖かそう……ってそうじゃねえよ！ この状況で俺があつさりお邪魔しまーすって入っていけると思ってたの!?!』

「邪魔するんやったら帰ってやあ」

『あいよー、って言えばいいんですかね……』

結局、帰るなら八神家じゃないか。なんてどうでもいいことまで考えながら、ヤクモは頭を抱える。

ちゃんと宣戦布告したよねとか、なんではやてに伝わってないんだとか。思うところはたくさんあるが、もう彼はこの際その辺りを全力で無視することに決めた。

言えば更に時間を取られるのが目に見えていたからだ。

ただし守護騎士たちには、後日なにかしらの報復手段は考えておこうと心に硬く誓う。

『これが最後通告だ。闇の書を引き渡してもらおう。もし拒否するなら——』

「うん？ 別にかまわへんよ。取りに来るか、それともどつか持って行けばええん？」

『……あ、あつれー?』

意識して出していた低い声が、一瞬にして崩れ去る。

とりあえず寄越せとは言ってみたものの、あつさりくれるとは流石にヤクモも思っていなかった。

そのための準備なり人員なりを用意していた側としては、とんでもない肩すかしだ。

『えっと、冗談とかで言ってるわけじゃないからな？ 借用じゃなくて、譲渡だつてわかってる?』

「自分で言つといて困惑するんやめーや。そんで、どこに持って行けばいいん？」

『え、あー……じゃあ、最初に会ったこ——ゴホンゴホン——おつとすまない、ちよつと咳き込んでしまった。お前の家から一番近い海浜公

園まで来い。もちろん1人でだ。仮に守護騎士が出張ってくるようなら』

「はいはい、1人で行けばええんやろ？ 何時くらいに持って行けばええん」

『アッハイ。じゃあ明日の日が落ちてから……ねえ、なんか流れおかしくない？』

せやろか？ と首を傾げるはやて。

画面の中のヤクモが、こんな絶対おかしいよ！ と叫んでみたところで、彼女の不思議そうな表情は変わらない。

「せやったら、夜の7時くらいに行くことにするわ」

『夜道は危ないから、じゃなかった。下手な行動をしないよう、こちらとしても監視の目を置く。家を出たら、まっすぐこちらへ向かってこい』

「悪役やりたいんやったら、もうちよいしっかりやりーや」

『べ、別にお前のためなんかじゃないんだからね！』

はいはいツンデレ乙、と受け流されたヤクモが寂しそうな表情で通信を切断する。

次に彼が何をしてくるか、それを予想してはやては小首を傾げた。

小さな唸り声に続き、わずかな吐息も漏れだす。

「師走は忙しいって言うけど、年越し前に変なイベントフラグ引いてもうたかもなあ」

ぼやくような言葉がどこかへ吸い込まれていくのを見送りながら、はやてはヴィータに闇の書を取ってくるようお願いした。

59猫の手も借りた

さつきまで曇っていた空から、とうとう雪が降り始めていた。寒い寒いとは思っていたが、現実的な要素を見せられると泣きたくなる。

クリスマスのはきは降らなかつたくせに、なんで今なんだよ。運命の神様は、もうちよつと自重してくれてもいいと思うよね。

「こちらオーナー1。キャット1、キャット2は状況を報告せよ」

『誰がオーナーだブツ飛ばすぞ!』

『あなたが主人になるくらいなら、今すぐ首を吊った方がましね』
酷い言われようだなあ。別にいいんだけど。

状況の推移は順調そのもの。

八神家を監視している猫たちの報告にも、まったく問題はない。言うべきことがあるとするなら、守護騎士たちが少しリラックスしすぎなところか。

あいつら、俺が敵だつてわかつてんだらうな。

『ターゲットが家を出たわ。ロツテ、追いかけてくれる?』

『おっけー、任せといて』

意外なことに、文句を言いながらも猫たちはしっかりと働いてくれる。

そりゃ、家に帰れるかどうかの瀬戸際だから当然か。

まあ交通費は俺が持つんだから、しっかりと働いてもらわないと困るんだけどね。

「守護騎士たちの動きはどうだ?」

『正直、拍子抜けするくらい大人しいわ。探知魔法系も反応なし』

「無駄な信頼を喜べばいいのか、なめられてる事実を嘆けばいいのか……」

難しいところだなあ。

やつぱり、あいつら俺のこと敵だと思っていないんじゃない?

釘を……いや、今は刺しても無駄か。

はやてがここに来たら、ちゃんと言い含めとこう。

「そのまま監視を続行。はやての接近か、守護騎士に動きがあったら連絡をくれ」

はいはい、とかなり雑な返事を最後に念話が切断された。

まあ、やることはちゃんとやってくれてるわけだし。態度まで軟化しろってのは、流石に無理な注文だろうな。

特に支障はないから、このままでもいいだろう。

「そんなことより、予定が狂いまくってる方が問題なんだよなあ」
どの辺で狂ったかって？

そんなの決まってるんだろ。はやてと初めて会ったときからだよ！

仮宿確保キターとか考えてた当時のアホな俺に、このクソロリコンが！ って言いたい気分だよな。

「適当なところで姿を消せばいいや、なんて思ってた時期が俺にもありました……」

『え、なんの話ツスか？ というか、急に連絡きたと思ったらそれツスカ』

こつちの話だ、気にすんな。

『なんかよくわかんないスけど、こつちの手配は済んだツス。バラした機械のアガリは、いつもの口座ツスよ。ミッドの通貨に両替してあるツス』

「わかった。ついでに、やっぱり密告の準備もしといてくれ。このままじゃ、すんなり行きすぎて怪しまれる」

『あー……じゃあ、交渉の録音は握りつぶすんスね』

「闇の書きようだい、はいどうぞー、で話が終わったからな。使えるかこんなもん」

そもそも交渉じゃねえよこれ。

使った瞬間、ここまでのお膳立てが全部崩壊するわ。

え？ もう崩壊気味だった？

やかましいー！

「昨日、結界を張ったときの魔力は検知してあるな？ それとなく管理局に提出しといてくれれば、情報提供料くらい貰えるだろ」

『それは別にいいツスけど。今度から表立って協力できなくなるツス

よ?』

場合によつてはこっちの方がやばいくらいなんだから、その辺りは仕方ないだろう。

はやてには、もう少しゴネてもらうつもりだったのに。すんなり渡されちやうと、いろいろ都合が悪くなる。

通信記録は破棄して、強奪した事実だけ用意するしかない。

「どっちにしても俺は宿替えだ。拠点をミッド方面に移すからな」

『それはまた、金づ——常連さんがいなくなつて寂しくなるツスね』

「テメエ、今金づるつて言いかけたか?」

喧嘩なら買うぞクソ野郎。

『気のせいツスよ』

「……まあいい。俺とのパイプは切れるが、守護騎士たちが次の常連になるはずだ。俺の情報だけは漏らすな。それ以外の事は便宜を図つてやれ」

『流石はお客さん、信じてたツスよ!』

調子いいなあ、こいつ。

俺の評価がどこら辺なのか、一回ちゃんと話し合つた方がいいかもしれない。

事と次第によつてはぶつ飛ばす。

『でも、便宜を図るつて言われてもツスねえ。守護騎士はともかく、所有者は一般人なんスよね? 流石になあ。なんにも無しでつて言うのはなあ』

「よし、いい度胸だ。ロボットの情報が、お前にはいかないようにする事もできるんだが?」

『ボランティア精神あふれる心で対応するツス』

いい心がけだが、最初っからそういうスタンスでお願いしたい。

聞いてもらえればラッキーくらいで言つてるんだとは思ふが。事あるごとに腹を探られると、流石に面倒だ。

下手な鎌掛けなんてしないよう、痛い目に合わせた方が精神衛生的にいい気もする。

ついついため息が漏れても、誰も文句なんて言わないよね。

「これは独り言だけだな。はやては将来的に管理局で働きたいそう
だ。魔力の素質も申し分ないし、守護騎士っていう戦力も持つてる。
きつと、凄く出世するだろうなあ。その幼少期を支えたとなれば、い
ろいろプラスになるかもしれないんだけどなあ」

『誠心誠意、お店を上げて応援させてもらおうッス！』

この野郎……

わかりやすくもいいけど、やっぱり1回くらいブツ飛ばしといた方
がいいかもしれないな。

60月にヤクモ、花にはやて・前

イラツとする店員との会話を切り上げ、念話を切断する。

深く吐いた息が、白い塊になって空気に溶けた。

頼むから、もう少しすんなりことを運ばせてくれないだろうか。

どいつもこいつも邪魔するのが好きすぎて困る。

「アホ博士ぶん殴って、聖王教会にも顔出さないとな。猫はミツドに捨てとけばいいか」

そのあとは知らん。

勝手にグレアムのところへ帰るだろ、たぶんだけど。

まあ、あいつらに必要以上の手を貸す必要もないはずだ。仲良しこよしになりたいわけでもないんだし。

「みんな思い通りに動かないもんだから、やることが日に日に増えていくよね。そう思わない?」

「そらゲームとはちやうからな。みんな、自分の思った通りに動くんやし当たり前やろ」

そしてまた1つ、思い通りにならない来客があった。

報告しろって言ったんだけどな。あのヌコ共め、嫌がらせのつもりかよ。

「よく来たな、はやて。仲間になる代わりに世界の半分とか要求してみるか?」

「前に、魔王は別におるとか言つたらんかった?」

ああ、言ったような気がするね。

地球破壊ビームは本気で死ぬかと思ったわ。常に非殺傷設定らしいし、大丈夫だったとは思うけどさ。

夜の暗闇の中から、苦笑したはやての車椅子が進み出てくる。ちようど街灯で照らされた場所で止まって、膝の上の闇の書に手を置いた。

俺の足元まで、街灯の光が届くことはない。

なんとなく、自分の立場を突き付けられたような気分だ。

闇の書の装丁を優しく撫でるはやてが、今なにを考えているか。そ

れがわからないのも、住む世界が違うからだろうか。

「じゃあ、約束通り闇の書を貰おう。説明はできないけどな」

「ええけど、呼び出したってことは話があるんやろ？ 闇の書が欲しいだけやったら、他にもやり方とかあったやろうし。そっちを先に聞きたいんやけど」

「……そうだな。じゃあ、率直にいこう。いくつか言っとくことと、はやての生活を助ける手段を置いて行こうと思ってる」

正直、前から少し気になってはいた。

もともと、両親のいなくなった八神家を援助していたのはギル・グレアムだ。しかし、次元断層が発生している現状では連絡手段がないはず。

はやてはなにも言わなかったが、守護騎士が増えたことで家計は火の車だったんじゃないだろうか。

今まで節約してきた貯金で食いつないでいた可能性もある。

まあなんにせよ、流石にこのままというわけにはいかないだろう。そうなつてくると、次は自力で資産運用をするか。あるいは、グレアムとの連絡手段を再び確保しなくてはならない。

どっちでも好きなやり方を選べばいい。だが、どちらを選ぶにしても用意は必要だ。

「海鳴市の外れに中古車の販売店がある。表向きの仕事とは別に、裏で魔法関係者を相手に商売をしてな。魔法の教材も用意させてるから、受け取りがてらに挨拶してくるといい」

「魔法関係者に裏稼業なあ。魔導師って、そんなにおるもんなん？」

「適正さえあればわりと。とは言え、ここは管理外世界な上に魔法文化もない。適正者の数も少ないし、発現しないまま終わるやつも多いんじゃないかな」

だが、決していないわけじゃない。

魔法に触れて、ミッドへ移住した人間もそれなりにいるだろう。

もちろん、それだけが理由ではないが。

「ここはいろんな意味で環境が整ってるからな。俺みたいなのも少なからず潜伏してる」

「自分の住んどった世界が、そこまで物騒やって初めて知ったわ。具体的に、環境ってどういう意味なん？」

「んー……ざっくり言ってしまうと、管理外世界なのに魔法技術の商品が手に入る環境って意味だな。ああ、あと無駄に平和ってのもあるか。世界規模の戦争なんて、管理外世界だと稀によくあるからなあ」

「稀なんかよくあるんか、これももうわからんな」
「もちろん、ここでだってないわけじゃないんだろうが。それもほんの小競り合いレベルのものばかりだ。」

世界中を巻き込んだ戦争、なんて規模は久しく記録にない。

次元外に出ていた魔法適正者も、これなら帰って気易いだろう。

当然、そういった人の出入りがあれば、そこに需要を求めた商売人もやってくる。

結果的に、平和な管理外世界で魔法関連の物資が手には入ってしまう。

俺のようなジャンルの人間には、潜伏しやすい場所としか言いようがない。

「まあ心配するな。俺らみたいなのにもルールはある。この環境を崩して、潜伏しづらくなったら意味ないからな」

「どの口が言うとなんのや」

「俺は悪くねえ」

ロストロギアもガチムチロボも事故だよ。

ちゃんと事後処理もしただろ。

「なにはともあれ、この店には絶対行け。そうすれば、また資産管理をしておじさんとも連絡がつく」

「……それは、暗におじさんも魔法関係者やっていう意味なん？」

「自分で調べろ。そのために伝手を1つ譲ってやってる」

ふーんと漏らして、はやてが考え込む。

頼むから、もう余計なことを思いつかないでくれ。

「ところで、ヤクモさんのことも同じように調べられるわけやろ。それはええんか？」

「一応、貸しを作って口止めはした。それ以上の利益をくれてやれば、

喋るかもしれないけどな」

「簡単じゃないぞと付け加えれば、やはりふーんと息を漏らすようにはやてが頷く。」

「実際、ガチムチロボの件は本当にやばかった。」

「危うく管理局の介入を許して、潜伏できる世界が1つなくなるところだったからな。商売人からしてみても、自分たちの市場が減ったかもしれないわけだし。」

「まあ、だいたいわかったわ。ほんなら、はいこれ。闇の書、持って行くんやろ?」

「……そうだけど。なんか、タイミングおかしくないか?」

「せやろか。別に、まだ話があるんやったら聞くで」

「ちよつと警戒し過ぎだろうか。」

「みんながこぞって邪魔するから、疑り深くなってるのかもしれない。」

「変に考え込んでいても仕方ないので、浮遊魔法で差し出された闇の書を引きよせる。」

「ああ、それから。管理局に就職するのはいいけど、あんまり正義感を振りかざさないように」

「管理局って警察みたいなのもなんやろ? そこで正義感は振りかざすなつて、言ってることおかしい?」

「法の番人が聖人ばかりなら、汚職なんて言葉は存在しないんだよなあ。一部の例外はいるけど、基本的にあそこは魔窟だと思っとけ。俺なんか可愛いレベルに見えてくるから」

「なんせ、サイン1つで違法研究を合法にできたりするやつらだ。」

「お得意の尻尾切りで、そういう黒い部分はしっかり隠してるけど。人助けは結構だが、向ける矛先は間違えるな。無暗に噛みついてたら、それこそなにされるかわからんからな」

「管理局も怖いところなんやなあ。でも、なんかあったらヤクモさんが助けてくれるんやろ?」

「無茶言うな。そもそも、俺はチンピラに毛が生えた程度の雑魚なの。管理局と正面切つてやりあえる権力も武力もねえよ」

「だいたい、すぐ駆けつけられる場所にいるかもわからないだろうに。」

「なんやかんや言いながら、ヤクモさんなら助けに来てくれそうだな。心したわ」

「……頼むから、それを無茶する理由にだけはするなよ？ お前から逃げつつ安否の確認、なんて矛盾したこと高頻度じゃできないからな」

「心配せんでも、私はヤクモさんみたいな無茶はせえへんよ。」

「こいつ、ホントにわかっただろうな。」

61月にヤクモ、花にはやて・後

悪びれた様子もなく、にっこり笑顔のはやてを見て思わず息を吐く。

諦めの境地、ここに極まれりって感じだ。

そもそも、小学生にこんなこと言ってる自分が情けなさ過ぎるんだから仕方ない。

「まあ、これで闇の書の分くらいは聞いた感じやな」

「そりゃよか……おい待て。言っとくが、今のは全部世間話だ。闇の書の対価に情報をやってるわけじゃないからな？」

不意に、ひやりと腹の底が冷えたような錯覚があった。

やばい。今、なにか致命的な一言を許してしまった気がする。

油断していたつもりはない……と思いたい。

そもそも相手は小学生だ。年季の差だってある。

どこか心の底で、大丈夫だと高を括っていた部分がなかったとは言い切れない。

「残念やけど、そう思ってるんはヤクモさんだけやで？」

「ごり押しにしか聞こえないな。はやてがなにか言ったところで、脅されてたって事実捏造できるからな？」

「そらまあ、言うだけやったらな。悪名が信頼に置き換わるんって、皮肉以外のなんでもあらへんけど」

余計な御世話だ。

そう言い返そうとしたところで、無造作にICレコーダーが取り出された。

ポケットからするりと出てきたそれは、赤いランプを灯しつつ稼働している。

「よっせ」

「闇の書やったら、ちゃんとあげたやろ？」

最初から最後まで今の会話を録音されたとして、特に問題はない。そんな些細な証拠、捻じ伏せられるくらいの伝手はある。

握りつぶしてもいいし、不十分な証拠として却下もできるだろう。

ただ、はやてが行動を起こしたという事実は問題だ。
状況理解はもちろんだが、行動力だって馬鹿にはできない。
そもそも、子供と侮ったのが間違いだったか。

「お前の将来が怖いな。抜け目ない行動だとは思いますが、カードとしては弱い」

「でも、できたら証拠は回収していききたい……ちやうか？」

手の中でICレコーダーを弄ぶはやての、どこか試すような視線が俺を射抜く。

確かにその通りだ。

できるなら、そういう小さな芽は摘んでおきたい。

下手なゴシップは、未来で絶対に厄介事を産む。

はやてが管理局に就職して、上を目指すならなおさらだ。

それでなくても、古代ベルカの技術と最高の戦力持ち。どこかで目をつけられて、変な横やりを入れられる可能性だってある。

「もう一度言う。よこせ」

「うーん……そうやなあ。じゃあ、取れるもんなら取ってみ？」

不意に悪戯でも思いついたように笑ったはやてが、自分の服の襟にICレコーダーを放り込んだ。

引っ掛かりのない体型のせいか、お腹の辺りが重みで垂れ下がっている。

なにやっつてんだこいつ。

「はい、ちよつとお邪魔しますよー」

「ちよツ!? マジか!!」

驚くぐらいならやらなきやいいのに。

無造作に裾を上げ、可愛い臍を眺めつつICレコーダーを回収する。

普段ならいざ知らず、この状況で躊躇うわけないだろうが。

「ヤクモさんに汚された……」

「否定はしないけど、人間が悪いな。そもそも、小学生の裸で興奮しろとか無理ゲーだろ」

「かつちーん。なんや、今凄い勢いでバカにされた気分やわ」

体を退くよりも早く、はやての手が俺の肩を捉えた。

ひくひくと頬が引き攣っているのは、たぶん気のせいじゃないだろう。

なんでさ。

「まあいい。頼むから、もう普通に諦めてくれない?」

「お断りやな。ようやつと、ヤクモさんをライトの下まで引きずり出したんや。今の自分が、どれくらい届くんか知つとくのも大事やろ?」

言われて見上げる。

当然だが、頭上には煌々と輝く街灯があった。

さつきまで届かないと錯覚していた場所。俺が『いるべきではない』光の下だ。

「付き合う必要があるのか?」

「もちろんあるで。例えば、そやなあ……グレアムおじさんのことやったら、実はもう連絡取れてんねん」

「……は?」

「ヤクモさんは、ずっと家におらんかったもんなあ。やから、私がなのはちゃんに魔法の相談しとったんとか知らんやろ」

一瞬、頭の中が真っ白になった。

なのはに、魔法の、相談?

いや、落ち着け。別に相談くらいすればいい。

俺にはいないが、頼れる仲間は大切にすべきだ。

でも、ギル・グレアムと連絡が取れている? それはつまり……「近くに仲間がおるんやったら、お互いに助け合う。それは普通のことやない? それに、なのはちゃんは友達やもん。相談くらいするで」

「あんの守銭奴! 仕事ぐらい選べ!!」

ビデオレターの仲介したり、はやての人探し手伝ったり。

そんな心温まるハートフルな仕事をこ受けるやつだった記憶が欠片もない。

思い浮かぶのは、金勘定をしながらけらけら笑っている姿だけだ。

なのに、どうして人助けみたいなことしてんだよ！

「あいつが、本当にギル・グレアムに連絡をつけたのか？ 高くついたらんじゃないか？」

「まあ、確かにお金は取られたんやけどな。でも、普通にエアメール送るくらいの値段やったで？ なのはちゃんも、これでビデオレター送ってるって言うてたし」

あいつ、マジでなにやってんだよ。

今さら慈善活動でも始めたってのか？

いや、巡り巡って俺への当てつけて可能性もあるけど。

「なんでギル・グレアムがミッドにいるってわかった」

「それはたまたまやな。ホンマは魔法のこと聞くんもりでなのはちゃんに相談して、囑託魔導師って制度があるのを知ったんが始まりや」
「……なるほど。管理局になのはが紹介して、書類を上げたらギル・グレアムの目に入ったのか。世の中クソツたれだな!!」
なんだよそれ。

どうせ、リンディ・ハラオウン辺りに書類送ったんだろ？

なら、そこはしっかり自分の手柄にしろよ！ ミッドに帰ってから、新戦力として報告を上げればいいだろうが!!

いや、わかってるよ！

高町なのはっていうとんでもない戦力を持つてる以上、追加ではやての面倒までは見れないよな！

武力の集中を防ぐとか、確かそんなルールが管理局にはあったはずだ。

どうせ最初から自分が運用できないなら、相応に信用できて貸しを作る相手に紹介するのは道理だろう。

それがギル・グレアムだったのは出来過ぎだと思うが。

「思ったより通用してるみたいやなあ。ちよつと落ち着きいや」

「腸が煮えくりかえりそうだ。ネコ共から通信が来なかったのも、それが理由だな？」

「せやで。私がここへたどり着くまでの間に、説得するよう守護騎士のみんなに頼んどいたからな」

ギル・グレアムの同意もあって、帰る手段も確保できたなら裏切られるのは当然か。

本当に頭が痛くなる。

なにより、自分で撒いた種なのが余計に腹立たしくて仕方ない。

「手紙でやったけど、おじさんがいろいろ話してくれたわ。私のこと監視してたのかな。次元航路が安定したら、改めて会いに来るらしいぞ」

「それはまた、ずいぶん殊勝だな。今度会ったらぶん殴ってやる」

「もう、そういうのあかんで？ 貰った伝手は、ちゃんとヤクモさん追いつめる為に使うから安心してえな」

どこに安心すればいいんだよ。

それにしても、この調子ならミッドに進出してくる未来は遠くないな。

「わかった。この件に関しては俺の負けだ。これも返してやる」

まあ、ここまで仕込んだならICレコーダー以外の録音媒体も用意してあるだろう。

猫共が裏切ってるなら、ここにこっそり守護騎士が勢ぞろいしてる可能性もある。

証拠を突き返されたはやての眉間に皺が寄った。

あつさり返されたことが腑に落ちないのだろう。

わずかに警戒の色を目に宿し、驚きとも戸惑いともつかない表情で俺を見返す。

「本当は、お前が中古車店で駆け引きとかも覚えて。そのあと、ミッドに来てから情報を流すつもりだったんだけどなあ。予定が狂ってばっかりだ」

「……おかしいなあ。ちよつとは届いた気いしたんやけど」

「ちゃんと届いたさ。だから、使いたくないカードを切るはめになった」

ここまで用意したものは全部無駄になったよ、おめでとう。

今からやるのは純粋なコネクションのゴリ押しだから、まだはやてじゃ対応できない方法だよ。

「ミッドに来たら、ベルカ自治領にある聖王教会本部を訪ねろ。言つとくが、今回ののは強制だ。行かないとダメかどうかなんて問答はするな」

なにか言いそうになったはやての口を、先に釘を刺す形で閉じさせる。

「そこでカリム・グラシアという女に会え。さっきも言ったが、管理局は魔窟だ。後ろ盾がないと、お前なんて一瞬で吞まれるぞ」

「ベルカ自治領の聖王教会な。真面目な感じやし、了解や。その辺の詳細しいところは、またグレアムおじさんから聞いとくけど。それが使いたくないカードなん？」

その話も、全部録音しとるで？　と言外に言ってるんだろが無駄だ。

そういう問題じゃないんだよ。

「じゃあ、これで逆転だ。ヤクモ・ナナミなんて名前の人間はどこにもいない。この場合はL級艦船第八番艦・アースラの艦長、リンディ・ハラオウンが証人になるだろうな。そんな人間は、第97管理外世界はもちろん、どこにも存在しませんってさ」

「……は？」

今度ははやての頭が真っ白になる番だ。

アースラはジュエルシードの件で第97管理外世界のこと調査している。

その上で、一般人の情報提供者からフェイトのパーソナルデータや魔力干渉の観測データを受け取っている。

これが犯罪者の提出物だとバレれば、当然だが証拠能力は薄くなるだろう。

そうならないよう、俺の存在を認めることはない。

同時に、俺の名前は偽名だ。

例えば交流があっても、どれだけ映像が残っていても、ただのそっくりさんでは俺と断定できない。

「本当の名前を教えなかったのは、こういうときの保険だよ」

「とんでもないごり押しを見たわ。でも、それやとヤクモさんがここ

におらへんってだけやろ?」

「まさしくその通りだな。だからこそ、コネクションだ。俺は2年ほどベルカ領でヒキコモリ生活をしていたことになるだろうな。そう言わせるだけの手土産も、ここにある」

「無茶苦茶言うとな。闇の書が聖王教会に流れるルートではれるやろ」

「闇の書を盗んだのはヤクモ・ナナミだろ? 裏社会に流されたロス・トログリアは、どこから出てくるかわかったもんじやないからな。俺は知らん」

はやての顔が、目に見えて苦い顔になっていく。

完全に屁理屈の塊だが、実際どうしようもないから困っているのだろう。

もちろん、深く突けば埃の出る言いわけだ。

ただ、軒並み突ける人間が突かれるとまずいというだけの話である。そして、今のははやてにはそもそも突けるだけの力すらない。

「どれだけ頭が回っても、コネクション1つで全部潰せる。それを覚えておくといい。次に会うときに、今から怖くて仕方ないけどな」

「あわよくば、ここで首輪付けたらうと思ってたんやけどなあ」

やっぱり届かんかった、とはやては苦笑する。

いや、はつきり言って危なかったよ。

これでコネクションが揃ったら、将来的にどうなるのか想像もつかない。

次のときには、正面からやり合うのは避けた方がよさそうだ。

「ホンマに行ってしまうんか?」

「ああ。なかなか楽しい共同生活だったよ。俺みたいなのが、まさか家族の温もりを——」

そのときふしぎな事が起こった。

いや、太陽光とか液化化とかは関係ないんだけどね?

家族という言葉が、いやにすんと胸の奥に納まった気がする。

愛とか恋とか、そんな小さな理由でこんなことしてるわけがない。

「家族がどうしたん?」

「いや、別に。ミッドで待ってるから、さっさと魔法覚えて追いかけてこい。あんまり遅いと、俺の敷いたレールの上を歩き続けることになるからな」

「そんなんぶつ壊したるさかい、覚悟しときや」

本当にぶつ壊されそうだなあと、思わず笑みが漏れた。

俺に初めてできた、本当の家族。

利用するために拾われた恩でも、同業者のよしみでもない確かな繋がりがここにある。

なるほど、これが家族か。

確かにこれなら、理由なんてなくても肩入れしたくなる。

「こんな感情が、俺にもあるなんて驚きだな」

「え、なんか言うた？」

いんや、なんにも。

するりとはやての手から逃れて、数歩離れる。

転移魔法を展開し、諦めたような笑みで手を振るはやてに罪悪感を覚えた。

厄介なもんだなあと苦笑しつつ、俺も手を振り返し、そして世界は切り替わる。

ここからは、また殺伐とした世界だ。

でも大丈夫。

考えても見ろ、闇の書の影響力を。俺はあと10年は戦える！

空白期 ミッド暗躍編

62病は発狂から

観察日記1日目 ヤクモ様のコンディション、良好

今日から、ドクターの要請により報告書を書くこととなった。

どのような形式がいいか悩んだ末、普段の行動を報告せよとのことだったので、日記という形をとろうと思う。

それもこれも、帰還初日にヤクモ様が騒動を起こしたせいである。後ほど、抗議の言葉を思いつく限り伝えよう。

最初の1ページ目なので、少し長めに。この日記のルールと、書くことになった経緯を軽く書いておく。

ルールは単純。ヤクモ様に、この内容を見せないこと。

そして、日記を書いている風を装って、ヤクモ様の行動を逐一記録することだ。

次に経緯だが………どう書けばいいだろう。

ヤクモ様が帰還と同時に、ドクターの研究室へ押し入って質量兵器を乱射した。

そのとき、既に活動状態にあったトーレとクアットロを相手に大立ち回りをしたらしい。

実際の場面を見ていないため、なんとも言えないが。後日、これを読んだ私が混乱しないことを祈る。

なにをしているんだろうか。あの人は……

観察日記4日目 ヤクモ様のコンディション、錯乱

騒動から数日たつが、依然としてトーレとクアットロはヤクモ様のことが受け入れられないらしい。

なにかにつけて、衝突している場面を見ている気がする。

……いや衝突でいいのだろうか、これは？

なぜ、ヤクモ様は2人を見かけるとしやがみ込んで顎をしゃくる様に睨むのかわからない。

……
決まって顔に蹴りをもらっても、やめない理由が本当にわからない

観察日記10日目 ヤクモ様のコンディション、疲労

ヤクモ様は、目を離すとすぐに徹夜を繰り返すことが判明した。

曰く「人間は50分の活動時間と、10分の小休止で脳活動を続けることができる」とのことだった。

脳は大丈夫かもしれないが、体がもたないのでは。そこまで思っ
て、脳もダメだったことに思い至る。

これは、早急に休みを取らせなくてはならない。

彼は、ドクターのやろうとしていることに必要な人材なのだから。

観察日記13日目 ヤクモ様のコンディション、睡眠

本日は、兼ねてより警告していた睡眠の要請を無視され、ついに強
硬手段をとった。

………私は悪くない。

観察日記38日目 ヤクモ様のコンディション、失踪

ここ数日、ヤクモ様の姿がどこにも見えない。

ずっとなにやら作っていたようだが、その作品も見当たらない。

起動実験にでも出ているのかもしれないが。しかし、監視役として
はよくない状態だ。

まさか、基地の監視網をくぐって脱走できるとは思っていなかった。
た。

正直に言うと、少し甘く見ていたのだろう。

次は、生きていればセーフぐらいのセキュリティを用意しなくて
は。

心配はいらない。ヤクモ様もよく言っているのだから。

なんとか致命傷で済んだ、と。

観察日記40日目 ヤクモ様のコンディション、帰還

なぜか、ヤクモ様はドゥーエと一緒に帰ってきた。

帰って……いや、訂正しよう。

なぜか、ヤクモ様はドゥーエに引きずられて現れた。

なんでも、管理局の最高評議会が集う部屋まで侵入してきたらしい。

どうなればそんなところへ行くことになるのかわからないが、本人は「ぶらぶらしてたら着いたんであつて、脳みそ見ても楽しくねえよ」と肩をすくめていた。

そういう問題ではないと思う……

当の最高評議会からは、ドクターの元へクレームが入ったらしい。顔を引き攣らせたドクターを見るのは、初めてかもしれない。

観察日記43日目 ヤクモ様のコンディション、寝不足

やはり、少し目を離すと平気で徹夜の作業を繰り返す。

何度目かもわからないが、強硬手段をとった。

ついでと言つてはなんだが、今回は作っているものも確認するようドクターから言明されている。

結局、前回はなにを作っていたのかわからず仕舞いだったからだ。

作っていたのは、グローブのような武器だった。

そういえば、ドゥーエが隠密向きの武装を欲しがっていたような気がする。

出会って数日で武装を作るだなんて。私の分は、途中で投げ出したというのに……

観察日記51日目 ヤクモ様のコンディション、負傷

通路の向こうから、ずたずたになったヤクモ様とずいぶん嬉しそうなドゥーエが歩いてきて驚いた。

いろいろ話し込んでいたようだが、それどころではない。

すぐさまヤクモ様を抱えて治療室へ向かい、体中の切り傷をふさぐ処置を行った。

あとから追いついてきたドゥーエ曰く、新武装の性能テストに熱が入りすぎたとのこと。

とりあえず、2人には正座をしてもらった。

観察日記84日目 ヤクモ様のコンディション、失踪

またヤクモ様がいなくなつた。

もう何度目かもわかりませんが、セキユリティをどうやって抜けているのかさっぱりわからない。

いっそのこと、縛つて監禁した方が確実性を得られる気がしてきました。

観察日記105日目 ヤクモ様のコンディション、失踪

なぜか、ミッドチルダ西部のエルセア地方で目撃情報があつた。

いや、あつたというか……試験起動中の機動兵器が、たまたま発見したというのが正しい。

とりあえず現地に向かつて方々探し回つてはみたが、流石に遅かつたようだ。

すでに痕跡もなく、足跡を追うのも難しかった。

……ここ1ヶ月ほど、彼の顔を見ていないせいでしょうか。このふつふつと湧き上がるなにかは、きつと怒りであると思います。

観察日記117日目 ヤクモ様のコンディション、帰還

ヤクモ様の帰宅、と同時に捕縛に成功した。

何をするだアー！ と細やかな抵抗をされましたが、これでもう逃げられないでしょう。

椅子に縛り付けられたままもがくヤクモ様を見ていると、なにやら言葉にしづらい感情が芽生えそうです。

仕事？ トイレ？ 食事？

ご安心ください、私がすべての面倒を見ますので。

観察日記118日目 ヤクモ様のコンディション、失踪

まさか、ここまでノータイムで消えるとは予想外でした。

そういえば、右腕の改修をするために戻つたと言っていたような。

彼が脱出できた理由は、おそらくそれでしょう。私としたことが、義手であることを失念して腕を縛るだなんて：

次に身柄を確保した際、そのような無粋なものは破壊しなくてはなりません。

椅子に温もりは残っていませんが、どうやってここから脱出しているかは既に調査済みです。

いつの間に防犯システムに潜り込んだのかは知りませんが。全てのセンサー類が、一見するとわからないレベルでズラされています。

そうやってできた隙間を縫って、彼は外へと出ているようです。

おそらくは、今回も……

外に出てもらえた方が、こちらとしては好都合。

大丈夫。手加減は得意です。

観察日記131日目 ヤクモ様のコンディション、搜索中

ヤクモ様を追いかけ、隠れ家を出てから数日。今日も何度かドクターから通信が来ていた。

しかし、いつもタイミングが悪い。ちょうど、重要な情報を掴めそうなときに限って呼び出しが鳴る。

なので今回も、断腸の思いで無視して目の前の状況に集中することを選ぶ。

最終的に、これがドクターのためになるのだから許してもらえらるろう。

だから1日も早くヤクモ様を捕縛し、隠れ家へ戻らなくては。

観察日記144日目 ヤクモ様のコンディション、搜索中

ドクターの開発していた機動兵器を、最近よく見るようになった。私を見つけては襲い掛かってくるが問題ない。

逆に、こちらの足りない手を補う道具が増えて助かっているくらいだ。

それにしても、なぜドクターの作品が私を？

なにかの不具合かもしれないので、後ほどメッセージでも送って
こう。

観察日記183日目 ヤクモ様のコンディション、すれ違い

どれだけ探せども、手がかりばかりでヤクモ様の姿が見えない。

仕方がないので、情報の整理や足りなくなった物資の補充をしよう
と隠れ家に戻ってきた。

すると、いつの間にか新たな姉妹が何人かロールアウトしていたの
だが。どうにも、彼女たちが持つ武器が気になる。

聞いてみると、ヤクモという技術者にIS能力に合わせた武装を製
作してもらったのだという。

いったいいつの話か聞けば、なぜか悲鳴のような声で1週間前だと
教えてくれた。

なにやら妹はぐったりしてしまったので置いてきたが、これは失敗
したかもしれない。

次からは、もう少し隠れ家へも戻るようにしよう。

観察日記254日目 ヤクモ様のコンディション、発見

偶然。本当に偶然ではあるが、ここにきてヤクモ様を発見するに
至った。

それはグラナガンの街を歩きながら、次はどの地方へ飛べばいいか
予想を立てていたときのこと。

なんとなく視線を向けたカフェテリアのテラス席に、緑髪のロンゲ
と同席している彼を見つけた。

久しぶりに見たヤクモ様は、10本指の右手で忙しなく空間モニ
ターのキーボードを叩きつつも、コーヒーを片手に談笑している。

ちゃんと健康そうでよかったとか、いつの間に義手を改造したのだ
ろうとか、談笑するようなお友達がいたんだとか。そういつたいろん
な感情が入り混じって、気づいたら緑髪の男を締め上げていた。

既にヤクモ様の姿はなく、辺りには悲鳴を上げながら逃げ惑う人、
人、人。

今でも半壊したカフェテラスを見渡すことに、どうしてこうなったのか疑問がわいてくる。

不思議だ。

とりあえず、緑髪からいくつかヤクモ様が潜伏している隠れ家を聞き出すことに成功した。

管理局が出張ってきたので止めを刺しそこねたが、まあ大丈夫だろう。

観察日記365日目 ヤクモ様のコンディション、不明

案の定だったが、聞き出した隠れ家はすべてもぬけの殻になっていた。

どこの部屋も殺風景で、元から物があつたのかは怪しいが。とりあえず、備え付けられていたベッドからシーツを回収しておく。

これをもとに生体サンプルをとれば、搜索の手がかりになるはずです。

そう、これは手がかり。手がかりですから。決して私用にしているなどと（ファイルが破損していてこれ以上読み込めない）

中間報告まとめ

気づけば1年ほど経ち、いまだヤクモ様の確保には至らず。

いつも上手に、私の手をすり抜けていってしまう。でも心配ありません。

きつと次こそ捕まえて、今度こそ逃げられないように縛り付けて、この手の中に、私がいないと生きていけない、私だけのヤクモ様を

……

考えただけでも素晴らしい。

そうなる日が、今から楽しみであります。

搜索の続行につき、必要な事務処理の一部を妹のクアットロへ委譲。

以降、どうしても私の処理が必要なもののみメッセージへ添付して送ってもらうように調整をした。

63 備えあれば嬉しいな

夜の街は明るい。

まるで昼間と勘違いしてしまいそうになるほどに、光で溢れかえっている。

空を見上げれば1つ1つの雲がくつきりと見え、月明かりがなくとも足元はしっかりと見えている。

もう時計は深夜を訴えているのに、人の往来だって途切れることがない。

夜の街は明るい。

だが、その明るさを避けるようにして1人の男が裏路地を歩いていった。

隣の通りへ出れば明るい街が広がっていると、彼はそれを嫌うように暗く汚く狭い、そんなビルとビルの間を縫うように進んでいく。

こつこつと響く靴音に合わせて、ポケットの中の小銭がちやらちやらと音を立てる。

口元には灯。

くゆる煙を後ろに流しながら、冬でもないのに吐く息は白く濁っていた。

「よう、待ったか少年」

「待ってませんが。少年はやめてください、ヤクモさん」

何度目かの曲がり角で、彼、ヤクモ・ナナミは待ち人と出会う。

真っ白なスーツに緑の長髪。優男然とした見た目に反し、青い瞳の中には油断がない。

管理局本部に所属する査察官、ヴェロツサ・アコースがそこに立っていた。

辟易とした表情で首を振る彼に、ヤクモは失笑とともに煙を吐いて見せる。

「煙草なんて吸ってましたっけ?」

「最近、なにかとストレスが多くてなあ。追跡者がエキサイトしてる

からなんだけど……まあ、なんだ。お前、よく無事だったな」

「追跡者……なるほど、あまり思い出したくないですね。あれは。自分でもよく生きてたなどは思います」

嫌なことを思い出して、ヴェロツサの表情が歪む。

少し前、2人が会ったときの闖入者を思い出しているのだろう。

ヤクモとしてもあれはイレギュラーだったし、なによりあそこまでの強硬手段に出られたこと自体が予想もできなかったのだが。

「もうちょっと冷静なやつだと思ってたんだけどなあ。まあいいや。それよりも、頼んでたことはどんな感じだ？」

「今、日程を調整してますけど。今度はなにを企んでるんです？　この場合によっては、僕も被害を受けるわけですけど」

「暴力シスターの折檻なんて慣れたもんだろ」

「自分は受けないからって気楽に言っ……」

聞こえないとでも言うかのように、ヤクモは煙を空に吐いた。

明るく照らし出された空に昇るよりも早く、白の塊は霧散して消えてしまう。

「まあ、どうせこつちだつて顔だしたら一発ぶん殴られるだろうからな……うん、なんか対策考えとかないとやばいかもしれん」

「やばいどころか、間違いなく引導を渡されますよ。世界平和のためとか言われながら」

ありそうで困るから、2人そろって言葉を失う。

ついでに暴力シスターの元締めはなにも言わず、ただにこやかに眺めているだけだろう。心の中では、こつそり再起不能にならないかなとか思いながら。

そういう風景が簡単に予想できてしまったヤクモは、自分でもわかるくらい頬の筋肉が引き攣らせる

ちよつと話がしたいだけでこれなのだから、泣いてもいいじゃないかとすら思えてくるほどだ。

「予測可能回避不可能とはこのことか。めっちゃ逃げてえ。もう全部放り出してしばらく引き籠りてえ」

「それでも、会うんでしょう？　なにやら、入れ込んでいる少女がい

るって話ですけど。え、ロリコン？」

「ははは、てめえ言うようになったな頭吹っ飛ばすぞ」

わあ怖いと、軽い足取りでヴェロツサが数歩さがる。

そのおちやらけた姿は、スラム街を走り回っていたころからずいぶん変わった。

たまたま見つけた古代ベルカ系のレアスキル持ち。それを渡りに聖王教会へコネを作って、気づけばずいぶんと長い付き合いになる。やっていることは下種以下の何者でもないが、それを重々承知した上でヤクモは肩をすくめてみせた。

適度な距離感を保っているとは思う。

これは、お互いにお互いを利用しているのだと。

最初にヤクモはヴェロツサの環境を改善した。その見返りとして、コネを手に入れた。

そしてヤクモはヴェロツサに少しばかりの処世術を教えた。代わりに情報をいくらか貰った。

いつしか地位を手に入れた彼は、今やヤクモにとって重要なパイプの1つである。

「ああ、さもしい大人になっちまったなあ」

「僕と初めて会った段階で、十分にさもしかつた気がしますけど？」

痛い指摘に表情を歪めながら、ヤクモが灯を消す。

再び闇に落ちた路地裏に、もう彼の姿はない。残ったのは白いスーツの影のみだ。

都合が悪くなると、すぐ逃げるよね。なんて首を振りながら、ヴェロツサも暗い路地を後にする。

†

さて、ちよつくら車を転がして人に会いに行こうとしているわけだが、とりあえずウーノをなんとかしないと話が進められなくなってきた気がする。

というのも、少し前までは気にならなかった追跡能力に磨きがか

かかってきているからだ。

よし、そろそろあの仕掛けの準備でもしようかな。からの「みいつけたあ！」が鉄板になりつつある。

この精度でストーカーされると、ホント洒落にならない。なんだあれ、ジェイソンも裸足で逃げただすぞ。

「ということ、頼みがあるんだけど」

『無理だ』

それはそれは鬱陶しそうな表情で、グレアムおじちゃんに拒否られてしまった。大量の書類整理で苛立っているからか、空間モニター越しにため息までついている始末だ。

なんとなく、画面外から発情期の猫みたいな声も聞こえるが。まあ、そこはいいだろう。

『君のおかげで、こちらは大忙しだ。まあ、自業自得であるとも言えるのだがね』

「そうだゾー」

なんて適当にいったら、画面が切り替わってぐりとぐらのどつちかわからない方が割り込んできた。

ん？　なんか名前が違ったような……とりあえず音声をミュートにしておく。

こちらら運転中なので、あまり騒がれると爆音流して走る迷惑車両扱いされかねない。

俺ったら恥ずかしがりやさんだから、そんなの耐えられない！

『聞いてんのかいあんたは!!』

「聞いているわけないだルルオ？」

今です！　とばかりに音量を戻せば、ドンピシャで怒られたので音速で煽り返す。

なんか、今にも歯を噛み砕きそうなくらい食いしばってるけど、カルシウム足りてるんだろうか、コレガワカラナイ。

「まあまあそう言うなって。はやてからの小さな復讐なんて、立派な大人にしてみれば軽いもんだろ？」

『……彼女の罰はかまわない。甘んじて受けよう。だが、ここにある

書類の半分は君の仕業なんだがどうかかな?』

「細かいこと気にしていると、血圧上がっちゃうよ?」

『上げている本人に言われると、なおのこと腹が立つんだがなあ』

眼鏡を外して、目頭をもみもみ。

天下のグレアム提督も、流石に疲労がたまっているようだ。

とはいえ、闇の書事件未遂から1年と少し。そろそろアースラもグ
ラナガンに帰港するころだろう。

その前に楔っぽいものをあっちこっちに打ち込まないといけない
わけだから、もうちよつと無理してほしい。

1週間くらい眠れなくなる栄養ドリンクを送つとけばいいだろう
か。

『今度はなにをするつもりかね』

「いやちよつと聖王協会に用事があるんだけどね? ほら、前に言っ
たストーリーカーをしばらく引きつけといて欲しいっていうか。そっち
の使い魔に俺の恰好で逃げ回ってもらいたくて?」

『嫌に決まってるでしょうが! さつさと自滅しろ犯罪者!!』

「あーあ、はやての地盤のためには必要なことなのになあ。ロストロ
ギア認定されてる闇の書をどうにかしないと、管理局に入局したと
き、あいつは苦勞するんだろうなあ。それなのに手を貸してくれない
とか、グレアムおじちゃんってば心がせまーい」

とか言ってみたりしたら、耐えきれなくなったぐりとぐらの活発な
方がサンドバックみたいなのを画面の端で強打しはじめた。

ずっとそこにあつたのか、もしくは魔法で生成したのか。どっちに
しても、アグレッシブなストレス発散方法だなあと思う。

ほら見ろ、相方が死んだような目でため息ついてるぞ。

『……わかった。時間はどれくらい稼げばいいんだ』

「夕方ぐらいまでよろしくお願いさしすせそ。指定エリア送つとくか
らあくしろよ?」

『君はときどき不思議な言語で喋り始めるから、すごく理解に苦しむ
んだがね……』

アツハイ。

はやてだったらどう返してきてただろう。1年も離れてると、流石に寂しくなってきた。

あの打てば響くってというか、むしろ殴り倒されそうな勢いの返しが欲しい！

……はて、前にも似たようなこと言っただけでなかったかな俺。

そんなことを思いながら、空間モニターを消して車を走らせる。ベルカ自治区はもう目の前。たどりつくまでに、自分の性癖に対する疑問とか解消できる気がしない。

やめよう。きつと考えすぎると沼に引きずり込まれるわ、この発想。

64 転んだ先の杖

すぽーんと首が飛ぶ。

ぐるんぐるんと視界が回る。

見えているのは3人分の姿。

正面、動じた様子もなく紅茶に口をつけている金髪少女。背後に、血走った目で愛機ヴィンデルシャツを振りぬいている暴力シスター。真下では、なくなった首を手探りで確認する自分。

以上3名の姿を眼下に見送りながら、床の上を4バウンドくらいして俺の頭は停止した。

いっつも思うんだけど、あいつのデバイスってどう見てもトンファーだよ。そのビジュアルで双剣とかマジワロス。

「なお、その体は自動的に消滅す、あつ、ちょ！ 冗談だからまって!」
なんの躊躇もなく暴力シスターの手で、俺の体が縦に切り裂かれる。

ちよつとショッキンクな光景だが、どうしようねこれ。

首だけじゃ動けないんですがそれは。

「見ない間に少しはマシになったのかと期待したけれど、ダメねこれは。シャツハ、粗大ごみの手配をしておいてね?」

「この場で粉々にすれば、不燃ごみでいけるかと思えますよ騎士カリム」

「ねえ、君らほぼノータイムだったけど、これ完全に事件だからね?」
人の首斬り飛ばしといて、なに平然と処理の話してんだこいつら怖すぎだろ。

聖王協会の幹部クラスが言うと、現実味ありすぎて腹の下あたりがひゅんってしちゃう。

「おかしいわね。なんで死んでないのかしら」

「残念ながらカリム、これは本体ではないようです。本当に残念ですが」

そりゃ無防備にここ来るわけないじゃん。

だから、心の底から残念そうな表情で言うのやめてもらえませんか

ね。あと、舌打ちもやめーや。

まさかここまで嫌われてるだなんて。オラ、わくわくすつぞ。

「あー、そろそろ本題はいつてもいいかな。一応、交渉に来ただけども」

「はやてのことなら手遅れよ？ もううちで面倒をみているもの。1年くらい前だったかしら」

「それは別にいいわ。行けって言ったの俺だし。今日来たのはそっちじゃないんだなあ」

知りたい？ 知りたい？ どうしても知りたい？

なら、とりあえず首をテーブルの上に置いてもらえませんかね。この位置だと、視界が低くてめんどくさいんだ！

とか言ったら暴力シスターに蹴り上げられた。

ボールは友達！ そのままワンクッション天井を挟んでテーブルにドライブシュート！

やっべ、視界が揺れまくって気持ち悪いつていうか壊れるわ!!

「なにこの三分の一も伝わらない置き方」

「純情さが足りなかったのでしょうか」

そうそう、だいたいいつも空回りしてるもんね。俺。

つていうかき。ぶっちゃけ、はやての手が回んの早すぎじゃない？

下手なヒントとかやるんじゃないか。今回は負けましたみたいだなテンションで別れたくせに、あいつ欠片も諦めてねえじゃねえか。

お願いだから5年くらいは第97管理外世界でゆっくりしてほしい。

どうせ、守銭奴の転送屋が裏で手を貸してんだろうけどさ。

「おかしいわ。もつと驚くつて聞いていたけれど、これも当てが外れたようですね」

「いやいや、スーパァ驚いてますよ？ 主にはやての予想能力とか。俺が言いそうなこと理解されすぎてる件について」

「御託は結構です。あなたは闇の書を持ってきたんでしよう？ さつさとこちらへ寄りこしなさい。ここ2年ほどの偽造戸籍は用意してしますから」

「……………」

「なんです?」

「いや、シャツハなのに話が早すぎて困惑してる」

叩き潰しましょうかと笑顔で言われて、すみませんでしたと素直に謝る俺。

おかしい。交渉ってこんな感じのテンションでするものだったっけな。

「まあ、こっちとしてはスムーズにことが済んだからいいんだけど。これはこれで、はやてがなんかしてそうで怖いわけだが」

「もしあの子がなにかしていたとして、それを教えるほどの義理はないわね。闇の書の交換条件以外に、出せるものなんてないわよ?」

「そりゃそうだ。ああ、でも1つ頼まれてほしいかな。闇の書のおまけってことで、ちよつと保管してほしいっていうか。はやてが来たら渡しといてほしいっていうか?」

約束とか破ってばっかだけど、たまには守つとかないとね。

今さらかよ遅くね? とか言われるとぐうの音もでないわけけども。

「届け物? 直接、あの子のところに送ればいいじゃない。それくらいのお金ならあるでしょうに」

「いやいや、ここまでたどり着いたはやてへのサプライズ用だからな。ちよつとくらい仕返ししとかないと、こっちとしてはやられっぱなしになるわけだね?」

というかね。まだピンときてないようだけど、カリムは直接はやてと会ったら絶対気に入る。

今は、とりあえず協力してるくらいだろうが。それはもう、軽く家族認定して侍らせようとするのがわかりきってる。

だから、今のうちに言つとかないと俺の話とか二の次にされかねない。

いや、後から反故にされる可能性もあるけども。はやてとカリムが、いいぞもつとやれるな関係になったらそれ以前の問題になつてしまふだろうし。

そびえ立つキマシタワーを前にしたら、ちっぽけな俺にできることはなにもない。

尊い、とかなら言えるかもしれないけど。

「とりあえず、はやてへの貸しにもできると思ってた預かってくれない？俺の方で持つてると、ときどき犯罪臭がしてきてこまつてるんだよね」

「リアル犯罪者が犯罪臭？」

この際、シャツハの余計な疑問は置いておこう。

そんなことより、ウーノに追われる身としては荷物を減らしておきたいというのが本音だ。

いやむしろ、切なる願いと言ってもいいかもしれない。

「まあ、こいつを見てくれ」

「口から出てきた紙を見ろだなんて、シャツハ取つてくれる？」

「すいませんカリム。警戒のため、武器から手を離せないのでお断りします」

しばらくお互いに見つめ合ったまま、カリムとシャツハの無言タイムが続く。

やっというてなんだけど、恥ずかしくなってきたから早めに取ってほしい。

そして、見つめ合う女性2人の横に転がった生首が紙吐いてるっていうわけわかんない状況なんだけど。

ナニコレ珍百景。

「わかった。お前らがぶっ壊した首から下、そこにデータチップがあるから探してくれない？無事だったらの話だけ」

「そういうものがあるなら、わざわざ口から出す必要はないのでは？」

「ダメよシャツハ。悪い意味で、彼に常識は通じないわ」

なるほど、となぜか納得したようなシャツハが、裂けるチーズよろしく縦に両断された胴体のチェックを始める。

口から出たものは嫌で、ボディタッチは大丈夫ってどういうことだろうね。

難しい年ごろなんだろうか、俺と同一年くらいのくせして。

「なにやら、軽いセクハラを受けた感じがしますが。ところで、これどこにデータチップがあるんですか？」

「襟の裏だ。大怪盗はいつもそこに隠すからな」

「ちよつとなにを言ってるのかわかりませんが、ありましたカリム」

「そう、内容はあとで目を通しておくとして。現物ってなんなのかしら」

「あー、そうな。ありていに言っちゃうと、高機能なダッチワイフって
いうか？」

ぶつちやけ、質量兵器ギリギリラインのオートマタなんだけどモデルがなあ。

漱石さん、かなりグラマラスだから凄いことになってんだよなあ。

あと、これ今から俺も凄いことされそうだわ。シャツハに。

意味深でもなんでもなく、ヴィンデルシャフトの一撃で脳天かち割りコース確定の予感！

「言い残すことがあるなら、一応聞いておきましょう」

「はやての大切な家族が使うパーフェクトボディだから、壊したりしないようにね」

あと、受け渡すその日までいろんな意味で悶々としてるといいよ。

ダッチワイフのいる生活とか、はやてになんて言って渡せばいいんだとか。

いいゾ〜こ……

†

途中で映像が途切れたが、たぶんヴィンデルシャフトが叩き込まれたんだろう。

バイザーを上げれば、ちよつと聖王協会の一室から窓が吹き飛ぶ瞬間だった。

これは相当怒ってらっしゃる。しばらくは近づかないでおい方がいい。

オートマタの遠隔操作デバイスを助手席に放り、車のエンジンに火を入れる。

アクセルを踏み込めば、車体はとて平和に進み始めた。

この後は、闇の書と漱石さんのボディを聖王協会に送り付けて。それから、偽の戸籍でてきとうに大きめの花火とか打ち上げよう。

あとは、自滅っぽい演出からの死んだふり潜伏だな。

ちよつとは追手を誤魔化せるといいなあ。

65 死んだヤクモが咲きほこる

闇の書を抱えた漱石さんのボディを、聖王協会に送る手続きを終えて帰路につく。

車の調子はすこぶるいいが、向かう先は迷走中だ。

今日はどの隠れ家にするか。殆どウーノに特定されているが、なぜかなにも残ってないので普通に使えてしまうのが悩みどころ。

隠しカメラとか盗聴器とか、そういうのが一切ないのはどういこうとだろう。

逆に怖い。

なぜかベッドシートとか風呂上りに体拭いたタオルとか、そういうのもなくなってるけど。

あれ、こっちは普通に怖い。

「あいつ、着実に人の道踏み外してるよなあ」

戦闘機人ってみんなあんな感じなのかな。

そういえば、ドゥーエに武装作ってくれて言われたときも似たような気持になったなあ。

だって殺傷能力は高いけど、使い方次第ではじわじわダメージを蓄積できるような武装とか言われたんだよ？

そりや作ったけどさ、あのとときの目はホントやばかった。

嗜虐性の塊みたいなマジキチ系の眼光だったし、姉妹って似るんだなって思ったよ。

性能テストは面白かったけどね。

いや、マゾに目覚めたとかじゃなくて、使い方バリエーションを見れたって意味で。

「腰を落ち着けて、偽造戸籍とかちゃんと確認しとかないとなあ」

花火の打ち上げ方とか考えないといけなし。

っていうか、名前だけでも確認しようと思ってチラ見したのが間違いだった。

誰だ、名義に『寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、藪ら柑子の藪

柑子、パイポパイポパイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助』とか書いたやつ！

どう考えてもはやてだろいい加減にしろ！

このままだと俺の人生が早口落語になってしまう。

ご丁寧にも、聖遺物の窃盗がどうかで聖王協会を追放された身分らしいし。これは早々に処分してしまわなくては。

というか、はやてのやつ今度会ったらどうしてくれようか。

‡

次元断層の影響とはいえ、ミッドチルダへの帰路はずいぶん長いものになった。

場所が近かったからとジュエルシードに関する事件に関わり、フェイトを保護してから約1年の道のりだ。

主犯ではないが、状況をややこしくしてくれた彼には言いたいことが山ほどある。

だがまあ、それもあと2ヶ月ほどで終わる。

帰還すれば、フェイトの裁判や小規模とは言え次元断層が発生してしまった報告書。そういったデスクワークをこなさなくてはならない。

もろもろ骨の折れる仕事だが、それらはフェイトの今後にも関わってくるだろう。

母さん……リンディ艦長も、思うところがあってこっそり動いているようだし。

「だというのに、お前は性懲りもなく……」

「ええ、お前らが出張ってきたのは俺のせいじゃないんだけど……誰だっけ、肩パッドくん？」

名前くらい覚えとけよ！

そう叫びたくなるのを我慢して、僕とフェイトはデバイスを構えている。

目の前にいるのは、誰でもない状況をややこしくしたバカだった。

「えつと……なんでお兄さんがここに？」

「ん？ 俺を誰かと勘違いしているようだなフェイト。俺はジュエルシード集めを手伝ったお兄さんではない。ジユゲムだ！」

「じゅげ、え？」

「正確には、寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、藪ら柑子の藪柑子、パイポパイポパイポのシューリンガン、シューリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助だ！」

「ご、ごめんなさいもう一度」

「いやフェイト。もう偽名なのが丸わかりだから聞かなくていい」

どうせ、まともな回答が返ってこない。聞けば聞くだけ、こちらが混乱するだけだろう。

あと少しで帰港だったというのに。聖王協会から遺物を窃盗した犯人が、近くにいるようだから向かってくれなんて命令さえ来なければ。

ギル・グレアム提督のことを、今日ほど恨んだことはない。

「他人だとか言つときながら、普通にフェイトの名前を呼ぶ安易さ。

あとで情報操作が大変なのはこっちなんだぞ！」

「ちよつとなに言ってるかわかんないですね」

掠れた音で口笛を吹き始めたバカが、余計に腹立たしい。

というか、僕の名前は完全に忘れていたくせになんなんだこいつは。

「ごほんっ。まあ、必要ないところは編集でカットしてもらおうとしてだ。誰でもいいから管理局員よこせって言つたのが失敗だったかなあ。っていうか、なんでフェイトもいんの。護送中じゃ？」

なにやら、ピースを作った両手で何かを切断するような動作が非常に腹立たしい。

フェイトがここにいるのは、裁判の結果を少しでもいいものにするためだ。

余剰戦力がない状態での犯人確保。これに協力したという事実は、かなりプラスに働いてくれるだろう。

そういう判断のもとで、彼女も僕と一緒に出撃している。

艦長の許可も得ているため、公式の記録としてちゃんと残るのだ。

「ま、いっか。とりあえず仕切り直しで」

わざとらしく咳払いをして、バカが謎のポーズをとった。

腕を体の前で平行に交差させるような……ホントなにしてんだこいつ。

「フウーハハハハハ！ 我が名は狂気のマッドサイエンティスト、ジユゲム。愚かな聖王協会役員共は、俺の才能に理解もしまま切り捨ててくれやがった。だからぶっちゃけどんなものか知らないけど、聖遺物とか盗んでやっちゃったぜ！」

「おい……」

やるなら最後までまじめにやれよと言いたい。

どんなものか知らないけど盗んだってどういうことだ。

「えっと、あの、お兄さん。悪いことは、しちゃだめなんですよ？」

「うわなにこの良心の呵責に訴えてくる最終兵器金髪ロリ。マジかよ。管理局ズルくね？」

「よくわかりませんが、ごめんなさい？」

謝らなくていいぞフェイト。おおむね、こいつの言っている意味が分からなさすぎるのが悪い。

それにしても、なにがしたいんだこいつは。

さつきから聞いていると、どうにも通報すら自作自演らしい。

謎の偽名に、犯罪歴のでっち上げ。管理局員をここまで引つ張り出した理由はどこにあるんだろうか。

「フェイトの説得にやや心折れ気味だけでも！ 俺の野望はこんなところで潰えたりはしない。お前たちに捕まってやるなんて、できない相談だ。そんなに確保したいなら、力尽くでやってみせ、うわフェイトはつや!?!」

いろいろバカがわめいている途中に、フェイトが最速で突っ込んでいった。

迷いのない初動に、正直僕もちよつと驚いている。

確保できそうなら躊躇わずにいけとは言ったが、このタイミングで

いくとは思ってなかった。

バルディツシュの一撃をもらに受けた右腕が、防御魔法も展開していなかったのに甲高い音を鳴らす。

あれ、質量兵器なんじゃないか？

「よし、罪状が増えたなジユゲム」

「これは予想してなかったでござる……」

バルディツシュを弾いたバカの腕は、なにやら金属製の部品が見え隠れしている。

上から人工皮膚のようなものでも張っていたようだが、それがほぼ吹き飛んでしまった形だ。

「まあいいけど。どうせ遅かれ早かれバレることだし。だが、この程度で勝ったと思うなよ管理局！ 俺には奥の手があるんだからな」

不敵に笑ったバカが、勢いよく右腕を天高く掲げて見せる。

なにを、と思ったときには遅かった。どこからともなく現れた、カプセル型の機動兵器が彼に向かって殺到したのだ。

その数5機。

見ている前で、それぞれの機動兵器が変形していく。

1機は右腕に、1機は左腕に、1機は右足に、1機は左足に。そして最後の1機は頭から上半身を覆うように、バカの体を包んでいく。

『見よ！ これぞ六機合体、ゴットジユゲムの真の姿だ！』

6機？ 6機とはいったい……5機と1人じゃないのかそれは。

それ以前に変形とか言っているが、実質内部に空間を開けて体を収めるスペースを作っただけだ。

なんだろう。出来の悪い着ぐるみを見ている気分だ。

「ど、どうしようクロノ。あんなの、どうやって取り押さえれば」

「落ち着けフェイト。僕ももう少し冷静になるから」

そう、冷静になろう。そうでもしないと、砲撃魔法をぶち込みたい衝動にかられる。

非殺傷モードも切ってしまいたくなる。

あれは、この世に生きていていい存在だろうかとか考えてはいけな
い。

『フウーハハハハハ！ 慌てているな？ 慌てているだろう！ この姿になった俺に隙は……あれ、ちよつと待て。なんかジエネレーターが熱い。ん？ AMF発生装置が競合してる？ ウツソだろお前！ なんで5機揃ったくらいでシステムが競合してるんですかね!? あ、やばい。これ結構やばい。脱出！ 脱出ボタ……ああああ、システムエラーとかマジクソゲー!!』

そう叫んだと思ったら、六機合体ゴツトジユゲムは爆散した。

隣でフェイトが、力いっぱいお兄さあああああんと叫んでいる。

僕には、これがただの茶番に見えたわけだが……

どうしよう、泣き崩れたフェイトになんて説明したらいんだろう。

そこらに転がる残骸から、バカの肉片が出なければ安心してくれるんだらうか。

なんにしても、胃がキリキリと痛みを訴え始めていた。

きつと、あいつは僕の仕事を増やすためだけに現れたに違いない。

次に会ったら吊るしてやる。

66 網にかかるは狂人ばかり・前

正直に言おう。フェイトを泣かせたのはやりすぎだったと思う。あとでめっちゃ怒られる気がするけど、やってしまったものは仕方ない。

おおおおお落ち着け俺。折檻とかドックフードとか、ベベ別に怖くねえし！

とか思いながら、隠れ家の洋服タンスに入ってガタガタしていると通信が飛んできた。

サウンドオンリーの空間モニタから漏れ出す声には、聞き覚えがある。

嫌らしく粘着質なそれは、どう考えてもスカリエツティのものだ。

『君、死んだんじゃないかな？』

「は？」

俺の偽名死亡情報、出回るの早すぎやしませんかねえ。

肩パッドの腹いせだろうか？ まあ、なんでもいいんだけど。

「なんで、お前がそんな情報知ってるの。追い回されるのはウーノだけで間に合ってるけど？」

『悲しいことに、ウーノの行方を探っていると君が見つかってしまうから困るよね』

え、なにそれやばい。変な汗止まらないんですけど。

ホラーかな？

俺の肝はひえっひえですよ。

『まあ、そのことはとりあえず置いておくとしてだ』

「え、それと別件なの？ なんだ、新しいIS作れとかそういう話かよ」

えつとどこまで作ったっけな。

フルダイブヘルメットは、俺が持つてるからノーカンとして……

確か、DSグローブだろ。羽を模した切れ味のいい光刃が出る妖精さんなりきりセットに、透明マントと。あとは、なんか柔そうな幼女に防御力の昇天ペガサスMIX盛りな防具と小さめのナイフ、潜水艦

女に盗撮カメラだったかな。

ああ、面白半分でブーメランブレードとかも作ったっけ。

まさか、ホントに使うとは思わなかったけど。

「残りの子たちの要望送ってくれば凶面引くから、組み立てはそっちでやってくれない？ 今、ちよつと潜伏先探して忙しいんだけど」
『ああ、まあそつちもそうなんだけどね。ちよつと別で設計図を作っ
てほしいものがあるんだよ』

「設計図？ どんな」

『ふむ。大型の魔力攻撃兵器をという、スポンサーからのオーダーなのだがね。対空性能が高く、超長距離をカバーできるものがあるという
となんだが。まあ、これを見てくれ』

こいつをどう思う？ すごく、アホです……

なにこれ。作れって言ったやつはアホなの？

送られてきたデータを見る限り、質量兵器は禁止なんだからね！

ブンブン！ とかほざいてる集団の発想じゃない。

え、ドゥーエが脳ミソの世話してたし、こいつのスポンサーって管理局の裏側でいいんだよね？

ホントに？

実はどっかのテロリズム溢れた、ヒヤッハーハレルヤピーナツツバ
ターな武装集団じゃなくて？

「おい、こんなスペックの対空砲火を首都圏に設置するとか本気で
言ってるの？ カバー範囲広すぎか！ こんなのも機だけ置いてと
か、どう考えても無理だろ常考。3、4機くらい設置しないとダメだ
ぞ」

お前、これは要塞つくるストラテジーゲームじゃねえんだぞ。

四方八方を兵器に囲まれて、生活する側が平気なわけねえだろ！

へいきだけに!!

『最後のは聞かなかったことにして、君から常識を説かれるとは驚き
だね。ただ、これは私のオーダーではないんだよ』

「やばい、管理局が思ったよりも腐ってる」

もうやだよ、面倒ごとがまた増えたジャンツ！

1つ片付いたと思ったらすぐこれか。いい加減、過労になるわ。正直、バカンスとかしたい。

「……サイズの概算出すから、設置できそうな場所を最低でも3か所用意させろ。設計はするけど、建造には関わらないからな。あと、残りのナンバーズのIS要望も」

『働き者だなあ、君は。実に助かるよ。この調子で、ウーノのことも帰ってくるように説得してくれたりしかいかね?』

「そりゃ親の仕事だろうに。家出娘ぐらい自分でなんとかしろ」

「ごもつとも、とくつくつ笑うスカリエツティとの通信を途中でぶつた切る。」

用向きは終わったんだから、無駄話に付き合う必要はない。

しばらくすれば、あちからから大量のデータが送られてくるだろう。

おかしいなあ。はやての家で、ぐうたらしてた時の方が暇だった気がするゾ!

まあ、なんにせよだ。これはタンスの中でタケってる場合じゃない。い。

潜伏先とか考えなくてよくなったと、前向きに考えよう。

そう思いながら開け放った戸の向こう、ブルーベリーみたいな笑顔のウーノがいる。

んんん、これは詰みましたぞ。

‡

目が覚めて、最初に飛び込んできたのは真っ白な天井だ。

知らない天井だ、とかお約束を思い浮かべながら辺りを見回す。

そうして気付くのは、天井と言わず壁も床も真っ白という事実だ。

窓のない部屋。入り口は1つ。家具はベッドと簡素な机だけ。

体が動くから拘束はされなかったようだが、ここにいると目がチカチカしてくる。

「おう、なんだこの首の」

そこには、目覚める前にはなかった違和感があった。

ちよつとチョーカーっていうには、革の質感がリアルすぎる。

なんていうか、犬とかがつける首輪って方がしっくりくる感じだ。

ここがどこかわからないし、肝心のウーノも見当たらない。

あー、これはアレだ。とりあえず目星？

「リアルクトウルフとか誰も求めてないんだけどなあ。ベッドの下とかに、ウーノがいたりしない？」

身乗り出して覗いてみるが、そこには誰もいない。

いたらいたでちびるかもしれないけど、いないといないで不安感がぐんぐんグルト。

メモの1つも落ちてほしいなあ。

まずは、ベッドから降りて持ち物チェック。

服装はそのまま。デバイスあります。魔法はご丁寧にAMF効いてますねえ。

机の上にはなにもないし。あとは、ドアが開かなかつたらどうしよう。

巷で流行のキスしないと出れない部屋とかだったら、俺はいつたいどうすればいいの？

「そして普通に開くんですがそれは」

これはこれで怖えな。

とりあえず、向こう側に顔を出し、右見て左見て上見て更にぐるりと一周視線を巡らせる。

見えるのは左右に伸びる通路。部屋の中と同じで天井も壁も床も真っ白だ。

通路の両端には、それぞれ1つずつドアが見えるが。

ふうむ、これはいいよな感じしてきたなあ。魔法なしとか、神話生物とかでてきたら素で負ける自信あるぞ俺。

「ここは優秀なハンター理論。右から攻めてみるか」

そおつと部屋から出て、忍び足でドアの前へ。

ダイスを振っても、中の情報とかもらえないのでリアル聞き耳をたてる。

音はしない。大丈夫……たぶん。

ノブを捻れば、なんの抵抗もなくドアが開いてしまう。いつそ鍵とかかかってればよかったのに。

「なにをしておられるんですか？」

「ひぎいっ!？」

突然、背後から声がかかったせいで凄い声が出た。

ビビりタケってねえし! 別にタケったわけじゃねえからな!!

「ずいぶん錯乱しているようですね。平常運転で安心しました」

「え、ウーノ? なにこれやばい、思考が全然追いついてこないんだけど。状況説明カモン」

「よくわかりませんが、潜伏先をお探しのことでしたので。ずいぶん昔に破棄した、ドクターの施設を流用した隠れ家を用意させていただきました」

「なるほど?」

「ごめん、意味わかんないまんまだわ。」

なんでお前が潜伏先のこととか知ってるのとか、そういうのいろいろとあるけども。

とりあえず、率直に言って監禁と軟禁とどっちなんですかねこれ。

「私はドクターから、ヤクモ様のお手伝いをするように言われています。別に監禁や軟禁なんてしませんよ。外に出たいのであれば、反対側のドアから出られます」

あ、アルエ?

なんか、狂気の日記見て身構えすぎてたのかな。

いや、なんかその前にヴェロツサが絞殺されかけたりしてた気もするけど。

あれって、もしかして俺の見間違い?

なーんだよかった。これなら心配なさそうだわ。

冷や汗止まってないけど、これで1つ問題解決だよねなわけねえだろクソが!

首の斬新なチョーカーはどうすんだよ、これやっぱ洒落になってねえやつっぽいんですけども!!

「ご心配なくヤクモ様。どこへ行かれてもご一緒いたします。これは監禁でも軟禁でもありません。れっきとした管理です」

やばい、目が笑ってない。いや、笑ってるのかこれ。

ちよつと狂気度高すぎて判断できませんねえ。
ハハツ、ちびりそう。

おそろくだけど、この首輪にGPSちつくなのついてる気がするわ。

管理局がどうか言ってる場合じゃなくなってきたわ。やばいよ
やばいよ……

67 網にかかるは狂人ばかり・中

口に啞えた煙草が、じりじりと燃えている。

そろそろ灰が落ちそうだが、今いい感じで大型対空兵器の設計が進んでいるところだ。

あとちよつと、あとちよつとだから耐えろよ!? と心の中で叫びながら手を動かす。

だがまあ、こういうのが最後まで耐えきったことなんてほとんどない。膝の上に落ちて熱い思いをするか、灰でズボンが汚れてあーあとなるのが常だ。

そして今回もやっぱりそのパターンで、しかし横からすつと伸びてきた灰皿が最悪の結果を回避してくれた。

隣に座ったウーノは、なにが楽しいのかにこにこした顔で俺の口から煙草を奪いながら言う。

全面真っ白な部屋の中に、そこだけ暗闇が差したような笑みだ。

「煙草を今すぐやめろと無茶はいりませんが、危険な吸い方をするのはやめた方がいいと思いますよ」

「アツハイ、ごもつともで」

なんなのこいつ。灰皿キャッチはファインプレーかもしれないけど、ずっと横にいるのはなんなの。つていうか近い。

やばい、これ普通に怖いわ。

いや、とても仕事熱心ですねとか感心されても困る。ぶっちゃけ、不安を誤魔化すために仕事してるようなもんだし。

「えつと、工作室に移動するわ」

「はい、わかりました」

すつと立ち上がると、ウーノも同じく立ち上がる。

ちよつと前に、通路の反対側へ行けば出られると彼女は言っていた。

そして、事実そちらは外へ通じるドアではあった。ただし、ウーノが同行してないと開かないけどな!

首も蒸れるし、誰か助けてなんでもするから。

「あー……ところで寝室と設計用の演算室は行き来できるのに、なんで工作室は外に作ったの？」

「それは構造上の問題です。ドクターは、自らの手を油で汚して物を作るタイプの方ではありませんから。寝室の近くには、設計室だけあれば十分ということでしたので」

なるほど？

確かに、あいつが工具片手に物作ってるとか違和感パナイわ。

そんなことを思いながら、ウーノが首輪にリードを繋げるのを待つて白い空間を脱出する。

寝室を背に、左手のドアを出た先は薄暗かった。

足元から淡く照らす光源があるだけだから、当然と言えば当然なのだ。

ぼんやりと浮かび上がる無機質な壁が、どこまで行っても代わり映えのない風景を彩っている。

殺風景だなあと思いながら、ウーノと2人で歩き出す。

工作室は少し離れた場所にあった。その更に奥まで突き進めば、太陽を浴びることもできるだろうが。

「変な趣味に目覚めそうなんだけど、このビジュアルなんかならない？」

「よくわかりませんが、これが一番堅実な方法ですのよ」

外に出る時は首輪にリード。これで逃げられたら奇跡だわ。

AMFもぼつちり効いてるけど、微粒子レベルの可能性で走れば逃げられるじゃとか思ったわけですよ。

あれ、これ工作室行くつて言つて外出ちやえばこつちのもんじゃね？とか思つてた時期が俺にもありました……

実際のところリードを引かれれば首が絞まるし、白い部屋から出てAMF完璧だし。

普通に考えて、魔力結合と魔法効果を邪魔された状態で細かい制御のいる短距離転移とかできないわ。

「人間にも光合成が必要だと……あれ？　なんか、人影が見るんだけど。気のせいかな？」

暗くて見えづらいけど、向こうから誰か来てるよね。

ウーノの妹たちが、俺を笑いに着たりしたんだろうか。クアットロとか、そういうことやりそうな気がするんだけど。

「そこの2人組、止まれ！ ここの施設の関係者だな？ こちらは次元管理局、首都防衛隊所属のゼストだ。大人しく武装を解除し、その場に跪け」

「おっふ……」

なんか、前にも似たような名前聞いたような気がするのは気のせいかな。

ああいや、そんなこと言ってる場合じゃねえ。なんか、まだ後ろに2人くらいいるみたいだし、これは戦力が数と質の両方で負けてる感が凄い。

これあかんやつ！

「ええつと、アレだ。ウーノは、あの3人を1人で制圧できたりする？」

「おそろく無理かと」

ですよねー。

じゃあ、もう次の行動は決まったようなものだ。

素早くウーノを抱え上げ、来た通路をダッシュで引き返す。

少し戻ればブロックの切れ目、隔壁がおろせるはずだ。そこまで逃げるとだよオオオー……ッ！

背後で、えつ、あつ、逃げたー!? とかいう声も聞こえるが知らん。

正義の管理局が数の暴力で弱い者いじめとかいい加減にしろよ？

八つ当たりだけど！

「……大胆、ですね。ヤクモ様」

「お前、その謎の余裕はどこから出るんだよ」

簡単な身体強化をなんとか発動させながら、必死に走って壁のコンソールまでたどり着く。

大慌てで隔壁をおろせば、局員3人のうちローラーブレードみたいなものを履いた女が目の前まで迫っているところだった。

ギリギリ通路は塞がったが、なんだよあの光GENJI女。怖すぎ

じゃない？

ようこそ隠れ家へ、遊びたくないよパラダイス！

とか言ってたら、ドカンと大きな音を立てて隔壁が歪んだ。

連打の音が絶え間なく聞こえるんだけど、これもしかして殴ってんの？

とんだゴリラ女じゃねえか。

「うわあ、マジかよ」

「これは……推定、10分ほどで破られるのではないかと思います。ちなみに、この施設の出入り口は1か所しかありません」

「隠し通路とか、なにか脱出経路もないの？」

「ないですね」

どんな自信を持って作った施設かは知らないけど、バカじゃないの。

ボツシュート方式でもいいから、逃げ道作っとけよな！

「頼むから他のナンバーズ呼んで。セインがいれば、脱出も人員運搬もできるだろ」

「はい。では連絡をしますので、しばらくこのまま奥へと退避してください」

え、俺が運ぶの？ 隔壁閉めながら？

ここまで結構歩いたんだけど、成人女性を抱えて戻るのかよ。

ならせめて、首のやつ外してほしいな。このままだと、女王様抱えて走る謎のDMが完成しそうだからさ。

✦

だんだん近づいてくる轟音とかいう、心理的拷問になんとか耐えることしばし。精神的な限界がこんにはする直前で、応援が壁からひよっこり現れた。

現れたのはトーレにクアットロ、チンクとセインだ。

彼女らは、合流早々にウーノと対応策を話し合っている。とは言え、戦闘面の機能が未調整だとかで運搬係限定のセインは外れているが。

もうこうなると、AMF環境下ではほぼ役立たずな俺と部屋の端で

駄弁っているしかない。

「……これ俺が入っても戦力的に微妙じゃね？」

「えー、現状うちの最高戦力だよこれ。チンク姉だつて来てるし、むしろヤクモさんの方が邪魔そうな感じ？」

「ははは、タクシー女に言われちゃ立つ瀬がねえ。ところで、この首輪をデープダイバーで外せないかな」

「できるよーと無造作に手を伸ばして、首輪を引っこ抜くようにセインの腕が動く。

首輪が首を通過したのか、あるいは首が首輪を通過したのかはわからないが、予告なしでやるのやめてくれ。心臓に悪いからさ。」

そして、なんか作戦会議してたはずのウーノが凄い目でこっちを見ている。

ヒエツ……

「というか、もう普通に逃げよう？ これ迎撃する必要ないんじゃないか」

「あー、それがそうもいかないみたいでさあ。いろいろ手を回してみただけど、あの3人つてずっとこっち追つてきてるらしいんだよね。だから、ドクターはここで手を打つときたいんだって」

「そういうの、もっと戦力そろえてからやっどうぞ」

機動兵器とか大量投入しろよ。

アホほど数揃えて、過剰戦力ですり潰すのが量産機のいいところだろ。あの3人が無双系キャラだったら、スコアアタックされるかもしれないけどさ。」

巻き込まれたこっちはいい迷惑……いや、逃げるチャンスだから助かりましたありがとうございます！

「さて、じゃあセイン。俺を連れて工作室まで行つてくれない？」

「え、なんで？」

なんでつてお前、そりや逃げるたゲフンゲフン。

工作室まで行けば、試作段階の兵器が数点置いてある。

AMF環境下において、俺自身の戦力は面白いぐらい低いかもしれないが、自分で作った兵器の運用なら自信がある。

そして、設計したのはどれもこれもAMF環境下で運用することを

考えた兵器たちだ。こういう場でこそ、輝くものをもっているだろう。

つまり俺が工作室で武器を手に入れて、正面戦力に集中している人組を後ろから奇襲する。

うん、完璧ですネ。

ついでに、試作兵器の起動実験もできるよヤッター！

「いやいや、それを私たちに信じろと？ それは無茶つてもものじゃありません？ 私やトーレ姉様は、あなたに対する不信感とかぬぐい切れてないんですけど？」

「えー、マジでー。ウケるー」

「ウーノ姉様、あれ殴っていいですか？」

暴力反対！

っていうか、ウーノは妹の発言無視して俺を睨み続けるのやめろよ。

なんか、流れでクアットロも俺のこと睨みだしたじゃねえか勘弁してくれ。

「とにかく、ごちゃごちゃ言ってる時間ないだろ。いつも通り、ウーノがお目付け役について来ればいいじゃん。どっちにしろ、お前も武器いるだろ？」

「まあ、そうですね。新しい首輪も必要ですが」

「1回それは忘れろ。頼むから……」

「ただ首輪に固執してんだ。」

さつきから、すげえ近くで粉碎音はじめてんだぞいい加減にしろ！

68 網にかかるは狂人ばかり・後

工作室で武装を回収し、大慌てで準備を整える。

ギリギリまでごねやがって、ホント勘弁してくれない？

おかげで、こちらら小型化が終わってない大型兵器担いでダツシユしてんだぞ。

「ときに、この武装はどう使用すれば？」

「高周波ブレードだから、なんにも考えないで振り回せ。当たったらお前の勝ち。以上」

「わかりやすくもいいですね」

「ええ、なにその説明。それで、納得しちゃうウー姉もどうかと思うんだけど」

うるさい、お前はさつきと地面に潜って退避してろ。

巻き込まれてもしらねえぞ。

あと、間違ってもあの3人組に手出すなよ。

支援のためとか言って地面に引きずりこもうとしてみろ、絶対に腕ぶった切られるからな。

「さて、お仕事しますかね。めっちゃ始まって感あるけど」

「先行します」

高周波ブレードを一閃し、ウーノが先んじて走り出す。

同時に、セインも地面の下へと潜っていった。

さて、こっちは今から重たいバックバック背負って走るわけだが。

まあ、廊下の先から戦闘音してるし仕方ないよね。

いやホント、なんか移動手段考えとくべきだったわ。次に作るのそれはだな。

えっほえっほと走っていると、戦闘音が1つ増えたような気がする。

たぶん、ウーノが到着したんだろう。

金属音が多いのは、AMF環境下で魔法が使いにくいからか。

肉弾戦だけでナンバーズを迎撃できてるなら、相手は歴戦の戦士つてことになる。

つまりあれだ。俺が正面切って戦うと普通に負けるやつってことだ。

「……泣きそう」

そんなことを言っている間にも、戦場が近づいてくる。

トーレとチンクが正面から、ウーノが後方から挟み撃ちに行っている形だ。

クアットロは正面組の後方。補助をする位置で、あの手この手の嫌がらせをしているらしい。

敵側は、光GENJI女がウーノの奇襲に対応したようだが。

え、あのオッサンなんなの。なんで2対1で押し勝ってるの。

わけわかんないんですけど。

ここAMF環境下だよな？　なんでチンクの右目がぶった切られてるんだよ怖いわ。

「隊長！　後方から更に増援が！」

「ムッ！　メガニュー！　クイントの支援を優先しろ。こちらはなんとかする」

オッサンと光GENJIの間に立ってる女が、なんか喚いてるけどどうでもいいや。

そんなことより、前衛の2人が使ってるのベルカ式魔法だよな？

この状況とは相性よさそうだけど、そもそも安定してない技術じゃねえかよ。

まさか、はやてが暗躍して安定させといたテヘペロとかないよね？

いや、闇の書の本体はこっちが回収して聖王協会に投げ入れてきたから大丈夫だと思うけど。

技術が出回るには早すぎるし。あれか、こいつら天才系か。

ムッ！　じゃねえよふざけんなバカ。

ああ……もう、ホントいやになる。

「試作兵装、ラハティ。起動シークエンス開始」

とりあえず、なんかされる前にこっちから動いとくか。

ってことで、プレイボール。

驚いた。それが戦闘終了後に抱いた、正直な感想だった。私の持つヤクモ・ナナミに対するイメージと言えば、初対面にして大乱闘を演じた危険人物だったが。

果たして、あのとときの彼は本気だったのだろうか。クアットロと2人で無力化できたのが、今では不思議にすら思える。

「正直、貴様がこれほど強いとは思っていなかった」

「え、普通にやったらトーレの方が強いだろ。なに言ってるのとお前」
本当にそうだろうか。

いや、今すぐに戦えばそうなのかもしれない。
つまりはそういうことだ。

彼の言葉通り『普通に』やれば、私の方が強いのだろう。

今回持ち出してきた、試作武装とやらがいい証拠だ。

「ん？ ああ、安心しろよ。この構造は、俺のスペックで調整してあるからだ。お前なら、普通に持っても安定させられるだけの骨格が作ってあるだろ」

そう言つて、ヤクモは右腕を肘関節まで飲み込んだ身の丈ほどもある砲身を肩に担ぎ上げる。

ラハティとか言ったか。

どうせこっちは義手だからなんて、気軽に言ってしまう神経は常軌を逸している。

同じ戦闘機人だというならまだしも、彼は普通の人間……のはずだ。

「なんだよ？」

「え、ああいや。あとからロールアウトしてくる妹が、その武装を上手く運用できればいいと思ってるな」

ふうんと適当に相槌を打って、ヤクモ・ナナミはてくてくと侵入者の方へ歩いていく。

彼ら3人組は強敵だった。

確かに、単純な性能面ではこちらが勝っている。だが、あのまま続けていれば負けていたのは私たちだろう。

事実、チンクは右目を破壊されてしまったのだから。

ヤクモ・ナナミやウーノの奇襲がなければ、地面に倒れ伏していたのは私たちだったはずだ。

「しかしまあ、なんだ。スカリエツテイの野郎は、管理局からバックアップ受けてんだろ？　なんでまた、捜査官がこうもしつこく追ってくるんだよ」

「向こうで捜査中止の命令はでているはずだ。彼らが、独自に動いたんだろう」

ヤクモ・ナナミの戦い方を一言で表現するなら、地味のそれに尽きる。

必殺の大技があるとか、圧倒的な戦闘力があるとか。そういう、わかりやすいものがあるわけではないらしい。

ただひたすらに嘘をつき。どれだけ劣勢でも笑って見せ。挑発に挑発を重ねて、虎視眈々とチャンスを待つ。

そして、その瞬間が来たならば迷わず飛び込む。

果たしてそれは博打なのか計算なのか、それは誰が見てもわからないだろう。

更に言えば、無駄に大掛かりな仕掛けも装備も、その全てがチツプだということだから素直に驚く。

倍率もオツズも無視しての大勝負など、常人ならやる前に考えもしないだろう。

地味だがとてつもなく大胆で、考えなしのように支離滅裂なことをしてのける。

狙ってやっているのか、悪運がいいだけなのか。見ていて、混乱することこの上ない男だ。

「まあ、なんにせよ。これで向こうも少しは大人しくなるわけだ」

「必ずではないが。まあ、そういうことだな」

天井を見上げながら一息吐いて、ヤクモ・ナナミは煙草に火をつけた。

左手だけで、器用にやるものだなと思う。

……おや？ なにかおかしい気がする。

具体的になにがとは言えないが、なにかが感覚的に違和感を覚えた。

敵は倒した。

まだ死んではないようだが、抵抗するだけの力はないだろう。虫の息というやつだ。

今、ウーノとクアットロがドクターと通信で話しているはずだが。この3人は実験材料として回収することになるらしい。

あとはドクターのいる隠れ家まで連れて行けば、それで今回のことは終了だ。

特に変なところなど、なさそうに思えるが……

「あー、なるほどなるほど。トローレ、そこちよつと危ないから5歩くらいさがった方がいいぞ」

「どうした？ なにかあるんだ？」

言われて反射的に5歩さがる。

ヤクモ・ナナミは天井を見ていた。ということは、先の戦闘でどこか脆くなっているのだろうか。

釣られるように私も上を見ようとして、不意に背後からウーノの声が響く。

「いけませんトローレ！ ヤクモ様の確保を——」

なにが、と思ったときにはラハティが閃光を吐き出していた。

天井を砕き、通路を塞ぐように崩落していく向こう側。

そこで悠々と煙を吐き出しながら、ヤクモ・ナナミが『魔法』を發動する。

背中のパックパックを起点に、あれは転移術式だろう。

AMFが発動している環境で、どうやって？

それ以前に、あのバックパックはラハティの動力炉という話だったのではなかったか。

「いやあ、今回こそは詰んだかと思ったわ。俺の悪運、まだ尽きてなかったんだなあ」

場違いにヤクモ・ナナミが煙草を吹かす。それに呼応して、バックが展開される。

あのままでは不味い。

本当に逃げられてしまう。

今、私が全速で突っ込めば間に合うだろうが。それを彼は許さない。

崩落する瓦礫と、しつかりこちらをとらえたラハティの銃口。

動けば撃つ。そんな気配をしつかりと感じる。

仮にも傭兵というのが、ここにきて初めて真実味をもったような気がした。

「空間固定も終わったな。それじゃあ、俺はこれで……えっ？」

ヤクモ・ナナミは、地味な戦い方をする。

わかりやすい力なんてないまま、虎視眈々とチャンスを待つ。

待って、待ち続けて、待ち焦がれて。そして、この瞬間をつかみ取った。

ただ、唯一の誤算があるとすれば侵入者の意識が残っていたことだろう。

無手の格闘技使いが、最後の力を振り絞って彼の足を掴んだ。

逃がさないという執念のようだが、体の大半は転移術式が固定した空間の外だ。

このままいくと、上半身だけ転移の対象となってしまう。いや、それ以前に転移そのものにノイズが入りそうだ。

「あつ、俺の悪運もここまでだったかもしくない」

諦めに似た呟きを残して、転移魔法が発動する。

転移追跡は無駄だろう。

対策くらい用意しているだろうし、それ以前にまともな転移になつたかも怪しい。

あのまま虚数空間に放り出されていても、特に不思議はないレベルの事故だ。

転移光が収まった地点。

格闘使いの両足、左腕。そして、ラハティの大半が残されたまま2

人が消えている。

直前で、ヤクモ・ナナミが固定空間内に引っ張り込んだのだろう。格闘使いが即死を免れる代償に、彼も武装を丸々放棄することになったわけだ。

「これは……流石に死んだか」

生きていたら奇跡だろうな。

次元断層の中を、多次元転移するぐらいの無茶だ。

そんなことをして無事なやつがいるわけもない。

ウーノ辺りが後ろで凄い顔になっていそうだが、どうしたものか。

なんにせよ、彼の命運もここまで。

少し残念な気もするが、それはそれ。

ドクターの指示に従って、残りの侵入者を回収することにしよう。